

ISSN 0385-0285

# 沖縄県立博物館紀要

## 第 21 号

BULLETIN OF

THE OKINAWA PREFECTURAL

MUSEUM

No. 21

1995

### 目 次

|   |     |
|---|-----|
| 前田真之：発見に向かわせる解説：物から学ぶ.....                | 1   |
| 新城さやか、萩尾俊章：沖縄の戦後関係資料と沖縄系移民資料に関する調査報告..... | 19  |
| 當眞嗣一：離島の小規模グスクについて.....                   | 43  |
| 瀬名波任：球陽に見られる地学関係の記述について（1）（國初・雷）.....     | 73  |
| 嵩原建二、久貝勝盛、瀬名波任：那覇市天久で観察された鳥類（1）.....      | 79  |
| 嵩原建二、池間幸男、兼城克男：慶良間諸島の鳥類.....              | 101 |
| 久貝勝盛：世界のサシバ属.....                         | 129 |
| 久貝勝盛、嵩原建二、瀬名波任：久米島におけるワシタカ類とハヤブサ類.....    | 159 |
| 沼口憲治、溝口文男、久貝勝盛、嵩原建二：種子島、馬毛島の野鳥観察記録.....   | 169 |

### 短 報

|   |     |
|---|-----|
| 嵩原建二、久貝勝盛、瀬名波任：最近(1994年4月～1995年3月)沖縄諸島で保護<br>及び目撃された興味深い鳥類について..... | 209 |
|---|-----|

沖 縄 県 立 博 物 館  
OKINAWA PREFECTURAL MUSEUM

# 沖縄県立博物館紀要

## 第 21 号

沖 縄 県 立 博 物 館

## 目 次 CONTENTS

|   |     |
|---|-----|
| 前田真之：発見に向かわせる解説：物から学ぶ.....  | 1   |
| Masayuki Maeda : Interpretation on Rediscovering Museum Objects : Learn from the Materials  |     |
| 新城さやか、萩尾俊章：沖縄の戦後関係資料と沖縄系移民資料に関する調査報告.....   | 19  |
| Sayaka Shinjyo and Toshiaki Hagio : Research Report on Materials Concerning Postwar Okinawa and Emigration from Okinawa   |     |
| 當眞嗣一：離島の小規模グスクについて.....   | 43  |
| Shiichi Toma : Small Scale Gusukus, the Medieval Castles, in the Isolated islands, Okinawa  |     |
| 瀬名波任：球陽に見られる地学関係の記述について（1）（國初・雷）.....   | 73  |
| Tsutomu Senaha : On the Description Concerning Earth Science in the Kyu-yo, an Official Okinawan Historical Book (1)  |     |
| 嵩原建二、久貝勝盛、瀬名波任：那覇市天久で観察された鳥類（1）.....  | 79  |
| Kenji Takehara, Katsumori Kugai and Tsutomu Senaha : Birds at Ameku area, Naha City, Okinawa (1)  |     |
| 嵩原建二、池間幸男、兼城克男：慶良間諸島の鳥類.....  | 101 |
| Kenji Takehara, Yukio Ikema and Katsuo Kaneshiro : Birds of the Kerama Islands, the Ryukyu Archipelago  |     |
| 久貝勝盛：世界のサシバ属.....   | 129 |
| Katsumori Kugai : Genus <i>Butastur</i> in the World  |     |
| 久貝勝盛、嵩原建二、瀬名波任：久米島におけるワシタカ類とハヤブサ類.....  | 159 |
| Katsumori Kugai, Kenji Takehara and Tsutomu Senaha : Hawks, Eagles, Vultures and Falcons on Kume Island, the Ryukyu Archipelago   |     |
| 沼口憲治、溝口文男、久貝勝盛、嵩原建二：種子島、馬毛島の野鳥観察記録.....   | 169 |
| Kenji Numaguchi, Fumio Mizoguchi, Katsumori Kugai and Kenji Takehara : Bird Watching Notes in Tanega-shima and Mage-shima, the South West Islands, Japan                  |     |
| <b>短 報 Short Report</b>   |     |
| 嵩原建二、久貝勝盛、瀬名波任：最近(1994年4月～1995年3月)沖縄島諸で保護及び目撃された興味深い鳥類について.....   | 209 |
| Kenji Takehara, Katsumori Kugai and Tsutomu Senaha : The Interesting Birds that were observed or Given Medical Care Recently (Apr. 1994-Mar. 1995) in the Okinawa Islands |     |

## 発見に向かわせる解説：物から学ぶ

前田 真之

(沖縄県立博物館)

Interpretation Rediscovering Museum Objects : Learn from the Materials

Masayuki MAEDA

(Okinawa Prefectural Museum)

Abstract : Interpretation is very important in museum. We, however, regret that we have little experience of the interpretation in Japan.

Here I showed the practices of the interpretation introduced into Okinawa Prefectural Museum.

The first is the interpretive way rediscovering the museum object, the folding screen related to the bird's view of Shuri and Naha area.

The second is the interpretive way rediscovering the museum object, beam balance.

Finally I conclude that interpretive way, asking a question, building up hypothesis on museum object and discussing hypothesis, is very effective for rediscovering museum object.

### [はじめに]

近年、わが国においても、ボランティアの導入を図る博物館や美術館が増えつつある。その実情については、日本博物館協会より「日本の博物館事情」、「博物館ボランティア活性化のための調査研究報告書」が平成5年度に出版され、国内および国外のボランティア活動の様子が紹介されている。<sup>(註1)</sup>

沖縄県立博物館においても、平成5年度からボランティア活動事業をスタートさせ、ボランティアの育成に努めてきたが、そのボランティア育成の中で、特に力を入れてきたのは、“ボランティアによる解説をいかに進めていくのか”ということであった。

私たちは、そのためにアメリカにおける“発見に向かわせる解説”的手法を参考にしながら、ボランティアへの解説指導を試みてきた。“マクドナルドの箱の50の見方”で紹介されている50の質問や国立アメリカ歴史博物館の歴史伝承室にある“ソドハウス（土の家）”の質問などの手法は、“質問を通して博物館資料を細かく観察する力を身に付けさせ、それをとおして新たな発見に向かわせる内容をもっている。”その手法を応用し、当博物館の資料を使って試みてみたのが、“首里・那覇港図の屏風についての質問づくり”である。これについては20号の拙稿「インターパリテイションとボランティアガイド」<sup>(注2)</sup>で紹介した。

その後、琉球大学の方からボランティアへの実践を学生にも試してみないかとの提案があり、田港朝昭・里井洋一先生の「社会科地理歴史科調査Ⅱ」「社会科公民科調査Ⅱ」の一環として、授業「県立博物館：物を通して学ぶ」を共同で計画することになった。4回のこの授業は、I. 首里・那覇港図の屏風から学ぶ、II. 秤にいどむ、III. 鉄かぶとの疵を探る、IV. 拓本から学ぶの4つで構成し実施してきた。

本稿ではIの“首里・那覇港図の屏風”やIIの“秤にいどむ”的実践例を中心にボランティアの実践と比較しながら、発見に向かわせる解説の手法について検討していくこととする。

## I. 首里・那覇港図の屏風から学ぶ

首里・那覇港図の屏風の学習に先立ち、授業の手順を次のように確認した。

①質問づくりをする。

\*質問は、各自OHP用紙に書く。グループで相談をし、それぞれが書いたものからグループで発表する質問を3つ選ぶ。そしてなぜこの3つの質問を選んだのか、その根拠もグループごとに発表する。

②各自の質問を大きな用紙にまとめて書き、みんなで質問を共有する。

\*質問が屏風の何に関するものなのか、質問対象が分かるように屏風の位置を表す番号をつける

③みんなの知恵を合わせて、仮説づくりをする。

\*質問に関連して解明の手掛かりになるものを博物館で探し、それをもとに仮説を述べる。

\*博物館の学芸員を含めて、答えの仮説づくりをする。

④できあがったOHP用紙をコピーして、学生に配布する。

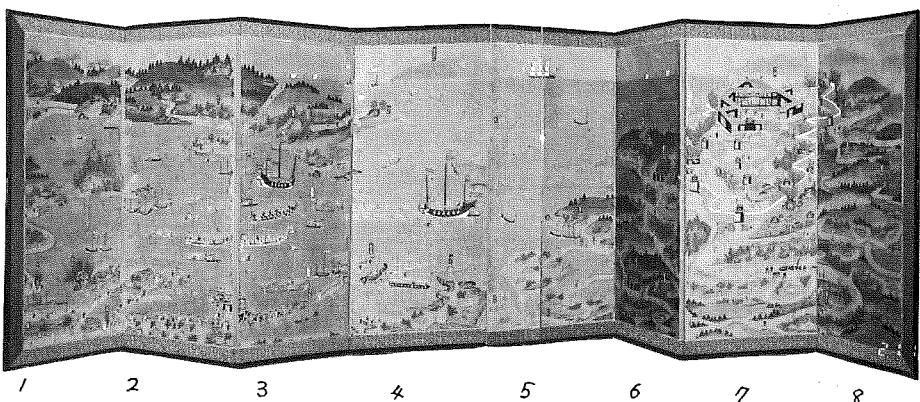
⑤次回に、質問づくりについて学んだことや感想を発表する。

今回の授業においては、博物館ボランティアへの解説指導と異なる試みを行ってみた。今回の場合、仮説づくりのための手掛かりを館内展示から見つけてくるという条件づけを行った。

### 1. 個々の質問づくり：

13名の受講生が、次のような屏風に関する質問づくりを行った。

(写真 ①首里・那覇港図の屏風)



| 質問の場所    | 受講生の質問内容   | ボランティアの質問内容                           |
|----------|--|---------------------------------------|
| 1 特定せず   | お墓がみあたらるのはなぜ   |                                       |
| 2 特定せず   | いつごろから首里城という名前がついたのか                                   |                                       |
| 3 特定せず   | 沖縄というとヤシのイメージがあるが、低木樹なものしか見当たらないが、琉球と現在の沖縄との違いを表しているのか |                                       |
| 4 特定せず   | 絵を描いた人は、首里城内をよく知っていた人ではなかったか                           |                                       |
| 5 特定せず   | 図は、どのあたりから描いたのか  |                                       |
| 6 特定せず   | 各地に城(ぐすく)があるのは、なぜか                                     |                                       |
| 7 特定せず   | 首里城の門には名称がついているがなぜか                                    |                                       |
| 8 特定せず   | 民家にシーサーのあるところが見えないけど、あまり普及していなかつたのか                    |                                       |
| 9 特定せず   | 灯台がないけど、それにかわる働きをしている場所はどこか                            |                                       |
| 10 特定せず  | 服の色の違うのはなぜか  | ・港で傘をさしている人が多いが、その当時傘の使用は、広まっていたのだろうか |
| 11 特定せず  | なぜ傘をもっているのか  | ・山に描かれている樹木から、屏風を描いたときの季節がわかるのかな      |
| 12 特定せず  | 誰が描いたのか  | ・那覇の海のむこうに描かれている垣花は、島だったのかな           |
| 13 特定せず  | 沖縄に来て、寺のことはあまり聞かないが、絵にはたくさんある。當時そんなに普及していたのか           | ・白っぽい斜めの線が海の近くまでできているが、何だろう           |
| 14 特定せず  | 壁に使われている石は、どこからとってきたのか                                 |                                       |
| 15 1-A   | 真玉橋に牛に乗って長い棒をもっている人がいるが、何をする人か                         |                                       |
| 16 1-A~B | 奥之山とあるが、当時は島だったのか                                      |                                       |
| 17 1-A   | 牛車に乗っている人は、どんな人か                                       |                                       |
| 18 1-C   | 通堂とかかれたすぐ下の白い物は何か。                                     |                                       |

※ 質問の場所は、屏風のA・B・Cの横線と1~8の縦線の組み合わせによる。

|    |        |  |   |
|----|--------|--|---|
| 19 | 1-C    | 硫黄城とは何か  |   |
| 20 | 1-C    | 赤い桶を棒で担いでいるが、何が入っているのか                             | ・動物で描かれているのは牛だけだが馬などのほかの動物が描かれていないのには、何か理由があったのかな |
| 21 | 1-C    | 赤い色など色つきと、そうでないものに違いがあるのか                          |   |
| 22 | 2-B    | 御物城とは何か  |   |
| 23 | 2-B    | 赤い旗が3本たっているが、赤い部分だけが、きれいにはがれていのなぜですか               |   |
| 24 | 2-B    | 船の後方に両手を指している人がいるが、何をさしているのか                       | ・海は現在の松川あたりまで入り込んでいたのだろうか                         |
| 25 | 2-B    | 船に大樽をふたつのせているが、何を運んでいるのか                           |   |
| 26 | 2-B    | 棒と太鼓を持っている人の役目は何か                                  |   |
| 27 | 2-C    | 人々の中にちょんまげの人がいるが、それはなぜか                            | ・陸にいる人達の服装には、違いがあるのかな                             |
| 28 | 2-C    | 船をながめる異服の男たちとは、日本人か                                |   |
| 29 | 2-C    | ほらがいらしきものを吹いているがどうしてですか                            |   |
| 30 | 2-C    | 侍がハーリーをみている場所は現在のどの辺か                              |   |
| 31 | 2-C    | 白い建物の横の家には、石垣がないのはなぜか                              | ・描かれている船は、何種類あるのか                                 |
| 32 | 2-3C   | 出島に羽織りをつけた人がいるが、彼等は一体何者                            |   |
| 33 | 2-3C   | 2人の男が指しているのは、どこか                                   |   |
| 34 | 2-3C～B | ハーリーらしきものをみている薩摩の人間らしきものがいるが、ハーリーは、彼等の歓迎のために行われたのか | ・船に乗っている人の服装は、どんなかっこうをしているの                       |
| 35 | 2-3B   | ハーリーに乗っている黒服、赤帽の男は役人であろうか                          | ・ハーリーの服の色が、白・黒・水色だが、正しいか                          |
| 36 | 3-A    | 日の丸はいつからあったのか                                      |   |
| 37 | 3-A    | ハーリーの旗は、なぜ三角日の丸か                                   |   |
| 38 | 3-B    | 草葺きの細長い屋根の屋根の下に榜を着た人がいるが、何をさしているのか                 | ・0の中に+と書いた旗があるが、何を表しているのかな                        |
| 39 | 3-B～C  | 薩摩の船は、貿易船なのか。それとも別の目的なのか                           | ・屋根つきの船は、何に使われていたのかな                              |
| 40 | 3-B    | 屋良座にあるのは灯台か  | ・和船がなぜ沖縄にあったのだろう                                  |
| 41 | 4-A    | 沖の船はどこの船か  |   |
| 42 | 4-B    | 那覇港は毎日のようにこんなにたくさんの船で賑わっていたのか                      |   |
| 43 | 4-B    | 進貢船の旗の文字の意味は                                       |   |
| 44 | 4-B    | 進貢船に日の丸がついているが、これはなぜか                              | ・三重城と書かないで新重城と書いているが、どちらが正しいか                     |
| 45 | 4-B    | 日の丸の旗があるが、これは日本の旗を意味するのか                           |   |
| 46 | 4-C    | 外国船があやしい   | ・外国の船らしきものに白・青・赤の三色旗があるが、どこの船だろう                  |
| 47 | 4-C    | 黒い船の名は、何か  |   |
| 48 | 4-C    | 新重城は、現在のどのあたりか                                     |   |
| 49 | 4-C    | 新重城とは何か  |   |
| 50 | 4-C    | 新重城とは、そこにある建物の名前か                                  |   |
| 51 | 5-A    | 沖にある黒船の帆と旗からわかる風向きの関係がおかしいのでは                      |   |
| 52 | 5-A    | 外国船があやしい   |   |
| 53 | 5-A    | この船は何か   |   |
| 54 | 5-A    | 沖に見える船は洋船のようであるが、どこの国が何のために現れたのか                   |   |
| 55 | 5-A    | 「慶」と書いてある島らしきものは何か                                 |   |
| 56 | 5-B    | 泊村は石垣に囲まれているが、村が大きな城壁みたいなものに囲まれていたのか               |   |
| 57 | 5-C    | 久米村が見当たらぬのはなぜか                                     |   |
| 58 | 5-C    | 泊塩浜にある藁葺きみたいなものは何か                                 |   |
| 59 | 5-C    | 泊の真ん中にある石碑は何か                                      |   |
| 60 | 6-A    | 社蘭と書いてある建物は何か                                      | ・社蘭という名前は、今どこにあたるのか                               |
| 61 | 6-B    | 弁財天堂のかけはしの手すりがない                                   |   |
| 62 | 6-C    | 崇元寺の門が一つしかあいていない                                   |   |
| 63 | 6-C    | 崇元寺前にある石碑は何か                                       |   |
| 64 | 7-A    | 首里城の屋根は瓦に見えない。赤瓦じゃなかったのか                           | ・首里城内の広さや標高は、どうなっているのだろう                          |
| 65 | 7-A    | 首里城の柱は黒いが赤ではないのか                                   |   |
| 66 | 7-A    | 首里城が黒いのはなぜ   |   |
| 67 | 7-A    | 首里城の龍柱は向かい合っているが、歴史展示室にある首里城の白黒写真では向かい合っていない       |   |
| 68 | 7-A    | 中山城のすだれ(?)に鶴の絵が書いてあるが琉球に鶴はいたのか                     |   |
| 69 | 7-A    | 円覚寺の屋根の端についているものは何か                                |   |

|          |   |  |
|----------|---|--|
| 70 7-A~B | 首里城の門は、奉神門を除いてすべて開け放たれている。外との交流は、ある程度自由だったのか        | • 首里城ではなく、中山城と書いてあるが、なぜだろう                               |
| 71 7-B   | 門の前にいる二つの獅子はシーサーの原型か                                | • 首里城の歓会門の前に獅子らしきものが向かいあっているが、ほんとにあったのだろうか、また向きは正しいのだろうか |
| 72 7-B   | 門の前のシーサーは、いつごろのものか                                  |  |
| 73 7-B   | 門番らしき人は見当たらないがどうしてですか                               |  |
| 74 7-B   | 首里城にはために旗は何か  |  |
| 75 7-B   | 現在の首里城にはシーサーがないのでは                                  |  |
| 76 7-B   | 中山城にしかシーサーがみられないがこれはどうしてか                           |  |
| 77 7-B   | 身分によって服の色が決まっていたのか                                  |  |
| 78 7-B   | そてつが首里城内だけとつつけたようにあるが、村には生えていなかったのか                 |  |
| 79 7-B   | 首里城の中の柵の中には何か銅っていたのか                                |  |
| 80 7-B   | 桶をかつぐ男の運ぶものは  |  |
| 81 7-C   | 玉陵がないのはなぜか  | • なぜ琉球で大名行列らしきものが出てくるのだろう                                |
| 82 7-C   | 首里城下の行列は、どこの侍か                                      |  |
| 83 7-C   | 大名列らしきものは何か   |  |
| 84 7-C   | 行列の先頭の人は琉球人のようだが帶剣している。薩摩の支配下にあった当時琉球の人の帶剣は許されていたのか |  |
| 85 7-C   | ひときわ異彩をはなつ黒服の武装集団は何者か                               |  |
| 86 7-C   | 侍の行列らしきものは薩摩の侍か                                     |  |
| 87 7-C   | 行列の一一番先頭にいるのは琉球人のように見えますが、先頭の3人しかいなかつたのか            |  |

上記の受講生による質問づくりをボランティアと比べてみると、両者とも直接的であるか派生的であるかを問わず観察に基づいた質問づくりになっている。

これらの質問内容を大まかにみていくと、次のようなものに分類することができる。

① 個々に観察したものや意味や起源、由来、現在場所などを探る質問づくり

- 例) • 首里城の名称の起源 (質問番号 2)
- 進行船の旗の文字の意味は (質問番号 43)

② 同じ範疇に入るものの同士を比べて違いの理由をさぐる質問づくり

- 例) • 港にいる人たちの服のいろの違い (質問番号 10)
- 船をながめる異服の男たちは、日本人か (質問番号 28)

③ 物の分布状況に関する質問づくり

- 例) • 民家にシーサーのあるところが見えないけど、あまり普及していなかったのか (質問番号 8)
- そてつが首里城内だけとつつけたようにあるが、村には生えていなかったのか (質問番号 78)

④ 人間や物の動きあるいは動きについての質問づくり

- 例) • なぜ傘をもっているのか (質問番号 11)
- ほらがいらしきものを吹いているがどうしてか (質問番号 29)
- 薩摩の船は、貿易船なのか。 (質問番号 39)

⑤ ある物に関し本人のもっていたイメージと屏風の絵を比べての質問づくり

例) • 沖縄のヤシというイメージと絵の樹木を比べる（質問番号 3）

• 現在港にある灯台から当時それにかわるものを考えてみる（質問番号 9）

• 沖縄では寺の話は聞かない。しかし絵にはたくさん出てくる（質問番号 13）

• 首里城の屋根は瓦に見えない。赤瓦じゃなかったのか（質問番号 64）

• 行列の先頭の人は琉球人のようだが帯剣している。薩摩の支配下にあった当時琉球の人の帯剣は許されていたのか（質問番号 84）

⑥ 史実により確認されているものと絵を比べての質問づくり

例) • 久米村が見当たらないのはなぜか（質問番号 57）

• 玉陵がないのはなぜか（質問番号 81）

⑦ 個々の観察を統合した上になりたつ質問づくり

例) • 屏風をどのあたりから描いたのか→同じ方向に描かれている港と首里城を比べての質問づくり（質問番号 3）

• 那覇港は毎日のようにこんなにたくさんの船で賑わっていたのか（質問番号 42）

• 沖にある黒船の帆と旗からわかる風向きの関係がおかしいのでは（質問番号 51）

• 山に描かれている樹木から、屏風を描いたときの季節がわかるかな（ボランティアの質問）

• 動物で描かれているのは牛だけだが、馬などのほかの動物が描かれていないのには、何か理由があったのかな（ボランティアの質問）

上で紹介した①から⑦までの代表的な事例を見ていると、認識の深化の過程は初めは現象的な意味や起源、由来、現在場所、分布状況などからスタートしているが、やがてそれらの既存の知識をもとに対象をたぐり寄せ、イメージとの比較、史実との比較をへて個々の観察を統合した質問づくりへつなげている。<sup>(註3)</sup>しかしこの屏風は、既存の知識の程度の差はある、観察さえすれば誰でも質問がつくれる間口の広さを持っている。

## 2. 博物館内の他の資料を根拠にしたグループの仮説づくりとディスカッション

個々に行った質問づくりをグループで話し合わせ、さらに博物館資料等を根拠にして仮説をつくる課題を与えた。発表のあとは、それを受けてディスカッションを行う。

仮説 1：首里城の瓦は、黒かった。

米田和紀：琉球大学教育学部 中学校教員養成課程 3年

「首里城の瓦は、当時はまだ黒い瓦だったといった仮説を立ててみたわけだが、半分ほどは自分の勝手な想像であったにもかかわらず、博物館の職員の方からも褒めていただき、大変恐縮におもった。自分が立てた仮説を裏付けるために、二階にあった瓦のコーナーを調査した。すると、赤瓦は18世紀ごろに出現していることが分かった。那覇港図が19世紀に書かれたのなら、この頃すでに赤瓦は存在しているはずなので、首里城の屋根は赤くてもおかしくないはずである。しかし首里城の屋根は黒く書かれている。当時では、最上流階級のはずなので、瓦屋根にできなかつたとは考えにくい。そこで自分は、この絵が書かれた時点ではまだ赤瓦に改装していなかつたのではないかと考えたわけである。」

仮説 2：墓がないのは、ありのままにかいだため

後藤啓子：琉球大学教育学部大学院国語教育 1年

「墓がなぜ屏風にえがかれていないのかということに関して、とにかく私たちグループは、屏風が見たままにありのままを書いていると思うところから仮説を立てていきましたが、「ハレとかケガレとかそういうものを考えに入れて、屏風に死を入れるのを避けたのではないか」との意見に愕然としました。いわれてみれば全くその通りで、屏風がどのように使用されたにしても、わざわざ墓を書くことは避けたいと思うのが普通だと思います。思い込みがまずあって、それにしたがって仮説を立てたせいで常識的なところが、スッポリ思考からぬけていたわけです。・・・・・・・・・・・・・・」

仮説 3：屏風には独特の描きかたがある

亀澤和憲：琉球大学教育学部 中学校教員養成課程 3年

「今回の調査で「首里・那覇港図」について観察した訳だが、全員で検証した中でシーサーについての議論が印象に残った。・・・・・・・・・また、自分の質問づくりの中で「この図はどこの場所から描かれたのか？」という意見を出したが、全体検証でこれは場所的にどこからではなく、全体を見渡せるような描き方で作成したのではということだった。後で田港先生から、昔の屏風絵の描き方にも似たような手法があるといった内容のお話しがあり、「なるほど」と思った。その他にも、授業の後で話題になっていた「帆船の帆と風向き」の関係のように、いろいろと興味深い発見があるよう感じた。調査として今回初めてだったが、次回から多くの視点で素材を検討していくことで、物を見ていく目を育てていきたいと思う。」

ここでは3つの代表的な仮説を紹介した。ボランティアへの試みにおいては、質問づくりが中心であったが、今回は質問づくりをもとに仮説まで立てるという作業を加えた。ここに紹介した3つの事例の中で博物館内にある他の資料を根拠にして仮説を提示したのは、仮説の1のみである。すべての場合に他の資料を根拠にした仮説づくりが可能というわけではないが、博物館における学習をみすえたとき、このような手法を使った学習および解説の方法が有効なものとして検討されるべきであろう。

(写真② 仮説発表)



### 3. 屏風づくりについての感想発表

大浜詩織 琉球大学教育学部 中学校教員養成課程 3年

博物館を見学するのは、何年ぶりというほど久しぶりだった。普段は、博物館の前を通り過ぎるだけで、全く行く機会もなかつたし、行こうともしなかつた。この授業は、博物館を利用するとあって、はじめは少々緊張気味であった。

今回は、本物の那覇港屏風を見て、それについての疑問点を調べ、みんなで話し合う形式であった。疑問点1つに対しても、考えが様々でとても興味深かった。みんなの意見を聞いているとそれが本当の回答のような気がしてきた。この人の考えに賛同するとか、そういう考え方もあるんだなと参考になった。

亀澤さんの“この屏風は、どの方向から描いたものか”という質問に、豊さんが創造画と回答したときにはすごく関心させられた。豊さんの説明で、私の頭がすっきりと整理されたような感じでした。またこの絵画が必ずしも実在していたそのままの様子ではないかもしないという根本をひっくり返すような斬新的な考え方にも、はっさせられた。

1つの教材をみんなでじっくり検証し、展開していった今回の授業は、楽しかった。

・・・・・前期の時よりもだいぶ人数が増えて、屏風を見るだけでも大変だった。発表する時間も、それだけ長くなつたけれど、人数が増えたぶん、いろんな人の意見を聞くことができて、とても勉強になった。

その中でとくに興味を持ったのは、お墓についての質問である。現在、その場所にお墓がどのくらいあるのか、よくわからないが、屏風を見ると玉陵もないし、やはり米田さんの言った「墓は不吉なものだから意図的に描かなかった」との説は、かなり真意をついていると思った。

他に考えたことは、「琉球の人は帯剣が許されていたのか」という質問に対してである。絵を見る限りでは、帯剣をしていると思われるは行列の中の一部の人で、他に帯剣している人はいなかつたと思う。これは「門番らしき人が見当たらないのはなぜか」という疑問と関連していると考えた。作者の都合で、門番を描かなかつたのかも知れないが、私は当時の琉球では武器を持っている人がごく少数であり、そのため厳重な警備をする必要を強いられることはなかつたのではないかと思った。

その他には二つ確かめたことがある。先日首里城に言った時、いまでも首里城にシーサーがあることと、屏風でいうと柵で囲われているところを見た。前に首里城に行った時は、シーサーに気づかなかつたので、あると知って驚いた。・・・・・

気をつけてみると、普段見えないいろんな事に気づくのだなあと、改めて思った。

大浜さんと仲村さんの感想をみていくと、幾つかのことが分かってくる。

大浜さんは詳しく観察する中で、一つのことに対して様々な仮説が出てくること、また様々な意見を闘わせる中で、問題点が整理されてくることを感じとっている。

仲村さんは、質問づくりや仮説づくりの中で、問題解決のために実際にその場所へ足を運んでいる。

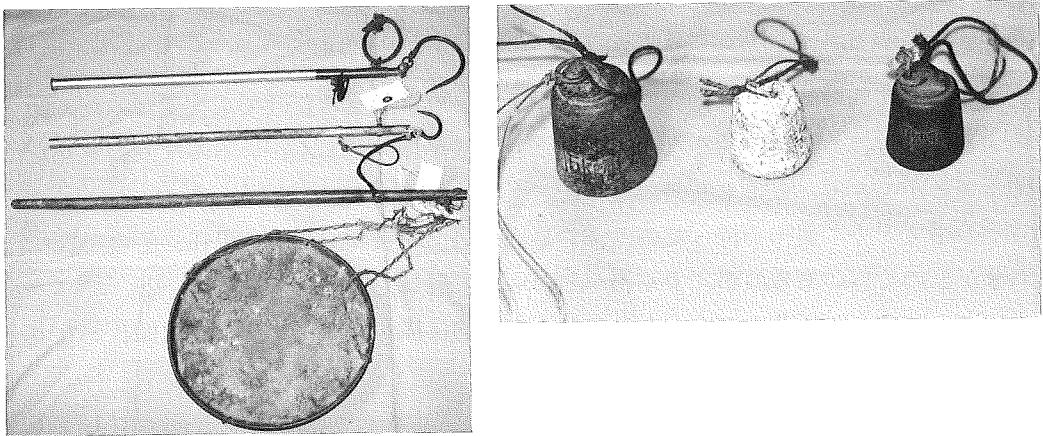
二人の感想を通して言えることは、①細かく観察をして質問を作る→②仮説を立てる→③ディスカッションを行う→④確かめるの4つの作業が、発見に向かわせるための手段として、有効であるということである。

## II. 秤にいどむ

秤にいどむの学習にさきだち、次のような条件を設定し、課題を与えた。

条件① 3組の竿秤の分銅と竿をばらばらにする。

\*作業の便宜上、3つの竿を木秤、錆秤、鉄秤と呼ぶ。3つの分銅は大分銅、白分銅、小分銅と呼ぶ。



条件② 900 グラムの重さのものを 3つ用意する。

条件③ 現在使用されている台秤を置き、自由に使えるようにしておく。

課題① 竿ばかりを選択し、スケッチを行う。

課題② どの竿と分銅が対になっているのか、はじめに選択した竿に合う分銅を見つける（仮説づくり）。竿に合う分銅を見つけたら、その根拠を皆の前で発表する。

課題③ 3組の分銅を、観察をもとに古い順番に並べる。

課題④ 竿ばかりの質問づくりを行う。

### 1. 竿ばかりのスケッチを行う

ここでは、二人のスケッチを紹介しておく。

#### 第2回 社会科／地歴科／公民科調査 竿秤に挑む

仲村千晶

- ・木秤の単位と、その分銅の単位が違うのはなぜか
- ・目盛りが十進法でないのはなぜ。（木秤と、さび秤）
- ・自分で秤は作っていましたか。
- ・トロの単位が使われ始めたのはいつ頃からか。

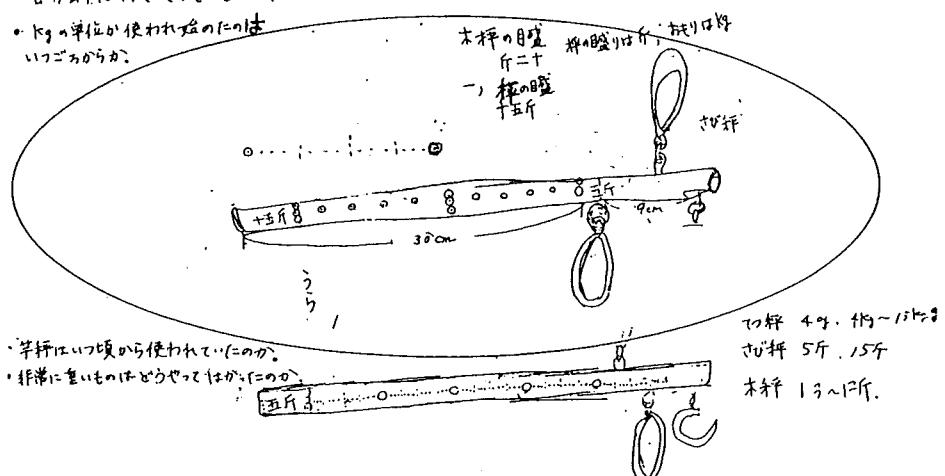
・秤をみて、構造の中に、竿秤の絵をかきましょう。  
・秤を復元し、年代順にならべましょう（仮説作業）。

・絵や仮説作業から質問をつくりましょう。

$$1\text{斤} = 600\text{g}$$

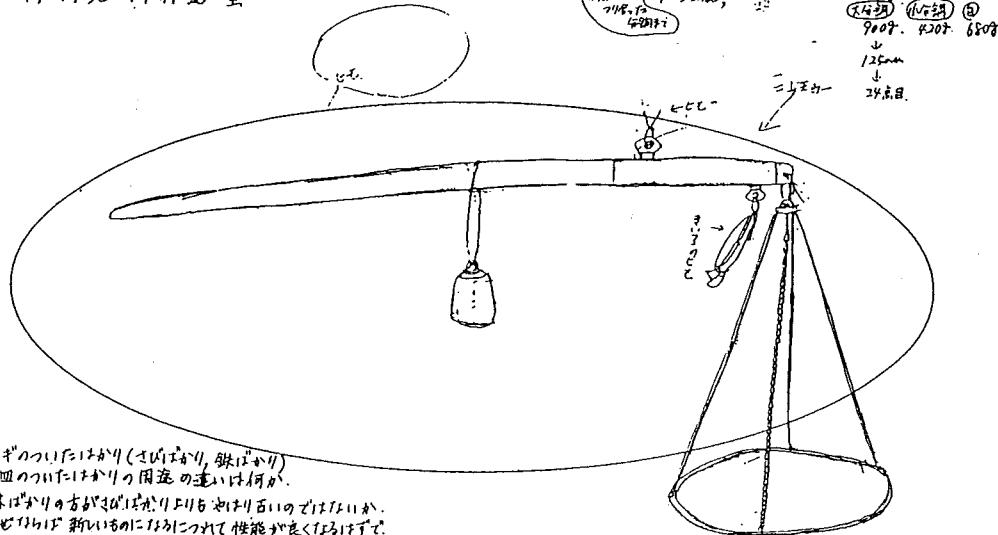
$$900\text{g} \cdots \frac{3\text{kg}}{600\text{g}} = 1.5\text{斤}$$

|     |          |
|-----|----------|
| 1kg | 白 - 1.5斤 |
| 2kg | 小 - 2斤   |
| 大   | - 1.25斤  |



## 第2回 社会科／地歴科／公民科調査 竿秤に挑む

9421430・1年伊達 望



- ・竿秤をみて、横円の中に、竿秤の絵をかきましょう
- ・秤を復元し、年代順にならべましょう（仮説作業）。
- ・絵や仮説作業から質問をつくりましょう。

始めに与えた課題“スケッチを行う”は、スケッチの作業を通して受講生にくわしく観察してもらうことをねらいとした。

仲村さんは鉄秤の方をスケッチしている。目盛りのところに着目し、さらに竿秤の表と裏の両面をスケッチしている。目盛りを記入しながら、十進法でないことに気づき、さらに表と裏の両方のスケッチを通して重さが五斤と十五斤までの二通り計れることに気がついている。さらに後の課題でもある竿にあった分銅についても記録しており、木秤の竿に書かれている単位と分銅の単位の違いに疑問を持ち始めてきている。

伊達さんは、木秤をスケッチしている。全体の外観をスケッチしているが、この竿がどの分銅と対になっているのか、またこの秤でどれだけの重さまで計れるのか、そのてがかりにつながる目盛りなどのスケッチがない。この木秤には、3つの秤を古い順に並べるときの手掛けりが隠されているのだが、気づいていない。さらに3つの秤の古さを確かめるとき、竿の材質にのみ着目し、木の材質であるということから鉄秤より古いであろうとの結論を出している。

### 2. 竿に合う分銅を見つける

今回の受講生は、これまでに竿秤を操作した経験のないものばかりであった。グループを3つに分け、先に述べた条件を提示した以外はすべてグループの試行錯誤に任せることにした。どのような方法を駆使して竿に合う分銅を見つけだしたのか、受講生のレポート

を見ていくことにする。

亀澤和憲 琉球大学教育学部 中学校教員養成課程 3年

今回の調査は、「竿秤」についての内容であった。用意された3種類のはかりの中で、自分は「鋸秤」と仮称されたタイプについてスケッチを行い、観察した。

次にはかりとどの分銅が一致するのかを調べる作業では、対象物の重さ（900g）と白い分銅が1.5斤（=900g）で釣り合ったので、白分銅と鋸秤の組み合わせを考えた。これについては、最初から白分銅が置かれていたので、まさかこの分銅ではない筈という懸念もあったが、他の2つの分銅では、うまくかみあわなかつたので、間違いないと思った。

### 3. 3組の竿秤を古い順番に並べよう

竿に合う分銅を見つける作業は、1時間以上にもわたる操作をとおして3つのグループが結論に至り、各グループごとにその根拠を発表してもらった。そして次の課題である3組の竿秤を古い順に並べよう挑戦してもらった。しかしこの順番並べについては、一番新しいのはkgと表示されている鉄秤であるとの結論に至るが、残りの木秤と鋸秤については意見が分かれ、とうとう次回持越しとなる。

#### (1) 木秤が一番古いとする説

(仲村千晶)

三つの秤のうち、どれが一番古いのかで意見が分かれたが、結論として、やはり木秤の方が一番古いと思われる。その理由は、一つに秤に記されている字が右から左に書かれていること。ふたつめに、素材が“木”であることである。木というのは水を吸うと膨脹したり、気温によっても形がくずれたりしやすいので、長期間使用すると誤差が広がるおそれがある。物は改良されていくので、秤も、木から鉄へと、その素材が移っていったのではないかと思う。

(下川まゆみ)

私の仮説でいくと、古さの順で木秤→さび秤→鉄秤である。つまり皿秤→かぎ秤である。かぎ秤には皿をひっかけて計ることもできるので便利である。またかなり大きく皿に入りきらないものでも、ひっかけることができれば、かぎばかりの方が便利だ。

\*下川さんは、かぎ式になっているさび秤を2番目に新しく、木秤を一番古いものとみなしている。

(与那嶺忍)

竿秤を古い順に並べるという作業は、いがいに簡単だったようだ。もしも正しければ 15kg 用の竿秤（鉄秤）がいちばん新しくて、＊数字を右から書いている方が最も古いものだと思った。

（＊木ばかりをさしている。）

## (2) 錫秤を一番古いとする説

(亀澤和憲)

・・この後年代順（古い）にならべるという問題では、木ばかりと錫ばかりの順番で錫ばかりが古いと考えたが、自分たちの意見が少なかったので不安になってしまった。

木秤と錫ばかりとでは、どちらが古いのかについて結論を下すには、やはり観察をする以外に方法はない。木秤に書かれている文字について、伊達さんのレポートをのぞいてみることにする。

「木秤には銀色の文字と点が打たれていたが、文字はほとんど読めなかつた。このこともあったかと思うが、最後の最後まで、これらの点がどんな重さを示しているのか分からなかつた。」

伊達さんが、レポートでも触れているように、やはり手がかりは読みにくい文字にあつた。この文字は点の集まりによって構成されているので判読しにくいが、備え付けの拡大鏡をつかえば、検討可能となってくる。

木の竿には 4 種類の文字が書かれていて、①二斤二分一、②十二斤、③七瓦、④一匁五百瓦となっている。受講生には斤という漢字は読めたのであるが、瓦や匁の意味が分からなかつたようである。瓦がグラムを、匁がキログラムを表しているということを観察やその後の調べでつかんでいたなら、この木秤が斤とキログラムの両方を使用できる過渡期のものであることが判明し、時代順の確定ができたであろう。

（写真④）木秤の文字を拡大した部分



この竿秤の勉強をとおして、物をじっくり見ることがいかに大切であるかを、痛感したと思う。

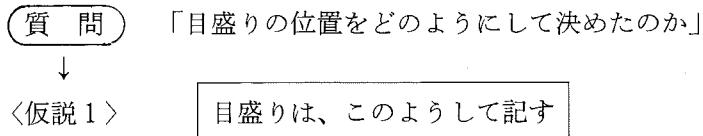
#### 4. 質問づくりと仮説づくり

それぞれのついた質問を挙げてみる。

1. かぎのついた秤と皿のついた秤の用途の違いは
2. 木秤のほうが、鋸秤よりも、古いのでは
3. 目盛りの大きな区切りに●を使うのはなぜか
4. 木秤の単位とその分銅の単位が違うのはなぜか
5. 白分銅は、何でできているのか
6. kg の単位が使われ始めたのは、いつごろからか
7. 竿秤は、いつごろから使わっていたのか
8. 非常に重い物はどうやって計ったのか
9. 木秤に書いてある十二斤と二斤二分一以外の字は、何と書いてあるのですか
10. 分銅と秤がもともと 1 セットだったとは考えられないのではないか  
(たまたま寄贈者が一緒にしたのではないか)
11. 斤とは何進法ですか
12. 右書きから左書きに変わったのはいつか
13. 皿秤とかぎ秤の用途の違いは、何か
14. 木秤には、計測するとき真横にも、真上にも表示があるが、これは何のためなのか
15. 木秤の竿が曲がっているが、きちんと計測できるのか
16. 白分銅は、まわりが欠けているが、ちゃんと重さはあっていましたか
17. 検定証印は、いつ頃制定されたか
18. 目盛りは、どのようにして決めたか
19. すべて沖縄の竿秤か
20. 分銅の素材は
21. 分銅に香川と書いてあるが、それと竿のメーカーとは違うのではないか
22. 分銅を変えても重さは正しく量れますか
23. 沖縄は本土と重さの単位が、同じだったのだろうか
24. 秤を長年使用して、くるいは生じないのか
25. ここにある秤は、以前どこで使用されていたのか
26. 木秤だけ、目盛りを刻んでないのはどうしてか

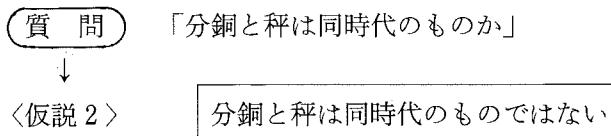
27. どんな人から寄贈をうけたのか  
28. 沖縄でこれらの秤は作られていたのか

次にそれぞれの質問をもとにつくった仮説を紹介してみよう



下川まゆみ 琉球大学教育学部 中学校教員養成課程 2年

まず一斤とか1kgとかの決まったおもりを皿の上にのせ、あらかじめ用意してあった分銅とどこでつりあうか記しておき、次に五斤とか5kgのようなすこし重いものをのせ、同様にチェックする。あとは、それを等分になりように目盛りをうつ



亀沢和憲 琉球大学教育学部 中学校教員養成課程 3年

分銅と秤は同時代のものではない。根拠として、はかりに比べ、分銅の方がすり減っていたり腐食しているのが明らかであると感じたことが挙げられる

## 5. 感想発表

下川まゆみ 琉球大学教育学部 中学校教員養成課程 2年

今回の授業は、非常に疲れた。特に私の選んだ秤が一番分かりにくかったし、このような秤に接したのは始めてで、またどのように使用するかなど全然分からなかったからである。またこの授業を受けるまで、"斤"とか"分"とかの存在を知らなかつたので、難しく思った。それでもこれだけの秤で、こんなにいろいろな疑問点が挙がるから、一つのものをくわしく観察していくことは、重要なことだと思った。

今回の秤の授業では、操作を通して一つのものをじっくり観察させ、観察したものの中から手がかりを見つけさせていくというねらいを持っていたが、点文字で書いた瓦や匁の存在に気づかなかったため、3つの秤を時代順に並べることができなかった。しかし最後のまとめで話したように、物そのものに着目し、物から学ぶことの重要性は理解できたと思う。

### III. 結論：発見に向かわせる解説について

琉球大学教育学部の田港朝昭先生、里井洋一先生との共同授業の実践は、実に有意義なものであった。

博物館における解説というとき、一般的には解説シナリオを作成し、それにしたがって説明をしていくのが通常である。しかし来館者が多様であるとき、とりわけその大部分を占める小中学生を念頭に置いたとき、知識を中心とした解説では子どもたちの意欲を失ってしまうことになりかねない。<sup>(注4)</sup> 発見に向かわせるアメリカの解説の手法のように、物そのものの観察に向かわせる方法については、これからももっと学ぶ必要が生じてくるであろうし、さらに博物館の資料を使ってその具体化を試みることが、これからも重要になってくると思われる。

今回は、大学生を対象に、歴史展示室にある首里・那覇港図や民俗資料などを使って“物そのものの観察にいかに向けさせていくのかという”課題に迫ってみた。

その中で計画した質問づくり→館内の他の資料を根拠にした仮説づくり→ディスカッションという構成は、実施してみて、手応えを感じた。このような試みをこれからも他の博物館資料を使って試みていきたい。歴史展示室のノロ資料、美術工芸室の紅型、民俗室の龕、自然史展示室のヤンバルクイナ、ノグチゲラ、イリオモテヤマネコなど、観察を導入しながら広がりを持たせることのできる好素材がまだまだいっぱいある。

#### 〔脚注〕

注 1 財団法人日本博物館協会「日本の博物館事情（博物館白書平成5年度版）」

財団法人日本博物館協会「博物館ボランティア活性化のための調査研究報告書」

注 2 前田真之「インターパリテーションとボランティアガイド」『沖縄県立博物館紀要第20号』

注 3 シカゴにある自然史フィールド博物館教育課が出版した Teach the mind, touch the spirit は、観察に目を向けさせるためにどのような実践を行っていったら良いのか参考になるものが多く含んでいる。

この著書では、資料から学ぶということで、クリップを対象にした資料分析を行っており、それをとおして観察の内容が、①説明、②比較、③対照、④分析、⑤推論、⑥仮説形成、⑦議論展開に分類されることが述べられている。さらに質問をすすめるための戦略として、①情報を集める、②情報の組織化・プロセス化を行う。③知られている情報から推論や仮説、組織原理の発見に向かわせる、の

段階的なプロセスをふまえさせることの重要性を指摘している。

注4 物そのものの観察をとおして、いかに発見させていくのかについては、Freeman Tilden の *Interpreting Our Heritage*, University of North Carolina press も、よく読まれている。

しかし物そのものの観察をとおして、具体的にどのようなことが分かってきたのかについては、Edith Mayo の *American Culture*, Bowling Green State University Press に所収の Kenneth L. Ames の *Material Culture as Non Verbal Communication* が参考になるであろう。

イギリスにおいては、Susan M Perce の編集による *Museum Studies in Material Culture* が出版されているが、アメリカの実践例に比べて思弁的な傾向が強いように思われる。しかしこの本の中で、イギリス側からみたアメリカの研究動向が、Thomas J. Schlereth の *Material culture research and North American Social History*において紹介されており、手がかりになる。

アメリカ国立歴史博物館のハンズ イン ヒストリールームで使っているリーフレットの中にも、物そのものの観察に向かわせる好資料が数多くある。

## 沖縄の戦後関係資料と沖縄系移民資料に関する調査報告

新城さやか、萩尾 俊章

(沖縄県立博物館)

Research Report on Materials Concerning Postwar Okinawa and Emigration from Okinawa.

Sayaka SHINJYO and Toshiaki HAGIO

(Okinawa Prefectural Museum)

### はじめに

1995年度（平成7）は戦後50年の節目にあたる年で、沖縄県立博物館では太平洋戦争・沖縄戦終結50周年事業の一環として特別展「甦る沖縄・戦災文化財と戦後生活資料展」が企画されている。その特別展の実施計画にともない、沖縄の戦後資料の調査をおこなった。本稿はそれらの資料調査で得られたデータについて、特別展の中では十分に生かすことのできないデータに関して資料報告をするものである。

資料調査は沖縄県内分に関しては、萩尾俊章と新城さやかが1994年10月から1995年2月にかけておこなったものによっている。資料の一覧は桐のデータファイルに一括して入力・保管されている。ここで紹介されているのはその一部である。また、アメリカの沖縄関連の資料調査については、沖縄県立博物館職員の浜比嘉勝副館長、大城将保学芸課長、久貝勝盛学芸員と萩尾が1994年6月12日から26日、與那嶺一子学芸員と萩尾が同年11月25日から12月6日の計2回にわたっておこなったものにもとづいている。これについても同様にデータファイルに保管されている。

本稿は、前半の沖縄の戦後資料については新城さやかが、後半の移民関係資料については萩尾俊章がそれぞれ分担して執筆した。

## 1 占領下初期の統治機構に関する資料

### 1) 沖縄諮詢会関係資料

去る太平洋戦争において日本で唯一地上戦の場となった沖縄では、1944～45年にかけて住民をも巻き込んだ激しい壮絶な戦闘が繰り広げられ、20万余の尊い人命が失われる結果となった。その戦闘の様子についてはここでの論述趣旨から外れるため割愛するが、1945年4月、沖縄本島に上陸を開始した米軍は、南西諸島を米軍の支配下に置くことを内容とした「ニミッツ布告（米軍海軍軍政府布告第1号）」を発表、沖縄本島中部の読谷村に米海軍政府を設置するとともに本島内および周辺離島10数カ所に一般住民や軍人軍属のための捕虜収容所を設け、占領政策の足掛かりを築いていった。そして同年8月15日、米軍政府は各地の収容所から124名の住民代表を選んで石川市に招集し、仮沖縄人諮詢会を開いて沖縄の中央政府創設に際する準備機関としての諮詢会設置および沖縄占領行政の基本方針を初めて明らかにするとともに、続く20日にはこれら住民代表による諮詢委員選挙のもと15名の委員を選出させた。これが戦後沖縄の行政機関の始まりともいえる「沖縄諮詢会」の誕生である。

志喜屋孝信を委員長として発足したこの沖縄諮詢会は、当初その活動の場を石川市石川に置き、米軍と住民との橋渡し的役を果たす機関となつたが、そもそもが米軍政府の諮問機関であることから決議権等の実質的権限を持った機関ではなかった。しかし、ここでえて特記すべき点はこの沖縄諮詢会によってさまざまな戦後復興対策が立案、実施されていき、沖縄の戦後行政の基礎を形作っていったということである。

ではこの沖縄諮詢会についての資料を見ていくと、まず最初に挙げられるのは「諮詢会會議録」である。これは当時の諮詢会委員たちと米軍政府との戦後復興における意見のやりとりを伺い知ることのできる貴重な資料であり、原本は現在沖縄県立図書館史料編集室（以下史料室と記述）の書庫に保管され、その内容詳細については文献「沖縄県史料 戦後1 沖縄諮詢会會議録」にまとめられているのでそれを参照されたい。また、同じく史料室書庫には他にも米軍政府が諮詢会を通して沖縄住民に出した指令および布告等の文書関係資料が英文と訳文の2種類で保管されている。ただ、會議録や文書とはいってもこれらは終戦直後の物資貧窮の最中に記録されたものであることから、使用された用紙が米軍政府配給の用紙や何らかの文字を記してある用紙の裏面を利用したもの、また上江洲敏夫氏が「終戦後しばらくして出回った緑の野線入りの用紙から、ザラ紙風の白紙やガリ版刷りの野紙などが使用され、法量も一様でない。表紙はマニラ紙よりやや薄手の厚紙や封筒用紙などが使用され<sup>(注1)</sup>」と指摘しているように紙の種類およびサイズもまちまちで、さら

に記述に使用された筆記用具の種類も一定しておらず、この点において終戦直後の沖縄の時代相を物語る資料としての特徴を見ることができると言えよう。この他石川市立歴史民俗資料館には沖縄諮詢会看板が復元資料として収蔵されている。

沖縄諮詢会において戦後復興の手立てが確立されていったことは先にも述べたが、その中でもことのほか文化・教育面における復興については注目すべきものがある。文化面においては後でふれることとして、教育面では1945年5月石川市に戦後初めての学校「石川学園」が誕生したのを皮切りに、各収容所地区に次々と学校が開校されていった。これを受け同年8月には米軍政府内に教科書編纂所が設けられ、そこで作成された手作りの教科書が戦後沖縄の学校教育の担い手となった。これが有名な「ガリ版刷り教科書」である。残念ながら今回の資料調査において原本資料を見つけることはできなかったが、個人的に何名か資料所有者がおられるということで今後ぜひその方面に調査にあたりたいと考えている。また、先の石川学園については、現在石川市立城前小学校に記念碑「戦後教育発祥の地」が建立されており当時の様子をその碑文に見ることができる。

## 2) 民政府関係資料

1945年10月以降、収容所生活を送っていた住民たちの旧居住地区への帰村が許可されることになり、旧市町村の復活および各市町村長の任命によって県内の地方政治機構が次第に確立されいくようになると、それに伴う中央政治機構の改革の必要性が生じたため、前述の沖縄諮詢会は翌年の1946年4月24日、「沖縄民政<sup>(註2)</sup>」へと発展的解消および発足を見る運びとなった。

では民政府関係の資料を見ていくことにする。まず会議録および文書資料であるがこれは前述の沖縄諮詢会会議録同様、史料室に保管されており資料の状態もほぼ同じである。史料室には他にも沖縄民政府総務部調査係が発行した「一九四六年 沖縄民政要覧」や沖縄民政府文教部発行の「一九四六年十一月 学校一覧表」等、中央政治機構発刊によるおそらく戦後初めてであろう統計資料がいくつか保管されていた。また、沖縄民政府の印章、看板は当県立博物館において現在常設展示されている。その他注目すべき資料としては、石川市立歴史民俗資料館で現在常設展示中の竹劇団一連資料が挙げられる。先の沖縄諮詢会当時、特に文化面復興が注目される事象であることは前述で若干ふれたが「軍政府の主要ポストには比較的リベラルな学者軍人がそろっていた。—中略—海軍軍政府のスタッフ連は沖縄の文化や歴史に理解があり—」<sup>(註3)</sup>と大城将保氏が指摘しているように、当時米軍政府は文化面復興に際しての協力を惜しみなく行っていた。特に米軍政府文教部長のハンナ少佐に至っては戦前からの芸能関係生存者を調査し彼らを石川に集め、芸能活動を再

開させるべく多くの手助けを行った人物であるが、この芸能関係者たちを中心に「沖縄芸能連盟」が発足、後に1946年4月から1年間沖縄民政府文化部の直轄となった沖縄民政府劇団「松」「竹」「梅」の3劇団<sup>(注4)</sup>の結成へと経緯をたどった。竹劇団というのはこのうちの1つで主に本島北部を拠点とした演芸活動を行った劇団であり、当時使用された舞台衣装や小道具および劇団長辞令書等が前述の竹劇団一連資料としてその活動を現在に物語る重要な資料となっているのだが、特に注目すべき点は、終戦後の物資不足の中にあって、劇団員たちが米軍政府の援助のもと米軍部隊からの物資などを入手、それらを有效地に利用して衣装、化粧品、小道具の材料としたことである。<sup>(注5)</sup>米軍のカッパを利用した男物着物や払い下げ品利用の衣装箱などにはその見事な創意工夫の跡を見ることができる。

さらに民政府について考察の際、見逃してはならないのは宮古・八重山の両先島についてである。宮古・八重山は終戦直後は沖縄の政治機関からほとんど放置された状態におかれ、しかも1946年3月以降は沖縄民政府と行政組織上分離してしまったことから、1947年にそれぞれ「宮古民政府」「八重山民政府」を設置し独自の自治機構を確立していかねばならなくなってしまった。では、これら両先島民政府関係資料を見てみたい。まず、八重山民政府関係資料では1946年から1950年までの吉野高善知事時代の八重山民政府知事日誌が石垣市の南嶋民俗資料館に展示されている。また、この資料館には吉野高善知事による自筆の告辭あいさつ文や八重山民政府関連の新聞記事切抜が綴り資料として、その他、民政府認可の同人雑誌もいくつか収蔵されている。さらに前述の史料室には八重山民政府がかつて終戦直後八重山支庁だったころの八重山支庁布告文書がこれも綴られて保管されていた。これに対し、宮古民政府関係資料は十分な資料たる資料がなく、今回の調査で実際に見ることができたのは宮古民政府総務部調査課が発行した「公報 新宮古」(沖縄県立図書館宮古分館蔵) ぐらいであった。

### 3 ) 群島政府関係資料

前述の沖縄諮詢会、民政府に続く占領下初期の統治機構として次に登場したのが群島政府である。1950年11月～1952年4月の約1年半にわたり南西諸島は米軍政府によって沖縄・宮古・八重山・奄美の4群島に分割されたが、それぞれ各群島別にこの群島政府がおかれて、琉球列島米国民政府<sup>(注6)</sup>（以下、米国民政府と記述）発令の布告・布令・指令などに基づいてその区域内の公共事務を処理し、行政事務を行う統治機構としての役割を果たしていた。

群島政府関係の資料を見ていくと、まず史料室の書庫に保管されている宮古群島条例文書綴りがあり、資料から伺える特徴としては、起案文が手書きされていること、また条例

項目に至っては貝殻・海人草および宮古上布検査条例などといったように地域色が色濃く反映された条例項目があるのが見受けられ、これは当時それぞれの群島別で条例が制定されていたことを裏付ける注目すべき資料ではないかと思われる。また、石垣市立八重山博物館では八重山群島政府印入りの委嘱状などがいくつか収蔵されており、さらに当県立博物館においては沖縄群島政府印を所蔵している。

以上、沖縄の戦後米軍占領下初期の統治機構関連資料について見てきたが、いずれの項目にても言えることは、これら資料の絶対数が少ないということである。終戦期の混乱および半世紀近くの年数を経ている影響などで資料が散逸した点もある。またわれわれの調査不足も否めない点ではあるが、今回の資料調査では沖縄本島・八重山に比べ特に宮古関係資料については残存資料が少ないという事実が顕著に現れる結果となった。

## 2. 戦後生活資料について

1945年の沖縄が戦禍による多大な被害を被ったことは周知の事実であるが、その中にあって住民たちは実にたくましく戦後の混沌とした時代を生き抜いていった。そのことを物語る資料としてやはり最も重要なのは、住民の生きていく姿のすべてが結集して生み出されたと言っても過言ではない、生活の中で最も欠かすことのできない生活資料の数々である。

この戦後における生活資料を見るにあたり、筆者は2つの項目に分けたいと考えた。1つは住民たちが終戦直後の収容所生活からやがてそれぞれの旧居住地へと帰村し、その後の生活基盤を確立していくまでの占領下初期（終戦直後）生活資料、もう1つは人々の生活も大方落ちつきを取り戻しつつあった1952年4月1日の琉球政府発足以降におけるアメリカ文化移入期の生活資料である。よって、以下の記述もこの2つの項目に従うものとしたい。

### 1) 占領下初期（終戦直後）の生活資料

#### ①衣食住および冠婚葬祭関係資料

前章でも述べたように、戦後沖縄の出発点はそれぞれの地域的差異があるにせよ米軍の設けた捕虜収容所における生活復興からであると言えよう。終戦直後、人々は収容所生活において米軍からの無償配給物資によって日々の糧を得たが、やがて自分たちの生活の中にうまく適応させるべくこれらの配給物資に巧みに手を加え、創意工夫に満ち溢れた生活資料を次々と作り出していった。このような配給物資利用の生活資料については鍋やアイ

ロンなどに代表される飛行機部品のジュラルミンを加工した製品、薬莢を利用した灰皿、あるいは米軍払い下げの軍服である HBT、テント地やカッパ等を利用した衣服、コーラ瓶を半分から切って作ったコップなどがよく知られているが、これらの詳細については別の文献等でも多々詳述されている<sup>(注9)</sup>かと思われるので、今回この論述に際してはその中でも筆者が特に珍しく興味深いと感じたいいくつかの資料を中心として見ていただきたいと思う。

はじめに先で若干ふれたジュラルミン製品についていくつか特徴ある資料を紹介することにする。普通ジュラルミン製品と聞いて真っ先にイメージするのは、既述のように材料となる飛行機残骸部分を窯で溶かしてから新たに鋳型に流し込んで加工するといった鍛治的手法による製品であるが、今回の調査において他の手法によるジュラルミン利用製品があることを初めて知ることができた。諸見民芸館に常設展示されているビンダーレ（洗面器）と鍋は、地面に凹型の穴を堀りそこに板状のジュラルミンを置いてビンダーレおよび鍋の形に近づくように上から金槌等で叩いて作られたものである。また、伊江村教育委員会委員長の新城昇氏が個人的に所有しているやかんは、これも同じくジュラルミンを叩いてしかも上下を張り合わせて作られたものであった。さらに、もう1つ印象に残った資料は平良市総合博物館に収蔵されているダーツ鍋（写真1参照）である。この資料で注目すべきなのは、やはり板状のジュラルミンを今度は鍋の形になるように適当にひだ（ダーツ）を寄せて作ったという製作方法の面白さである。学芸員の方の説明ではおそらくこの製作方法が「ダーツ」という名称の由来となったのではないかということであった。

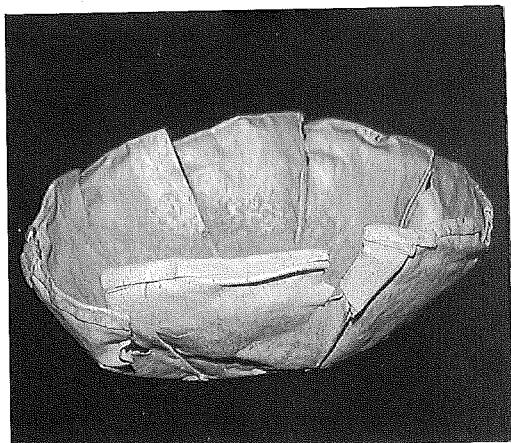


写真1：ダーツ鍋  
(平良市総合博物館)

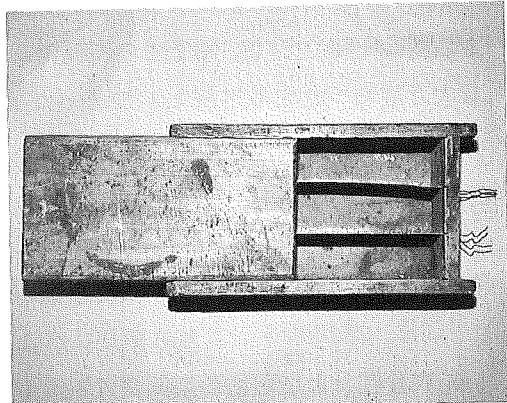


写真2：木製トースター  
(宜野座村立博物館蔵)

次に、これも上述の薬莢利用の資料についてであるが、嘉手納町史編纂担当室の方で薬莢を溶かし固めて作られたという洗面器とパーマゴーという変わった資料を見ることができた。また、前述の諸見民芸館には薬莢利用の木炭アイロンというのがあった。これら

資料に共通する特徴としてはかなりの重量があった点であり、これは薬莢がもともと真鍮製であることに起因しているのではないかと思われる。

他に木材を利用したいくつかの面白い資料にも出会った。前述の嘉手納町史編纂担当室には米軍用ベッドの木枠骨組部分を利用した鉋（かんな）があり、宜野座村立博物館においては木製トースター（写真2参照）なる資料があった。これは、ふたの付いた何らかの木箱を利用して作られたものと思われ、パンを焼く部分にトタンを使用して熱の通りを良くしてあるところは見事な創意工夫を凝らした資料であると言えよう。宜野座村立博物館にはまた米軍払い下げの木材を利用したガン（龜）というものまで展示されていた。

このような冠婚葬祭にまつわる資料でいうと、米軍のパラシュートでつくられた神衣装や祝座における太鼓として利用された米軍用水カン（共に石川市立歴史民俗資料館蔵）、さらには宜野座村惣慶部落東組が祭りの際に使用した米軍払い下げ品利用のドラ（宜野座村立博物館蔵）があった。衣食住といった日々の営みに関する資料にとどまらず、こういった特別的事象についての資料までが配給物資を利用して作られていたということは、あらゆる生活の場面においていかに当時の沖縄が物資貧窮にあえいでいたかを、そしてその中にあってかたくなに自分たちの生活文化を守っていこうと懸命だった住民たちのしたたかさを如実に物語っているといっても過言ではない。

その他特に注目したい資料としては、米軍廃品の木綿ロープをほぐしその糸を染めて織り上げた木綿絣やマラリアの薬であるキニーネ染め紅型などの着物（共に石川市立歴史民俗資料館蔵）、米軍用のバケツを利用したアルミ製の手洗い用水タンク（南風原文化センター蔵）等が挙げられる。またこれは配給物資利用の生活資料ではないが、おそらく沖縄戦当時のものと思われる石製地雷を利用した鍋（宜野座村立博物館蔵）というのもあった。

## ②学校教育関係資料

日常生活の中において忘れてはならないものとして学校の存在がある。終戦直後、沖縄でいち早く教育面の復興がはかられたことについては1章で述べたので、ここでは学校で実際に使用されていた資料について見ていくことにしたい。

終戦直後の配給物資であった米軍のHBTやテント地、カッパ利用の衣類資料があることは先述のとおりだが、これらの布地やビニール地は、衣類だけでなく通学用カバンとして、あるいは子どもたちが教室や校庭で遊んだであろうお手玉や野球用グローブ、ボール（写真3参照）などといった学校関係の資料にまでその形を変えていったのであった（共に平安座小中学校歴史資料館蔵）。

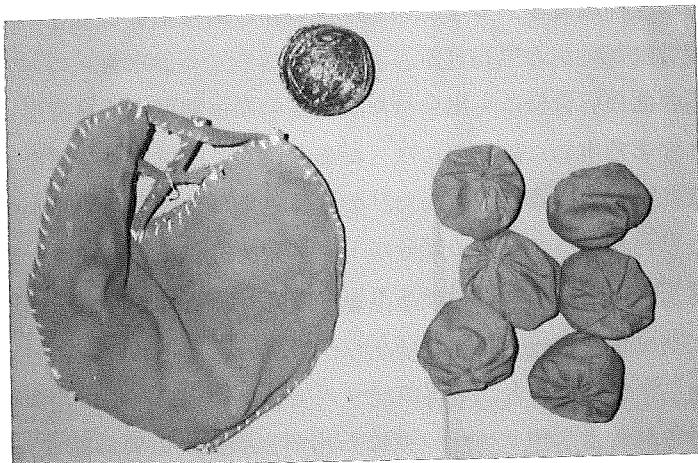


写真3：米軍払い下げカップを利用して作られたお手玉・ボール・グローブ  
(平安座小中学校歴史資料館蔵)

### ③軍作業・戦果・密貿易関係資料

終戦直後の沖縄住民にとって、生活物資のほとんどが米軍からの配給物資に頼らざるをえなかったことは前述したが、やがて住民たちが収容所からそれぞれの旧居住地区へと帰村はじめ、沖縄の通貨制度が復活するようになるとこの配給物資も無償から有償へと代わっていった。人々は物資を手に入れるための給与を求めて仕事に就いていったが、その当時の仕事といえばほとんど米軍基地の労務を行う軍作業しかなかったため、働く者であれば老若男女を問わずこの軍作業に従事し、給与としてB型軍票=B円をもらった。B円は戦後の沖縄の語り草として必ず登場するものであり、軍作業を資料的見地から考えた場合においても立派な一級資料である。

しかし、人々の暮らしは軍作業だけでは到底ままならず、やがて食糧を中心とした米軍の豊富な物資をより多く手に入れる方法として窃盗行為である戦果あげがはびこるようにになった。南風原文化センター蔵のアメリカ製コンパスもそういった戦果品関係資料のひとつである。

さらに当時の人々が生活物資を得るもう一つの手段としては密貿易が挙げられる。宮古・八重山などの離島においては米軍からの援助もほとんどなかつたため、密貿易はさまざまな生活物資を島に運んでくれる重要な役割を果たした。この密貿易の沖縄における中心地となつたのが日本最西端の島与那国で、現在、与那国民俗資料館には表1にあるようにその当時の密貿易を語る資料のいくつかが展示されている。

表1 密貿易関係資料 (与那国民俗資料館蔵)

| 資料名称            | 数量 | 法量   | 備考   |
|-----------------|----|--|--|
| ホイコなべ (ジュラルミン製) | 1  | H21.8×ふた径22.4  | 終戦直後に台湾から持ってきたもの。  |
| 碗(大)            | 3  | 「嵐」銘入りのもの：<br>H7.3×径15.9/<br>H7.0×径16.0/<br>H8.2×径19.1 | どんぶり型のもの。台湾の人たちがお粥を食べるものとして使用していた。                                       |
| 櫃               | 1  | H14.9×径20.3  | 台湾で木をくりぬいて作られたもの。  |
| 台湾製盆            | 1  | 径18.3  |  |
| 台湾製盆・コースターセット   | 6  | 盆(1点)：径22.5/<br>コースター(5点)：<br>径6.3                     | 6点一式   |
| ガラス製ボール         | 1  | H8.6×径18.6   | 資料は台湾からの貿易品であるが日本製のもの  |
| 鉄製盆             | 3  | 大：径40.4／中：径<br>35.3／小：径30.3                            | 資料は台湾からの貿易品であるが日本製のもの  |
| コーヒーポット         | 1  | H18.3×W24.0  | 資料は台湾からの貿易品であるが日本製のもの／「CHERRY CHINA SANGO JAPAN」銘入り                      |
| コーヒーカップ         | 2  | 径9.5   | 資料は台湾からの貿易品であるが日本製のもの／「CHERRY CHINA SANGO JAPAN」銘入り                      |
| コーヒーカップ受け皿      | 2  | 径14.5  | 資料は台湾からの貿易品であるが日本製のもの／「CHERRY CHINA SANGO JAPAN」銘入り                      |
| 吸物碗             | 1  | H8.0×径11.1   | 緑色／資料は台湾からの貿易品であるが日本製のもの   |
| 吸物碗             | 1  | H7.4×径10.4   | 茶色／資料は台湾からの貿易品であるが日本製のもの   |
| 米酒ガーミ           | 1  | H46.5×径34.0  | ふた付／緑釉掛／台湾製  |
| 米酒ガーミ           | 1  | H47.5×径34.0  | ふた付／褐釉掛／台湾製  |
| 桶               | 1  | H36.6×径39.6  | 台湾から入ってきたもの。米櫃として使用していた。   |
| 石臼(タイワンウス)      | 1  | H18.5×径37.0  | 台湾から入ってきたもの。前述資料の桶・土台となる木枠(アジマー)・挽き木と併せてセットで使用されていた。セット時の法量：H59.5(全体の高さ) |

## 2) アメリカ文化移入期の生活資料

### ①生活改善運動関係資料

前述したように、住民たちが旧居住地への帰村を終え、生活状況も落ちつきを取り戻すようになってくると、今度は農村および漁村を中心として、生活環境の改善と健康づくりを基本的テーマとし、<sup>(註12)</sup>身近な生活の問題をとりあげ、解決していくことを目的とする生活改善運動が行われるようになっていった。主に生活技術の普及をはかるため、各地域ごとに置かれた生活改善普及員が普及指導にあたり、その指導内容はさまざまでまた時代ごとに変化が見られた。

この生活改善運動関係資料としては、芭蕉布や縫着物をワンピースやツーピース、上着等の洋服に作り替えた衣類のいろいろや手作りの鯉のぼり（共に宜野座村立博物館蔵）、また面白いものとしては米軍払い下げ品を利用した改良カマドの作り方や物を頭に乗せること等の生活習慣の見直しおよび改善を促した図入りの文書資料（県立図書館史料編集室蔵）が見られた。

### ②「基地の街コザ」関係資料

琉球政府成立以降のアメリカナイズ的生活資料について見ていくとき、その代名詞ともいえるのが「基地の街コザ」の存在である。本島中部に位置するコザは、今でこそその市政名を沖縄市と改めてはいるが、沖縄ではどちらかといえば未だにコザという呼び名が一般的に用いられており、なじみ深い。

東洋最大の規模を持つ嘉手納基地に隣接したこのコザの人々は、米軍基地によってその運命を幾度となく翻弄されたが、Aサインバーや質屋、お土産品店などの米兵相手の商売を生み出して基地と密接した生活を送るなか、一方では民謡や芸能といった沖縄の伝統文化を発展させていった。そういう意味ではコザは戦後沖縄の姿を象徴し今に伝える興味深い街であるといっても過言ではなかろう。

さてこのコザについて資料的に見ていくと、やはりアメリカ的影響を多く受けた資料が目立っており、諸見民芸館に至っては館収蔵資料のほとんどにその影響が象徴されているようと思われる。また、Aサインバーのネオン看板やジューケーボックス（沖縄市立郷土博物館および諸見民芸館蔵）、軍雇用員関係資料（表2参照・沖縄市史編集室蔵）などもコザならではの資料の数々であると言えよう。

表2 軍雇用員関係資料の一部（沖縄市史編集室蔵）

| 資料名称                                       | 数量 | 備考   |
|--|----|--|
| 終了証書                                       | 1  | ‘Department of the Army Certificate of Training’／KIYOKO URASAKI MILITARY CORRESPONDENCE COURSE (16 HOURS)／16. October 1970。軍雇用員のためのトレーニングを終了した証明書。 |
| 在琉米従業員公報                                   | 6  | 第5号「特殊作業手当」1972.4／第6号「扶養手当と通勤手当」／第7号「祝日」／第8号「語学手当」1972.5／第9号「期末手当・従業員の行為」1972.5／第10号「従業員の行為」1972.5。3枚一綴りの2点。表は日本文・裏は英文で記述されている。                    |
| 雇用記録文書 (URASAKI KIYOKO Clerk Typist)       | 9  | 9枚一綴り。1960～70年代のもの   |
| NHK ラジオテキスト英語会話                            | 1  | 軍雇用員の人が使用していた書籍。1961年2月発行。   |
| WINDOW ON THE WORLD 1                      | 1  | 軍雇用員の人が使用していた書籍。1958年4月発行。好学社  |
| 今日に生きる日米会話 1                               | 1  | 軍雇用員の人が使用していた書籍。1954年発行  |
| 文書：「軍関係離職者の皆さんへ 高等弁務官付再雇用員調整官より 退職金などについて」 | 1  | 1971.1.1 高等弁務官付再雇用調整官 ウィリアム・T・バード。4枚一綴り  |
| 軍雇用員への表彰状                                  | 2  | SEIEI KIYAN 宛「DEPARTMENT OF THE ARMY」1969.6.10／1967年頃  |
| 軍雇用員への表彰状                                  | 1  | SEIEI KIYAN 宛「USARYIS CIVILIAN WELFARE FUND COUNCIL CERTIFICATE OF RECOGNITION」1962.2.9  |

### 3 琉米文化会館の果たした役割とその資料

琉米文化会館は、米国民政府の直轄施設として米国の政策および情報を沖縄の住民たちに知らせることを目的に1947年から52年頃にかけて那覇、石川、名護、宮古、八重山の5ヵ所に設立されたアメリカ式の情報文化センターで、会館設立時から1971年の閉館に至るまでの約25年間にわたる戦後沖縄の文化および社会教育の発展を語る際、決して忘れてはならない重要な位置づけを持った文化施設である。<sup>(註13)</sup>今回の資料調査ではその中でも特に宮古・八重山両琉米文化会館関係資料をあたるとともに、当時の関係者の方々からの話をうかがう機会にも恵まれたので、そのことについて記していくたいと思う。

まず、宮古琉米文化会館について見ていくことにする。1952年4月の琉球政府創立とほぼ同時期に開館された宮古琉米文化会館は、館長と始めとして行事担当や司書など14、5人の職員を要し行事部と図書室部とに職務を分担、活動を行った。行事部では積木遊びなどの幼児教室、小・中・高校生対象の少年少女合唱団や英会話教室、ガールスカウト、一般向けの絵画、書道、生け花、英会話等の各教室やダンス、演劇、琉舞クラブなど、小

さな子どもからお年寄り向けまでの実に様々な行事プログラムを計画、推進する業務を担当し、また図書室部においては館内の図書閲覧業務をはじめとしてお話会や読書会を開いたり、館外活動としては米国側が発刊した宣伝誌「今日の琉球」や「守礼の光」の配付活動の他、1週間のうち3日は移動図書館や巡回映写会などを実施したそうである。当時、宮古琉米文化会館の開館時間は午前9時から午後10時までだったので職員は2交代勤務で職務をこなしたことであり、特に館外活動のプログラムを担当していたという方(註15)では、遠隔地域に巡回した際は午前中に就学前児童を対象とした紙芝居、夜暗くなつてからは映写会を行い、これらのプログラム活動を終えて家に帰宅するのは大分夜が更けてからのことだったこともしばしばだったそうである。このように利用者の便宜を考えた配慮の上での開館および活動時間が設けられていたことは現在においても感心させられる事象のひとつであるが、宮古琉米文化会館ではこれら諸々の行事を計画実施していくにあたって1950年代のハワイ東西文化センターにおける活動方式を参考にしたということであり、また米国民政府文化事業部からも琉米文化会館担当者であるハワイ2世の部長が月に1回ほど県内の各会館を視察指導し社会教育の普及活動発展に努めていたそうである。さらに、当時の関係者が活動面において特に強調していたことの一つにボランティア精神(註16)ことが挙げられる。前述の行事部におけるプログラム開催にあたっては必ずしも館職員がすべて指導していくのではなく地元宮古のその道専門の方を講師として招いたそうだが、その際講師謝礼金というのは一切なく、ボランティアとして依頼したということで、このような考え方も米国民政府からの指導に影響を受けたものではなかったかということだった。その後、宮古琉米文化会館は1971年6月30日付を以て全職員が解雇、閉館となり、平良市が建物および業務を引き継いで現在に至っているが、当時、宮古で考えられるあらゆる文化行事はそのほとんどが琉米文化会館を中心としたものだったということであり、現在宮古における琉舞や合唱団、また宮古野鳥の会等に代表されるような社会教育活動がさかんなのは、この琉米文化会館当時の影響を多分に受けているのではないかという話であった。

では宮古琉米文化会館におけるこれらの活動を資料を通して見ていくことにしたい。ま  
ず、平良市総合博物館には大理石（トラバーチン）で造られた英字入りの宮古琉米文化会  
館看板と巡回映写会の際に使用したと思われる映写機、携帯用スピーカー、16ミリフィ  
ルム等の資料が収蔵されていた。次に、先ほども若干ふれたが、宮古琉米文化会館閉館  
後、引き継いだ建物および業務のほとんどを現在も担当する形となっている平良市立図書  
館の収蔵資料を紹介すると、ここには宮古琉米文化会館当時の洋書に代表される図書資料  
をはじめとして、琉米文化会館の職員が毎日記録していた会館日誌および当時の活動を示  
したファイルの一部が残っている。

ところで、この平良市立図書館における収蔵資料について特徴的に感じた点があるのであえて記しておきたいが、ここを調査した際、当初予想していたよりもはるかに残存資料が少ないという感想を持った。というのは、前述のように当時の機関を建物ごとそっくりそのまま移管したはずの場所においてはよほどのことが無いかぎり資料が分散することはないだろうと思っていたからである。実際、関係者の方からも次のような話が聞かれた。当時、宮古琉米文化会館では大宜味館長をはじめ職員たちによって関係資料はすべてリストアップし形としてきちんと残したはずだったが、あれだけの貴重な資料は現在一体どこに消えてしまったのか自分たちにもよく分からぬということである。宮古関係の資料が少ないということは先の1章でも述べたが、なぜ宮古関係の資料は残存しにくいのか、今回の資料調査で疑問に感じたことの一つであり、また学芸員業務の柱でもあるこの「資料保存」面については今後これからもしっかりと取り組んでいかねばならない重要課題であるということを自己反省の意味も含め痛切に認識させられた。

この宮古の事例とは対照的に、今度は、八重山琉米文化会館の資料について見ていくことにするというと、こちらは当時の資料がかなり残されているという印象を持った。八重山でも当時の職員だった方からの話をうかがうことができたが、<sup>(註1)</sup>文化会館の活動状況についてはほぼ宮古の事例と同じなので、紙面の都合上ここでは特徴的な事象を紹介するにとどめたい。八重山諸島はその地形の複雑さゆえに離島や陸の孤島的地域が多く、館外活動としての巡回移動文庫や巡回映写会については、職員が月1回ぐらいのローテーションで2人1組になって担当し、本貸出および映写会の他にも専門家をよんでの講演を開いたりしていたそうである。移動の際には船を利用してあちこち回ったり、また、当時は電気が通っていなかったこともあって発電機を持参、操作もすべて自分たちの手で行ったということであった。そのこともあって住民たちは巡回映写会などを非常に楽しみに待っており、歓迎されたそうである。また、職員たちも文化活動をしているという自負を持って仕事に取り組んでおり社会教育普及のための自主学習もしっかりと行っていたということであった。

この八重山琉米文化会館関係資料では、当時の活動を示したアルバムおよび新聞記事スクラップ、文書や年間スケジュール等を綴ったファイル、洋書をはじめとした図書資料、映写機および携帯用スピーカー、さらには「他文館カレンダー綴り」と題して上述の那覇、石川、名護、宮古の各琉米文化会館から送られてきたカレンダーおよび行事予定表がきれいにファイルされた資料など、多くの関連資料が石垣市立図書館に移管されて残っていた。その他、八重山博物館には巡回用図書箱や図書室の看板、ガールスカウト活動の際に使用されたと思われる米軍用携帯食器セット等の資料が収蔵されている。

以上、この章では宮古・八重山を中心とした琉米文化会館について述べてきたが、この

ように琉米文化会館の活動の様子および関係資料を見る限り、戦後沖縄の文化ならびに社会教育発展において琉米文化会館の果たした役割というのは重要であり、その根底には各会館の活動に際する助言指導面やもちろん資金面において米国民政府側の援助があったこと、また実際に各会館で働く職員たちにとっては当時の憧れの的であったアメリカ文化に直接的に触れる機会を他の住民たちよりも多く持つことができ、さらに給与面などから見ても他の職種より優遇されていたことなど、これら諸々のことをふまえて考えると住民たちがいくら支配者とはいえ米国側に対して少しあは好意的見方もあったという点は確かに否めない。

しかし、琉米文化会館はあくまでも先述のように米国民政府直轄施設であり、基本的にはアメリカの対沖縄占領政策および文化政策に強く規定され、「宣撫的文化政策」の拠点としての役割をも果たしたという点は決して見逃してはならない重要なところである。小林文人氏らが強調しているように<sup>(注18)</sup>「基本的には、沖縄民衆の生活と意義の深部には、琉米文化会館は滲透・定着することはなかったというべきであろう。部分的に近代的かつ文化的であっても、沖縄民衆にとっては所詮それは占領者側が与えるものであり、その意味で異質であり、ときには甚だしく嫌悪すべきものであった」であろうし、実際、映写会に使われたフィルムのほとんどが米国のものであるということや、住民たちの多くにとって十分に読みこなすことは困難であろう洋書の図書がなかなか多いという点、さらには米国側の宣伝誌配付センター的役目を琉米文化会館に託したといったこれら関係資料の面からもうかがえるように、琉米文化会館における活動はおそらく米国民政府の支配的手中から離れることはなかったからである。よって、琉米文化会館の果たした役割を見ていくとき、それは戦後沖縄の文化向上および社会教育発展の上で必ずしも歓迎されるだけではなかったという側面の視点をも持つことが大切なのではないかと筆者は考える。

#### 4. 沖縄系移民の諸資料

##### 1) 県内の移民関係資料

移民に関わる資料は個々人あるいは公共的な機関で保管されており、今回の調査ではそれらのほんの一部をかいま見たに過ぎないが、幾乎かでも記録をとどめておく必要があると思われたので、ここにかいつまんで記述しておきたい。各所蔵機関の資料一覧をあわせて掲載する予定であったが、紙幅の関係上やむをえず割愛した。

金武町は、当山久三の出身地であり、海外へ多くの移民を送りだした地域であることもあって、移民関係資料が豊富に収集されている。

金武町教育委員会では、博物館建設の予定があり、多くの資料が収集されている。その中にはひときわ大きく、頑丈な金属製のトランクがある。教育委員会社会教育課の仲間政治氏によれば、南米への移民の人たちが所有していたこのトランクは「ホンコン（香港）バッグ」（写真4参照）と通称されていた。というのも、南米への移民が香港経由で渡航しており、その際に香港でこれらの大きなトランクを買い求めたことからそう呼ばれた。自分たちが最初に持っていたやなぎごうりからそのバッグに荷物を移し替えたという。

その他に、ロサンゼルスで録音され、ニューヨークで製作されたレコード「屋嘉節／懐かしき故郷 普久原朝喜」と「筑前 吾等の家は五大州（上・下） 鹿倉旭富」がある。後者は当山久三を題材として作られた浪曲であり、貴重な資料である。

金武町史編纂室には、布哇浄土宗教団総長から仲間勇三氏宛の感謝状、琉球政府米国民政府発行のパスポート、仲間ナベさんからハワイへ送られた布製の封筒、渡航費貸付契約書、南米やフィリピン他の写真などが多数収集されている。

宜野座村立博物館には、展示室にアルゼンチンから帰沖する際に用いた鉄製のトランクが展示され、「沖縄行・幸喜」との銘がある。他に革製のトランク、やなぎごうり、フィリピンから持ち帰ったナベや水牛の角などがある。



写真4：香港バッグ（金武町教育委員会蔵）

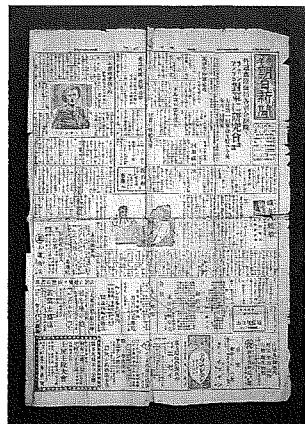


写真5：『南洋朝日新聞』  
(石川市立歴史民俗資料館蔵)

移民で海外へ渡航するときの様子を示す日記などは非常に貴重である。具志川市史編さん室には南米関係の移民資料が収集されていて、その中の一つに、「海外渡航記念帳」という日記を記した手帳がある。具志川出身の山口栄清氏の手記で、神戸から香港、シンガポール、コロンボ（セイロン）、ダーバン、ケープタウン、そしてブラジルへと航海して移民先へ渡航したことがわかる。日記帳は昭和13年旧暦5月9日から書き始められてい

る。日をとて、船の航行、天気、1日の行動が簡潔に綴られており、移民資料として重要なである。

また、移民関係資料としていま一つ注目されるのが、石川市立歴史民俗資料館の所蔵で、石川善吉氏から寄贈された『南洋朝日新聞』（写真5参照）であろう。県内では他に所蔵していないという移民先で発行された新聞資料である。昭和16年4月9日付で、発行は南洋サイパン・北ガラパンの二島となっている。

ところで、戦後、沖縄が復興する過程で、本土や海外在住の県出身者から救援運動がなされたことはよく知られている。それとはやや経緯を異にするが、海外からの引揚者が帰沖して復興の一躍を担った例をここで一つ紹介しておきたい。

石垣市立八重山博物館の大浜憲二氏より紹介をうけた石垣市在住の大底悦さん（石垣市新川出身・大正2年生）は、南洋サイパンへの移民の経験がある。<sup>(注19)</sup> 大底さんの自宅には、昭和21年にテニアンから最後に沖縄へ引き揚げる際にアメリカ人から提供されたジュラルミン製品などが残されている。これらは現地で当時よく使用されていた製品で、夫の大底満名さん（明治41年生、新川出身）が英語に堪能であったことから、譲り受けたものである。夫は昭和8年頃にはテニアンに入植していたようである。

大底悦さんは、昭和10年に写真の見合結婚でサイパンに赴くことになった。当時24歳であった。14日間船に乗ってサイパンに着いた。サイパンに1泊してからテニアンに向かった。夫は南洋興発（株）の機関長として働いていた。沖縄の出身の人々は何人かいたが、八重山からは大底さんだけであった。悦さんはその後10年間テニアンに在住し、テニアン国民学校の教員を終戦まで務めた。大阪女学校をでていたので、その経験が生かされた。それでも、移住当初の頃、夫を送りだした後は寂しさからよく泣いていたという。

サイパン・テニアンは戦争では玉碎組であった。追いつめられた人々は、泣くわが子を崖から捨てたりしたが、本人たちの子どもは泣かなかったので、そのようなこともなく、沖縄に3人の子どもを連れて帰ることができた。

引き揚げは昭和21年で、現地では主人が一時抑留されていた。石垣に戻ってから始めた水道配管の工事技術はこの抑留中に、アメリカ人から教えられたものだという。また、その時には米人が使用していたジュラルミン製品を持ち帰った。解放された後、千歳丸でテニアンから出発して馬天港に入った。現在の沖縄市高原のインヌミヤードウイにキャンプ生活をした。そこで、2~3ヶ月生活してから、夫が船を手配することができた。20数名が乗船し、宮古経由で、八重山に戻ることができた。八重山に着いたのは、旧暦の8月15日であった。

石垣に戻ると水道を引く事業を始めた。石垣で水道が引かれたのはこれが最初だった。水道工事で用いる工具類はテニアンのアメリカ人から譲り受けたもので、一部は現在も保

管してあり、他は水道会社に渡してあるという。戦後の石垣市の復興期において、水道事業に関しては、南洋からの引き揚げ者である大底氏の尽力が大きかったことがうかがえる。

## 2) アメリカの沖縄系移民資料

### ①ハワイ

マウイ島のマウイ沖縄文化センターには、ロイ・R. ヨナハラ氏が収集した資料をはじめ、マウイ在住の沖縄出身の人たちが寄贈した資料が展示・保管されている。

ヨナハラ氏の所蔵する資料は特別展で公開されるのでここでは割愛させていただくが、それらとは別に、『首里市立女子工芸学校卒業アルバム』(1931年) やヨナハラ氏所蔵のアルバム写真がある。それらには首里城関係、とくに御内原や建物内部の写真が多く含まれている。ヨナハラ氏のお母さんは名前をフミ・ヨナハラ（旧姓：仲座文）といい、首里市立工芸学校を卒業し、その後学校で教鞭をとっていた。だいたい1917～18年頃という。アルバム写真にている首里城関係の写真はおそらくは当時のものと考えられる。その後ヨナハラ氏のお母さんは父と結婚し、呼び寄せられる形でハワイへ来ている。父が先にホノルルに移民で来ていて、母と結婚後にマウイに渡っている。

ヨナハラ氏が一部尚家の家紋が入った染織資料を有している。というのも、戦後の1945年頃日本に来ていたことがあり、そのころ漢那憲和・政子夫妻にお世話になり、懇意になった。<sup>(注20)</sup> 政子夫人は尚泰の四女であることから、嫁入りで所持していた尚家関係の染織資料を譲り受けたものという。

また、マウイの沖縄救援関係の写真が2点ある。一つは、「沖縄戦災民救難品荷造りを終えて」と題されているもので、1945年12月15日の写真である。ワイルク昭和青年会館

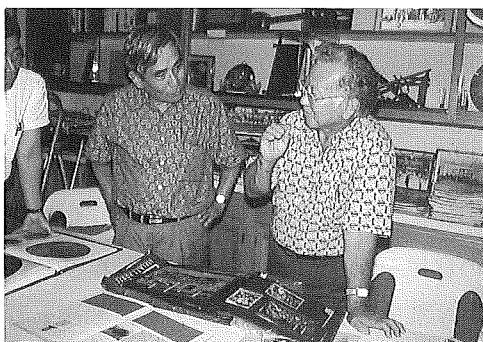


写真6：ヨナハラ氏（右）と聞き取り中の  
大城学芸課長  
(マウイ沖縄文化センター)



写真7：沖縄への医薬品荷造り・中央で子  
どもを抱いているのがエドワード・  
クシ氏  
(マウイ沖縄文化センター蔵)

で撮影されたものである。ワイルク昭和青年会館は1935年に設立されたもので、戦後マウイ沖縄人系連合会館へ改称された。いま一つは、同じ時期の写真で、「沖縄への医薬品を梱包して発送するところ」のもので、ワイルクのドクター、エドワード・クシ氏（久志：首里出身）の家の前で撮影された写真である（写真7参照）。ドクター・クシは、沖縄の人で最初にハワイ大学を卒業した人であったという。

センターに展示中の南蛮壺は、安里カナさん（沖縄市美里出身）から寄贈されている。これは沖縄からスクガラスを入れて送ったもので、昭和10年頃という。当時ハワイで輸入して販売していた。移民先に在住していても沖縄の味は忘れられなかつたのであろう。セイイチ・カミムラ氏（沖縄市越來出身）が寄贈したスーツケースは、1930年頃本人が沖縄に一時戻ったりしたときや各地を旅行したときに使用したものである。ウシ・ヒガさん（北中城村島袋出身）が寄贈したやなぎごうりもある。

また、クニヨン氏（那覇市首里出身）が寄贈した工工四是、第2次世界大戦中に、マウイで工工四が手に入らない折、有り合わせのスクラップブックに工工四を書き写したものである。

ホノルルのハワイ沖縄センターには、三線・ソロパン・工工四ほか沖縄関連の資料があるが、その中で注目されるのが仲眞良永・良金父子の愛用した三線である。

ハワイの琉球音楽は、1906年（明治39）仲眞良永氏が開拓し、その子仲眞良金氏と、宮城栄吉氏師範の時代に確立されたという。野村流音楽であった。仲眞良永氏は1875年（明治8）に美里村字泡瀬で生まれた。12歳の頃美里親方に見いだされ、歌道に励み、野村流の競演会で優勝してからは、尚家に奉公し桑江良慎氏の指導を受けながら音楽を学んだ。その子の仲眞良金は1921年（大正10）に父の呼び寄せでハワイに来て、以後は父とともに演芸会での地謡を務めた。また、宮城栄吉氏は与那城村出身で、1922年に18歳でハワイに移住した。祖父が琉球音楽に造詣が深かったことから子どもの頃から興味をもち、来布後は仲眞良永氏に師事し学んだ。

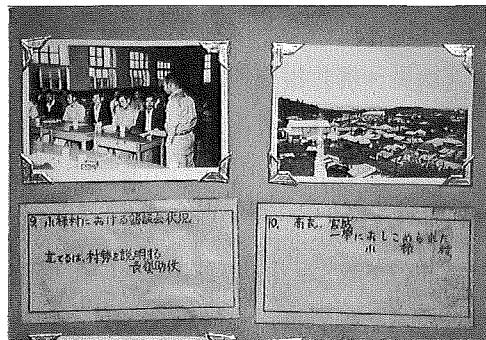
## ②ロサンゼルス

ロサンゼルスにある北米県人会は、今回の特別展に関連して、全面的なご協力の下に多くの資料が新たに発掘された。

北米県人会には、戦後沖縄に来てアメリカへの移民を呼びかける懇談会の記録写真資料が一綴ある。年代は不詳であるが、糸満・小禄・与那原・普天間・金武・名護・辺土名などでの懇談会の模様と当時の各地域の状況がわかる貴重な資料である（写真8参照）。

また、同県人会には、在伯国沖縄救援委員会発行の『会報』第1号（1947年7月）から第13号（1948年7月）までが所蔵されている。『会報』は1948年の6月を除き毎月発

行されており、正式名称は伯国赤十字社公認日本救援会サンパウロ支部沖縄救援委員会である。この『会報』は、私見では沖縄県内に所蔵されている機関があるのかつまびらかでないが、おそらくきわめて希少な救援関係資料と推定される。



屋宜盛浦氏は三線の「健堅与那」と呼ばれるものを所有している。その来歴を記したメモ書きによれば以下のようなである。三線・健堅与那は、伊江王子が尚育王より拝領後、伊江家より高安朝常に譲渡された。この三線はもと志多伯開鐘と対であったが、双方ともに盜難に遭い、その後発見されて本家に戻った。「健堅与那」と称せられた名器である。本来の持ち主は首里の高安殿内・高安朝常氏からハワイの仲眞良金氏に渡り、1990年に現所有者の屋宜盛浦氏の手に譲渡された。由来についてさらには補充調査が必要である。

同じく三線の中でブラジルで製作されたものがある。名護市田井等出身の糸数文男氏が所有するもので、カンポグランデの伊礼ジョー氏が製作した。1950年頃の製作である。材料はすべて現地で調達して作られており、胴の皮はブラジルの蛇ボアの皮を用いている。糸数氏は1954年にボリビアのコロニア・オキナワへ2次移民として渡った。その後、1962年アルゼンチンに移住し、さらに1972年にここロサンゼルスへ移住した。この他、1930年頃の芭蕉絹縞、木綿絹白地絹縞などの染織資料も所有している。

軍事機密『戦闘要報綴第2中隊』はヒロシ・オカノ（岡野博）氏が所有するもので、本人は帰米2世で、1941年10月にミネソタ州の軍インテリジェンス語学学校に入学した。その後、第2次世界大戦中の1945年の4月から12月まで通訳として沖縄に配属された。第10軍であった。

『戦闘要報綴第2中隊』には、第88野戦病院での写真、台風直後の与那原・中城湾の写真、キャンプでの芸能写真など終戦当時の沖縄の写真が数多く掲載され、貴重な写真記録である。また、中には米軍が沖縄で配布したプロパガンダ・リーフレット（写真9参照）も添付されている。表は「老人や女だけで沖縄の再建は望みない」という文言で、裏面は

「沖縄男子へ」で始まる説得の文章である。この種のリーフレットは数多くあるが、本資料はこれまでには紹介されていないものようである。

小橋川次郎氏は在米沖縄救援連盟報道部発行の『救援ニュース』を所有している。第2号（1946年10月）、第5・6号（1947年10月）、第7・8号（1948年4月）、ならびに在米沖縄復興連盟発行の『救援ニュース』第3号（1950年7月）である。この『救援ニュース』については、沖縄県立図書館史料編集室に、『戦災沖縄救援復興活動記録』として、創刊号から終刊号までが一括して収蔵されている。とはいっても、『救援ニュース』自体は、資料の現存が少なくとりわけ貴重である。小橋川氏は父が本部町伊豆味の出身で、最初はメキシコ移民（1904年移住）であった。その後父はアメリカアリゾナ州へ移住し、本人は1914年11月4日に生まれた。その後6歳の時に沖縄へ来た。1929年に名護の第三中学校を卒業し、1931年に16歳でアメリカに帰国した帰米2世である。帰国するときには神戸から竜田丸でサンフランシスコへ渡航した。その際の乗船証なども保管されている。

真境名愛子氏は祖父（母の父）である大城元長氏の終戦直後の日記がある。日記は4冊あり、1948年10月26日以降、1950年8月15日以降、1951年1月24日以降、年月日記載なしのそれぞれである。終戦後に初めて配給された紙に綴った日記で、場所は知念村久手堅となっている。なお、同氏は絹白地型付、桐板経縞など染織関係も所蔵しておられる。

以上、アメリカ在住の沖縄系移民の人々が継受している諸資料について略述したが、移民社会においては、思いのほか伝統的な生活資料を有していることが摘記できる。ハワイでは2世・3世の世代に移行しており、ロサンゼルスでは1世から2世の世代へこれから移行しようとする時代である。それぞれ移民社会の世代深度は異なるが、伝統文化の強力な継承という点では共通している。それゆえ、現地の沖縄では戦災などの関係でもはや収集できない貴重な資料が受け継がれているものもある。したがって、単に移民資料という視点からだけではなくることのできないものであり、今後はもう一つの沖縄文化として資料の掘り起こしをおこなうべきであろう。

#### おわりに

沖縄県立博物館は戦後の灰燼に帰した状況の中から、当時の職員たちが文化財の収集に尽力してきた。その努力のかいがあって、美術工芸資料を中心に多くの資料が当館に収蔵されるようになった。博物館の企画展・特別展では、機会ある度に、それらの美術工芸資料が公開されてきた。

しかし、当博物館では、これまでに戦後資料を意識的に収集しようとする配慮に欠けて

いたように思われる。民俗資料の中でジュラルミン製品やタンク舟、歴史資料の中で、海邦国体の役員の帽子・腕章、7・30関係の標識や標示類、琉球政府時代の三角点などが収蔵されてはいる。ただ、これらは機会よく当館に寄贈あるいは移管されたもので、一定の視点に立脚して体系的に収集されたものではない。

そのようなことから、今回の調査による反省をふまえ、戦後資料ならびに移民とともに諸資料は、体系的に、しかも各市町村とも相互に連携・協力して全県的な規模で調査・収集される必要があると思われる。

#### 〈脚注〉

- (1) 上江洲敏夫「解題」『沖縄県史料』戦後2 沖縄民政府記録1 p 5 沖縄県立図書館史料編集室編 1988年
- (2) 沖縄民政府は1946年4月24日発足当時から同年11月30日までは「沖縄中央政府」と称していた。
- (3) 大城将保「解題」『沖縄県史料』戦後1 沖縄諮詢会記録 p 9 沖縄県立図書館史料編集室編 1986年
- (4) 「沖縄民政府直営劇団」『沖縄大百科事典 上巻』 p 587 沖縄タイムス社 1983年
- (5) 沖縄国際大学文学部社会学科石原ゼミナール『報告書 あし 第15号 戦後コザにおける民衆生活と音楽文化』 p 63 1994年
- (6) 「八重山支庁」『沖縄大百科事典 下巻』 p 695 参照のこと。
- (7) 米国政府は沖縄統治のための政府出先機関として、それまでの米軍政府を廃止、1950年12月15日新たに琉球列島民政府を設立し以後1972年5月15日の沖縄日本復帰まで沖縄統治における最大の権限を持つ機関となった。
- (8) 「群島政府」『沖縄大百科事典 上巻』 p 1010
- (9) 「第二節 戦後の民具」『浦添市史 第七巻資料編6 浦添の戦後』 1987年 を参照されたい。
- (10) 「通貨制度」『沖縄大百科事典 中巻』 p 807~809 参照のこと。
- (11) 「B円」『沖縄大百科事典 下巻』 p 276~277 参照のこと。
- (12) 「生活改善運動」『沖縄大百科事典 中巻』 p 543
- (13) 「琉米文化会館」『沖縄大百科事典 下巻』 p 956 参照のこと。
- (14) 当時の会館職員である砂川幸夫氏（現在沖縄図書館宮古分館長）からの聞き取りおよび同氏「『宮古琉米会館』の文化活動を振り返って」『地域と文化』20号 ひる

ぎ社 1983年による。

- (15) 当時の会館職員である友利敏子氏からの聞き取りによる。
- (16) 砂川幸夫、上掲書による。
- (17) 当時の会館職員である与儀玄一氏（現在石垣市立図書館長）からの聞き取りによる。
- (18) 小林文人・小林平造「琉米文化会館の展開過程」『民衆と社会教育－戦後沖縄社会教育史研究－』 p186 エイデル研究所 1988年
- (19) 大底悦さんからの聞き取りによる。
- (20) 漢那憲和氏（1877～1950）は軍人でもあり、政治家。1923年に少将まで昇任、退役後の1928年には、衆議院議員に当選。以後5期の14年間議員を務め、内務次官にもなった。

### 【謝辞】

この原稿を記すにあたり、以下の県内各機関および関係者の方々には、多忙な中、大変お世話になった。

- ・伊江村教育委員会委員長 新城昇氏
- ・宜野座村立博物館
- ・金武町教育委員会
- ・金武町史編纂室
- ・石川市立歴史民俗資料館
- ・石川市立城前小学校校長 富田烈氏
- ・嘉手納町史編纂担当室
- ・平安座小中学校教頭 佐久川清氏
- ・沖縄市立郷土博物館
- ・沖縄市史編集室
- ・諸見民芸館
- ・南風原文化センター
- ・沖縄県立図書館史料編集室
- ・平良市総合博物館
- ・平良市立図書館
- ・沖縄県立図書館宮古分館
- ・友利敏子氏（宮古地区婦人連合会会长）
- ・石垣市立八重山博物館
- ・石垣市立図書館
- ・南嶋民俗資料館
- ・与那国民俗資料館 池間苗氏
- ・大底悦氏（石垣市新栄町）

また、ハワイではハワイ沖縄センターのバニー・ミヤシロさんをはじめ、民間大使のジョン・ヒロコ・アラカワさん、タケジロー・ヒガさんにいろいろとご協力をいただいた。マウイ島ではロイ・R. ヨナハラ氏にひとかたならぬお世話になった。

ロサンゼルスにある北米沖縄県人会は、今回の特別展に関連して、会長の沢嶽安和、副会長の當銘洋弘、国吉信義の各氏をはじめ、真境名愛子・糸数文男・宮城次夫・岩田麻利子・小橋川次郎他の諸氏のご協力の下に多くの資料が新たに発掘された。

ここでは紹介できなかったものの、上述の県内資料調査期間中においては、他の機関の方々にもいろいろとご教示をいただいた。

最後に、特に記して感謝申し上げたい。

## 離島の小規模グスクについて

當 真 嗣 一

(沖縄県立博物館)

### 1、はじめに

大学の史学科を卒業した私は、数年間の教員生活のあと文化財関係の仕事につくことになり沖縄各地の離島をまわる機会に恵まれた。時間を見つけては行く先の島々でグスクを訪ね歩き、これまで数多くのグスクを見ることができた。これらのグスクはたいへん優れた繩張りを持っており、<sup>①</sup>こんな小さな島に何時、誰が、いかなる目的をもって築いたのかグスクに対する興味はつきないものがある。筆者は、こうしてグスクを歩くうちいつしかその魅力に取りつかれ、今ではブッシュをかきわけてグスクに入り遺構を読み解くことを中心的課題とするようになった。

グスクをめぐる研究状況は、いわゆるグスク論が活発に論議されているわりには実際グスクの中に足を踏み入れ過去から現在に残された遺構群を読み取りそれを繩張り図として記録するという基本的作業が手付かずの状態である。グスクを読み解く作業は筆者が再三指摘するとおり、県下各地に分布するグスクの中に足を踏み入れグスクの繩張り調査をおし進めていくことが大きな課題だと思われる。では繩張り調査とはどういうものであろうか。それは、グスクの中に入り地表面観察によって防御遺構を把握することを主眼とする調査でその成果を繩張り図としてまとめることである。<sup>②</sup>こうして出来上がった繩張り図からはグスクの構造や性格・機能および防御の仕組みなどがよく理解できるものである。したがって、今後のグスク研究は、県下各地に分布するグスクの繩張り把握と、防御遺構の整理・分析という基本作業をおし進めグスクの繩張り研究を発展させていくことが必要だと考えられる。本稿では筆者がこれまで踏査してきた離島所在のグスクの中から、とくに沖縄本島の周辺にある小さい離島のグスクについて紹介し、これらのグスクの性格や機能について若干の考察を試みることにする。

なお、取り上げるグスクについては次の11の前提項目を設けた。

- ①所在地、②別称、③創築年代、④主要年代、⑤廃城年代、⑥主な城主あるいは築城主体  
(以上③から⑥については主な合戦、普請および廃城などによって判断される年代だが、

古文書・古記録の少ない現状では伝承なども参考にして記入した)、⑦遺構の年代(出土した遺物や收拾した遺物の年代観を記入した)、⑧遺構、⑨城域、⑩高さ、⑪関連文献。

### ヤヘーグスク

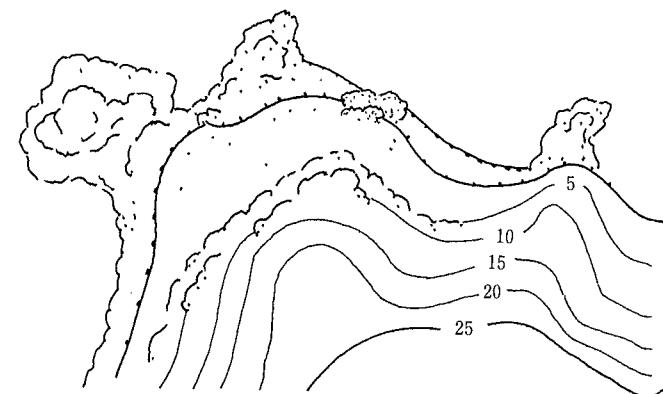
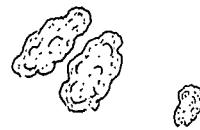
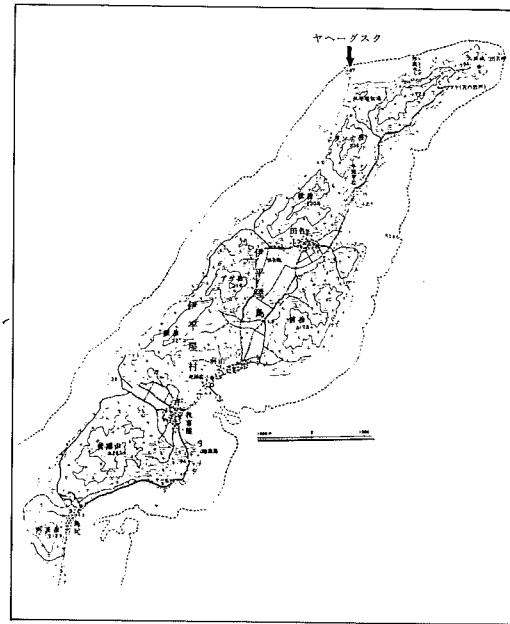
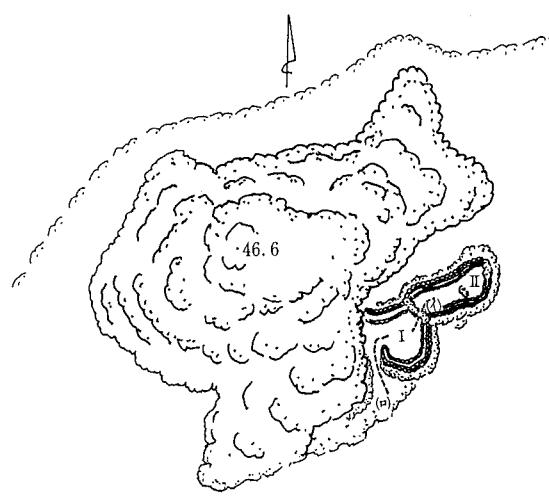
①伊平屋村字田名、②ヤヘーの大岩、③④⑤⑥⑦——、⑧野面積み石垣、⑨26m×13m、⑩比高約20m、⑪伊平屋村史

このグスクは沖縄県下で最も北に位置しているグスクである。グスクが所在する伊平屋島は周囲32kmの小さな島であるが、琉球諸島のなかではじめて統一国家をつくりあげた第一尚氏発祥の地として知られている。第一尚氏に次ぐ第二尚氏の出自もこの伊平屋島に隣接する伊是名島であり、琉球歴代王統の発祥の要因を考える上でこれらの島々は比較的重要な地域になっている。

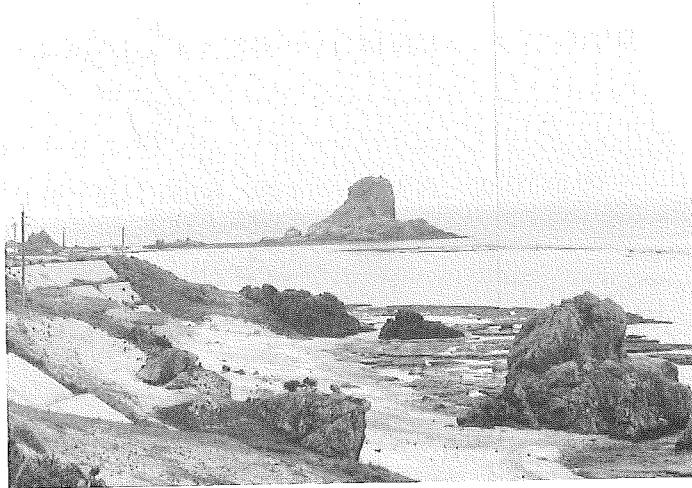
さて、グスクはこの伊平屋島の北海岸、環中国海に突出する岩礁の上に立地している。海岸べりから約200mほど沖合にあるため満潮になると歩いて渡ることはできない。島の人たちは「ヤヘーの大岩」と呼んでいる。<sup>④</sup>

グスクは標高46.6mを測る岩礁頂部の東側裾に広がる岩盤の上に立地し、周囲を幅約1~1.7m程の石垣がめぐる。石垣の高さは、一番高いところで現在高約1m程でそう高い石垣ではない。ただ、石垣の幅が1m以上もあることから考えると、その高さは2mに程近い高さはあったと思われる。このグスク石垣は岩盤の上に積まれているので干潮時の岸との比高は約3~4mになる。城壁としては十分な高さである。

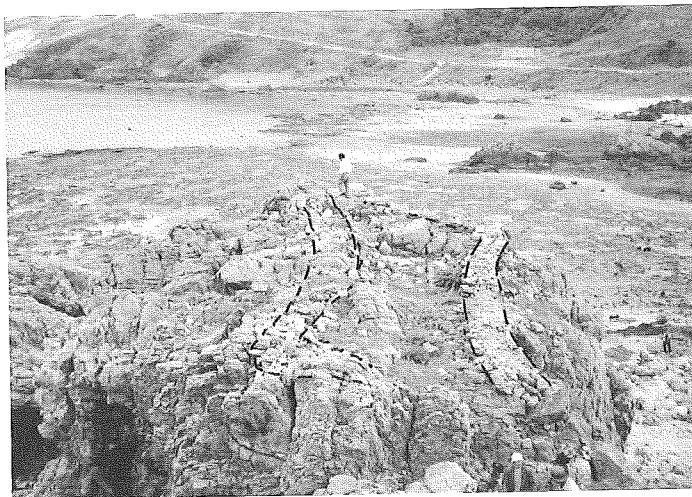
グスクは2つの曲輪によって構成されている。Iの曲輪は頂上46.6mの大岩に接するところの曲輪で80m<sup>2</sup>程の広さを有し、その中はほぼ平坦になっているが自然地形のままである。グスクそのものが岩盤の上にあるため地表土は非常に薄い。石垣の幅はIIの曲輪よりも約50~60cmも厚く築かれており、高さもIIの曲輪を取り巻く石垣より高くなっている。IIの曲輪は南北に細長く12m×4m規模である。曲輪内部は平坦となっているがIの曲輪同様自然地形である。表土が薄く岩盤が剥き出した状態である。IとIIとの比高差は約1mで段違いになっているが虎口らしい構造物が認められない。おそらく曲輪間の往来には木橋が利用されたのではなかろうか。IIの曲輪は幅1mの石垣が四方を取り巻きイ以外外部との往来が遮断される形となっている。城外からの虎口はI曲輪の西北西に開いている(口)。虎口の位置は、石垣が大岩と接するところの繫目付近に開いており、横矢を効かせた構造をとる。単純なつくりだが周辺には幅の厚い石垣をはりめぐらしており外部からの侵入に備え特段の注意が払われている。グスク内の広さや立地の点でみると恒常に人が住んだとは考えにくく、臨時的な城として理解すべきであろう。事実、グスク



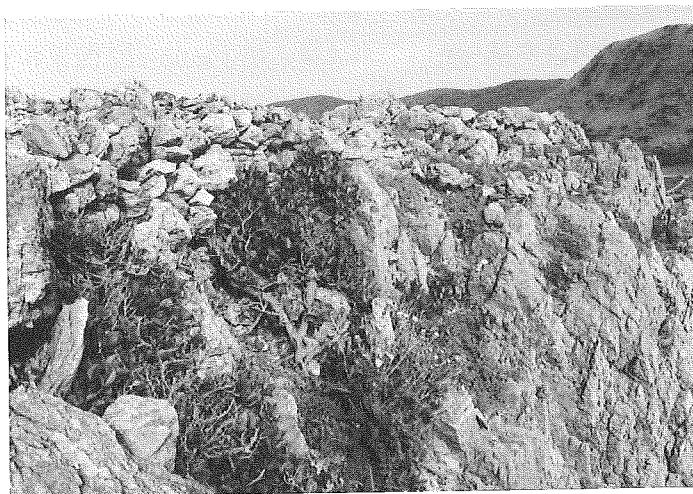
ヤヘーッスク



ヤヘーグスク遠景(東より)



ヤヘーグスクⅡの曲輪  
----線は石垣の部分



ヤヘーグスクⅠの曲輪の石積  
(西より)

内では遺物がほとんど確認できない。

このグスクで注目すべきは I の曲輪に隣接して標高 46,6m のピーク部を有する大岩の存在である。頂上に登ると眺望は素晴らしく海上を航行する船を捉えるのに適した場所になっている。現在ではロープ等を使わないと頂上に登れないがかつては I の曲輪と連絡の取れる箇所があったものと思われる。

築城年代についてははっきりしないがグスク時代に属する遺跡と考えられている。

### 伊是名グスク

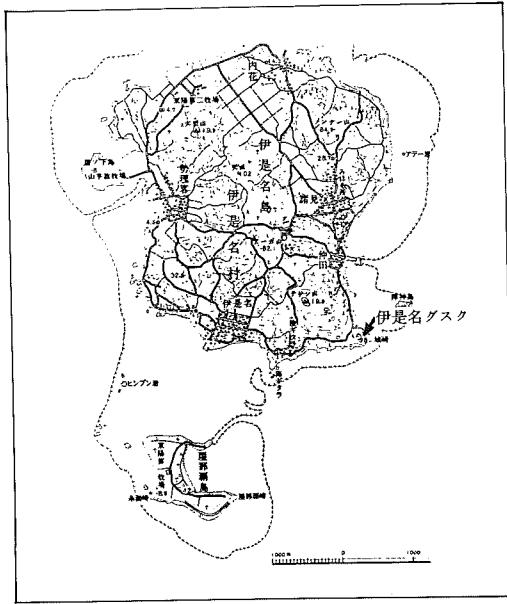
①伊是名村字伊是名、②伊是名グスク、③14世紀、④⑤——、⑥佐銘川大主、⑦14~15世紀、⑧野面石垣・切岸・井泉、⑨100m×50m、比高約 60m、⑩伊是名村史

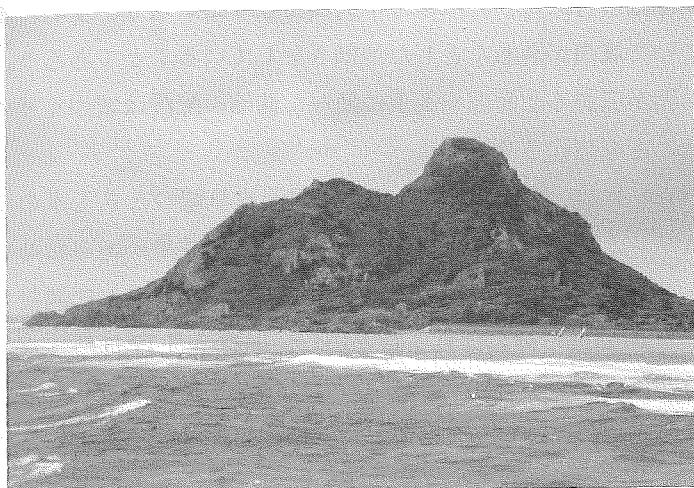
この城跡は伊是名島の東南端にあり、海に突出する円錐状の岩山に形成されたグスクである。伊是名島は沖縄本島北部本部半島の北方海上約 23km に浮かぶ周囲 17km の小さな島で、三山分立時代には山北王の統治する島であった。第二尚氏を打ち立てた尚円王の生誕地でもある。寛永 6 年（1629）頃の石高は 696 石余と記録されている。

伝承によれば、伊平屋の島主屋藏大主が伊是名島を統治していたころその子の佐銘川大主を伊是名へ派遣し、伊是名グスクを築かせ（または修築）この地を治めさせたという。<sup>⑩</sup> この佐銘川大主の子苗代之大親が後の第一尚氏王統を開いた思紹である。

グスクは東・西・南の三面が険阻な絶壁に面し北面だけは緩傾斜面になっている。各曲輪はこの北面の緩斜面部を削平して離段状に配置されている。先端の斜面上には曲輪 I がある。グスク内に入る者はこの I の曲輪に向かって否応なく右脇腹をさらけ出す恰好となるので、登り路を抑える曲輪であろう。曲輪の北側隅には隅櫓の機能をもつ自然の大岩（イ）がある。大岩の上からはグスクに登ってくる敵兵ばかりでなく、グスクの下に展開する城下集落（現在は伊是名古島として遺跡になっている）が俯瞰できる。城内への登り路は I の曲輪の北から東に回り込むようにして頂上へ向かって伸びていくが、その左右には小さな削平地が続き登り路の抑えとしている。

西側の崖の縁辺部は、平地からのグスクに攀じ登ってくる敵の侵入に備えて珊瑚石灰岩を利用した野面積みの石垣が約 3 m の高さで直に積まれている。グスク石積みはこの西側の崖の縁辺部と山の頂上部を越えた南側の平地に向かった傾斜面に認められる。石垣がこの地域に限られるのは、平地に面しているため敵の侵入を警戒したことである。つまりこのグスクの防御上の弱点をカバーするために石垣が築かれているわけである。繩張り図からもわかるようにグスクの東と南は、自然の断崖をつくり海に落ちるため敵を寄せつけない。だからこの部分には石垣が認められないのである。





伊是名グスク遠景(北より)



伊是名グスク(西より)  
(斜面部分に曲輪がある)



伊是名グスク  
(平たい石を積み上げた城壁)

ところで、このグスクの曲輪配置の特徴は、グスクの中央部を登り路が通り、左右に細長い腰曲輪を交互に張りつけていて城内がきちんとした地割りをしていることであろう。円錐形の岩山に占地し緩い傾斜面が広がる北面部を上手に使った曲輪の配置は城づくりの経験をもつた者の築城者がいたことを想起させる。

なお、グスクの頂上近くの（ロ）には、『琉球国由来記』に雨天や旱魃のときも水の増減がないと記載された「イシカ」<sup>⑥</sup>と呼ばれる井泉（2）がある。この井泉があったせいで北山軍の水攻めにも届しなかったという伝説が残っている。この「イシカ」に隣接して「大城ミヤ御イベ」がある。この御嶽の神名は真玉森といい、旧暦7月17日の「ウンジャミ」には祭の場となる。現在は「諸見・仲田のナー」ともいわれ、「シヌグ」行事の際には、諸見と仲田の第1の拝所に位置づけられている。<sup>⑦</sup>付近の削平地はウイミナーと称されているが、もともとは腰曲輪の一つであろう。

このウイミナーの西には「高城ミヤ御イベ、神名スエノ森」の御嶽があり、そこは小さな曲輪（ハ）になっている。現在瓦葺きの小祠が置かれている（3）。さらにグスク内には「伊是名ミヤ御イベ、神名伊是名森」と呼ばれるもう一つの御嶽がある。この御嶽はグスク内西側七合目あたりにあって小さな削平地になっている。防御のための石垣が若干認められることから西側から城内に侵入するのを阻止するために築かれた曲輪であることがわかる。

中心となる大きな削平地（曲輪）には遺物包含層が形成されている。表面踏査により14～15世紀に属する貿易陶磁器の破片も数多く採集されている。なお、採集遺物の中には高麗青磁等も含まれており注目されている。<sup>⑧</sup>

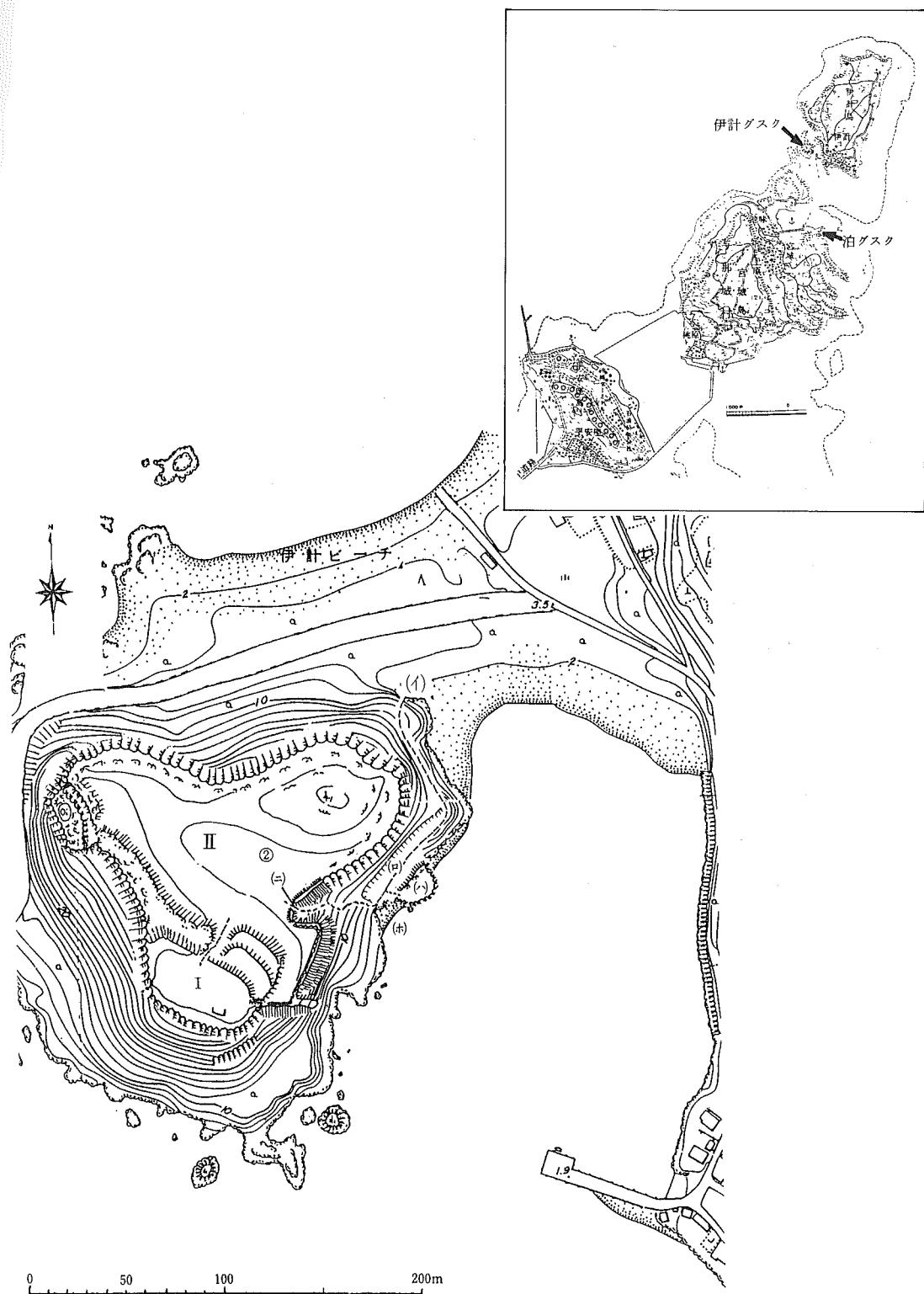
### 伊計グスク

①与那城村字伊計、②イチグシク、③④⑤——、⑥アタヘチクドン、⑦14～15世紀⑧野面石垣・土塁・切岸、⑨150m×120m、⑩比高約40m、⑪『沖縄の城跡』新城徳祐著

伊計グスクは沖縄本島中部の離島字伊計集落西北西海岸、すなわち伊計島の船着場（現在は伊計漁港）に入る左岸の陸繫島の岩山の上にある。グスクは船着場を挟んで集落と相対峙する恰好となるために、地形的には港となる入江をグスクと集落が抱きかかえる形となる。

伝承によると、「アタヘチクドン」という按司が居城していたグスクだったといい、対岸の泊グスク（宮城島所在）の城主「川端イッパー」とは事あるごとに領域の拡大を狙って相争っていたといわれている。<sup>⑨</sup>

グスクが機能していた時期は、表面採集で得られた貿易陶磁器により14～15世紀頃と



伊計グスク

考えられている。朝鮮の李朝成宗2年（1471）に申叔舟が編集した『海東諸国紀』に池具足城と記されているのがこのグスクではなかろうか。

グスクの周辺は天然の断崖によって囲まれているが、東側から南南東側にかけては崖面が急峻さに欠けるため防御上の構造物はこの部分に集中して見られる。虎口（ニ）もここに開いているが、合横矢を効かしているのが特徴的である。グスクに登る路は砂洲によつてつながった（イ）から開いており、断崖の下を潜るようにして（ロ）の平場に出、しばらくして右折し虎口に至ることができる。グスクに登る路は断崖の真下を通ることになるために断崖の上に位置する城内からは城道が完全に抑えられる。

虎口の防御は完璧で、左右に土壘と石垣があるために横矢が効き攻城軍の侵入を許さない。曲輪Ⅱは、自然地形をわずかに残しているものの中央部が平坦となっており、その中に「城之殿」（②）がある。現在曲輪内がはブッシュに被われているため中の様子を掴むことはできないが、戦争前夜の増産運動の時期に青年団によって芋畑として開墾されたといわれ、この時にかなりの地形的改変を受けたといわれている。

グスクの南の先端、標高49mを測る城内で最も高いところに曲輪Ⅰがある。この曲輪の下には二段の小曲輪を設けており、曲輪Ⅰに登ってくる敵兵を迎え打つ構えをとっている。曲輪Ⅰとの比高差が2～3mあるので、防御上の要として小曲輪の存在は非常に有効である。曲輪Ⅰは50m×30mの規模を有し、比較的広い平場であり曲輪の先端にはコンクリート製の祠が置かれている。この祠の中には大形の貝が奉納されている。この曲輪Ⅰが主郭であろう。曲輪に立つと西に金武湾、東に太平洋を望むことができ、また、隣接する宮城島の泊グスクは対岸にあって指呼の間にある。また伊計の入江は（現在伊計漁港になっている）グスクのすぐ下に広がり、船の出入が手に取るようになる。

（ロ）と（ハ）の平場からは表面採集によって14～15世紀に属する貿易陶磁器が数多く得られる。この一帯は削平地となっていて、グスク時代に属する遺物包含層が確認される地区である。したがって居住区だった可能性もある。（ハ）は海に突出する岩の上を人為的に加工しており、何らかの施設があった可能性が高い。この（ハ）に隣接する海岸ベリ等でも貿易陶磁器が採集される。また、（ハ）に隣接して小さな砂浜（ホ）があり小舟が接岸できるようになっている。

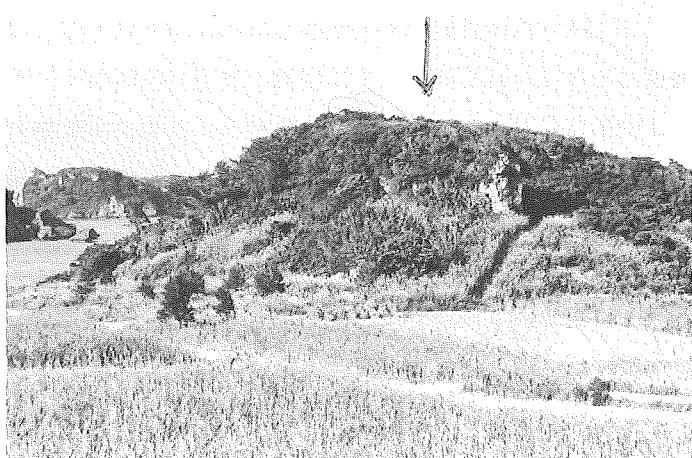
このグスクは島陰となる入江（現在は伊計漁港として使用されている）に面し、入江に貿易船を引き入れ取引を行うためには好都合だったとみられることから、東海上における交易の拠点としてのグスクだった蓋然性はきわめて高い。

### 泊グスク

①与那城村字宮城、②トマイグシク、③④⑤——、⑥川端イッパー、⑦14～15世紀、



泊グスク



泊グスク遠景(西より)



泊グスク(大手の城道)



泊グスク虎口に残る切石

⑧野面石垣・切岸・土塁、⑨300m×80m、⑩比高約15m、⑪『沖縄の城跡』新城徳祐著。

このグスクは、与那城村字宮城の泊原に所在する。太平洋に突出する琉球石灰岩からなる独立した岩山の上に営まれたグスクである。四面とも断崖絶壁であるが、南南西側に僅かに緩い傾斜面があり、そこに虎口が取りついている。北と西側の面はキノコ状の切り立つ断崖を形成しておりそこには障壁としての石垣は見られないが、東側から南側にかけては、無理をすれば容易に攀じ登れる崖面であることからここには約1～2m幅の石垣が築かれている。高さについては自然崩壊が進行しているためはっきりしないが現在高で最大2mの石垣が部分的に残存する。

伝承では「川端イッパー」という按司が城主だったといわれている。伊計グスクと泊グスクの争いの状況について新城徳祐氏は次のような伝承を記録している。<sup>⑫</sup>

「昔のこと、泊城の城主は川端イッパーといって、大そう力の強い武士が住んでいたそうであるが、同じころ、前方の伊計島の伊計城にはアタヘチクドンが、城主として住んでいたという。泊城主の川端イッパーと、伊計城主のアタヘチクドンは、いつも勢力争いをしていたそうであるが、どうしても勝敗がつかなかった。そうしているうちに、伊計城主のアタヘチクドンは、次のような策略をもって泊城主の川端イッパーを滅ぼした。ある冬のこと、北風が吹きあれたので、これ幸いなりといって木灰を空高く投げつけさせた。それで泊城内の武士たちをはじめ、城主の川端イッパーは力つきて敗北し、ついに城下のオクシノ寺という洞窟で自殺して相果てた。」

戦いの様子が非常に幼稚でありあくまで伝承の域はでないが、グスク時代には隣接する按司同志が利権を巡って争っていたことは事実であり、グスク時代の緊張した状況を反映していると思われる。

岩山は南北に細長く、南北両端にピークがあり、北のピークはほぼ平坦になっているが、自然地形もわずかに残している。現在、熱帯樹によって覆われているために輪郭が掴みにくく判然としない。南のピークは30m×50mの削平地（I）で、城内北よりに石積みの根石らしいものが確認されるが、曲輪内を区画する石積みかどうか判然としない。この曲輪の周囲には断崖の縁辺部に石垣が認められる。IとIIIの間には一段下がって曲輪IIがあり、その南南西側に虎口（イ）が開いている。この曲輪IIは約1m前後の段差で東西に分けられそうであるが明瞭な区画があるわけではない。西側の石垣沿いに香炉を置いた拝所がある。IIの曲輪の断崖縁辺にも野面の石垣が築かれ城壁としている。

IやIIIの尖端部は削平段となっていてそこに立つと視界が開け太平洋が一望できる。またIの郭内からは城下の平野部を見下すことができ、IIIの郭内方からは対岸の伊計グスクや伊計の集落をはじめ太平洋の波打つ白波が望めて絶景である。（イ）の虎口を出ると

城道が南に向かって伸びている。とくに虎口近くは厚く高い野面の石垣によって防御されており、下からの登り口も狭められている。今では石垣が崩れていて往時の姿をとどめてないが、四角に加工された切石も若干見られることからかつては石垣のきちんとした城門だった可能性は高い。虎口への城道は崖下を縫うようにしながら通っており、東側は切岸となって落ちるが、その下には山の裾部を取り巻くように曲輪（IV）が認められる。この曲輪にはアダンの木が密集しているため輪郭はとりにくい。城道の西側にも二段の小曲輪が連なる。

城内には遺物包含層が確認されグスク系の土器や貿易陶磁器が採集される。崖下でも若干遺物が採集されるが城内から投棄されたものであろう。城内に居住空間があったことは遺物包含層の存在により明らかであるが、発掘が実施されてないので地下遺構については未確認である。グスクの時期は、貿易陶磁器の年代観から14～15世紀頃と見られる。

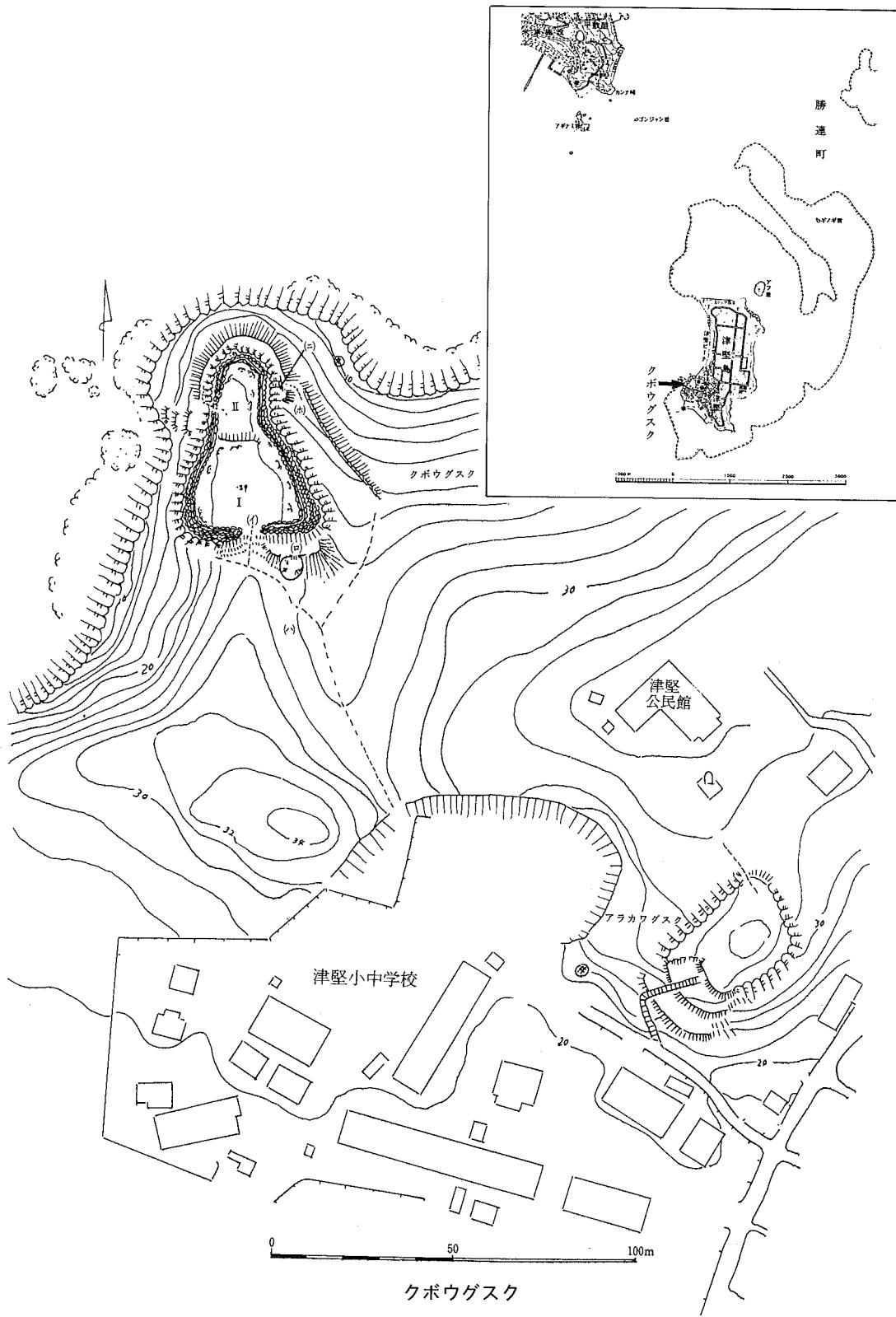
グスクが水田となる谷間を背にして海岸に迫り出す岩山に立地していることを考えると、食料生産をおこないつつもやはり海上貿易を指向する集団が築いたグスクの可能性を考えることができる。

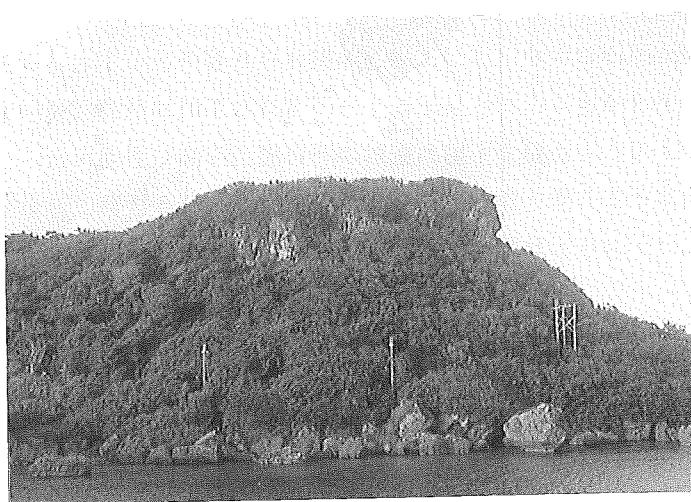
#### グボウグスク

①勝連町字津堅、②——、③④⑤⑥⑦——、⑧野面石垣・切岸、⑨60m×40m、⑩比高28m、⑪勝連町史。

グスクが所在する津堅島は、沖縄本島中部与勝半島の南東約5km、太平洋に浮かぶ周囲8kmの小島である。中城湾の入口に面し、湾に向かって航行する船がよく見える位置にある。クボウグスクはこの津堅島の西海岸にあり、海に突出した琉球石灰岩からなる岩山の上に営まれた小規模グスクである。グスクの由来については至近距離にクボウ御嶽があることからそう呼ばれているようであるが御嶽との関連性は薄いとみられる。

グスクは、標高29mのピークを中心に二つの曲輪とそれを取り巻く小さい腰曲輪となる。周囲は断崖に面し、南側の一方だけに限って緩い斜面となって内陸部に接続する。虎口（イ）はそこに開いている。坂虎口となっていて幅1m程の階段が取りついている。階段の東側、すなわちグスクに向かって右手前に切岸をもつ小曲輪（ロ）が虎口に向かう大手道を抑えるかのように設けられている。（ロ）の南に隣接して大きな陥没穴があるが、沖縄戦によるものである。このグスクの周辺や地下には日本軍の陣地が構築されており、今でも荒れ果てた陣地壕が残存し、戦争の生々しさをとどめている。昭和20年この島に米軍が上陸を開始し、それを阻止しようとする日本軍との間で死闘が繰り広げられたという。事実、岩陰などには現在でも砲弾の破片や軍靴等が散乱している。虎口の南前方は





伊計グスク遠景(西より)



クボウグスク遠景(西より)



クボウグスク(北より)

クバの木が密生する山となっていて、そこにコンクリート製の小さな祠（ハ）が建立されている。オヅカサノ御イベを祀るクボウ御嶽である<sup>⑩</sup>。また、グスクの南東約150mのところには島の最高頂標高33mの丘をピークとするアラカワグスクが位置している。

曲輪Ⅰは標高29mで、25m×20m規模の削平地である。崖の縁辺部には野面の石垣が積まれている。石垣の幅は厚いところで2～3mもあり、往時は比較的高い石垣だったよう見受けられる。とくに東側の緩い斜面には幅の厚い石垣が見られるが、その石垣はかなり崩壊しており、崖下には崩れた石が散乱している。曲輪Ⅰの北には一段下がって曲輪Ⅱがある。曲輪Ⅱは南北に細長く、15m×10mの規模を有している。曲輪の先端部に立つと目の前に与勝半島を望み、中城湾が180度の視界で入ってくる。Ⅱの西側斜面に小さな腰曲輪が三段設けられている。また、北東側の崖下には岩陰を利用した古墓（ニ）があり、そこへの墓道（ホ）が現存している。古墓の中には遺骨は入っていない。どこかに移葬されたのであろう。墓の内部も荒れはてている。この墓の下方、標高10mの海岸べりにはイヌチガードと呼ぶ井泉が存在する。

津堅小中学校の裏手からグスクに登る路を行くと、左手を曲がるとグスクに通じ、右手に曲がって行くと海に下りられる。付近の海岸は岩礁が発達した地域であるが、ところどころ岩礁が切れるところがあり、そこには小さな砂浜が見られ、小舟が上陸するには恰好の場所になっている。このグスクは、海に突出するという特異な形態をとっており、海上貿易と関係するグスクだった可能性が高い。グスク周辺からは14～15世紀に属する貿易陶磁器が採集される。<sup>⑪</sup>

### ティミグスク

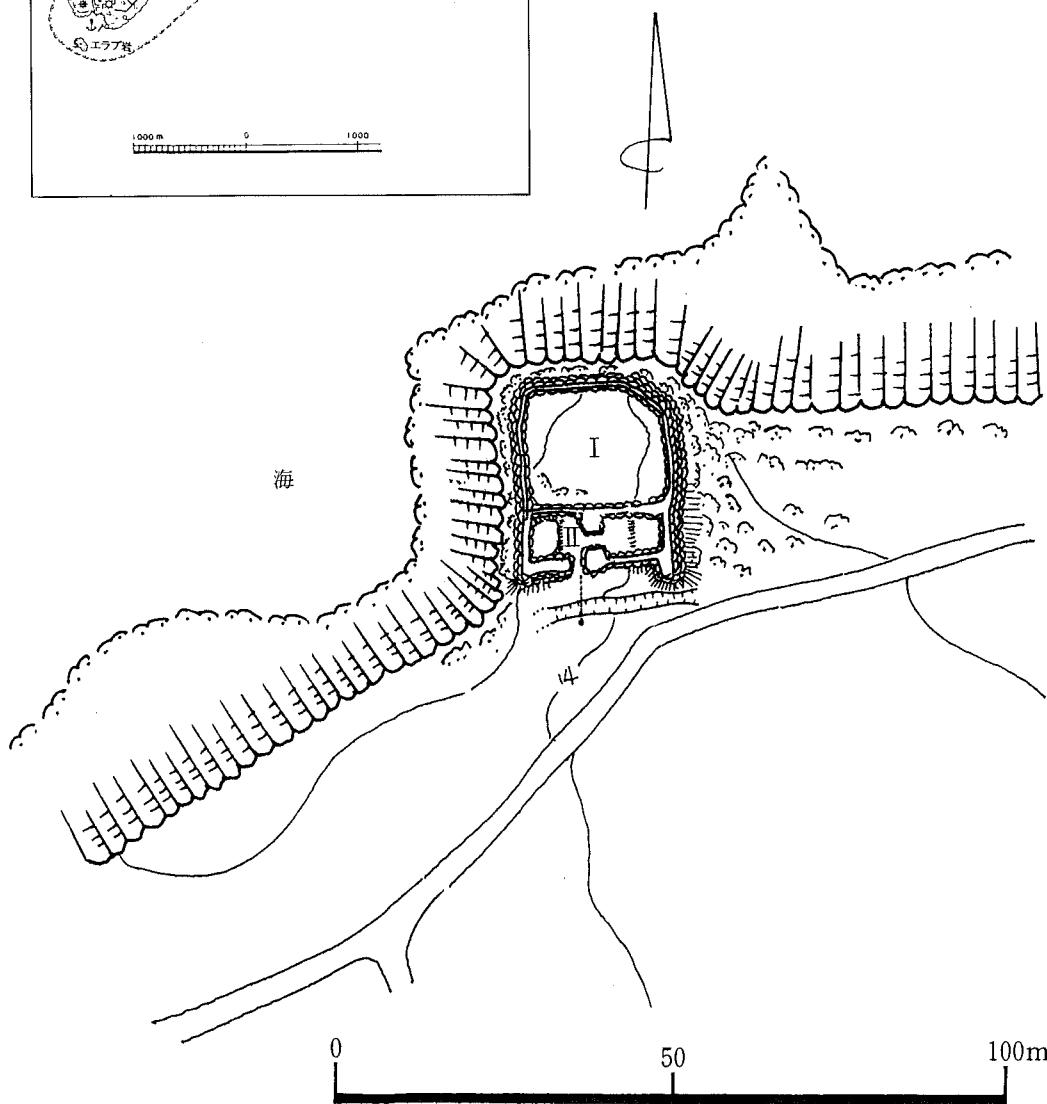
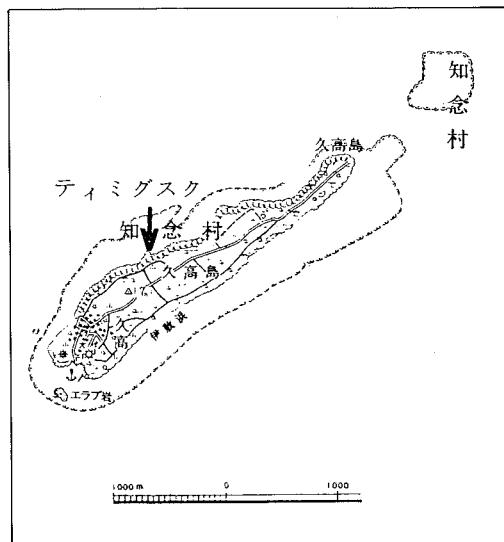
①知念村久高、②③④⑤⑥——、⑦14～15世紀、⑧野面石垣、堀切、⑨25m×35m  
⑩15m、⑪——。

このグスクは、久高島のほぼ中央部北西海岸に突出する石灰岩上に営まれた野面積みの小規模グスクである。グスクが所在する久高島は、沖縄本島南部の知念半島東方約5,5kmの太平洋上に浮かぶ全長3,2kmの小島である。

グスクは現在の集落から約1kmほど行った北東の方角にあって村人の居住空間から離れて立地している。近くには神事を行う際禊ぎの井戸となるヤグルガーや沖縄で最初に麦を蒔いた場所として伝承されるハタスバル等がある。

平面形態は、南北を長軸とする長方形を呈し周囲を琉球石灰岩の野面積みがめぐっている。先端部、つまり北側は急崖をなして海岸に接し、前方（南側）は内陸側へと続く。

曲輪Ⅰは先端部にあって、18m×14mの規模を有する主郭である。現在アダン等の海浜



Tami

ティミグスク



久高島ティミグスク遠景  
(西より)



ティミグスクの石積(北より)



ティミグスクの虎口付近

植物によって覆われているために内部の様子はつかめないが、平坦に造成されており土木地業が行われたことをうかがわせる。この曲輪の周囲は幅約2m、高さ1.5mの野面の石垣がめぐり、明らかに防御を意識した曲輪だということがわかる。曲輪Ⅱは南側の虎口に直結し、幅3m、長さ12m程の細長い曲輪である。中間に仕切りが入り二つの小曲輪に分割されている。西側には方形の櫓台が置かれ、東側の隅は一段上がり、そこよりⅠの曲輪に入ることができる。曲輪Ⅱには三つの香炉が置かれ、それぞれに中山・南山・北山への遙拝と記されている。Ⅰの虎口は南に向いて開けられており、その前面にはほぼ1m前後の浅い溝が東西に走っている。小さい堀切の可能性がある。

筆者は曲輪Ⅰの城内から蓮弁文の青磁碗を表面踏査によって一点採集したが、グスクの南に隣接する畠や原野からもグスク時代の遺物が採集されている。貿易陶磁器の年代観は14~15世紀のものである。<sup>⑨</sup>

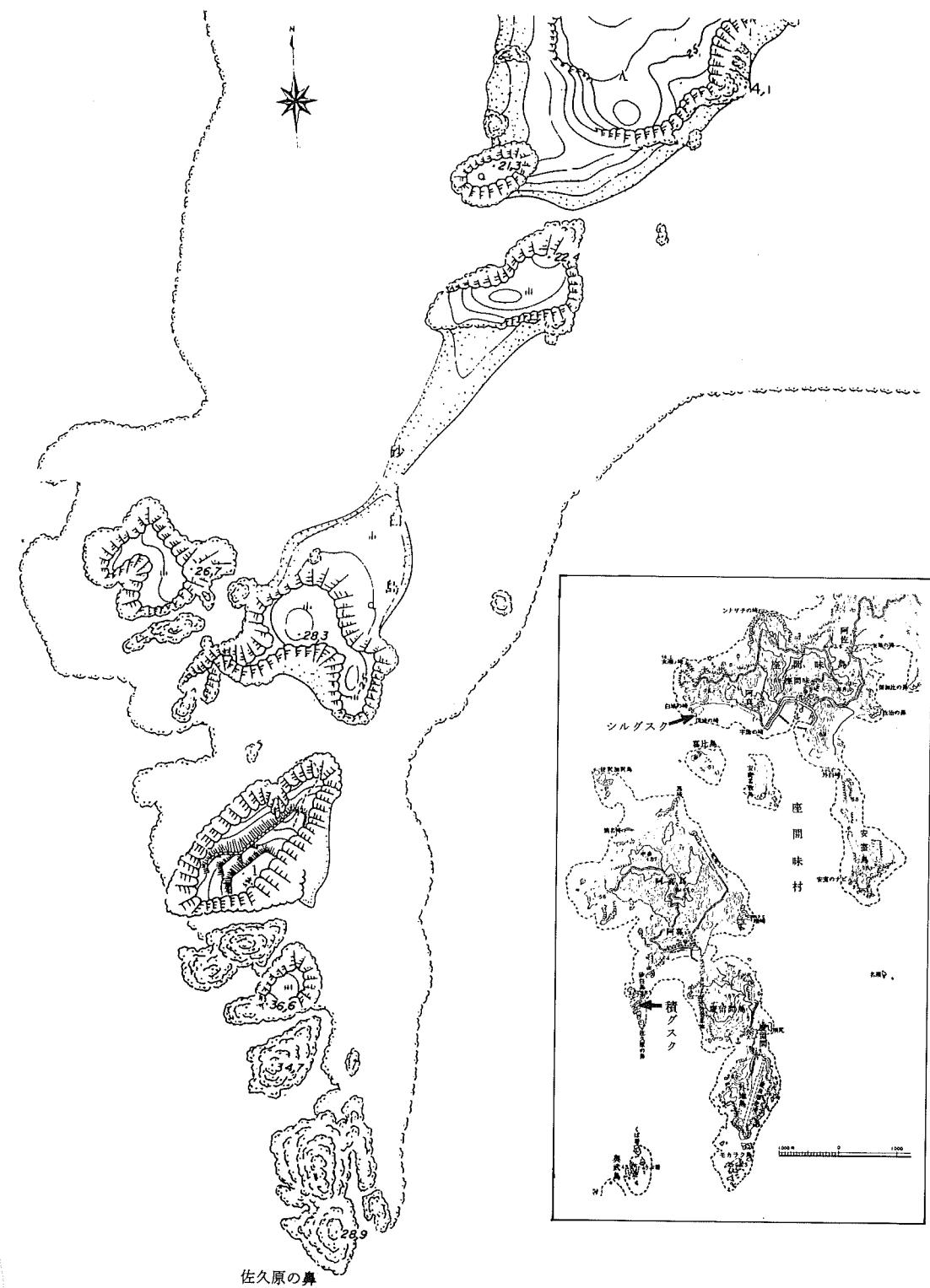
このグスクも、先のクボウグスク同様中城湾の入口に面し、湾内に入ってくる貿易船をすばやくキャッチできる位置に営まれている。グスク近くの海岸には小さな砂浜があり、礁湖の切れ目もあることから貿易船を引き入れたりするための海外貿易に関連するグスクだった蓋然性はきわめて高い。グスク内や周辺の畠地から貿易陶磁器が数多く採集できるのはそのことを裏付けるものであろう。

### 積グスク

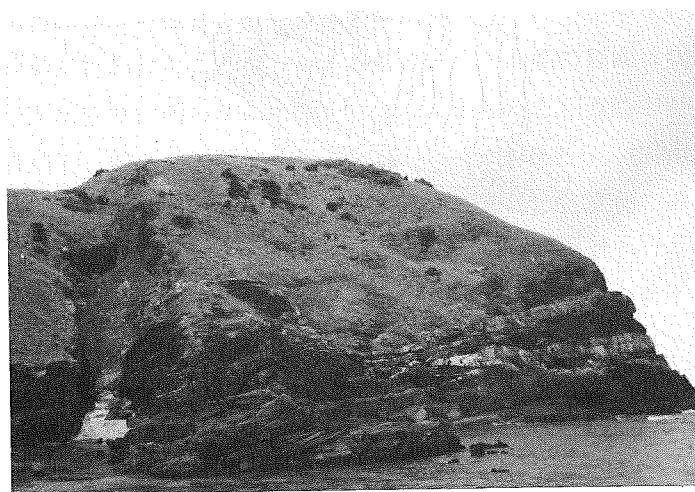
①座間味村字阿嘉、②ツングスク、③④⑤⑥——、⑦14~15世紀、⑧野面石垣・切岸、⑨100m×30m、⑩45m、⑪座間味村史。

このグスクは、阿嘉島の南西、スナシルの南に隣接するサクバル岩瀬中の中央部、比較的大きな岩瀬に立地する。この岩瀬まで行くには、干潮時を見計らいながらスナシルの高い岩瀬を越えてリーフ内を歩いて渡らなければならず容易でない。グスクまで行くには往時としても大変な苦労を伴なったものと思われる。それほど通行条件の悪い場所に立地しているのがこのグスクの特徴点の一つである。伝承によると、对中国貿易による宝物を狙ってしばしば海賊が攻め入るのでそれを防ぐために築かれた城だと言われている。<sup>⑩</sup>

グスクが立地する岩瀬の平面形態は、北東-南西方向を底辺とする三角形である。その上に形成されるグスクは標高45mをピークに北西の方角に向かって傾斜し、この傾斜面を削平した四つの平場から成る。最も高い位置にあるのが曲輪Ⅰで、その下に三段の小さな削平地が離段状に続いている。石垣は断崖が緩慢な北西側の中腹面をとりまくようにめぐっており、その幅は約1m、高さが約60~70cmを測る。石垣の高さがあまり高くないのは、海風が強く吹きつける岩場の上に積まれていて長い年月の間に石垣上部の方が崩壊



積ゲスク



積ゲスク遠景(西より)



積ゲスク  
(曲輪内のアダンと石積)



積ゲスクの石積

したからではないだろうか。

敵の侵入を防ぐために比較的緩い斜面に石垣をめぐらし、ところどころに小さい削平地を設けて撃迎の構えが取られていることからすると、小規模で単純な構造でありながらも軍事的に防御を意識してつくられたものだということが理解される。

岩瀬に登れる場所は北東方角のみに限られここに虎口が取りついている。虎口の作りは明瞭でないが、根石から判断する限り石積みによって固くガードがなされていたのであろう。この部分の根石を見ると他の根石に比べかなりしっかりした作りになっている。

石垣の素材は周辺で取れる自然の石を加工せずにそのまま使用し、大きさは頭大からそれよりやや大きめのものが多く使われている。

### シルグスク

①座間味村字阿真、②阿真のシルグスク、③④⑤——、⑥シンマノヒヤー、⑦13~14世紀、⑧野面石垣・土墨・切岸、⑨44m×35m、⑩35m、⑪座間味村史。

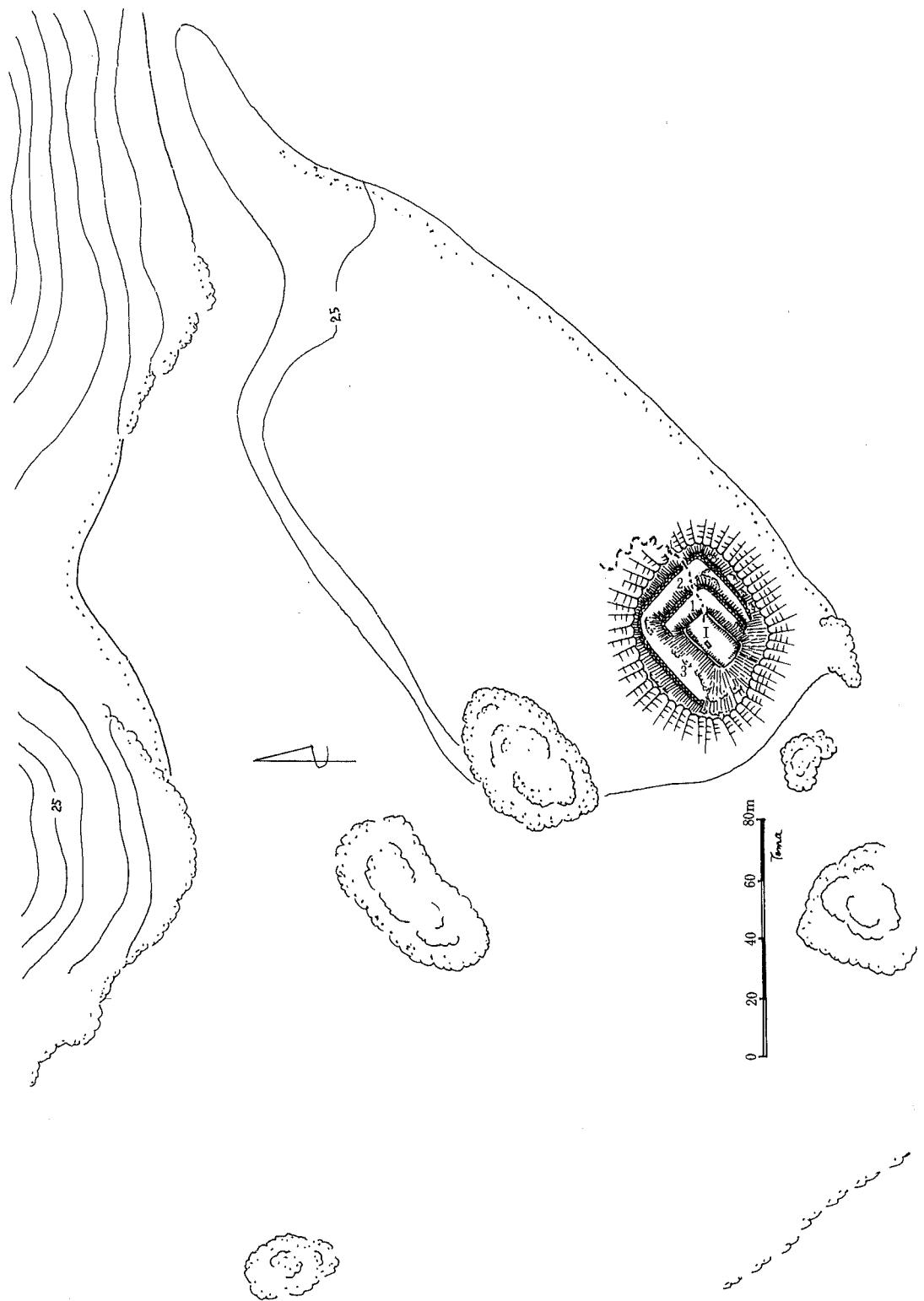
阿真集落の西南端、海に突出する岩山の上に築かれたのがシルグスクである。国土基本図ではこの一帯を深城の崎と記している。グスクが立地する岩山は標高35,5mをピークにピラミット形の形状をなし、その裾野は砂州になって小さな島を形成する。満潮時には島に渡ることができなくなる。

グスクの頂上は18m×8mの規模を有する曲輪Iである。この曲輪が主郭であろう。曲輪Iの四方は切岸になり登りにくく城壁の役目をする。北西と南東の縁には痩せた土墨がかすかに残っている。現在この曲輪には祠があり、旧暦8月11日と9月9日には阿真集落の各家庭から一人ずつ参加してシルグスク拝みが行われる。<sup>⑪</sup>

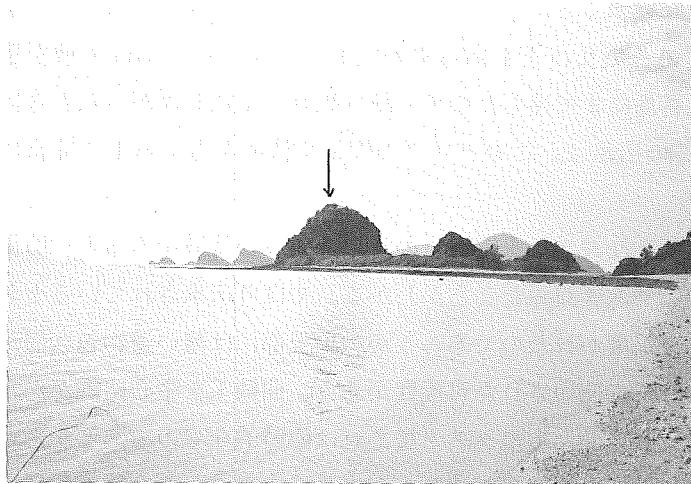
曲輪Iの下には石垣の障壁を有する腰曲輪が北西側に一段、北東側と南東側にそれぞれ二段作られている。南西側は切り立つ断崖が迫っているために切岸だけで終わり腰曲輪は取り付けられていない。腰曲輪1・2・3は崖を攀じ登って来る敵を意識したものであり、曲輪Iを防御するために緻密に計算されたつくりとなっている。主郭Iの虎口は東北東に開いており、腰曲輪1と2を跨ぐ形で曲輪Iに入る。主郭を中心として求心力の強い曲輪配置になっている。グスクの下から頂上へと進むには、等高線沿いにジグザグにカーブしながら登っていくが、急な坂道のために容易なことではない。現在は、村当局によって偽木による階段が取りつけられ、幾分登りやすくなった。

このグスクには、シンマノヒヤーという人物の伝説が残っている。座間味村史から引用すると次の通りとなる。

「昔、シンマノヒヤーという人が、何かのことから渡名喜島と戦争を引き起こし、敵軍



シルグスク



シルグスク遠景(西より)



シルグスクの石積



シルグスク主郭

の来襲から身を守るためにこの城をつくったという。この人は力持ちのうえに勇敢で、刳舟一隻分の石を両脇に抱えて、八、九丈ほどもあるその険しい岩山に運びあげて城を築き、彼が投げる石弾は遠く渡名喜島にまで達したので、敵は恐れて来寇しなかったと今に伝えている。」以上であるが、この伝承は、このグスクの性格や機能を考える上で非常に示唆的である。

切り立つ岩山の上になぜこのようなグスクを築いたのか。縄張りの特徴をみると、防御を意識つつ、非常に求心力の強いグスクだったことがわかる。やはり伝承されているとおり外敵への備えとしてこのグスクが築かれたのであろうか。頂上部には薄い遺物包含層が確認されることから居住空間としても使用された可能性があり、曲輪Ⅰを中心に誰かが常駐していたことが考えられる。見張りのためのグスクであれば臨時的なものであるから遺物包含層は存在しないはず、このグスクの性格や機能をどのように考えるか今後の課題としたい。

なお、グスクの登り口に近い平地からは若干の貿易陶磁器が採集される。時期的には13~14世紀に属するものである。

### スンジャグスク

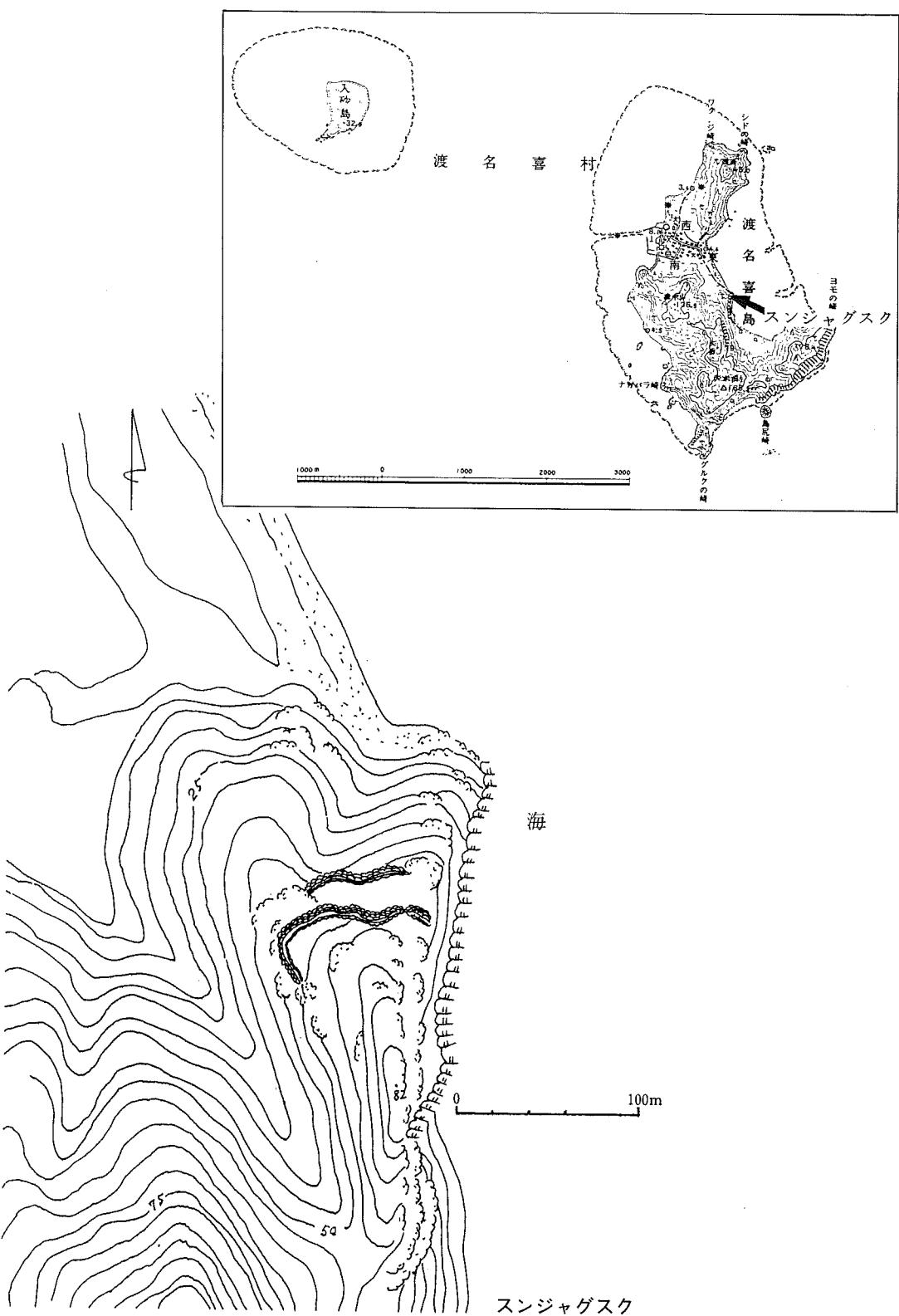
①渡名喜村、②③④⑤⑥⑦——、⑧野面石垣、⑨70m×25m、⑩60m、⑪渡名喜村誌。

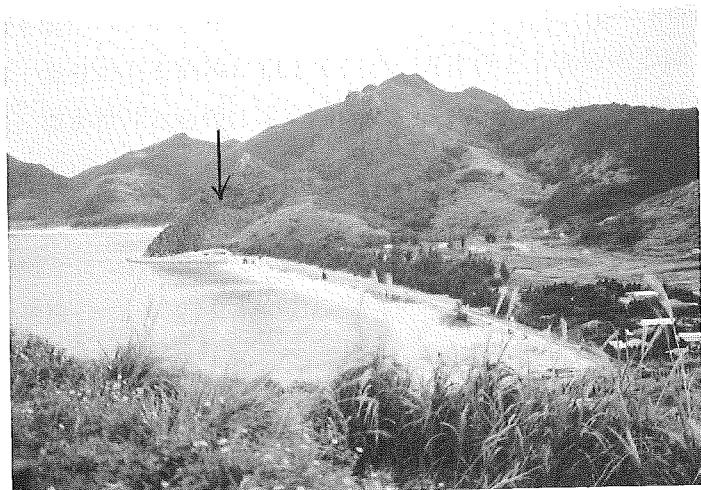
渡名喜島の東海岸側、古生期石灰岩の切り立つ断崖の上に占地するグスクである。渡名喜島は、那覇の北西約55km、面積およそ3,34平方kmの小さな島である。

このグスクは、古生期石灰岩のゴツゴツした露頭岩の上に石垣を積みあげて築かれており、城内はほとんど自然地形のままである。防御構造としては石垣だけであるが、一番弱点となる北面する傾斜面に野面石垣をまわして障壁とし、東は数十メートルの断崖絶壁となって海に落ち、西は小さな谷間を形成している。したがって、地形的にはピーカー部を中心として独立した一つのエリアを形成することになる。縄張図からもわかるように等高線に沿う形で石垣による二重のバリケードを築いた形となる。下方の平地部から登ってくる寄せ手を意識していることは明らかである。

石垣の素材には古生期石灰岩を手ごろの大きさに割って使用している。現在高が低いところで1m、高いところで約2mある。また、石垣の幅は約1,5mを測る。

このグスクの縄張り的特徴は、自然の地形を巧みに利用して、険阻なところをそのまま生かし、そうでない部分には障壁としての石垣を二重にめぐらすことによって、臨時的な逃げ城のような構造をとっていることであろう。<sup>⑪</sup>





スンジャグスク遠景(南より)



スンジャグスク石積

以上の縄張り構造から考えると、島人たちが有事の際緊急避難のために逃げ込むための避難所としての城だった可能性が高い。事実、島に海賊が攻めてきたときグスクに登って難を逃れたという伝承がある。

おわりに

本稿では沖縄本島およびその周辺の離島に所在する小規模グスクの縄張り構造について述べてきた。これらのグスクの多くが今では村人たちの間で拝所として信仰されている。しかし、グスクが聖域空間として利用されていたとしても、かつては何らかの軍事的な必要性に応じてつくられていたことは縄張図で見ると明らかである。断崖や急傾斜に面する

側の石垣は一重だが緩傾斜に面する側は外郭や腰曲輪をつけるという工夫をしたり、あるいは自然の地形を巧みに利用して、険阻なところをそのまま生かし、そうでない部分には障壁としての石垣を二重にめぐらしているという例などはこれらの小規模グスクが防御性を意識して築かれたものであることを証明するものである。

これまで見てきたグスクの共通項を抽出すると概ね次のとおりとなる。

- ①石垣や切岸によって防御された削平地を有していること。
- ②大海原を望む海岸や入江に面していて海を意識してつくられていること。
- ③小規模で単純な曲輪配置でありながらも防御性を強く持っていること。
- ④戦いの伝承や外敵から身を守ったというような伝承が残っていること。
- ⑤城内やグスクの周辺から14～15世紀に属する貿易陶磁器が採集されること。

以上であるが、防御された平場すなわち曲輪を有している事実は、たとえ小規模グスクとはいえ緊張した社会的状況を反映して作られており、戦い、守るために創出された城そのものだという認識をもつべきであろう。14～15世紀の琉球社会は、環中国海をめぐる貿易の中心的な位置におどり出た時期でもあり、このような時代的背景のもとにグスクが発展し、やがて離島各地にも数多くのグスクを誕生せしめたのではないかろうか。今後このような小規模グスクにも目を向けながらグスクの全体像にせまっていく必要があると思われる。

本稿を終えるにあたり、グスクの縄張り調査に御協力いただいた田原真孝氏、宮城伸一氏、山中久司氏、池原秀光氏、与儀達憲氏、矢沢秀雄氏、比嘉元子氏、安座間勝枝氏、花城潤子氏の方々に末尾ながら記して感謝申し上げます。

## 註

- ①拙稿「グスクとその構造」『中世の城と考古学』新人物往来社 1991年3月。
- ②拙稿「グスクの縄張りについて（上）」『博物館紀要』No.19 沖縄県立博物館 1993年3月。
- 拙稿「グスクの縄張りについて（下）」『博物館紀要』No.20 沖縄県立博物館 1994年3月。
- ③千田嘉博「中世城館縄張り調査の意義と方法」『国立歴史民俗博物館研究報告』第35集 1991年11月。
- ④『伊平屋村史』伊平屋村史発刊委員会 1981年12月。
- ⑤『伊是名村史』下巻 伊是名村史編纂委員会 1989年3月。
- ⑥拙稿『城—城に語らせたい地域の歴史—』沖縄県立博物館 1992年3月。

- ⑦前掲 註⑤。
- ⑧手塚直樹「伊是名島の陶磁器」『伊是名ウフジカ遺跡発掘調査報告書』伊是名村教育委員会 1980年3月。
- ⑨新城徳祐 『沖縄の城跡』(株)新報出版 1982年8月。
- ⑩前掲 註⑨。
- ⑪福田恒禎編『勝連村誌』 勝連村 1966年。
- ⑫『勝連町の遺跡』 勝連町教育委員会 1993年3月。
- ⑬『知念村の遺跡』 知念村教育委員会 1986年3月。
- ⑭『座間味村史』中巻 座間味村史編集委員会 1989年7月。
- ⑮前掲 註⑭。
- ⑯前掲 註⑭。
- ⑰拙稿「渡名喜島の遺跡」『沖縄県立博物館 総合調査報告書Ⅱ』1981年3月。

## 球陽にみられる地学関係の記述について（1） (國初・雷)

瀬名波 任

(沖縄県立博物館)

On the Description Concerning Earth Science in the Kyu-yo, an Official  
Okinawan Historical Book.

Tsutomu SENAHA  
(Okinawa Prefectural Museum)

Abstract : The author has discussed about the begining of the Ryukyu country and thunder written in the Kyu-yo, an official Okinawan historical book.

### はじめに

球陽は正巻22巻と附巻4巻からなる琉球の正史で、正巻は國初～尚泰29年（1876）、附巻は尚寧王12年（1600）～尚泰29年（1876）までの出来事が記載されている。

その中には、地学に関連した暦時・気象・海洋（津波等）・地震・火山・天文等の現象や國初において地理の内容も記載されている。気象や天文等の現象の中には、気象台や天文台の資料と照合が必要なものも多数有る。今回は照合無しでも考察できるものとして、國初と雷に関する内容を拾い上げてみた。

### 1. 國初の北極出地及び偏度去北極中線について

福建北極出地二十六度三分偏度去北極中線偏東四十六度三十分の記載があるが、北極出地つまり北極星の地平線からの高度、すなわち緯度と考えられ北緯 $26^{\circ}18'$ （福建の緯度を地図から求めると北緯 $26^{\circ}06'40''$ ）となる。

北極中線の位置…地図で求めた東経が $119^{\circ}25'03''$ なので $46^{\circ}30'$ を引くと東経 $72^{\circ}55'03''$

になる。

琉球北極出地二十六度二分三厘偏度去北極中線偏東五十四度から、北緯 $26^{\circ} 13' 48''$ （第33回那覇市統計書によると、市役所の位置が北緯 $26^{\circ} 12' 30''$ ・極北が北緯 $26^{\circ} 14' 32''$ ・極南が北緯 $26^{\circ} 12' 20''$ で、ほぼ正確な値）、北極中線の位置…前出統計書によると東経 $127^{\circ} 40' 51''$  [市役所]・極西が東経 $127^{\circ} 38' 18''$ なので、極西の値から $54^{\circ}$ を引くと東経 $73^{\circ} 38' 18''$ で福州からの値とは少し異なるがほぼ一致している。

考察：北極中線の場所及び福州・琉球の距離について

北極中線の場所は東経 $73^{\circ} \sim 74^{\circ}$ となり、タクラマカン砂漠の西にあるパミール高原あたりを通る事になる。このあたりが当時の中国の国威が及ぶ限界だったのではないか？

則琉球與福州東西相去八度三十分とある。偏度去北極中線偏東 $54^{\circ}$ 度（琉球）から偏度去北極中線偏東 $46^{\circ} 30'$ （福州）を引くと $7^{\circ} 30'$ になり、計算違いと思われるが、推算徑直海面一千七百里とある。これから $1^{\circ}$ あたりの長さを求めるに、 $8^{\circ} 30'$ なら $1^{\circ}$ が200里になる。 $7^{\circ} 30'$ なら $1^{\circ}$ が $226.66\cdots\cdots$ となり中途半端である。長さの基準を何によって定めたのかが分からぬとどちらが正しいのか断定は難しい。現実には両者の距離は約820kmなので、 $820\text{km}=1,700\text{里}$ なら1里=約0.482kmとなり、当時の度量衡の1里=0.576kmと比較して約16.3%の誤差になる。

## 2. 雷について

### 被害状況の記載

| 被害状況  | 回数 | 被害状況  | 回数 | 被害状況   | 回数 | 被害状況  | 回数 |
|-------|----|-------|----|--------|----|-------|----|
| 人死亡   | 45 | 家屋等破損 | 41 | 道路への落雷 | 2  | 被害無し  | 1  |
| 人負傷   | 4  | 家畜死亡  | 7  | 水田損壊   | 1  | (音のみ) |    |
| 人その他  | 1  | 植物被害  | 16 | 船損壊    | 2  | 不明    | 3  |
| 家屋等火災 | 15 | 岩破壊   | 3  |        |    |       |    |

考察：圧倒的に死亡や家屋破損が多く、人とのかかわり、特に土族とのかかわりの大いきいものの記載が多い。当時の生活状況からすると当然と思われる。

### 被害状況の表現

人死亡 [撃死：11回／打死：10回／震死：9回／焼死：3回／打殺：2回／遇着其（煙

or 烟) 身故：2回／驚死：1回 (擊：1回)／降打裂其頭：1回／倏落打斃：1回／震倒即死：1回／震傷而死：1回／冒着雷烟身故：1回／傷殺：1回／害：1回]

人負傷 [壓打：1回 (驚死の後蘇醒し翌日死亡)／幾絶氣息：1回／遇着雷烟少痛手足：1回／害：1回]

人その他 [致驚倒：1回]

家屋等火災 [燒化：5回／燒：4回／燒穿：2回／雷火燃起：1回／燒燼：1回／燒破：1回／燒失：1回]

家屋等破損 [破：5回／擊破：4回／小破：3回／穿：3回／小爲破：2回／損壞：2回／損破：2回／打破：2回／打壞：2回／大爲破：1回／割碎：1回／打碎：1回／打折：1回／雷損：1回／打斷：1回／打穿：1回／擊折：1回／碎散：1回／損：1回／打割：1回／盡碎：1回／碎落：1回／吹起：1回／崩：1回／穿破：1回]

家畜死亡 [打死2回／燒斃：2回／擊死：1回／斃死：1回／斃：1回]

植物被害 [擊破：3回／剥皮：3回／損壞：1回／損破：1回／打破：1回／打折：1回／打剥：1回／燒枯：1回／騰上：1回／傷損：1回／剥破：1回／擊壞：1回]

岩破壊 [打碎：2回／打崩：1回]

道路への落雷 [雷震于眞和志驛北邊宿道之端：1回／(鋪石を) 震起：1回]

水田損壞 [損壞：1回]

船損壞 [損壞：1回／有疵：1回]

音のみ [有鳴神之響：1回]

不明 [本年雷震三處：1回の記述で三ヵ所]

#### 落雷場所 (多い順序)

| 場 所 | 回数 |
|-----|----|-----|----|-----|----|-----|----|-----|----|
| 首 里 | 15 | 勝 連 | 3  | 南風原 | 2  | 伊平屋 | 1  | 伊是名 | 1  |
| 那 霸 | 11 | 宜野湾 | 3  | 兼 城 | 2  | 栗 國 | 1  | 佐 敷 | 1  |
| 宮 古 | 8  | 多良間 | 2  | 伊良部 | 2  | 屋 部 | 1  | 有 銘 | 1  |
| 眞和志 | 7  | 伊 江 | 2  | 北 谷 | 1  | 具志頭 | 1  | 伊豆味 | 1  |
| 与那原 | 4  | 本 部 | 2  | 浦 添 | 1  | 豊見城 | 1  | 羽 次 | 1  |
| 西 原 | 4  | 今歸仁 | 2  | 奥   | 1  | 具志川 | 1  | 仲尾次 | 1  |
| 具志川 | 3  | 羽 次 | 2  | 摩文仁 | 1  | 仲 里 | 1  | 本 部 | 1  |
| 八重山 | 3  | 美 里 | 2  | 越 来 | 1  | 喜屋武 | 1  | 小 祿 | 1  |
| 東 村 | 3  | 読 谷 | 2  | 黒 島 | 1  | 中 城 | 1  | 金 武 | 1  |

考察：土族の多い首里・那覇・真和志に報告が多いのは当然だといえるが、現在よく落雷の見られる西原からの報告が思ったより少ない。また、宮古からの報告が多いのは、平坦な地形故に被害が多かったからなのか（死亡 6 件内 1 件は船破壊含むもう 1 件は家畜死亡と家屋破損を含む・家屋破損 4 件等）、中央へ丁寧に報告していたからなのかはよく分からぬ。

#### 名称（初出の年代順）

雷： 86回 記録全般にみられ最もボビュラー

雷霆： 6 回 1680 年～1736 年（1725 年に一度表現無し…雷霆は本文でしか用いてないが 1725 年は本文無し）と 1875 年に一回のみ

殷雷： 9 回 1761 年～1770 年 2 月と 1799 年に一回のみ

鳴神： 2 回 1805 年のみ

雷公： 3 回 1805 年、1815 年、1872 年とかなり間がとんでもいる

雷神： 2 回 1872 年のみ

考察：年代による名称の違いは筆者による癖か？

#### 落ち方等（多い順序）

雷震：63回／雷落：24回／被雷：20回／震：9回／雷隕：2回／雷下：2回／鳴神之響：2回／震落：2回／雷神下落：2回／有聽得一聲雷響：1回／忽落：1回（大響）誤墜：1回／（大響）倏落：1回／（雷）大鳴：1回／（雷）大響：1回／震擊：1回／雷公降落：1回

考察：名称に比べ表現が多彩である。雷震、雷落、被雷、震を除けば 2 回以下である。雷落は 1680 年～1799 年、被雷は 1708 年～1875 年、雷震は 1771 年～1875 年、震は 1791 年～1863 年というように重なる部分を持ちながら使われる時期を多少分ける事は可能である。しかし、それ以外は意識して変わった表現にしているように思われる。

落雷場所・名称・落ち方等の総計が各々異なるのは、同じ雷に対し、名称・落ち方等に複数の表現があるため。

1579 尚瀬王 12 年…1815 年に「瓦底竹仍舊無異」とあり、濡れない場所には通電しない事が分かっていたようだ。

報文を書くにあたり、漢字の読み・意味等については糸数兼治館長に、落雷場所の位置等について萩尾俊章学芸員に指導して頂いた。紙面を借りて御礼申し上げます。

### 参考文献

- 球陽研究会編（1974）、球陽原文編、角川書店  
球陽研究会編（1974）、球陽読み下し編、角川書店  
那霸市（1994）、第33回那霸市統計書  
諸橋轍次（1960）、大漢和辭典、大修館書店

## 那覇市天久で観察された鳥類（1）

嵩原 建二・久貝 勝盛・瀬名波 任

(沖縄県立博物館)

The Birds at Ameku area, Naha City, Okinawa (I)

Kenji TAKEHARA, Katsumori KUGAI and Tsutomu SENAHA

(Okinawa Prefectural Museum)

### はじめに

那覇市天久の新都心開発地域（元米軍住宅地）は、総面積2,140,000m<sup>2</sup>で、那覇市の北西部安里、泊、古島、上之屋、天久、銘苅にまたがる広範な地域である（図1）。

大田（1975）によると、この地域の南東側にある小高に丘（標高約50m）には、第二次世界大戦中、旧日本軍の守備軍により「51高地」として堅固な陣地が構築され、上陸した米軍との間で激しく戦闘を繰り返した場所である。米軍はこの丘を「ショガーローフ（円錐形の丘の意）」と名付けたが、沖縄戦最大の犠牲者数である2600余人の死傷者をだしたとされる。

大戦後は旧銘苅集落の住民が戻り、農地を開いていたが、1953年4月から1954年8月にかけて旧銘苅、旧天久などの集落が米軍によって接収され、以来軍属及びその家族の住宅地として使用されていた（写真1）。しかし、1973年に返還が合意され、沖縄の本土復帰後の1987年5月に全面返還された。その後既設住宅の取り壊しが行われたが、そのまま放置され現在に至っている。このため河川沿いには潜在的な自然植生が回復し、また住宅地であった地域にはチガヤやヒメアブラスキ、ススキなどの草原が広がり、その中にモクマオウ、デイゴ、ガジマル、ホルトノキなどのかつての屋敷林の一部であったと思われる高木が散在する環境が残されていた（写真2）。また、解放地北側の一部は耕作地として利用され、サツマイモ、バナナ、ウコン、野菜等の農作物が栽培されていた。

本地域は現在新都心としての整備計画が実施に移され、地域振興整備公団による区画整理事業が進行中である。1993年冬に調査を実施した時点の現状は、総面積の約半分近く

が改変を受けており、造成工事の最中であった。したがって、回復してきつつあった自然環境が攪乱をうけている状況の中にあり、自然が保たれている地域は、まだ造成工事が行われていない北西部一帯の耕作地や丘陵地と河川沿いの古墓群発掘地域であった。

これまで那覇市における鳥類の記録は、近年与那城（1986）や慶田城（1988）によって報告がみられる。しかしながら、天久地域における鳥類の報告は、慶田城（1988）や沖縄野鳥研究会（1993）によって、断片的な報告が見られる以外は、まとまった報告はなされていない。

筆者らは、ビルが立ち並ぶ市街地のまっただ中にありながら、別世界のように自然植生が回復してきた本地域の自然環境を理解するため、そのひとつとして鳥類調査を実施し、若干の知見を得たので報告する。

この報告が将来の県立博物館の新館等の文化的施設が建設される際の屋外展示や緑地の植栽を検討する資料として、あるいは公園整備等を図る上で、那覇市街地の潜在的な自然環境を伺い知る基礎資料として、活用されることになれば幸いである。

本報告をまとめにあたり、調査に便宜を図って下さった地域振興整備公団、沖縄県企画開発部、那覇市都市計画課、那覇市教育委員会文化課の金武正紀氏、貴重な写真を提供していただいた那覇市広報課と那覇市教育委員会の古塚達朗氏に感謝申し上げる。また、貴重な野鳥の情報を提供していただいた沖縄野鳥研究会の比嘉邦昭氏、大城亀信氏と会員一同にも御礼申し上げる。

### 調査地環境及び調査方法

調査地地形は、調査地北西部および南東部に小高い石灰岩の丘<sup>\*</sup>（標高40～50m）が見られる他は大部分がなだらかな平地である。

調査地の地質は、島尻層群の第三紀泥灰岩が南半分を占めるが、北部の丘陵地帯や河川沿いに一部琉球石灰岩の露頭や風化土壌の島尻マージ帶が認められる。

河川は中央部に安里方面から安謝に向かうようにななめに流れる小規模な河川が見られ、銘苅原を流れる銘苅川と名護松尾原を流れる大湾川が合流して多和田川となり安謝川に注いでいる。河川水には生活排水が流れ込んでいて、濁りが目立ちドブ川化して水質は良好とは言えないように思える。

調査開始当初の本地域の植生は、概ねチガヤ、ススキ、ヒメアブラスキ、タチアワユキセンダングサなどの茂る草原で、その中にデイゴ、ガジマル、モクマオウ、ホルトノ

---

\*1995年3月現在ではこの丘は土地造成により一部消失している。

キ、アカギ、シマグワなどの高木が散在し、一部はギンネムの灌木林になっている地域もみられた。

河川部の両岸には古い墓が残され、1990年から「銘苅古墓群」として那覇市教育委員会によって発掘作業が行われている。したがって、造成工事が入っていないため、河川部の両岸には一部地域にオオバギ、ホルトノキ、ヤブニッケイ、リュウキュウマツ、アカギ、リュウキュウハゼ、ガジマル、ハマイヌビワなどが密生する残存林があり、また河川部にはススキ、パラグラス、ネピアグラス、ギンネム、ノアサガオなどが密生する環境がみられた。

調査方法は、主に車上からのラインセンサス法で行い、特にルートを定めず地域内（図1）の作業用道路（未舗装）を縦横に時速10km程度のゆっくりとしたスピードで移動しながら、車の中から目撲される鳥類を記録した。車上からの調査は、特に開けた環境においては車をブラインド代わりにすることができ、野鳥が警戒して逃げないため、調査活動をすすめる上で大きな利点がある。鳥体の目撃には8倍の双眼鏡も併用し、目撃された鳥類は可能な限り写真撮影も行った。

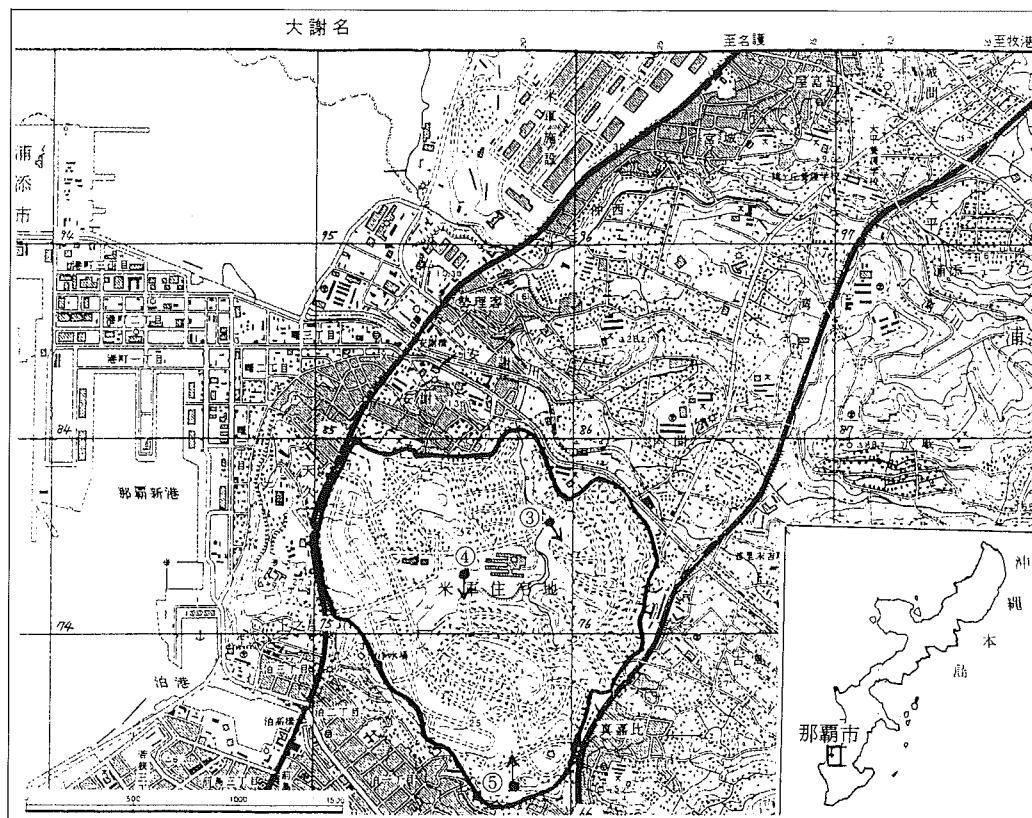


図1 調査地域——調査範囲(数字は写真番号と対応)  
(メッシュ図は、天然記念物調査用メッシュ地図を改変)

主たる調査地域としては、まだ造成工事が進行していない北西部の農耕地地域や小さな河川部、沈砂地を目的に設置された調整池及びその周辺地域などで重点的に行った。

調査概要は表1にまとめて示したように、1989年の1月と1993年の1月から1995年3月までの間に不定期にのべ16回実施した。調査時期は冬場が主体で、夏場や夜間の調査は未実施である。

なお、調査は事前に地域整備公団に対し地域内への立ち入り許可を得て、鳥類調査は実施した。また、調査資料の一部には、筆者らが過去に調査した未発表の記録も活用した。

さらに、本報告をまとめた1995年3月の時点では、区画整理事業の進行とともに調査環境がかなり変容してきており、前述したような調査環境とはなっていないので注意を要する。

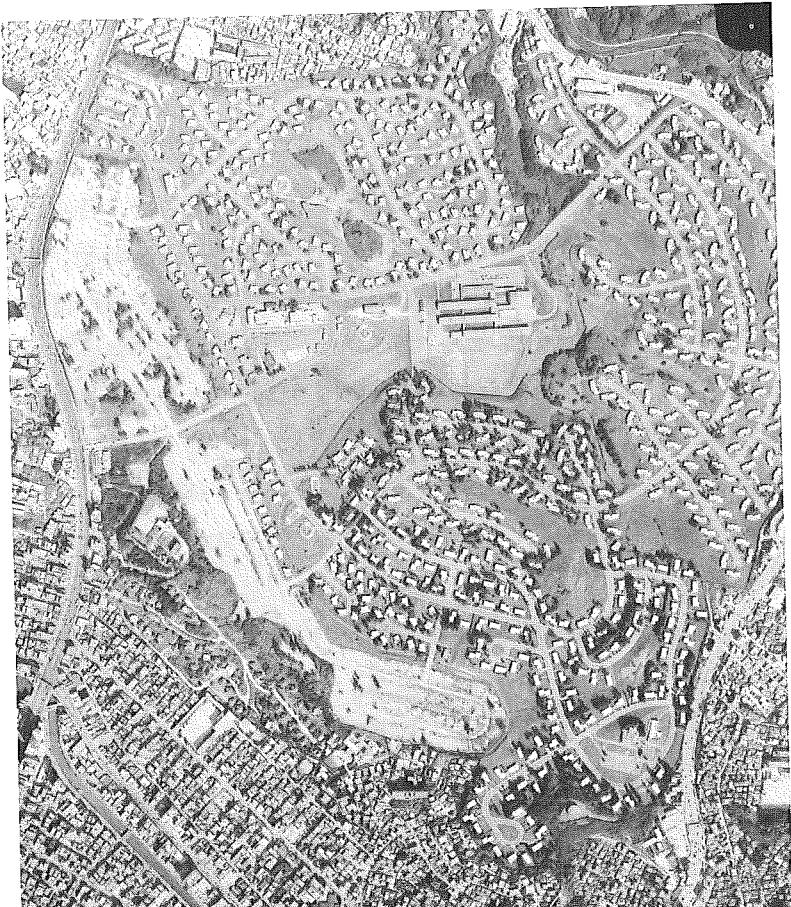


写真1 調査地返還前の航空写真（写真提供、那覇市教育委員会）



写真2 調査地遠望概観  
(写真提供、那覇市広報課)

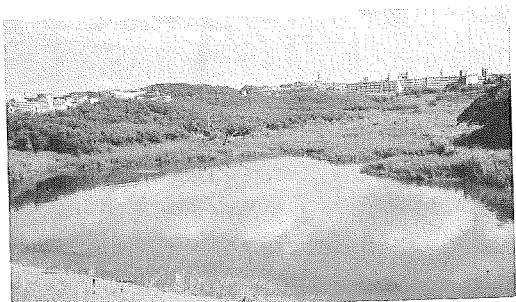


写真3 造成工事前(1)  
(調整地周辺 1993. 10. 20撮影)



写真4 造成工事前(2)  
(調査地南部 1993. 10. 20撮影)



写真5 造成工事後  
(調査地南部 1995. 3. 22撮影)

表1 調査概要

| 調査日         | 天気 | 調査時間        | 調査距離     | 備考             |
|-------------|----|-------------|----------|----------------|
| 1989年 1月23日 | 晴  | ---         | --       | 住宅撤収後放置され、草原化。 |
| 1993年 1月31日 | 晴  | 13:00—15:08 | 4.0km    |                |
| 1993年10月16日 | 晴  | 13:20—15:30 | 3.5km    | 造成工事中          |
| 1993年10月20日 | 晴  | 14:30—16:30 | 4.5km    | "              |
| 1993年10月23日 | 晴  | 8:40—11:30  | 7.5km    | "              |
| 1993年11月 6日 | 晴  | 11:00—12:15 | 5.5km    | "              |
| 1993年11月 9日 | 晴  | 17:00—18:00 | 3.0km    | "              |
| 1993年11月15日 | 晴  | 15:30—16:00 | 3.0km    | "              |
| 1993年11月27日 | 雨  | 15:30—16:00 | 3.0km    | 調査池の水かさが増す。    |
| 1994年12月 5日 | 晴  | 13:25—14:15 | 3.3km    | 造成工事中          |
| 1994年12月20日 | 晴  | 12:40—13:12 | 5.2km    | "              |
| 1994年 2月18日 | 晴  | 10:00—11:30 | 6.6km    | "              |
| 1994年 3月 4日 | 晴  | 12:00—13:00 | 6.6km    | "              |
| 1994年 3月 6日 | 晴  | 12:20—13:20 | 5.6km    | "              |
| 1994年 3月18日 | 曇  | 13:30—15:15 | 4.6km    | "              |
| 1995年 3月22日 | 晴  | 9:30—12:00  | 4.0km    | "              |
| 延べ16日       |    | 延べ1,207分    | 延べ73.9km |                |

### 調査の結果と考察

#### 1、鳥類の出現概要について

今回の調査で記録された鳥類は、表2に示したように1993年10月から1994年3月までに61種確認された。また、未発表の資料や1995年の調査記録を加えると63種であった。

その内訳は留鳥としてセッカ、メジロ、シロガシラなど17種、旅鳥や冬鳥としてコサギ、ダイサギ、コガモ、オナガガモ、カルガモ、アオアシシギ、タゲリ、アカハラ、マヒワなど45種、帰化鳥としてアミハラ1種が確認された。したがって、大部分が渡来して生息する鳥類であることがわかる。

与那城ら（1984）は、沖縄島の留鳥を34種としているので本地域からは、その半数が確認されたことになる。

これまで那覇市における鳥類の報告としては、慶田城（1988）による那覇市の市街地における「定点メッシュ法」によって、8目23科60種の鳥類が記録されている。その中で天久地域からの鳥類記録として、ムナグロ、ムネアカタヒバリなど23種を報告している。また沖縄野鳥研究会（1993）は、オオノスリ、ミヤマホオジロの2種を報告している。したがって、本地域でこれまで記録された鳥類を総合すると巻末の「天久の鳥類目録」に示したように、帰化鳥を含め9目25科65種（亜種を含む）になるものと考えられる。このことから本地域は、定点メッシュ調査で那覇市の全域から観察された鳥類数に匹敵する種数が確認できたことになり、留鳥の生息地或いは渡り鳥の渡来地として重要な地域であったことが示唆される。

その中では天久地域で新たに記録された種として、セイタカシギ、タゲリ、クロハラアジサシ、マガモ、カルガモ、カワセミ、アオアシシギ、ミサゴ、モズ、クサシギ、ゴイサギ、アカハラ、コミニズクなど41種あった。

本地域で確認個体が多かった種は、表2に示したように留鳥ではシロガシラ延べ368個体、アミハラ延べ203個体、バン延べ184個体、ヒヨドリ延べ107個体、キジバト延べ79個体などでこれらの種が優占的に生息している。冬鳥ではコガモ延べ194個体、ダイサギ延べ103個体、オナガガモ延べ74個体、コサギ延べ70個体などと個体数の確認が多かった。なお、夏場や夜間の調査を実施していないので、夏鳥として生息の可能性あるサンコウチョウや夜行性の鳥類であるヤマシギ類の確認はできなかった。しかし、ヤマシギについては採餌痕を調整池近くで確認した。また、本地域は森林地域はごくわずかであるので、森林地域に多くみられているカラス科、シジュウカラ科、サンショウクイ科、キツツキ科などに属する種を欠いていた。

## 2、出現種数について

本地域で一調査日（1回）当たりの調査で確認された種類数は、図2に示したように最も多い日が37種で平均27.1種であった（表2参照）。これは見落としもあるが時期的には冬季で冬鳥の確認が多いことによるものである。したがって、天久地域は市街地でありながら、冬鳥が集中して生息する場所であったことが示唆された。

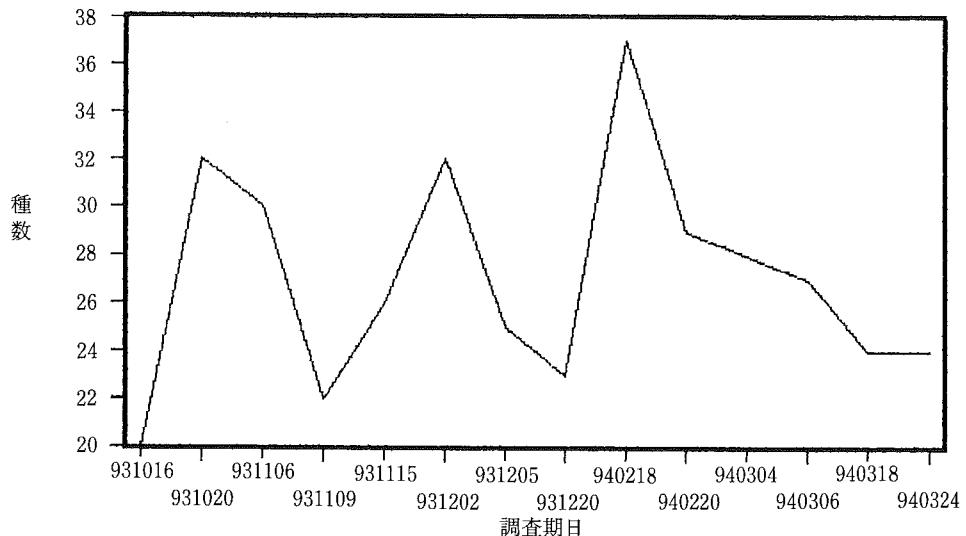


図2 天久地区における種数の変動 (1993. 10~1994. 3)

### 3、確認された保護を必要とされる貴重種

ここで扱う貴重種としては、(1)琉球列島の固有種、(2)天然記念物、(3)環境庁（1991）の日本版レッドデータブックでランクづけされた絶滅危惧種や危急種等をその範囲とした。

天久地域で確認された鳥類の中には、(1)及び(2)の該当種はなく、(3)のランクづけで「危急種」としてミサゴの1種、「希少種」としてセイタカシギ、チュウサギの2種が確認された。したがって、その生息地となっている調整池を中心とする水辺の環境や残存林などは、これらの貴重種の冬季の生息地として利用されていた。しかしながら、これらの種は渡来種であり、その利用は一時的なものである。

### 4、各種鳥類の出現状況について

出現した鳥類の中から主な鳥類をして選択し、以下にその出現状況について述べる。

#### 1) カツツブリ類

カツツブリが93年11月6日に調整池で3羽確認され、その後最高6羽確認されている。本種は県内各地で留鳥としてふつうに生息するので、おそらく本地域でも留鳥として生息しているものと思われる。

#### 2) サギ類

ダイサギ（写真6）、コサギ、アマサギ、チュウサギ（写真7）、アオサギ（写真6）、ササゴイ、ゴイサギ（写真8）の7種が目撃された。

これらのサギ類は県内各地に旅鳥や冬鳥として渡来し、河口干潟や河川、湿地などで生息する。本地域では大部分の種が調整池やその周辺地域の残存林などを中心に生息してい

たが、チュウサギとアマサギは隣接するチガヤ草原や農地などで単独及び小群で採餌する個体も見られた。

個体数ではダイサギが最高26羽、ゴイサギが最高24羽（1994年3月6日）、コサギが14羽（11月9日）と渡来数は多かった。したがって、サギ類にとっても冬季の生息環境として良好であったことが考えられる。

### 3) ガンカモ類

コガモ、マガモ、オナガガモ、ハシビロガモ（写真9）、カルガモ（写真10）、ヒドリガモ、ズズガモ、キンクロハジロ、シマアジ、ホシハジロ、オカヨシガモの11種が調整池で観察された。これらのカモ類は沖縄では冬鳥として渡来する種である。目撃された個体数はコガモが最高31羽（11月6日）、カルガモが最高14羽（11月6日）、オナガガモが6羽（11月9日）であった。これら以外のカモ類の個体数は1から3羽程度であった。これらのカモ類の中でマガモとコガモ、ハシビロガモ、オナガガモなどはダム湖内でしきりに採餌を行っていた。したがって、サギ類と同様ガンカモ類にとっても冬季の生息環境として良好であったことが考えられる。

### 4) アジサシ類

クロハラアジサシ（写真11）の渡来が、1993年10月16日に調整池で6羽確認された。本種は数少ない旅鳥として沖縄を通過するアジサシであり、ダム湖や沼地、水田などで見られる。しかしながら、一度に6羽の例は県内では他に記録がないものと思われる。

### 5) ワシタカ類

サシバ、チョウゲンボウ（写真12）、オオノスリ（写真13）、ツミ、ミサゴの5種が確認された。沖縄においてはツミだけが留鳥で、残りの4種は旅鳥や冬鳥として開けた農耕地や草原、森林部の林縁で生息するワシタカ類である。

この中で特筆すべきことは、オオノスリが確認されていることである。沖縄野鳥研究会（1993）によると、1989年2月9日に1羽観察され、写真撮影されている。筆者らは1989年1月23日に1羽確認した。

本種は主に中国北西部からインド北部地域に分布し、灌木林や草原など生息する。日本ではまれな迷鳥としてあつかわれており、沖縄でも記録は少なく、沖縄本島や宮古などで記録のあるだけのわめてまれな鳥類とされる。しかも市街地の近くでみることはまれで、その意味で草原が回復してきたこの地域は、本種の餌場として最適な環境を提供していたであろうと考えられた。

### 6) クイナ類

バン、シロハラクイナ、ヒクイナ、オオバン（1995.3/22、2羽）の4種が調整池や河川沿いで目撃された。バンは最高20羽以上も目撃され、ヒナも目撃されたのでここで繁

殖活動を行い、ほぼ良好な生息地として周年定着しているものと思われる。

#### 7) チドリ類

調整池でタゲリ（写真14）、草原地域でムナグロの2種が確認された。タゲリは主に冬鳥として渡来するが、数は少ない。本地域では過去にムナグロ（慶田城、1988）の記録があるので、ムナグロは再確認である。今後このような環境が維持されれば他にコチドリ、シロチドリなどが渡来する可能性があろう。

#### 8) シギ類

アオアシシギ、コアオアシシギ、イソシギ、タカブシギ、クサシギ、タシギ、タシギの一種、セイタカシギ（写真15）、ヤマシギの合計9種が調整池及びその周辺で観察された。これらのシギ類は県内ではふつうに旅鳥や冬鳥として渡来するシギ類である。しかし、これだけの種類が一ヵ所に集まって見られることは少ない。したがって、本地域はこれらの種が旅の途中に立ち寄る中継地や越冬地として絶好な場所であったことが考えられる。

#### 9) フクロウ類

コミミズクのみが草原地域で確認された（写真16）。本種は冬鳥として県内に渡来し、草原に生息する。また、曇りの天気には昼間でもよく活動する。

本地域はしばらく住宅地として使用されていたが、返還されて住宅地が取り壊され放置されたままになっていたため、草原の回復が見られた。また造成工事のために一部草刈されていたため、草原が広がっている環境も見られた。本種はそうした場所をこのんで採餌場所として利用し、本地域では3羽の生息を確認した。

#### 10) カワセミ類

カワセミ（写真18）が1993年10月16日に調整池で1羽目撃され、その後11月9日には2羽、12月7日、12月20日にはそれぞれ1羽確認された（表2）。この鳥は通常水のきれいな川にすみ、主として川魚を餌にしている。しかし、都市化が進行していくにつれ川の汚れが目立ち、川から餌となる川魚が姿を消すことと時を同じくしてこの鳥も市街地からいなくなってしまった。こうした意味で自然環境の良否を判断する指標生物として見ることもできる鳥類である。したがって、この鳥が確認できたことは自然が回復してきたひとつの証拠として考えることもできるであろう。

本種が生息する調整池には無数のグッピーが繁殖しており、おそらくこれをエサに定着して生息しているものと思われ、♂♀2羽確認された日もあったので、この地域で繁殖している可能性がある。

#### 11) モズ類

モズが北側農耕地で1羽目撃された。本種は冬鳥として県内各地に渡来するが、数は少ない。観察も1回だけのだったので、おそらく渡り中途の個体が目撃されたと思われる。

## 12) ヒタキ類

セッカ、ノゴマ、ウグイスなど3種が目撃された。セッカは農耕地や牧草地に普通に生息する留鳥で、地域内の草原的な環境のいたる所で目撃された。また、ノゴマは県内では冬鳥として渡来し、林縁や農耕地などでまれに見られる種である。本種はおそらくここで越冬中の個体が目撃されたものと思われる。

## 13) ツグミ類

シロハラ、ツグミ、アカハラの3種が草原や残存林などで目撃された。これらの鳥は県内各地に旅鳥か冬鳥として渡来する。この中でアカハラは1994年2月18日に6羽の群れが観察された。本種は通常小群で渡りを行うことが知られているので、渡り中途の群れが立ち寄ったものと思われる。

## 14) ホオジロ類

アオジのみが河川沿いの林縁で確認された。本地域では過去にミヤマホオジロ（比嘉私信）、ホオアカ（大城亀信私信）の記録があるので、この地域では3種のホオジロ類が記録されたことになる。これらの種は主に冬鳥として県内各地に普通に渡来する冬鳥であり、林縁や灌木林のしげみの中で生息する。おそらく、本地域でも越冬している個体が目撃されたものであろう。

## 15) セキレイ類

キセキレイ、ハクセキレイの2種を造成地内草原や調整池近くで目撃した。天久地域では慶田城（1989）によってムネアカタヒバリが確認されているので、本地域からは3種のセキレイ類が確認されたことになる。これらはいずれも県内では旅鳥か冬鳥で渡来し、草原や水辺、河川近くなどでみられる。

## 16) アトリ類

マヒワのみが確認された。本種は散在する高木であるモクマオウの実をついぱんでいる小さな群れを目撃した。本種は冬鳥として普通に渡来し、県内各地で見られる。本地域では渡り中途の小群が目撃されたものと思われる。

## 17) ハタオリドリ類やカエデチョウ類

スズメとアミハラの2種が確認された。スズメは広域分布種で、アミハラは飼い鳥が野生化（帰化）した種類である。アミハラは地域内の草原に出現するヒメアブラススキの種を採餌している10羽内外の小群がしばしば目撃された。また、1993年11月9日の夕刻近くの4時ころ、道路にたまつたわずかな水たまりに、シロガシラの群れとともに80羽以上の群れで集まり、水浴びすることが目撃された。さらに、調査期間内でのべ203個体も目撃された。このことから本地域に優占的に生息する種のひとつであることが考えられた。

## 調査の課題

調査結果で示したように、市街地に隣接した場所でありながら意外と鳥類の確認が多かった。今後調査を継続していくば環境の変化にともないさらに確認種数は増えることが予想される。したがって、造成工事が完了する時期や工事後まで可能なかぎり調査を継続する必要があるものと考えられる。このことは本地域の工事前や工事中及び工事後における鳥類の出現がどのように変動していくかを明らかにする絶好の機会であり、自然環境の変化にともなう鳥類の生息への影響を知るうえで貴重な資料になりえると思われる。

また、夏場の記録がないので夏場の調査を実施することも必要であり、さらに今後鳥類の出現種数の季節的な変動も把握する必要性があるものと思われる。

## 要約

- 1、1993年10月から1995年3月まで、那覇市の新都心開発地域である天久地区で鳥類調査を実施し、これまでの記録と合わせて9目25科65種（亜種を含む）の鳥類目録を作成した。
- 2、出現した鳥類の内訳は、留鳥が17種、旅鳥及び冬鳥が47種、帰化鳥が1種となり、渡来種が主体であった。
- 3、天久地区は市街地に囲まれているにもかかわらず、集中的に野鳥が生息する地域となっており、冬期の平均の出現種数は27.1であった。また天久地区で新たに記録された種は41種にのぼった。

## 参考文献

- 沖縄野鳥研究会編. 1986. 沖縄県の野鳥. 265pp. 沖縄野鳥研究会.
- 沖縄野鳥研究会編. 1993. 改訂沖縄県の野鳥. 299pp. 沖縄出版.
- 大田昌秀. 1979. これが沖縄戦だ. 琉球新報社.
- 環境庁編. 1991. 日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック—脊椎動物編. 330PP. 野生生物研究センター.
- 慶田城健仁. 1988. 那覇市の鳥類（予報）, R, BIRD(1) 1-10. 沖縄野鳥研究会.
- 那覇市教育委員会編. 1992. 銘苅古墓群（南地区）. 那覇市教育委員会.
- 与那城義春. 1986. 沖縄の野鳥観察. 168pp. 沖縄出版.
- 与那城義春・久貝勝盛・玉城常雄. 1984. 沖縄の鳥類, 沖縄の生物. p267-280. 沖縄生物教育研究会.

図版1 天久地域で確認された鳥類(1)



写真6 ダイサギ(左)・アオサギ(右)



写真7 チュウサギ



写真8 ゴイサギ



写真9 ハシビロガモ



写真10 カルガモ



写真11 クロハラアジサシ

図版2 天久地域で確認された鳥類(2)



写真12 ショウゲンボウ

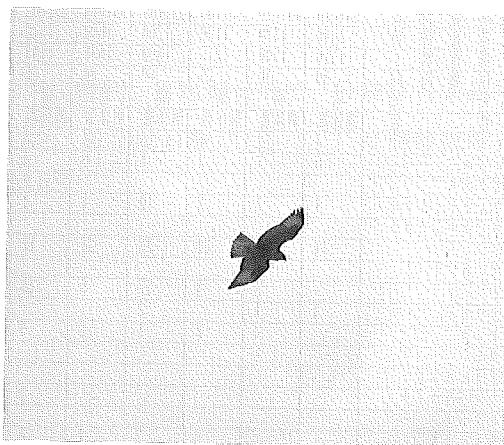


写真13 オオノスリ



写真14 タゲリ



写真15 セイタカシギ



写真16 コミミズク



写真17 カワセミ

表2 天久地区の鳥類調査記録

| 調査期日        | 931016 | 931020 | 931106 | 931109 | 931115 | 931202 | 931205 | 931220 | 940218 | 940220 | 940304 | 940306 | 940318 | 940324 | 合計       |
|-------------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|----------|
| 調査開始        | 1440   | 1430   | 1100   | 1700   | 1600   | 1510   | 1325   | 1240   | 1000   | 1420   | 1200   | 1220   | 1330   | 1030   |          |
| 調査終了        | 1510   | 1500   | 1215   | 1800   | 1630   | 1645   | 1415   | 1312   | 1133   | 1520   | 1300   | 1320   | 1515   | 1200   |          |
| 所要時間        | 30     | 30     | 75     | 60     | 30     | 55     | 50     | 32     | 93     | 60     | 60     | 60     | 105    | 90     | 830      |
| 大気種名        | 晴      | 晴      | 晴      | 晴      | 曇      | 曇      | 晴      | 晴      | 晴      | 晴      | 晴      | 曇      | 快晴     | 晴      |          |
| 個体数         | 個体数    | 個体数    | 個体数    | 個体数    | 個体数    | 個体数    | 個体数    | 個体数    | 個体数    | 個体数    | 個体数    | 個体数    | 個体数    | 個体数    | 個体数計     |
| 1 ヒヨドリ      | 4      | 12     | 8      | 6      | 14     | 8      | 7      | 4      | 4      | 6      | 11     | 4      | 10     | 9      | 107      |
| 2 メジロ       | 6      | 7      | 3      | 1      | 6      | 4      | 3      | 1      | 7      |        | 5      | 3      | 16     | 4      | 66       |
| 3 ウグイス      |        |        |        |        |        | 3      | 3      | 2      | 4      | 1      | 2      | 1      | 4      | 2      | 22       |
| 4 リュウキュウツバメ | 1      | 7      | 2      | 19     | 4      | 4      | 2      | 10     | 14     | 11     | 16     | 10     | 2      | 6      | 108      |
| 5 リュウキュウヨシゴ |        |        |        |        |        |        |        |        |        | 1      |        |        |        |        | 1        |
| 6 バン        | 14     | 12     | 24     | 32     | 27     | 12     | 6      | 9      | 8      | 6      | 9      | 9      | 12     | 4      | 184      |
| 7 ズアカアオバト   |        | 1      |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        | 1      | 2      | 4        |
| 8 キジバト      |        | 8      | 3      | 15     | 9      | 16     | 2      |        | 14     | 2      | 1      | 1      | 2      | 6      | 79       |
| 9 カワセミ      | 1      | 1      |        | 2      |        |        |        | 1      |        |        |        |        |        |        | 5        |
| 10 セッカ      |        | 4      | 3      | 1      | 2      | 3      | 3      | 2      | 3      | 1      | 6      | 4      | 8      | 9      | 49       |
| 11 ツミ       |        | 1      |        |        |        |        | 1      | 1      |        |        |        |        |        |        | 1        |
| 12 イソヒヨドリ   |        |        |        |        |        |        |        |        | 1      | 1      | 1      |        | 2      | 2      | 8        |
| 13 シロハラクイナ  |        |        |        |        |        |        | 1      |        |        |        |        |        | 1      |        | 1        |
| 14 ヒクイナ     |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        | 3      | 2      | 23       |
| 15 カツツブリ    |        |        | 3      | 2      | 1      | 6      | 2      | 1      | 1      | 1      | 1      |        |        |        | 73       |
| 16 スズメ      |        | 10     | 10     |        | 6      | 10     |        |        | 7      | 30     | 0      |        |        |        |          |
| 17 シロガシラ    | 27     | 11     | 4      | 30     | 20     | 31     | 10     | 7      | 7      | 140    | 23     | 4      | 43     | 11     | 368      |
| 18 コサギ      | 6      | 14     | 3      | 11     | 11     | 5      | 2      | 5      | 2      |        | 2      | 9      |        |        | 70       |
| 19 タイサギ     | 2      | 1      | 1      | 5      | 4      | 23     | 2      | 15     | 6      | 1      | 2      | 26     | 8      | 7      | 103      |
| 20 チョウサギ    | 1      | 12     | 4      | 9      | 3      | 3      |        | 2      | 7      |        | 1      | 1      |        |        | 44       |
| 21 アマサギ     |        | 3      | 2      |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        | 5        |
| 22 ジロハラ     |        |        |        |        |        |        | 1      |        | 5      |        | 1      |        | 2      | 3      | 13       |
| 23 ササゴイ     |        | 1      | 1      |        |        |        |        | 2      |        |        | 1      | 1      | 1      | 1      | 10       |
| 24 サシバ      | 1      | 2      | 1      | 1      |        | 1      | 1      | 1      | 1      | 2      | 2      | 1      | 2      |        | 16       |
| 25 ミサゴ      |        |        |        |        | 1      |        |        |        |        |        |        | 1      |        | 3      | 17       |
| 26 イソシギ     | 2      | 1      | 2      | 1      | 1      | 1      | 1      | 1      | 2      |        |        |        | 1      | 2      | 18       |
| 27 クサシギ     | 2      | 4      | 1      |        | 3      | 2      |        |        | 1      | 1      | 1      | 1      | 1      | 1      | 17       |
| 28 タシギ      |        | 1      | 1      |        |        | 4      |        |        |        |        |        |        |        |        | 3        |
| 29 タシギの一種   |        |        |        |        |        | 3      |        |        | 4      |        |        |        |        |        | 4        |
| 30 ムナグロ     |        |        |        |        |        |        |        |        | 3      | 3      |        |        | 1      |        | 21       |
| 31 アオアシシギ   | 3      | 3      | 2      | 3      | 2      |        | 1      |        | 1      | 1      |        | 3      | 15     |        | 25       |
| 32 ハクセキレイ   |        | 2      | 1      |        |        | 2      |        |        | 1      | 1      | 1      | 1      |        |        | 12       |
| 33 キセキレイ    | 1      | 3      | 1      | 1      |        |        | 2      |        |        | 1      | 1      | 1      |        |        | 194      |
| 34 コガモ      | 4      | 8      | 31     | 29     | 13     | 46     | 28     | 8      | 13     |        | 4      | 7      | 3      |        | 1        |
| 35 ジマアジ     |        |        |        |        | 1      |        |        |        |        |        |        |        |        |        | 6        |
| 36 クロハラアシサシ | 6      |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        | 1        |
| 37 セイタカシギ   |        |        |        |        | 1      |        |        |        |        |        |        |        |        | 3      | 3        |
| 38 タカブシギ    | 1      | 1      |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        | 23       |
| 39 マガモ      |        | 2      |        | 2      | 2      | 3      | 6      |        | 2      | 6      |        |        |        |        | 14       |
| 40 チョウウゲンボウ |        | 1      | 2      | 2      | 1      | 1      |        |        |        |        |        |        |        |        | 1        |
| 41 モズ       |        | 1      |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        | 1        |
| 42 オナガガモ    |        |        | 4      |        | 8      | 16     | 15     | 1      | 13     | 6      | 4      | 5      |        | 2      | 74       |
| 43 コアオアシシギ  | 2      | 2      |        |        |        | 1      | 1      |        |        |        |        |        |        |        | 1        |
| 44 ホシハジロ    |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        | 49       |
| 45 カルガモ     |        |        | 14     | 13     | 4      | 3      |        | 3      | 6      | 5      | 1      |        |        |        | 1        |
| 46 タゲリ      |        |        |        |        | 1      |        |        |        |        |        |        |        |        | 20     | 6        |
| 47 ツバメ      | 2      | 1      |        |        |        |        | 3      | 1      |        |        |        |        |        |        | 4        |
| 48 スズガモ     |        |        |        |        |        |        | 2      | 13     | 8      | 16     | 6      | 1      | 24     | 4      | 94       |
| 49 ゴイサギ     |        | 12     | 4      |        | 2      | 13     |        |        |        |        |        | 2      | 2      |        | 2        |
| 50 ヒドリガモ    |        |        |        | 1      |        | 1      |        |        |        |        |        |        |        |        | 20       |
| 51 アオサギ     |        |        | 2      |        |        | 4      | 4      | 1      | 3      | 3      |        | 1      | 1      |        | 3        |
| 52 アオジ      |        |        |        |        |        |        |        | 1      |        |        |        |        | 2      |        | 9        |
| 53 キンクロハジロ  |        |        |        |        |        | 3      | 1      |        | 3      |        |        |        |        |        | 2        |
| 54 オカヨシガモ   |        |        |        |        |        |        |        |        |        | 2      |        |        |        |        | 11       |
| 55 アカハラ     |        |        |        |        |        |        |        |        |        | 6      | 5      |        |        |        | 11       |
| 56 ハシビロガモ   |        |        | 2      |        |        |        | 4      |        | 2      | 3      |        |        | 1      |        | 3        |
| 57 ツグミ      |        |        | 3      |        |        |        |        |        | 2      |        |        |        |        |        | 3        |
| 58 ムクドリ     |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        |        | 1        |
| 59 ノゴマ      |        |        |        |        |        |        |        |        | 1      |        |        |        |        |        | 3        |
| 60 コミミズク    |        |        |        |        |        |        |        |        | 3      |        |        |        |        |        | 3        |
| 61 アミハラ     | 7      | 13     | 36     | 80     | 20     | 6      |        | 10     | 12     |        | 1      | 1      | 7      | 10     | 203      |
| 種数合計        | 20     | 32     | 30     | 22     | 26     | 32     | 25     | 23     | 37     | 29     | 28     | 27     | 24     | 24     | 27.0714※ |
| 個体数合計       | 93     | 162    | 178    | 266    | 170    | 240    | 116    | 104    | 177    | 250    | 126    | 105    | 168    | 99     | 2254     |

※は平均値。

## 那覇市天久の鳥類目録

Check-list of Birds in Ameke area, Naha-City.

(凡例) 調査: 1989年1月から1995年3月

記録の順序: 記録の順序は和名、学名、種別、目撃期日等で、分類は日本鳥学会(1974)を基本にした。数字は目撃期日、( )は個体数等

### カツツブリ目 PODICIPEDIFORMES

#### カツツブリ科 PODICIPIITIDAE

1. カツツブリ *Podiceps ruficollis*

留鳥: 調整池で観察。数は少ない。

### コウノトリ目 CICONIIFORMES

#### サギ科 ARDEIDAE

2. アマサギ *Bubulcus ibis*

旅鳥: チガヤ草原で観察。数は多い。調整池でも休息する個体を目撃した。

3. チュウサギ *Egretta intermedia*

旅鳥: 調整池及び草原、農地等で観察。

4. コサギ *Egretta garzetta*

旅鳥: 調整池で観察。

5. アオサギ *Adrea cinerea*

冬鳥: 調整池で観察。

6. ササゴイ *Ardeola striatus*

冬鳥: 調整池で観察。

7. ゴイサギ *Nycticorax nycticorax*

冬鳥: 調整池で観察。

8. リュウキュウヨシゴイ *Ixobrychus cinnamomeus*

留鳥: 調整池で観察。

### ガンカモ目 ANSERIFORMES

#### ガンカモ科 ANATIDAE

9. コガモ *Anas crecca*

冬鳥: 調整池で採餌する行動を観察。

10. シマアジ *Anas querquedula*

冬鳥: 調整池で観察。

93/11/15(1)

11. マガモ *Anas platyrhynchos*

冬鳥：調整池で観察。

12. ヒドリガモ *Anas penelope*

冬鳥：調整池で観察。

13. オナガガモ *Anas acuta*

冬鳥：調整池で採餌する行動を観察。

14. ハシビロガモ *Anas clypeata*

冬鳥：調整池で採餌する行動を観察。

93/11/6(2)

15. オカヨシガモ *Anas strepera*

冬鳥：調整池で雄雌つがいで採餌する行動を観察。

16. カルガモ *Anas poecilorhyncha*

冬鳥：調整池で採餌する行動を観察。

17. キンクロハジロ *Aythya fuligula*

冬鳥：慶田城（1988）

93/11/27(2)

18. スズガモ *Aythya marila*

冬鳥：調整池で観察。

19. ホシハジロ *Aythya ferina*

93/12/2(1)

#### ワシタカ目 FALCONIFORMES

##### ワシタカ科 ACCIPITRIDAE

20. ミサゴ *Pandion haliaetus*

冬鳥：調整池上空でソアリング行動を観察。通過。

93/11/15(1)

21. オオノスリ *Buteo hemilasis*

迷鳥：草地の上空を飛び回り、ホバリングすることもしばしば観察された。

また、北西部の丘陵地にある岩にとまったり、散在するモクマオウ、デイゴ等の高木にとまり、休息することもあった。非常にまれ。

89/1/23(1),

89/2/9(1)（沖縄野鳥研究会, 1993）

22. ツミ *Accipiter gularis*

留鳥：調整池周辺の林の上空で観察。

23. サシバ *Buteastur indicus*

旅鳥及び冬鳥：調整池周辺の林や草地の上空で観察。

ハヤブ科 FALCONIDAE

24. チョウゲンボウ *Falco tinnunculus*

冬鳥：調整池周辺の林や草地の上空で観察。

ツル目 GRUIFORMES

クイナ科 RALLIDAE

25. バン *Gallinula chloropus*

留鳥：調整池で観察。ヒナも見られたので繁殖している。

26. オオバン *Fulica atra*

冬鳥：調整池でみられた。

27. シロハラクイナ *Amaurornis phoenicurus*

留鳥：調整池や河川沿いで観察。

93/12/2(1), 94/2/18(1)

28. ヒクイナ *Porzana fusca*

留鳥：調整池近くの草地でみられた。

チドリ目 CHARADRIIFORMES

チドリ科 CHARADRIIDAE

29. ムナグロ *Pluvialis dominica*

旅鳥及び冬鳥：草原で目撃。

慶田城 (1988)

94/2/18(4)

30. タゲリ *Vanellus vanellus*

冬鳥：調整池で観察。

93/11/15(1)

シギ科 SCOLOPACIDAE

31. タカブシギ *Tringa glareola*

旅鳥及び冬鳥：調整池で観察。

32. クサシギ *Tringa ochropus*

旅鳥及び冬鳥：調整池で観察。

33. アオアシシギ *Tringa nebularia*

旅鳥及び冬鳥：調整池で観察。

34. コアオアシシギ *Tringa stagnatilis*

旅鳥及び冬鳥：調整池で観察。

35. イソシギ *Tringa hypoleucos*

旅鳥及び冬鳥：調整池で観察。

36. タンギ *Gallinago gallinago*

旅鳥及び冬鳥：調整池で観察。

37. タンギの一種 *Gallinago sp.*

旅鳥及び冬鳥：調整池で観察。チュウジシギ *Gallinago megala* と思われる。

セイタカシギ科 RECURVIROSTIDAE

38. セイタカシギ *Himantopus himantopus*

旅鳥及び冬鳥：調整池で観察。

93/11/14(1), 11/15(1)

カモメ科 LARIDAE

39. クロハラアジサシ *Sterna hybrida*

旅鳥：調整池で観察。

93/10/16(6)

ハト目 COLUMBIFORMES

ハト科 COLUMBIDAE

40. キジバト *Streptopelia orientalis*

留鳥：農地やガジマル、モクマオウなどの高木などで観察。

41. ズアカアオバト *Sphenurus formosae permagnus*

留鳥：草地が造成された平地で休息する個体を観察。

93/10/20(1)

フクロウ目 STRIGIFORMES

フクロウ科 STRIGIDAE

42. コミミズク *Asio flammeus*

冬鳥：草原で観察。

94/2/18(3)

ブッポウソウ目 CORACIIFORMES

カワセミ科 ALCEDINIDAE

43. カワセミ *Alcedo atthis*

留鳥：調整池で観察。

93/10/16(1), 10/20(1), 11/9(2), 11/27(1)

スズメ目 PASSERIFORMES

ツバメ科 HIRUNDINIDAE

44. ツバメ *Hirundo rustica gutturalis*

旅鳥：調整池や草地などの上空で観察。

45. リュウキュウツバメ *Hirundo tahitica namiyei*

留鳥：調整池や草地などの上空で見られた。

セキレイ科 MOTACILLIDAE

46. キセキレイ *Motacilla cinerea robusta*

旅鳥及び冬鳥：調整池で見られた。

47. ハクセキレイ *Motacilla alba lugens*

旅鳥及び冬鳥：調整池で見られた。

48. ムネアカタヒバリ *Anthus cervinus*

旅鳥及び冬鳥：まれ

慶田城（1988）

ヒヨドリ科 PYCNONOTIDAE

49. ヒヨドリ *Hypsipetes amaurotis*

留鳥：ガジマル、モクマオウなどの高木などで見られた。

50. シロガシラ *Pycnonotus sinensis*

留鳥：草地やガジマル、モクマオウなどの高木などで見られた。

モズ科 LANIIDAE

51. モズ *Lanius bucephalus*

冬鳥：農耕地や草地で見られた。

93/10/20(1)

ヒタキ科 MUSCICA PIDAE

ツグミ亜科 TURDINAE

52. ノゴマ *Erithacus calliope*

冬鳥：農耕地や草地で見られた。

94/2/18(1)

53. シロハラ *Turdus pallidus*

冬鳥：アコウやモクマオウの高木。

54. アカハラ

冬鳥：アコウやデイゴの高木で群れる。

94/2/18(15)

55. ツグミ *Turdus naumanni*

冬鳥：道路の水たまりや草地で集まっている群れの観察。

89/1/23(30), 94/2/18(2)

ウグイス亜科 SYLVIINAE

56. リュウキュウウグイス *Cettia diphone riukiuensis*

留鳥：草地で見られた。

57. セッカ *Cisticola juncidis*

留鳥：草地で見られた。

メジロ科 ZOSTEROPIDAE

58. リュキュウメジロ *Zosterops japonica loochooensis*

留鳥：小さな群れがホルトノキやモクマオウ、ガジマルなどの高木やギンネム林で見られた。

ハタオリドリ科 PLOCEIDAE

59. スズメ *Passer montanus*

留鳥：農地近くのモクマオウ、ガジマルなどの高木で見られた。

アトリ科 FRINGILLIDAE

60. マヒワ *Carduelis spinus*

冬鳥：モクマオウの高木で採餌。

93/1/31(8)

ホオジロ科 EMBERIZIDAE

61. ミヤマホオジロ *Emberiza elegans*

冬鳥：草地

88/2/12：沖縄野鳥研究会（1993）

62. アオジ *Emberiza spodocaephala personata*

冬鳥：草地で見られた。

93/1/31(1)

63. ホウアカ *Emberiza fucata*

冬鳥：草地で見られた。（大城亀信私信）

ムクドリ科 STURNIDAE

64. ムクドリ *Sturnus cineraceus*

冬鳥：モクマオウやガジマルなどの高木で見られた。

93/11/6(3)

カエデチヨウ科 ESTRILDIDAE

65. アミハラ *Lonchura punctulata*

留鳥：草地で見られた。飼い鳥の野生化。

---

備考：留鳥や冬鳥などの種別は、琉球新報社（1983）と沖縄野鳥研究会（1986, 1993）  
にしたがった。

## 慶良間諸島の鳥類

嵩原 建二\*・池間 幸男\*\*・兼城 克男\*\*\*

Birds of the Kerama Islands, the Ryukyu Archipelago.

Kenji TAKEHARA\*, Yukio IKEMA\*\* and Katsuo KANESHIRO\*\*\*.

**Abstract :** The Kerama Islands are located about 40km, southwest of Naha. Naha is located on the Southern part of Okinawa-jima, the Ryukyu Archipelago. The Kerama Islands consist of Tokashiki Island, Zamami Island, Aka Island, Geruma Island and several uninhabited islands.

The authors examined birds on the Kerama Islands from 1986 to 1994 and recorded 102 species. Among the researched birds, there were 23 resident birds. The species *Scolopax mira*, *Ciconia nigra*, and *Branta bernicla orientalis* are worth special mention.

On Tokashiki Island and Aka Island, the authors recognized the *Scolopax mira*, an endemic species of the Ryukyu Archipelago, which was designated by Okinawa Prefectural Government as a natural monument. Tokashiki Island and Aka Island are new habitats for the *Scolopax mira*.

### はじめに

沖縄島南部の那覇市から南西約40km 洋上に慶良間諸島がある(図1)。地理的位置は東経 $127^{\circ}13'$ ~ $127^{\circ}29'$ 、北緯 $26^{\circ}65'$ ~ $26^{\circ}16'$ の間に位置し、ここには無人島を含む大小20余にもなる島々が散在している。慶良間海峡を挟んで東側は渡嘉敷村に属し、西側は座間味村に属している。大部分の島が山地的な地形で平地が少なく、農地に恵まれず、海岸線は沈降したリラス式海岸をなしている。特に座間味島の高月山(標高131m)からの眺望は他に比類のない風光明媚な景観を有し、大部分が国定海岸公園としての保全が図られて

\* 沖縄県立博物館、\*\* 沖縄野鳥研究会、\*\*\* 沖縄野鳥の会

\*Okinawa Prefectural Museum, \*\*Okinawa Bird Study Society, \*\*\*Wild Bird Society of Okinawa.

いる。

慶良間諸島における鳥類の記録は、古くは KURODA (1925) や岡田ら (1959) などの研究があり、また近年では池原 (1974) や与那城 (1976)、田中 (1987) などによって断片的な報告が見られる。しかしながら、これまでの確認種数は 50 数種と少なく、鳥相についても詳細な検討はなされていないのが現状である。

筆者らは慶良間諸島の鳥類相について明らかにするため、1986 年から数回にわたり慶良間諸島の島々を訪れる機会に恵まれ、また筆者の一人である兼城は 1986 年から 1991 年までの 6 年間渡嘉敷島に居住し、渡嘉敷島における鳥類についての資料収集にあたった。

さらに座間味村屋嘉比島における鳥類調査は、県設屋嘉比島鳥獣保護区（全域特別地区）の存続期間更新に伴い、鳥獣類の生息現状を把握する目的で行われた沖縄県環境保健部自然保護課による動物調査の一環として実施されたものである。

これらの調査の結果、慶良間諸島の鳥類について若干の知見を得たので報告する。

本報告をまとめに際し、調査に便宜を図っていただいた沖縄県環境保健部自然保護課、沖縄県教育庁文化課、座間味村振興課及び座間味村教育委員会に厚く御礼申しあげる。また座間味村の宮里哲雄氏、宮平秀幸氏、宮平善孝氏、宮平優氏、宮城武氏、金城英幸氏の各氏には調査に協力していただき、また貴重な助言をいただいたので深甚なる感謝を申しあげる。さらに貴重な鳥類情報や写真を提供して下さった沖縄野鳥研究会の山城博明氏と比嘉邦昭氏にも感謝申し上げる。

### 調査地概要および調査方法

慶良間諸島はほとんどの島が起伏に富む山地地形をなし、山地が海岸までせり出しているため、海岸側は急峻な傾斜面となっている。このため平地が少なく、農耕地も少ない。

小西 (1965) によれば、慶良間諸島の地質は中生代の国頭累帯に属し、結晶片岩類、千枚岩、砂岩などを基盤にしているとされる。

宮城 (1974) によると、慶良間諸島に自生する植物は帰化植物を含め、シダ植物以上の高等植物が 584 種記録されている。そして、植物相は全体的に同じ地質を持つ沖縄島北部の国頭山地とよく似ているとされる。また、植生については新納ら (1974) によると、山地や丘陵地の常緑広葉樹林地域にリュウキュウアオキースタジイ群集やスダシイーリュキュウマツ混交林などの二次林、タブークロツブ群落などが識別されている。また代償植生としてのリュウキュウマツ林等の植生を識別している。

調査の概要については、表 1 に示したように、調査開始は 1986 年 4 月にさかのぼり、調査日は 1994 年 12 月まで期間に現地調査を延べ 15 日行った。

調査方法は集落や周辺農耕地、海岸などをゆっくり歩き、目撃及びさえずりで確認された鳥類を記録するようにした。また、各島にある林道や農道などを車で10km程度の速さで走り、目撃される鳥類を記録した。なお座間味島と渡嘉敷島の林道では車上ロードセンサス法で夜間調査を実施した。

しかしながら、各島ともその調査時期や調査方法などが若干異なる。また、調査環境も島により異なるので、以下島ごとに調査地の概要としてまとめた。

## 1. 渡嘉敷島

渡嘉敷島は慶良間諸島最大の島で、面積15.29km<sup>2</sup>、島の周囲は28.33km、標高227mである。この島は渡嘉敷村に属し、ここに村役場が置かれ、人口も668人と渡嘉敷村の中心となっている（写真1）。

渡嘉敷村にはこの島以外に前島、儀志布島、黒島、慶伊瀬島（神山島を中心とするチビシ）など大小十余りの無人島が所在する。

渡嘉敷島は地形的には山地部が標高200m内外の丘陵が連なり、山地部が海に落ち込むように海岸に迫り出しているため、海岸の斜面は急峻で、平地部は少ない。したがって、海岸低地に沖積低地や砂丘がわずかに見られ、島中央に渡嘉敷、島南側に阿波連、島中央西側に渡嘉志久などの集落がある。

佐久本（1984）によると、山地部や丘陵部のスダシイ群落は、西岳や前岳の山頂部に残存し、島の大部分はリュウキュウマツ林で占められている。また、風衝地の植生がよく発達し、海岸沿いの斜面や崖にリュウキュウチク群落、オキナワハイネズ群落等が識別されている。海浜ではツキイグ群落、アダン群落などが発達するとしている。

調査は渡嘉敷の集落及びその後背地の農耕地、水田と国立青年の家周辺、山地部では山稜部を走る林道などで実施し、現地調査は1986年4月と9月の2回行った。

調査方法は車で林道や農道を10km/h内外の速度走り、目撃及び鳴き声等で確認した鳥類を記録し、また渡嘉敷の集落や海岸周辺、渡嘉敷川、ダムなどを歩き回り、その周辺地域で目撃される鳥類を記録した。

なお本島では1986年9月に大谷林道（調査距離4.0km）で夜間車上ロードセンサス法による鳥類調査を実施した（図2）。

## 2. 座間味島

座間味村に属し、慶良間諸島では渡嘉敷島に次いで大きな島で、面積6.66km<sup>2</sup>、島の周囲は24.28km、標高160.7mである。座間味の集落内に座間味村役場が置かれ、人口も548人と座間味村の中心をなしている（写真2）。

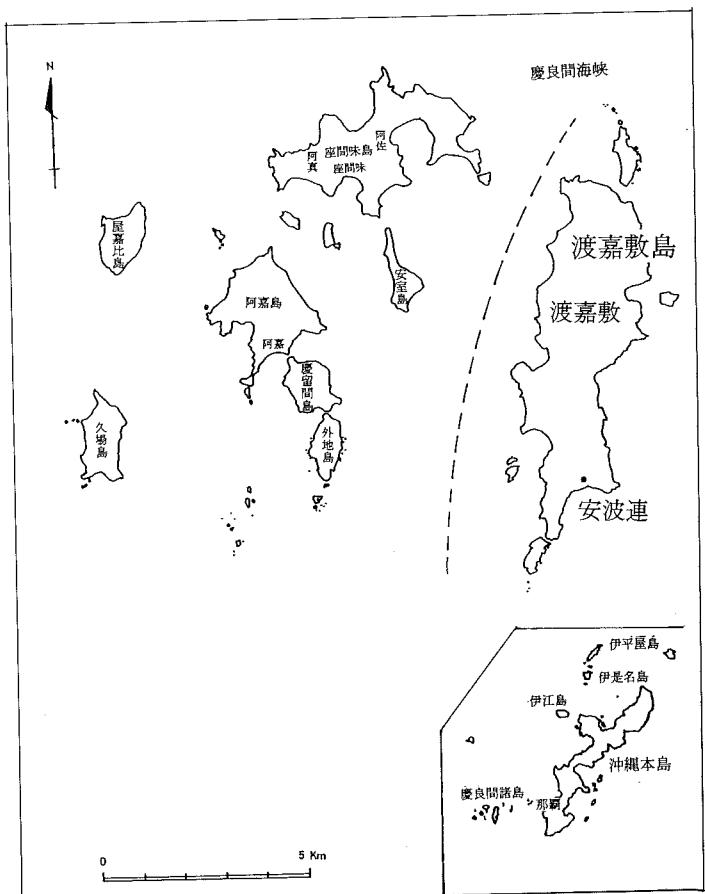


図1 慶良間諸島位置図

地形的には大城（1983）によると、全般に山勝で、大きく南西側ブロックと北東側ブロックに分けられ、島の周囲の海岸線は複雑に屈曲し、北側海岸は山地が海岸に突っ込み、急峻な地形をなしているが、南海岸側は緩傾斜で沖積低地が発達していて、集落地となっている。

地質的には大城（1983）によると、岩相的には下位から片状砂岩・片状砂岩・千枚岩互層、それに片状砂岩勝ち千枚岩互層からなり、それらは各不整合をなしている。

植生については、佐久本（1984）によると、リュウキュウアオキ・イタジイ群集は残存林的にしか見られず、大部分がリュウキュウマツ林を主体とする二次林である。

農耕地は集落周辺にわずかみられるが、一部海岸低地の砂丘や沖積地に放棄した農地の跡が散在する。

調査時期は1991年1月、1992年1月、1994年7月、11月、12月の延べ5回実施した。調査方法は車で番所林道や久岳林道を10km/h内外の速度走り、目撃及び鳴き声等で確認した鳥類を記録し、また座間味・安佐などの集落やその後背地の農耕地、海岸周辺を

歩き回り、周辺地域で目撃される鳥類を記録した（図3）。

なお本島では番所林道（調査距離4km）で車上ロードセンサス法により夜間調査も同時に実施した。

### 3. 阿嘉島

阿嘉島は面積3.82km<sup>2</sup>、島の周囲は12.32km、標高187mの島である。人口は272人で、集落は阿嘉だけである。

植生は佐久本（1984）によると、他の島と同様に大部分がリュウキュウマツ林で覆われ、山頂部にタブノキ林が発達しているとしている。

調査は1991年1月及び1992年1月の2度にわたりは実施した。調査地は集落周辺及び集落北側の湿地で行った。

### 4. 慶留間島及び外地島

慶留間島は面積1.15km<sup>2</sup>、島の周囲は4.84km、標高157.4mで、人口は75人を擁し、隣接する外地島とは橋で結ばれている。外地島は面積0.83km<sup>2</sup>の小さな島であるが、ここに慶良間空港が開設され、那覇から1日3便のエアコミューター機（7人乗り）が就航している。

外地島は地形的には海岸から標高約30mの高さにある段丘面を平坦にならして平地を広げ、ここに滑走路が建設されている。

植生は両島ともほとんどが他の島と同様に山地部はリュウキュウマツ林を主体とした二次林で、海岸部風衝地にトゲイヌツゲ群落及びリュウキュウチク林やタブノキが混生するイタジイ林が発達する。

調査は集落周辺や空港周辺などにおいて、1991年1月と1994年12月の2回実施した。

### 5. 屋嘉比島

屋嘉比島は慶良間諸島の南西のへりに位置する島で、面積が1.26km<sup>2</sup>、島の周囲は5.29km、標高214.4mと小さな無人島である（写真3）。

この島ではかつて銅山が開かれ、昭和13年頃には1,300人が移り住むほどの活気があったとされるが、第二次大戦後は無人島と化し、現在では年1回頂上の御嶽へ御参りすることや釣り人がたまに訪れる程度だと言われる（垣花、1978）。島に上陸するとまず目立つのが、この銅山から投棄された残しがむき出しのガラ場となっていて、草木も繁茂せずに崖くずれのような景観を呈していることである。

沖縄県環境保健部編（1993）の「環境保健行政の概要」（平成5年度版）によると、屋

嘉比島は昭和49年に全域が「鳥獣保護区特別地区」として設定されおり、ケラマジカや野鳥等の保護及び繁殖地の保全が図られている。また、本地域は1972年（昭和47年）5月15日に国の天然記念物「ケラマジカおよびその生息地」として指定をうけている地域であり、ケラマジカとその生息地である島全体が保護されている（沖縄県教育委員会、1993）。

鳥類調査を実施した地域は、図4に示したように屋嘉比島南東海岸の砂浜から島の南東部斜面を望む地域と洗礫場跡に沿うように森林内の山道を500m程度登った地域である。その調査環境としては、海岸砂浜と海岸部にハマゴウ、アダン、リュウゼツラン、テリハクサトベラなどが群生する地域と、島中央から海岸に向かって急傾斜を持つ斜面や谷部にオオバギ、ヤブニッケイ、ガジマル、クロツグ、イトスキ、リュウキュウマツなどが混生する地域の2つの環境を含んでいる地域であった。

鳥類調査は1994年7月26日と11月21日の夏季と冬季の2度にわたり島に上陸して実施した。調査方法は図4に示したように、海岸線と山道に各1本（距離約0.5~1km）の調査ラインを設置して、ラインの片側50m（両側100m）の範囲で目撃及び鳴き声等で確認される鳥類を記録した。また海岸部に2ヶ所の定点調査地を置き、30分間の定点調査によって目撃及び鳴き声等で確認される鳥類を記録した。

表1 鳥類調査概要

| 調査期日       | 調査時間        | 調査場所    | 天気 | 調査方法        | 備考 |
|------------|-------------|---------|----|-------------|----|
| 1986/ 4/29 | --終日--      | 渡嘉敷島    |    |             |    |
| 1986/ 9/27 | -- "        | 渡嘉敷島    |    |             |    |
| 1986/ 9/28 | -- "        | 渡嘉敷島    |    |             |    |
| 1986/ 9/29 | -- "        | 渡嘉敷島    |    |             |    |
| 1991/ 1/ 9 | 8:00~10:30  | 座間味島    | 晴  | 林道車上ロードセンサス |    |
| 1991/ 1/ 9 | 17:30~18:30 | 阿嘉島     | 晴  |             |    |
| 1991/ 1/10 | 9:30~ 9:30  | 座間味島    | 晴  |             |    |
| 1991/ 1/10 | 12:00~16:40 | 慶留間島    | 晴  |             |    |
| 1991/ 1/11 | 6:30~ 7:30  | 座間味島    | 晴  |             |    |
| 1992/ 1/21 | 13:40~15:00 | 慶留間・外地島 | 曇  |             |    |
| 1992/ 1/21 | 17:00~19:00 | 阿嘉島     | 曇  |             |    |
| 1992/ 1/21 | 22:00~23:00 | 座間味島    | 曇  | 夜間車上ロードセンサス |    |
| 1992/ 1/22 | 8:00~12:00  | 座間味島    | 晴  | 林道車上ロードセンサス |    |
| 1994/ 7/26 | 20:00~22:00 | 座間味島    | 晴  | 夜間車上ロードセンサス |    |
| 1994/ 7/26 | 9:00~11:00  | 屋嘉比島    | 晴  |             |    |
| 1994/11/21 | 14:30~17:00 | 屋嘉比島    | 晴  |             |    |
| 1994/11/21 | 20:00~21:00 | 座間味島    | 晴  | 夜間車上ロードセンサス |    |
| 1994/12/ 2 | --終日--      | "       | 晴  |             |    |
| 1994/12/ 3 | -- "        | "       | 曇  | 車上ロードセンサス   |    |
| 1994/12/ 4 | -- "        | "       | 曇  | "           |    |
| 1994/12/ 5 | -- "        | "       | 曇  | "           |    |



図2 渡嘉敷島における調査ライン

○：ラインの始まり ▲：ラインの終り ●：アミヤマシギの確認地点  
(国土地理院発行 1/25000 地形図を改変)

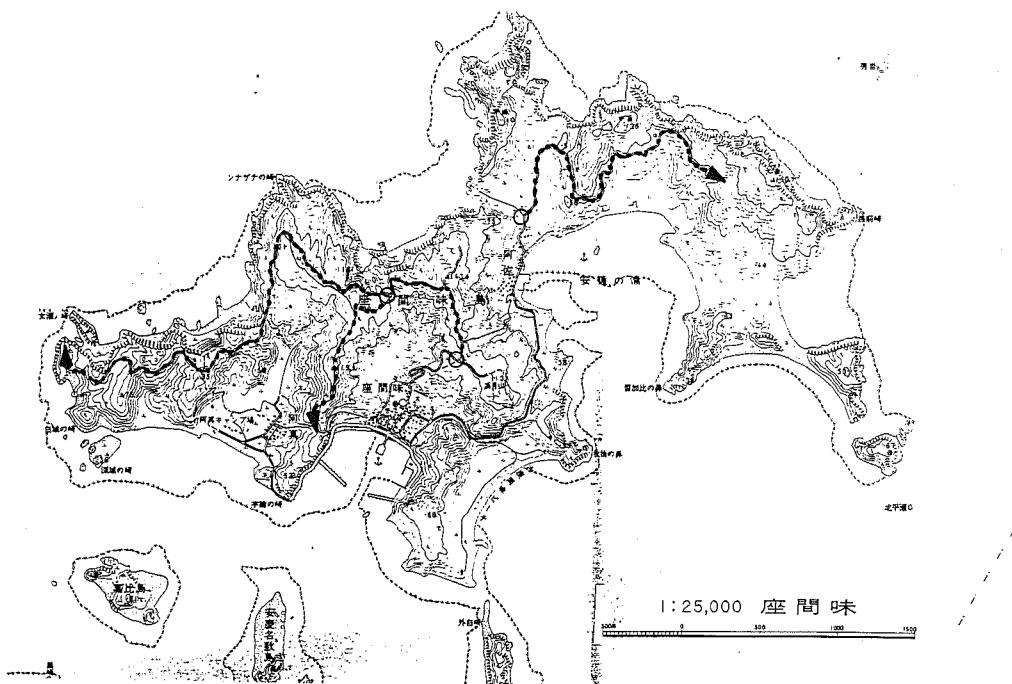


図3 座間味島における調査ライン

○：ラインの始まり ▲：ラインの終り  
(国土地理院発行 1/25000 地形図を改変)

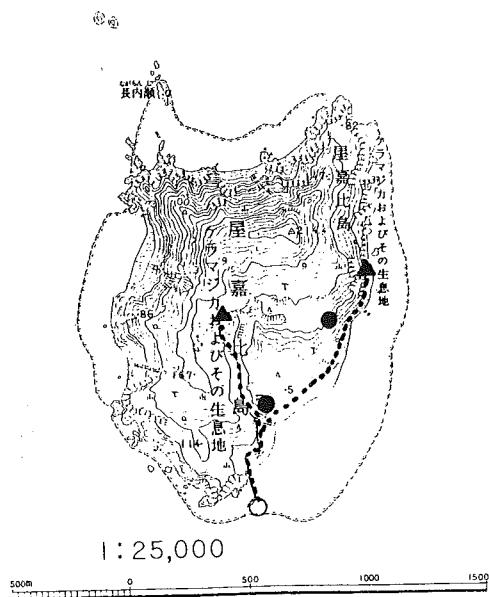


図4 屋嘉比島における調査ライン

○：ラインの始まり ▲：ラインの終わり ●：定点調査地  
(国土地理院発行 1/25000 地形図を改変)

図版1 調査地環境

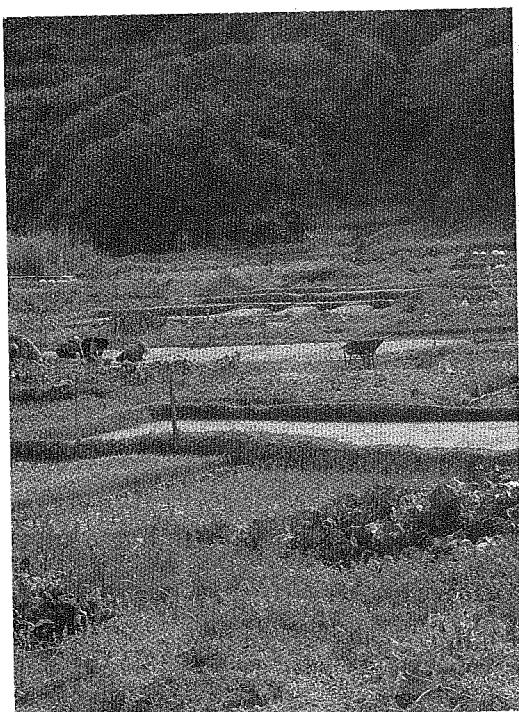


写真1 渡嘉敷島  
(撮影、1986年)

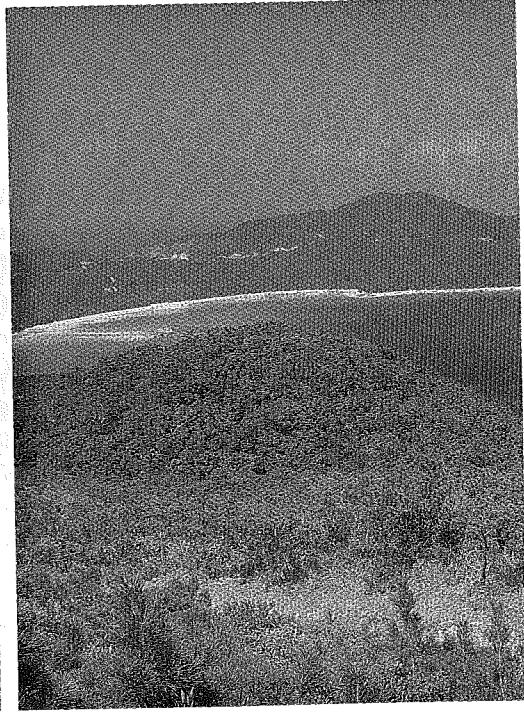


写真2 座間味島



写真3 屋嘉比島

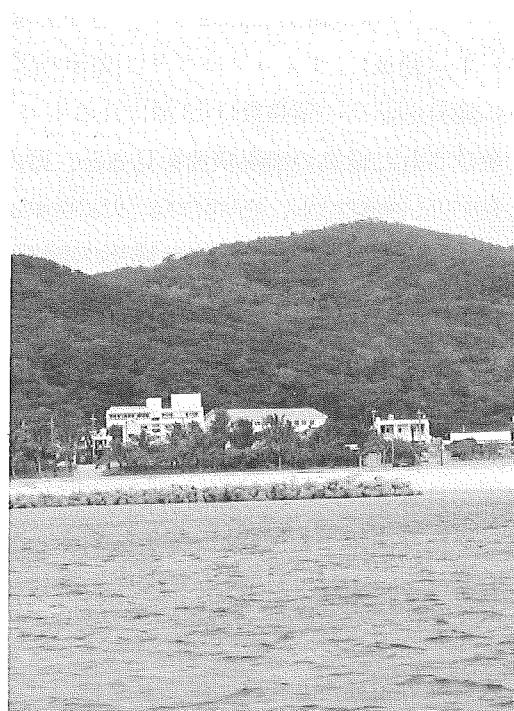


写真4 阿嘉島

## 調査結果及び考察

### 1. 慶良間諸島における鳥類の確認

鳥類調査の結果、慶良間諸島から約80種の鳥類を確認し、これにこれまで記録のある種を加えて巻末の「慶良間諸島の鳥類目録」を暫定的に作成した。その目録に示したとおり、慶良間諸島から14目32科（3亜科を含む）102種（亜種含む）の鳥類が記録されたことになる。この中では、今度の調査によって確認された55種が新たに慶良間諸島の鳥類記録として加わった。

鳥類目録の内訳についてはその種別が困難な種もあるが、留鳥として扱った種が23種（絶滅種含む）、県内では留鳥とされるが慶良間諸島にまれな冬鳥として渡ってくる種を含め、渡り鳥が79種（夏鳥8、旅鳥12、冬鳥52、迷鳥7）となり、渡り鳥が主体の鳥類相である。

以下留鳥と渡り鳥の出現状況について概説的に述べる。

#### 1) 留鳥の出現状況について

今度の調査においては、慶良間諸島からカワセミ、カイツブリ、シジュウカラ、カラス

バトなど19種の留鳥を記録した。この記録にこれまで報告されているリュウキュウカラスバト（絶滅）、オオコノハズク、アオバズク、アカヒゲの記録を加えると、前述したように慶良間諸島の留鳥数は23種になるものと思われる。

確認された留鳥の出現状況を見ると、県内でごく普通種であり、広域分布種のメジロ、ヒヨドリ、キジバト、ウグイス、リュウキュウツバメ、セッカ、スズメ、ハシブトガラスなどは島内の集落とその周辺地域及び農耕地や森林地域といったところで目撃された。また水田や河川、河口部などの水辺の環境ではリュウキュウヨシゴイ、カワセミなどが目撃されたが、シロハラクイナやヒクイナなどは確認できなかった。海岸近くではイソヒヨドリ、クロサギなどが確認された。

山地の森林環境ではカラスバト、キジバト、メジロ、ヒヨドリ、ハシブトガラス、ツミなどが目撃されたが、沖縄島などで普通に見られるズアカアオバト、コゲラ、ヤマガラなどの3種は確認することができなかった。したがって、慶良間諸島では、県内では留鳥とされるハト科やキツツキ科、シジュウカラ科に属する一部の留鳥を欠いている鳥類相であると思われる。

夜行性の留鳥としては、フクロウ科のコノハズクが確認され、またこれ以外に夜行性のヤマシギ類として、琉球列島の固有種であるアマミヤマシギが1986年9月に渡嘉敷島で初めて確認された。さらに、阿嘉島でも1992年10月に写真撮影されている（山城博明私信）。

のことから、慶良間諸島の留鳥種数は表2に示したように、同様な古い島の成り立ちやイタジイ林などの森林植生を有する沖縄島や八重山諸島に比べると少く、宮古諸島や久米島に近い留鳥数である。このことは前述したように森林地域に生息するヤマガラ、ズアカアオバト、コゲラなどの確認がされなかつことによる。しかしながら、森林性の未確認鳥類については、これらの種が慶良間諸島にもともと分布していなかつたのか、あるいは分布していたが森林の改変等によりすでに激減及び絶滅してしまつたのかどうかを検討するには資料が乏しく、詳細に言及できない。しかしながら、留鳥の中にはKURODA (1925) により記録のあるリュウキュウカラスバトのように、今日ではすでに絶滅している種も見られるので、この種のように慶良間諸島で激減もしくは絶滅した種もあるものと思われる。

なお、ここで扱う留鳥の中にはアマミヤマシギなどのように繁殖の確認をしてはいないが、留鳥として扱った種も含まれている。さらに県内では留鳥に扱われているが、慶良間諸島で繁殖の可能性は低いと考えられるムラサキサギは冬鳥として扱い、厳密な意味での留鳥種数からは除外した。また、留鳥としては記録しなかつたが、座間味村史 (1989) や当山 (1983) による動物の方言調査によって、識別されるウズラ（おそらくミフウズラ）を確認することができなかつた。これは、ネズミ駆除のため1957年から1958年にかけて

イタチが放され (Uchida, 1969)、今日ではほぼ定着していることから、イタチによる捕食圧により激減しているものと思われる。

その他には、県内各地に留鳥として生息するヒクイナやシロハラクイナを確認することができなかったが、この中ではヒクイナは警戒心が強く、開けた場所にててくることは少ないので、生息しているにもかかわらず目撃されることができなかつたであろうと思われる種もある。したがって、留鳥種数には今後調査がすすむと若干の変動があろう。

表2 各島地域別の留鳥種数の比較

| 調査地域  | 留鳥種数 | 総確認種数 | 備考・引用文献        |
|-------|------|-------|----------------|
| 慶良間諸島 | 23   | 102   |                |
| 沖縄島   | 34   | 242   | 与那城他 (1984)    |
| 宮古諸島  | 21   | 226   | 久貝・山本 (1981)   |
| 八重山諸島 | 35   | 294   | 八重山野鳥の会 (1983) |
| 久米島   | 20*  | 114   | 嵩原ら (1995)     |

\*帰化鳥は除外

## 2) 渡り鳥の出現状況について

### ア) 森林地域

夏季には森林地域でアカショウビン、サンコウチョウ、ホトトギスなどが渡来ってきていた。秋季にはアカハラダカが南下してきて一夜を過ごし、翌朝には群れをなしてさらに南下していく状況が見られた。また同じ時期にエゾビタキも見られる。これらは県内各地における一般的な夏季及び秋季の渡りの様相である。

冬季には各島にシロハラ、アオジ、サシバなどが渡来し、それ以外には外地島ではカシラダカ、座間味島ではミヤマホオジロ、チョウゲンボウ、トラツグミ、ツグミ、ムクドリ、屋嘉比島ではハヤブサなどが見られた。

### イ) 低地の農耕地及び河川、海岸部

海岸や周辺海域では夏季にベニアジサシやエリグロアジサシなどが渡来していることが確認された。

冬季には低地の河川や海岸などでダイサギやアオサギ、コサギ、チュウサギなどサギ類の渡来を確認したが、渡嘉敷島ではまれな冬鳥と考えられるムラサキサギを確認したことは特筆すべきであろう。

シギ類ではイソシギ、アオアシンギ、キアシシギなどが確認され、チドリ類ではムナグロ、タゲリ (座間味島、渡嘉敷島) などが確認されたが、慶良間諸島では海岸干潟がほとんど発達していないので、その渡来地となる場所が少なく確認種数は少ないようと思える。

また、慶良間諸島には池や沼、河川など水辺の環境が少なく、ガンカモ類でも確認種数は少ないが、海岸でツクシガモ、コクガンなど県内でも記録の少ない種が確認された。さらに、渡嘉敷島の海岸近くではペリカン科のモモイロペリカンが確認され、ウ類ではカワウが目撃された。

ワシタカ類ではミサゴが慶留間島や座間味島などで目撃された。集落周辺の農耕地や草原、林縁などではハクセキレイやキセキレイ、ツグミ、ムクドリ、ショウビタキ、ルリビタキ、シロハラ、メボソムシクイなどが見られた。まれな鳥類としては、渡嘉敷島においてホオアカ、オジロビタキ、チュウヒ、ナベコウなどが確認された。

### 3) 天然記念物等貴重種の出現状況

ここで扱う貴重種としては、その地域（慶良間諸島）に固有な種、琉球列島に固有な種、国及び県指定天然記念物、環境庁（1991）によってランクづけされた絶滅危惧種や危急種等保護が必要とされる種をその範囲とした。

出現した鳥類の中では、表3に示したように、その地域（慶良間諸島のみ）の固有種の該当種がなく、琉球列島の固有種としての該当種はアカヒゲ、アマミヤマシギの2種であった。また天然記念物に該当する種としては、マガソ、コクガン、カラスバト、アカヒゲ、アマミヤマシギの5種が確認された。この中でマガソとコクガンはまれな渡来種である。

以下その主な天然記念物指定種等の貴重種の出現状況について述べる。

#### イ) カラスバト *Columba janthina janthina* (写真4)

今度の調査では座間味島、阿嘉島、屋嘉比島、渡嘉敷島で生息確認した。おそらくまとまつた森林地域を有するような他の島でも生息しているであろう。特に屋嘉比島では1994年11月の調査では20個体以上確認したので、本種の生息地として、最も良好であろう。なお、環境庁（1991）のランクづけでは危急種である。

#### ロ) コクガン *Branta bernicla* (写真5)

渡嘉敷島で1986年3月16日に1羽確認した。本個体は朝は渡嘉敷港湾の干潟にやってきて海草をたべ、夕方には無人島へ帰っていく生活を約1ヶ月間つづけた。本種は県内でも渡来記録が少ないまれ冬鳥である。これまで沖縄本島の読谷村、糸満市などで記録が見られる。なお、環境庁（1991）のランクづけでは危急種である（表3）。

#### ハ) ホントウアカヒゲ *Erithacus komadori komadori*

与那城（1976）によって、阿嘉島と慶留間島で確認されているが、今度の調査では生息確認はできなかった。おそらくごく小数が常緑広葉樹林などの森林地域を主体に生息しているものと思われる。なお、環境庁（1991）のランクづけでは危急種である。

#### ニ) アマミヤマシギ *Scolopax mira* (写真6)

本種は、琉球列島の固有種で、1980年に沖縄島北部で初めて生息確認され、嵩原（1986）

によると名護以北（本部半島を除く）の沖縄島北部の森林地域に生息しているとされる。なお本種は1994年2月には沖縄県指定の天然記念物とされている。

渡嘉敷島では1986年9月29日に大谷林道で2羽確認し、この記録が慶良間諸島における初めての記録である（図2）。また、阿嘉島でも沖縄野鳥研究会の山城博明氏によって写真撮影されている。したがって、他の島にも生息している可能性がある。

本種はこれまで奄美大島、徳之島、沖縄本島北部に生息分布するとされており、沖縄島北部と同様な島の成り立ちや植生を持つ慶良間諸島で確認されたことは、動物地理学的に興味ある分布のしかたである。

なお、嵩原ら（1995）によると、最近久米島でも生息確認がされている。本種は環境庁（1991）によるランクづけでは絶滅危惧種である（表3）。

#### ホ) その他の貴重種

さらに、天然記念物以外では環境庁（1991）によってランクづけされた「危急種」や「希少種」の鳥類として、ミサゴ、チュウサギ、ハヤブサ、ナベコウなど11種が確認された。これらの種はリュウキュウオオコノハズクを除いて県内各地に冬季に渡来する種である。しかしながら、まれな冬鳥であるナベコウが渡来することは特筆すべきことであろう。したがって、慶良間諸島は狭い島嶼地域でありながらこうした貴重種のいくつかが生息及び渡来する地域としての自然環境は重要であり、河川や水田などの水辺環境や森林地域の保全を図る必要があろう。

#### 4) 確認されたまれな鳥類及び分布的に興味深い鳥類

##### (1) ホオアカ *Emberiza fucata* (写真7)

1986年4月29日に、渡嘉敷集落周辺の農耕地で2羽を目撃した。県内では数少ない冬鳥として渡来する。県内では、伊江島や石垣島などで記録されている（池原、1983）。

##### (2) ムラサキサギ *Ardea purpurea*

1986年4月29日に渡嘉敷集落後背地の水田近くで亜成鳥1羽を目撃した。県内では八重山諸島以南に留鳥として生息している。本地域にはまれな冬鳥として渡来しているものと思われる。

## 2. 各島における鳥類の出現概要

### 1) 渡嘉敷島

集落及びその周辺では留鳥のスズメ、ヒヨドリ、キジバト、リュウキュウツバメ、イソヒヨドリなどがみられ、農耕地としての水田地域にはリュウキュウヨシゴイが見られた。また、河川沿いではカワセミ、クロサギなどが見られた。

表3 慶良間諸島における貴重種の確認

| 種名            | 特別天然記念物 | 天然記念物 | 環境庁編(1991) |    |    |
|---------------|---------|-------|------------|----|----|
|               |         |       | 危惧         | 危急 | 希少 |
| コクガン          | ・       | ◎     | ・          | ・  | ◎  |
| マガン           | ・       | ◎     | ・          | ・  | ◎  |
| カラスバト         | ・       | ◎     | ・          | ◎  | ・  |
| ホントウアカヒゲ      | ・       | ◎     | ・          | ◎  | ・  |
| アマミヤマシギ       | ・       | ◎*    | ◎          | ・  | ・  |
| ツクシガモ         | ・       | ・     | ・          | ◎  | ・  |
| チュウヒ          | ・       | ・     | ・          | ◎  | ・  |
| ミサゴ           | ・       | ・     | ・          | ◎  | ・  |
| ハヤブサ          | ・       | ・     | ・          | ◎  | ・  |
| チュウサギ         | ・       | ・     | ・          | ・  | ◎  |
| ベニアジサシ        | ・       | ・     | ・          | ・  | ◎  |
| エリグロアジサシ      | ・       | ・     | ・          | ・  | ◎  |
| コアジサシ         | ・       | ・     | ・          | ・  | ◎  |
| ナベコウ          | ・       | ・     | ・          | ・  | ◎  |
| シノリガモ         | ・       | ・     | ・          | ・  | ◎  |
| リュウキュウオオコノハズク | ・       | ・     | ・          | ・  | ◎  |

\*は1994年2月に沖縄県指定天然記念物とされた。

夏季には周辺海域やチービンなどの無人島ではベニアジサシ、エリグロアジサシ、オオミズナギドリ、トウヅクカモメなどが観察された。特にチービン(神山島、ナガシヌ島等)はベニアジサシ、エリグロアジサシの集団繁殖地となっており、その環境保全が望まれる。

秋季には国立青年の家北側の展望台で500羽内外のアカハラダカの渡りが確認され、時期を同じくしてエゾビタキ(写真8)の渡りもみられる。また、9月と3月にはしばしばヤツガシラ(写真9)が渡来する。

この時期に行った夜間調査では大谷林道でヤマンギ、アマミヤマシギ、コノハズクが確認され、林道脇の立木にはアカショウビンやエゾビタキ、メジロなどが羽を休めていた。

冬季の渡り鳥としては、農耕地や林縁部ではシロハラ、アオジ、オジロビタキ、ホオアカ、チュウヒ、ムラササキサギなどが目撃された。また、水田地域にマガンやナベコウが渡来し、海岸ではツクシガモ、コクガンやペリカンなどまれな鳥類も見られる。渡嘉敷川やその河口では、カワウ、アオサギ、カワセミなどがみられる。

なお、渡嘉敷島には1974年9月にニホンキジ55羽(♂20、♀35)が放鳥されているが、

定着されていないとされている（沖縄獣友会、1983）。今度の調査でも確認することができなかつたので、おそらく定着していないだろう。

池原（1974）は渡嘉敷島から13種、田中（1987）は31種を報告している。したがつて、今度の調査記録と合わせて渡嘉敷島及びその周辺海域から65種の鳥類が記録されたことになる。

## 2) 座間味島

集落や集落周辺の農耕地及び林縁などではセッカ、ヒヨドリ、メジロ、ウグイス、リュウキュウツバメ、シジュウカラ、キジバトなどの留鳥が見られた。

冬季にはここにジョウビタキ（写真10）やルリビタキ（写真11）、メボソムシクイ、アオジ、サシバ、シロハラなどが渡来し、越冬していた。

座間味ダムでは、留鳥のカワセミとカイツブリがダム湖で生息し、周辺森林部にはウグイス、ハシブトガラス、メジロ、ツミ、リュウキュウサンショウクイなどが目撃された。ここでは冬季にシロハラ、アオジ、トラツグミ、ミヤマホオジロなどが渡来していた。

阿真のキャンプ場では、夏季にアカショウビンが目撃され、冬季にはツグミ、ハクセキレイ、ヤマシギなどが渡来していた。海岸線では、イソヒヨドリ、シロチドリ、クロサギが目撃された。

山地森林部の番所林道では留鳥のカラスバト、ヒヨドリ、メジロ、ウグイス、キジバトなどが目撃され、冬季にはサシバ、チョウゲンボウ、ミサゴなどが目撃された。

また番所林道における夜間調査では、ヤマシギ（写真12）、コノハズク、ゴイサギが確認されたが、アマミヤマシギは確認できなかつた。しかしながら、前述したようにアマミヤマシギは渡嘉敷島や阿嘉島で確認しているので、本島でも生息している可能性がある。

今度の調査では座間味島では46種の鳥類が記録され、その中で留鳥は19種であった。しかし、方言名でウザーと呼ばれているミフウズラは確認できなかつた。このことは前述したように本島にネズミ駆除のためイタチが導入され、現在ではほぼ定着しているため、地上性のミフウズラはイタチに捕食され、個体数が激減していることが考えられる。

留鳥の中で、繁殖確認したのはリュウキュウツバメだけである。本種は集落周辺や海岸近くで目撃されたが、ユヒナ浜にある海食洞では営巣（古巣を加え3巣）が確認された（写真13）。

KURODA（1925）によると、座間味島産の標本としてリュウキュウカラスバト、エゾヒヨドリ、ヤブサメなど21種を報告している。また池原（1974）は、ジョウビタキ、ホトトギスなど30種を座間味島の鳥類記録としている。したがつて、今度の調査記録を加え、座間味島からは56種の鳥類が記録されているものと思われる。

### 3) 阿嘉島

集落やその周辺農地ではメジロ、リュウキュウツバメ、ヒヨドリ、ハシブトガラスなどが目撃され、集落の北側谷間にある湿地や森林地域では冬季にシロハラがみられた。

夜間調査ではヤマシギが確認され、1989年10月にはヨタカ（写真14）とコノハズク、1992年10月にアマミヤマシギ（写真15）が写真撮影されている（山城博明私信）。

与那城（1976）によると、シロチドリ、タシギ、オオコノハズク、ヤツガシラなど25種を記録している。したがって、今度の調査記録を合わせ、この島からは34種の鳥が記録されているものと思われる。

なお、本島では冬季のみの調査であったので、夏季に調査を行う必要性があり、確認種数は今後さらに増えるであろう。

### 4) 慶留間島及び外地島

森林地域ではヒヨドリ、メジロ、キジバトが見られ、集落近くではイソヒヨドリやリュウキュウツバメが見られた。また、冬季にはモズ、カシラダカが渡来ってきて、越冬していた。

与那城（1976）によると、シロチドリ、コアジサシ、クロアジサシなど20種を記録している。したがって、今度の調査記録を合わせ、この島からは26種の鳥が記録されているものと思われる。

なお、本島でも冬季のみの調査であったので、夏季に調査を行う必要性があり、確認種数は今後増えるであろう。

### 5) 屋嘉比島

夏季の調査では夏鳥のエリグロアジサシやホトトギス、留鳥で国の天然記念物カラスバトなどの9種の鳥類を確認した。また、冬季にはハヤブサ、ジョウビタキ、アオジなど11種を確認した。

これまで屋嘉比島における鳥類については、池原（1974）や与那城（1978）などよって一部報告が見られる。今度の調査において出現した鳥類の中では、カラスバト、メジロ、ハシブトガラスなど確認された7種の留鳥と夏鳥のエリグロアジサシについては池原（1974）や与那城（1978）の報告を再確認した。しかし、夏鳥のホトトギスについては、今度の記録が屋嘉比島における初めての確認例であろう。したがって、これまでの記録を合わせ屋嘉比島から27種の鳥類が記録されたものと思われる。

本地域で特筆すべきことは、1994年11月の調査で、貴重種のカラスバトが20羽以上も確認され、本種を含む留鳥や夏季及び冬季の渡り鳥の生息地として重要な地域であることが理解される。また、鳥類以外にも調査中にも天然記念物のケラマジカ7個体を確認した。したがって、同島はこうした鳥獣の生息地および繁殖地となっていることが示唆された。

るので、今後も鳥獣保護区として島の環境保全に配慮することが望ましいと思われる。

#### 〈要約〉

1. 慶良間諸島で1986年から1994年までに鳥類調査を実施し、暫定的に14目32科（3亜科を含む）102種（亜種を含む）の鳥類目録を作成した。
2. 確認された鳥類の内訳は留鳥23種、渡り鳥79種と渡り鳥が主体の鳥類相であった。
3. 確認された鳥類の中で、ナベコウ、コクガン、アマミヤマシギなど55種の記録は、慶良間諸島における新たな確認と思われる。
4. 留鳥の中では、アマミヤマシギが渡嘉敷島と阿嘉島で生息確認され、新たな分布地であることを指摘した。

#### 〈参考文献〉

- 池原貞雄. 1974. 慶良間群島の陸上脊椎動物. 沖縄海岸国定公園拡張候補地学術調査報告, 国頭村東海岸・伊江島・慶良間列島. P.187-199. 沖縄県.
- 沖縄県教育委員会編. 1993. 沖縄の文化財 I, 天然記念物編. PP.44. 沖縄県教育委員会.
- 沖縄県環境保健部編. 1993. 環境保健行政の概要. 沖縄県.
- 大城逸朗. 1983. 座間味島の地質, 県立博物館総合調査報告書Ⅲ, P.11-15. 沖縄県立博物館.
- 沖縄県獣友会編. 1983. 狩猟鳥類個体数調査報告書, (日本キジ). 沖縄県獣友会.
- 垣花義孝. 1978. 屋嘉比島および久場島の開発の歴史, ケラマジカ実態調査報告Ⅱ, 沖縄県天然記念物調査シリーズ第12集. P.37-38. 沖縄県教育委員会.
- 新城和治・宮城康一・日越国昭. 1977. 屋嘉比島の植物相. ケラマジカ実態調査報告, 沖縄県天然記念物調査シリーズ, 第11集. P.92-104. 沖縄県教育委員会.
- 新納義馬・木華島辰磨・宮城康一. 1974. 慶良間列島の植生. 沖縄海岸国定公園拡張候補地学術調査報告, 国頭村東海岸・伊江村・慶良間列島. P.169-186. 沖縄県.
- 宮城康一・新城和治・日越国昭, 1977. 屋嘉比島の植生, ケラマジカ実態調査報告, 沖縄県天然記念物調査シリーズ, 第11集. P.105-118. 沖縄県教育委員会.
- 宮城康一. 1974. 慶良間列島の植物. 沖縄海岸国定公園拡張候補地学術調査報告国頭村東海岸・伊江村・慶良間列島. P.143-168. 沖縄県.
- 与那城義春, 1978. 阿嘉、慶留間、屋嘉比の鳥類. ケラマジカ実態調査報告Ⅲ, 沖縄県天然記念物調査シリーズ第12集. P.151-156. 沖縄県教育委員会

- 座間味村役場編, 1989. 座間味村史上巻, 自然・歴史・産業. 710PP.
- 当山昌直, 1983. 阿嘉島の動物の方言について. 県立博物館総合調査報告書Ⅲ, P. 23-29.  
沖縄県立博物館.
- 岡田弥一郎・木場一夫・仲宗根寛. 1959. II, AVES 鳥網. 沖縄産動物目録. P. 5-25.  
沖縄生物教育研究会.
- 与那城義春・久貝勝盛・玉城常雄. 1984. 沖縄の鳥類. 沖縄の生物. P. 267-280. 沖縄生物教育研究会.
- 佐久本敝. 1984. 沖縄島周辺離島の植物. 沖縄の生物. P. 191-200. 沖縄生物教育研究会.
- 八重山野鳥の会. 1983. 八重山地方鳥類目録, 10周年記念誌. p28-38. 八重山野鳥の会.
- 久貝勝盛・山本晃. 1981. 宮古諸島の鳥類目録. 沖生研第14号, 沖縄生物教育研究会.
- 環境庁, 1991. 日本の絶滅のおそれのある野生生物一レッドデータブック一脊椎動物編,  
330PP. 野生生物研究センター.
- 日本鳥学会. 1974. 日本産鳥類目録第5版. pp120. 保育社.
- NAGAMICHI KURODA 1925. A CONTRIBUTION TO THE KNOWLEDGE OF THE AVIFAUNA OF THE RIUKIU ISLANDS AND THE VICINITY, Published by the author.
- 嵩原建二. 1986. 沖縄北部におけるアマミヤマシギの分布について. あじまあ. 名護博物館.
- 嵩原建二・久貝勝盛・瀬名波任. 1995. 久米島で確認された鳥類. 久米島総合調査報告書.  
P. 65-94. 沖縄県博物館.
- 田中一郎. 1987. 第三節動物. 渡嘉敷村史, 資料編. P. 411. 渡嘉敷村.
- 琉球新報社編, 1983. 奄美・沖縄鳥類目録. 写真集沖縄の野鳥, p.54-62. 誠文堂新光社.
- Uchida, T. 1969. Rat-control procedures on the Pacific island, with special reference to the efficiency of biological control ; agents. II. Efficiency of the Japanese Weasel, *Mustela sibirica itatsi* Temminck & Schlegel, as a rat-control agent in the Ryukyuys. Jour. Fac. Agr, Kyushu Univ, 15(5) : 355-385.

図版2 慶良間諸島で確認された鳥類（1）



写真4 カラスバト  
(座間味島, 1994.11.21)



写真5 コクガン  
(渡嘉敷島, 1986.3.16)



写真6 アマミヤマシギ  
(渡嘉敷島, 1986.9.29)



写真7 ホオアカ  
(渡嘉敷島, 1986.4.29)



写真8 エゾビタキ  
(渡嘉敷島, 1986.9.29)



写真9 ヤツガシラ  
(渡嘉敷島, 1987.9.17)

図版3 慶良間諸島で確認された鳥類（2）



写真10 ショウビタキ  
(座間味島, 1994.12.2)



写真11 ルリビタキ  
(座間味島, 1991.1.11)



写真12 ヤマシギ  
(座間味島, 1991.1.10)

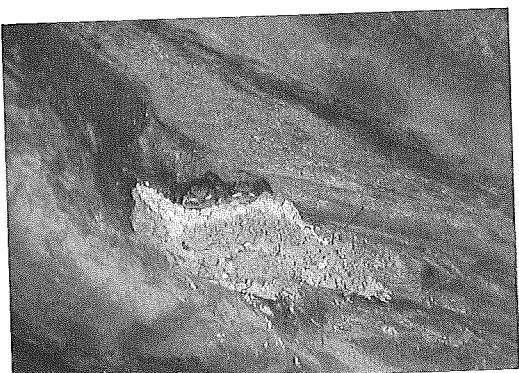


写真13 リュウウェツバメ  
(座間味島, 1994.7.26)

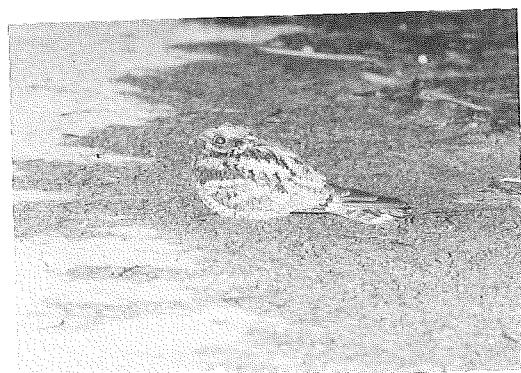


写真14 ヨタカ  
(阿嘉島, 1989.10)

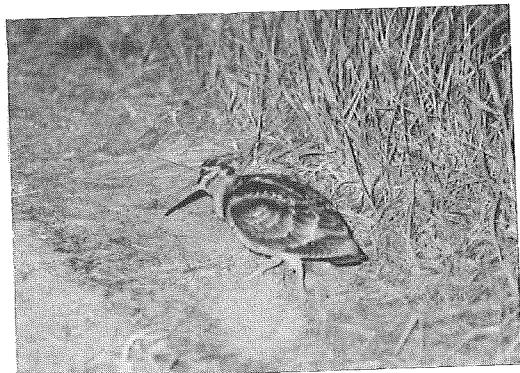


写真15 アマミヤマシギ  
(阿嘉島, 1992.10)

## 慶良間列島の鳥類目録（暫定）

### Check list of Birds in the Kerama Islands.

凡例：(1) 調査地：T, 渡嘉敷島, Z, 座間味島, A, 阿嘉島, G, 慶留間島, Y, 屋嘉比島.

(2) 確認状況：○, 生息確認. ◎, 繁殖確認

(3) 生息状況：R, 留鳥. S, 夏鳥. T, 旅鳥. W, 冬鳥. A, 迷鳥.

(4) 観察記録：確認地, 日付, 確認個体数, ( ) は場所の順

| 種名<br>Species                                   | 島 Islands |   |   |   |   | 状況<br>Status |
|---|-----------|---|---|---|---|--------------|
|   | T         | Z | A | G | Y |              |
| カイツブツリ目 PODICIPEDIFORMES                        |           |   |   |   |   |              |
| カイツブリ科 PODICIPEDIFORMES                         |           |   |   |   |   |              |
| 1. カイツブリ <i>Podiceps ruficollis poggei</i>      |           | ○ |   |   |   | R            |
| 1994/12/2, 1. (座間味ダム)                           |           |   |   |   |   |              |
| ミズナギドリ目 PROCELLARIIFORMES                       |           |   |   |   |   |              |
| ミズナギドリ科 PROCELLARIIDAE                          |           |   |   |   |   |              |
| 2. オオミズナギドリ <i>Calonectris leucomelas</i>       | ○         |   |   |   |   | W            |
| 1994/11/21, 3.                                  |           |   |   |   |   |              |
| 3. アカアシミズナギドリ <i>Puffinus carneipes</i>         | ○         |   |   |   |   | A            |
| 慶良間諸島近海 : 1986/3 (沖縄野鳥研究会、1986)                 | ○         |   |   |   |   |              |
| グンカンドリ科 FREGATIDAE                              |           |   |   |   |   |              |
| 4. コグンカンドリ <i>Fregata ariel ariel</i>           | ○         |   |   |   |   | A            |
| 1987/7/5, 1. (渡嘉敷海岸)                            |           |   |   |   |   |              |
| ペリカン目 PELECANIFORMES                            |           |   |   |   |   |              |
| ペリカン科 PELECANIDAE                               |           |   |   |   |   |              |
| 5. モモイロペリカン <i>Pelecanus onocrotalus</i>        | ○         |   |   |   |   | A            |
| 1983/7/19, 1. (渡嘉志久海岸)                          |           |   |   |   |   |              |
| ウ科 PHALACROCORACIDAE                            |           |   |   |   |   |              |
| 6. カワウ <i>Phalacrocorax carbo hanedae</i>       | ○         |   |   |   |   | W            |
| 1985/11/5, 1. (渡嘉敷川)                            |           |   |   |   |   |              |
| コウノトリ目 CICONIIFORMES                            |           |   |   |   |   |              |
| サギ科 ARDEIDAE                                    |           |   |   |   |   |              |
| 7. リュウキュウヨシゴイ <i>Ixobrychus cinnamomeus</i>     | ○         |   |   |   |   | R            |
| 8. ササゴイ <i>Butorides striatus amurensis</i>     | ○         |   |   |   |   | W            |
| 渡嘉敷島 1986/4/29, 1.                              |           |   |   |   |   |              |
| 9. ゴイサギ <i>Nycticorax nycticorax nycticorax</i> |           | ○ |   |   |   | W            |
| 1994/11/21, 1. (座間味)                            |           |   |   |   |   |              |
| 10. アマサギ <i>Bubulcus ibis coromandus</i>        | ○         | ○ |   |   |   | W/T          |
| 渡嘉敷島 1986/3/24, 3. 1986/4/29, 1.                |           |   |   |   |   |              |
| 座間味島 1994/12/2, 1                               |           |   |   |   |   |              |
| 11. コサギ <i>Egretta garzetta garzetta</i>        | ○         | ○ |   |   |   | W            |
| 渡嘉敷島 1986/4/29, 1.                              |           |   |   |   |   |              |
| 座間味島 1994/12/2, (1).                            |           |   |   |   |   |              |

| 種名<br>Species  | 島 Islands |   |   |   |   | 状況<br>Status |
|--|-----------|---|---|---|---|--------------|
|  | T         | Z | A | G | Y |              |
| 12. チュウサギ <i>Egretta intermedia intermedia</i><br>座間味島 1994/12/3, (1)<br>渡嘉敷島 1986/4/29, 1.                  | ○         | ○ |   |   |   | W            |
| 13. クロサギ <i>Egretta sacra sacra</i><br>渡嘉敷島 1986/4/29, 1.<br>阿嘉島・慶留間島：与那城（1976）                              | ○         | ○ | ○ | ○ | ○ | R            |
| 14. ムラサキサギ <i>Ardea purpurea manilensis</i><br>渡嘉敷島 1986/4/29, 1.  | ○         |   |   |   |   | W            |
| 15. アオサギ <i>Ardea cinerea jouyi</i><br>渡嘉敷島：池原（1974）<br>コウノトリ科 CICONIDAE                                     | ○         |   |   |   |   | W            |
| 16. ナベコウ <i>Ciconia nigra</i><br>1987/11/22, 1. (渡嘉敷水田)  | ○         |   |   |   |   | A            |
| ガシカモ目 ANSERIFORMES<br>ガシカモ科 ANATIDAE   |           |   |   |   |   |              |
| 17. マガシ <i>Anser fabalis frontalis</i><br>1989/11/22, 1. (渡嘉敷水田)   | ○         |   |   |   |   | W            |
| 18. コクガシ <i>Branta bernicla</i><br>1986/3/16, 1. (渡嘉敷海岸)   | ○         |   |   |   |   | W            |
| 19. コガモ <i>Anas crecca crecca</i><br>渡嘉敷島：沖縄県獣友会（1983）   | ○         |   |   |   |   | W            |
| 20. シノリガモ <i>Histrionicus histrionicus</i><br>座間味島：池原（1974）  |           | ○ |   |   |   | A            |
| 21. ツクシガモ <i>Tadorna tadorna</i><br>渡嘉敷島 1990/2/26, 1.   | ○         |   |   |   |   | W            |
| ワシタカ目 FALCONIFORMES<br>ワシタカ科 ACCIPITRIDAE  |           |   |   |   |   |              |
| 22. ミサゴ <i>Pandion haliaetus haliaeetus</i><br>慶留間島 1992/1/21, 1.<br>座間味島 1994/12/3, 4.<br>渡嘉敷島 1989/1/2, 1. | ○         | ○ |   | ○ |   | W            |
| 23. ツミ <i>Accipiter gularis gularis</i><br>座間味ダム：1994/12/3, 4.<br>阿嘉島 1992/1/21, 1.                          |           | ○ | ○ |   |   | R            |
| 24. アカハラダカ <i>Accipiter soloensis</i><br>渡嘉敷島 1985/9/28, 1. 1988/9/26, 1.                                    | ○         |   |   |   |   | T            |
| 25. サシバ <i>Butastur indicus</i><br>座間味島 1994/12/2, 1. (番所林道)<br>慶留間・阿嘉島・屋嘉比島：与那城（1976）                       | ○         | ○ | ○ | ○ | ○ | W            |
| 26. チュウヒ <i>Circus aeruginosus spilonotus</i>  | ○         |   |   |   |   | W            |

| 種名<br>Species                                       | 島 Islands |   |   |   |   | 状況<br>Status |
|---|-----------|---|---|---|---|--------------|
|   | T         | Z | A | G | Y |              |
| 渡嘉敷島 1986/4/29, 1.                                  |           |   |   |   |   |              |
| 27. マダラチュウヒ <i>Circus melanoleucos</i>              | ○         |   |   |   |   | W            |
| 渡嘉敷島：沖縄野鳥研究会（1986）                                  |           |   |   |   |   |              |
| ハヤブサ科 FALCONIDAE                                    |           |   |   |   |   |              |
| 28. チョウゲンボウ <i>Falco tinnunculus interstinctus</i>  |           | ○ |   |   | ○ | W            |
| 座間味島 1994/12/3, 1. (番所林道)                           |           |   |   |   |   |              |
| 屋嘉比島：与那城（1976）                                      |           |   |   |   |   |              |
| 29. ハヤブサ <i>Falco peregrinus japonicus</i>          | ○         |   |   |   | ○ | W            |
| 座間味島：Kuroda (1925)                                  |           |   |   |   |   |              |
| 屋嘉比島：1994/11/21, 1                                  |           |   |   |   |   |              |
| チドリ目 CHRADRIIFORMES                                 |           |   |   |   |   |              |
| チドリ科 CHARADRIIDAE                                   |           |   |   |   |   |              |
| 30. シロチドリ <i>Charadrius alexandrinus nihonensis</i> | ○         | ○ | ○ | ○ | ○ | R/W          |
| 慶留間島・阿嘉島・屋嘉比島：与那城（1976）                             |           |   |   |   |   |              |
| 31. コチドリ <i>Charadrius dubius curonicus</i>         |           | ○ |   |   |   | W            |
| 阿嘉島：与那城（1976）                                       |           |   |   |   |   |              |
| 32. タゲリ <i>Vanellus vanellus</i>                    | ○         | ○ |   |   |   | W            |
| 座間味港緑地公園 1994/12/2, (1)                             |           |   |   |   |   |              |
| 渡嘉敷島 1986/12/9, 1.                                  |           |   |   |   |   |              |
| 33. ムナグロ <i>Pluvialis dominica foulva</i>           | ○         |   |   |   |   | W            |
| シギ科 SCOLOPACIDAE                                    |           |   |   |   |   |              |
| 34. アオアシシギ <i>Tringa nebularia</i>                  | ○         |   |   |   |   | W            |
| 渡嘉敷島：1986/5/19, 1.                                  |           |   |   |   |   |              |
| 35. キアシシギ <i>Tringa brevipes</i>                    | ○         |   | ○ |   | ○ | T            |
| 渡嘉敷 1986/5/19, 1.                                   |           |   |   |   |   |              |
| 阿嘉島・屋嘉比島：与那城（1976）                                  |           |   |   |   |   |              |
| 36. イソシギ <i>Tringa hypoleucos</i>                   | ○         | ○ | ○ | ○ | ○ | W            |
| 座間味島：1994/12/3, (1)                                 |           |   |   |   |   |              |
| 阿嘉島・慶留間島・屋嘉比島：与那城（1976）                             |           |   |   |   |   |              |
| 37. クサシギ <i>Tringa ochropus</i>                     | ○         |   |   |   |   | W            |
| 田中（1987）  |           |   |   |   |   |              |
| 38. ダイシャクシギ <i>Numenius arquata orientalis</i>      |           |   |   | ○ |   | T            |
| 屋嘉比島：与那城（1976）                                      |           |   |   |   |   |              |
| 39. チュウシャクシギ <i>Numenius phaeopus variegatus</i>    |           |   |   | ○ |   | T            |
| 屋嘉比島：与那城（1976）                                      |           |   |   |   |   |              |
| 40. タシギ <i>Gallinago gallinago gallinago</i>        |           |   | ○ |   |   | W            |
| 阿嘉島：与那城（1976）                                       |           |   |   |   |   |              |
| 41. ヤマシギ <i>Scolopax rusticola</i>                  | ○         | ○ | ○ |   |   | W            |
| 座間味島 1994/11/21, 3. 1994/12/4, 3.                   |           |   |   |   |   |              |
| 座間味島 1991/1/10, 3.                                  |           |   |   |   |   |              |

| 種名<br>Species  | 島 Islands |   |   |   |   | 状況<br>Status |
|--|-----------|---|---|---|---|--------------|
|  | T         | Z | A | G | Y |              |
| 渡嘉敷島 1986/9/29, 1<br>阿嘉島 1991/1/9, 1.  |           |   | ○ |   |   |              |
| 42. アマミヤマシギ <i>Scolopax mira</i><br>渡嘉敷島: 1986/9/29, 2<br>阿嘉島 1992/10. (山城博明私信)<br>カモメ科 LARIDAE  | ○         | ○ | ○ |   |   | R            |
| 43. ベニアジサシ <i>Sterna dougallii bangsi</i><br>渡嘉敷島: 池原 (1974)<br>座間味島: 日本鳥学会 (1974)<br>チービン (ナガシヌ島) 1989/7/28, 1000   | ○         | ○ |   |   |   | S            |
| 44. コアジサシ <i>Sterna albifrons sinensis</i><br>座間味島: 池原 (1974)  | ○         |   |   |   | ○ | S            |
| 45. エリグロアジサシ <i>Sterna sumatrana sumatrana</i><br>座間味島: 日本鳥学会 (1974)<br>屋嘉比島: 1994/7/26, 1.<br>チービン (ナガシヌ島) : 1989/7/28, 40.   | ○         |   |   |   | ○ | S            |
| 46. セグロアジサシ <i>Sterna fuscata nubilosa</i><br>座間味島: 琉球新報社 (1983)   | ○         |   |   | ○ |   | S            |
| 47. クロアジサシ <i>Anous stolidus pullus</i><br>屋嘉比島: 与那城 (1976)  | ○         |   |   | ○ |   | S            |
| 48. ウミネコ <i>Larus crassirostris</i><br>渡嘉敷島港内 1992/1/5, 11.  | ○         |   |   |   |   | W            |
| 49. トウヅクカモメ <i>Stercorarius pomarinus</i><br>渡嘉敷島沖 1986/4/29, 1.   | ○         |   |   |   |   | W            |
| ハト目 COLUMBIFORMES<br>ハト科 COLUMBIDAE  |           |   |   |   |   |              |
| 50. リュキュウキジバト <i>Streptopelia orientalis stimpsoni</i><br>51. カラスバト <i>Columba janthina janthina</i><br>渡嘉敷島 1986/4/29, 1.<br>座間味島, 1994/12/4, 1. (阿佐), 1994. 11. 21. 1.<br>屋嘉比島 1994/11/21, 20+.<br>阿嘉島: 与那城 (1976) | ○         | ○ | ○ | ○ | ○ | R            |
| 52. リュウキュウカラスバト <i>Columba jouyi</i><br>座間味島: KURODA (1925)  | ○         |   |   |   |   | 絶滅           |
| ホトトギス目 CUCULIFORMES<br>ホトトギス科 CUCULIDAE  |           |   |   |   |   |              |
| 53. ホトトギス <i>Cuculus poliocephalus poliocephalus</i><br>屋嘉比島: 1994/7/26, 1.<br>阿嘉島: 与那城 (1976)<br>渡嘉敷島: 池原 (1974)  | ○         |   | ○ |   | ○ | S/T          |

| 種名<br>Species  | 島 Islands |   |   |   |   | 状況<br>Status |
|--|-----------|---|---|---|---|--------------|
|  | T         | Z | A | G | Y |              |
| フクロウ目 STRIGIFORMES   |           |   |   |   |   |              |
| フクロウ科 STRIGIDAE  |           |   |   |   |   |              |
| 54. リュウキュウオオコノハズク <i>Otus bakkamoena pryeri</i><br>与那城 (1976)  |           |   | ○ |   |   | R            |
| 55. リュウキュウコノハズク <i>Otus scops elegans</i><br>座間味島 1994/11/21, 3.   | ○         | ○ | ○ |   |   | R            |
| 56. リュウキュウアオバズク <i>Ninox scutulata totogo</i><br>座間味島：池原 (1974)  |           | ○ |   |   |   | R            |
| ヨタカ目 CAPRIMULGIFORMES  |           |   |   |   |   |              |
| ヨタカ科 CAPRIMULGDAE  |           |   |   | ○ |   |              |
| 57. ヨタカ <i>Caprimulgus indicus jotaka</i><br>阿嘉島, 1989/10 (山城博明私信)   |           |   | ○ |   |   | W            |
| アマツバメ目 APODIFORMES   |           |   |   |   |   |              |
| アマツバメ科 APODIDAE  |           |   |   |   |   |              |
| 58. アマツバメ <i>Apus pacificus kurodae</i><br>渡嘉敷島 1986/4/29, 1.  | ○         |   |   |   |   | S            |
| ブッポウソウ目 CORACTIFORMES  |           |   |   |   |   |              |
| ヤツガシラ科 UPUPIDAE  |           |   |   |   |   |              |
| 59. ヤツガシラ <i>Upupa epops saturata</i><br>座間味島 1991/1, 1 (高月山)<br>渡嘉敷島 1986/3/24, 1.<br>1987/9/17, 1. 1988/9/25, 1.<br>阿嘉島：与那城 (1976) | ○         | ○ | ○ | ○ |   | T            |
| カワセミ科 ALCEDINIDAE  |           |   |   |   |   |              |
| 60. カワセミ <i>Alcedo atthis bengalensis</i><br>渡嘉敷島 1986/3/24, 1.<br>座間味島：1994/12/2, 1. (座間味ダム)  | ○         | ○ |   |   |   | R            |
| リュウキュウアカショウビン<br><i>Halcyon coromanda bangsi</i>   | ○         |   | ○ | ○ |   | S            |
| 渡嘉敷島 1986/9/29, 1<br>阿嘉島・慶留間島：与那城 (1976)   |           |   |   |   |   |              |
| スズメ目 PASSERIFORMES   |           |   |   |   |   |              |
| モズ科 LANIIDAE   |           |   |   |   |   |              |
| 62. モズ <i>Lanius bucephalus bucephalus</i><br>慶留間島 1992/1/21, 1.   |           |   |   | ○ |   | W            |
| 63. シマアカモズ <i>Lanius cristatus lucionensis</i><br>座間味島, 1994/12/2(1), (阿真)   | ○         |   |   |   |   | W            |
| ツバメ科 HIRUNDINIDAE  |           |   |   |   |   |              |
| 64. ツバメ <i>Hirundo rustica gutturalis</i><br>渡嘉敷島 1986/4/29, 1.  | ○         |   | ○ | ○ | ○ | T            |

| 種名<br>Species                                     | 島 Islands |   |   |   |   | 状況<br>Status |
|---|-----------|---|---|---|---|--------------|
|   | T         | Z | A | G | Y |              |
| 阿嘉島・慶留間島・屋嘉比島：与那城（1976）                           |           |   |   |   |   |              |
| 65. リュウキュウツバメ <i>Hirundo tahitica namiyei</i>     | ◎         | ◎ | ○ | ○ | ○ | R            |
| 座間味島：1994/7/26（ユヒナ浜海食洞古巣3）                        |           |   |   |   |   |              |
| 渡嘉敷島 1986/4/29, 1. 1987/7/5, 3.（巣立ち）              |           |   |   |   |   |              |
| 66. コシアカツバメ <i>Hirundo daurica japonica</i>       | ○         |   |   |   |   | T            |
| 渡嘉敷島 1987/7/21, 1.                                |           |   |   |   |   |              |
| 67. イワツバメ <i>Delichon urbica dasypus</i>          | ○         |   |   |   |   | T            |
| 渡嘉敷島 1986/4/29, 1.                                |           |   |   |   |   |              |
| セキレイ科 MOTACILLIDAE                                |           |   |   |   |   |              |
| 68. マシジロツメナガセキレイ <i>Motacilla flava simillima</i> | ○         |   |   |   |   | W/T          |
| 渡嘉敷島 1986/9/20, 1.                                |           |   |   |   |   |              |
| 69. キセキレイ <i>Motacilla cinerea robusta</i>        |           | ○ | ○ | ○ | ○ | W            |
| 座間味島 1994/12/3, 1                                 |           |   |   |   |   |              |
| 阿嘉島・慶留間島・屋嘉比島：与那城（1976）                           |           |   |   |   |   |              |
| 70. ハクセキレイ <i>Motacilla alba lugens</i>           |           | ○ |   |   |   | W            |
| 座間味島 1991/1/11, 3.                                |           |   |   |   |   |              |
| 71. ホオジロハクセキレイ <i>Motacilla alba leucopsis</i>    |           | ○ |   |   |   | W            |
| 座間味島：1991/1/11, 1.                                |           |   |   |   |   |              |
| 72. ピンズイ <i>Anthus hodgsoni hodgsoni</i>          | ○         | ○ |   |   |   | W            |
| 座間味島：1991/1/11, 3.                                |           |   |   |   |   |              |
| 渡嘉敷島 1986/4/29, 1.                                |           |   |   |   |   |              |
| 73. ムネアカタヒバリ <i>Anthus cervinus</i>               | ○         |   |   |   |   | W            |
| 渡嘉敷島 中田（1987）                                     |           |   |   |   |   |              |
| サンショウクイ科 CAMPEPHAGIDAE                            |           |   |   |   |   |              |
| 74. リュウキュウサンショウクイ                                 |           |   |   |   |   | R            |
| <i>Pericrocotus divaricatus tegimae</i>           |           |   |   |   |   |              |
| 座間味島，1994/12/3(3)：座間味ダム                           | ○         | ○ |   |   |   |              |
| 阿嘉島：与那城（1976）                                     |           |   |   |   |   |              |
| ヒヨドリ科 PYCNONOTIDAE                                |           |   |   |   |   |              |
| 75. エゾヒヨドリ <i>Hypsipetes amaurotis hensonii</i>   | ○         | ○ |   |   |   | A            |
| 座間味島：KURODA（1925）                                 |           |   |   |   |   |              |
| 76. リュキュウヒヨドリ <i>Hypsipetes amaurotis pryeri</i>  | ○         | ○ | ○ | ○ | ○ | R            |
| 座間味島：1991/1/11, 1.                                |           |   |   |   |   |              |
| ヒタキ科 MUSCICAPIDAE                                 |           |   |   |   |   |              |
| ツグミ亜科 TURDINAE                                    |           |   |   |   |   |              |
| 77. ホントウアカヒゲ <i>Erithacus komadori namiyei</i>    |           |   | ○ | ○ |   | R            |
| 阿嘉島・慶留間島：与那城（1976）                                |           |   |   |   |   |              |
| 78. ルリビタキ <i>Tarsiger cyanurus cyanurus</i>       | ○         | ○ |   |   |   | W            |
| 座間味島：1991/1/11, 1.                                |           |   |   |   |   |              |
| 渡嘉敷島 田中（1987）                                     |           |   |   |   |   |              |

| 種名<br>Species  | 島 Islands |   |   |   |   | 状況<br>Status |
|--|-----------|---|---|---|---|--------------|
|  | T         | Z | A | G | Y |              |
| 79. ジョウビタキ <i>Phoenicurus auroreus auroreus</i><br>座間味島 1994/11/22, ♂2.<br>1994/12/2, ♂2. 1991/1/11, ♂1.<br>屋嘉比島 1994/11/21, ♀1.<br>渡嘉敷島 田中 (1987) | ○         | ○ |   |   | ○ | W            |
| 80. オジロビタキ <i>Ficedula parva albicila</i><br>渡嘉敷島：沖縄野鳥研究会 (1986)   | ○         |   |   |   |   | W            |
| 81. ノビタキ <i>Saxicola torquata stejnegeri</i><br>座間味島：1989/10, ♀1. 山城博明私信   |           | ○ |   |   |   | W            |
| 82. イソヒヨドリ <i>Monticola solitarius philippensis</i><br>座間味島, 屋嘉比島, 慶留間島<br>渡嘉敷島 田中 (1987)  | ○         | ○ | ○ | ○ | ○ | R            |
| 83. シロハラ <i>Turdus pallidus</i><br>(慶良間列島全域)   | ○         | ○ | ○ | ○ | ○ | W            |
| 84. アカハラ <i>Turdus Chrysolaus</i><br>渡嘉敷島 田中 (1987)<br>座間味島 1994/12/2, 1. (番所林道)   | ○         | ○ |   |   |   | W            |
| 85. ツグミ <i>Tuydus naumannni eumomus</i><br>座間味島 1994/12/2, 2. (小中学校校庭)<br>阿嘉島・慶留間島 1992/1/21, 1.   |           | ○ | ○ | ○ |   | W            |
| 86. トラツグミ <i>Turdus dauma aureus</i><br>1994/12/5, (1)<br>ウグイス亜科 SYLVIINAE   | ○         |   |   |   |   | W            |
| 87. ヤブサメ <i>Cettia squameiceps</i><br>座間味島 : KURODA (1925)   |           | ○ |   |   | ○ | W            |
| 88. リュウキュウウグイス <i>Cettia diphone riukiuensis</i><br>座間味島 : 1994/12/2, 5.<br>屋嘉比島 : 1994/7/26, 3.   | ○         | ○ | ○ | ○ | ○ | R            |
| 89. セッカ <i>Cisticola juncidis brunneiceps</i><br>座間味島 : 1974/12/2, 2.<br>座間味島・渡嘉敷島 : 池原 (1974)<br>屋嘉比島・阿嘉島・慶留間島 : 与那城 (1976)                       | ○         | ○ | ○ | ○ | ○ | R            |
| 90. メボソムシクイ <i>Phylloscopus borealis</i><br>座間味島 : 1992/1/21, 1.<br>ヒタキ亜科 MUSCICAPINAE   |           | ○ |   |   |   | W            |
| 91. エゾビタキ <i>Muscicapa griseisticta</i><br>渡嘉敷島 1986/9/28, 1.<br>カササギヒタキ亜科 MONARCHINAE   | ○         |   |   |   |   | T            |
| 92. リュウキュウサンコウチョウ<br><i>Terpsiphone atrocaudata illex</i>  |           |   | ○ | ○ |   | S            |

| 種名<br>Species   | 島 Islands |   |   |   |   | 状況<br>Status |
|---|-----------|---|---|---|---|--------------|
|   | T         | Z | A | G | Y |              |
| 阿嘉島・慶留間島：与那城（1976）<br>シジュウカラ科 PARIDAE   |           |   |   |   | ○ | R            |
| 93. オキナワシジュウカラ <i>Parus major okinawae</i><br>屋嘉比島：池原（1974）<br>座間味島 1994/12/3, 1.<br>メジロ科 ZOSTEROPIDAE  |           | ○ |   |   | ○ | R            |
| 94. リュウキュウメジロ <i>Zosterops japonica loochooensis</i><br>95. シマメジロ <i>Zosterops japonica insularis</i><br>座間味島：KURODA（1925）<br>ホオジロ科 EMBERIZIDAE                 | ○         | ○ | ○ | ○ | ○ | A            |
| 96. アオジ <i>Emberiza spodocephala personata</i><br>座間味島 1994/12/2, 10：学校裏<br>渡嘉敷島 1986/4/29, 1.<br>屋嘉比島 1991/11/21, 1.<br>慶留間島 1992/1/21, 1<br>阿嘉島 1992/1/21, 3. | ○         | ○ | ○ | ○ | ○ | W            |
| 97. カシラダカ <i>Emberiza rustica latifascia</i><br>慶留間島・外地島 1992/1/21, 1.  |           |   |   |   | ○ | W            |
| 98. ミヤマホオジロ <i>Emberiza elegans elegans</i><br>座間味島 1994/12/3, (1)：学校裏<br>渡嘉敷島 田中（1987）   | ○         | ○ |   |   |   | W            |
| 99. ホオアカ <i>Emberiza fucata fucata</i><br>渡嘉敷島 1986/4/29, 2.<br>渡嘉敷島：沖縄野鳥研究会（1993）<br>ハタオリドリ科 PLOCEIDAE   | ○         |   |   |   |   | W            |
| 100. スズメ <i>Passer montanus saturatus</i><br>ムクドリ科 STURNIDAE  | ○         | ○ | ○ | ○ |   | R            |
| 101. ムクドリ <i>Sturnus cineraceus</i><br>座間味島 1991/11/22, 1.<br>カラス科 CORVIDAE   |           | ○ |   |   |   | W            |
| 102. リュウキュウハシブトカラス<br><i>Corvus macrorhynchos connectens</i><br>確認種数 全体102種   | ○         | ○ | ○ | ○ | ○ | R            |

備考、種名の扱いは、日本鳥学会（1974）にしたがった。

生息状況は、琉球新報社（1983）と沖縄野鳥研究会（1993）にしたがった。

## 世界のサシバ属

久 貝 勝 盛

(沖縄県立博物館)

Genus *Butastur* in the World

Katsumori KUGAI

(Okinawa Prefectural Museum)

1991年1月から3月までの3ヶ月間、県人材育成財団の御好意で国外研究員として米国スミソニアン研究所へ派遣された。その間、スミソニアン自然史博物館（73個体）をはじめ、ニューヨークのアメリカ自然史博物館（78個体）、デラウェア自然史博物館（19個体）、シカゴ自然史博物館（23個体）、ハーバード大学自然史博物館（46個体）、イギリスのトリンという町にある大英博物館のブランチである動物博物館（161個体）で世界のサシバ属（アフリカサシバ、メジロサシバ、チャバネサシバ、サシバ）、約400個体の標本調査をした。その標本調査をもとにして、世界のサシバ属の分布地図を作成した。また、それぞれの種の翼長、脚の長さ、嘴の長さ、尾羽の長さ等を比較し、さらに Brown, L., D. Amadon, 1968. Ben King, 1975. John Mackinnon, 1991. Dodolphe Meyer De Schauensee, 1989. Lynx Edicions Bird Life International, 1994等を参考にしてそれぞれの形態的な特徴や生態をまとめた。

The author was dispatched to the Smithsonian Institution, Washington D.C. as a overseas researcher sponsored by Okinawa Prefectural Government Human Resources Development Foundation from January to March, 1991. The author has examined specimens of the Genus *Butastur* at the following museums: National Museum of Natural History, Smithsonian Institution, Museum of Comparative Zoology, Harvard University, American Museum of Natural History in New York, Chicago Museum of Natural History, Delaware Museum and National Museum of Natural History, British Museum.

The author, at the same time, has consulted the references; Leslie Brown, 1968, Ben

King, 1975, John Mackinnon, 1991 and Dodolphe Meyer De Schauensee, 1989 and made the following distribution maps of the Genus *Butastur*.

### Species Within the Genus *Butastur*

There are four species in the Genus *Butastur*; *Butastur indicus*, *Butastur teesa*, *Butastur liventer* and *Butastur rufipennis*. Here, the author will introduce briefly the features of the Genus *Butastur* and the general characteristics of four species consulting above mentioned references.

#### 1 Genus *Butastur*

Medium-sized hawks. Wings are long and pointed. The tail is medium length. Bill is rather weak, the basal portion and cere brightly colored. Tarsi not long; reticulate, but with a row of larger polygonal scales down the front. Colour pattern subdued, rufous brown, grey and whitish; young not very different from adult.

The position of this Genus is puzzling. The tarsal covering suggests that it may be an early offshoot of some kite, harrier or snake hawk stock, though it is little specialised. The voice of all species is buzzard-like.

*Butastur* is found in Africa and tropical Asia. The four species form essentially a super-species; though there may be a little overlap between three of them. One nests in Japan and North Asia, but is highly migratory (L.Brown and D.Amadon 1968).

##### (1) *Butastur teesa* (White-eyed Buzzard)

RANGE: SE Iran, Afghanistan and Pakistan through India nad Napal to Burma and Tenasserim. Found in open dry country and cultivation.

FIELD CHARACTERS: In flight, upper wing coverts and patch at base of primaries paler than rest of wing. Adult bird is like Gray-faced Buzzard-eagle, but has white eyes; white patch on nape; dark brown upper tail coverts; rufous-brown to tail with no bands. From *Butastur liventer* it is distinguished by its black throat streaks, barred under side and lack of chestnut in the wing. Juveniles like adult but have a whitish head and

pale under sides, with a rufous tail.

VOICE: It is said that 'Pit-Weer, Pit-Weer', repeated, very like the cries of *B. liventer* and *B. indicus*.

GENERAL HABITS: In India, it is a common bird of dry, open country, thin woodland, or of cultivated areas, usually in lowlands, but occasionally as high as 300 meters, such as Himarayas. It perches on trees, telegraph poles and even on wires, and from them makes short circling flights over the open ground, with a few rapid wing beats followed by a short glide. It flies low above the ground and sweeps upwards on to the next perch looking rather like a large accipiter. It is in some areas decidedly shy and will not allow close approach. According to L. Brown, 1968, an adult has been seen to squat on telephone wires when approached in the intruder reaction posture.

It does most of its hunting from perches, dropping to the ground to kill, but it also spends some time walking about on the ground in a purposeful way, especially in such areas as recently burned ground (L. Brown and D. Amadan, 1968).

FOOD: Small mammals, insects, lizards, frogs snakes, crabs and occasionally birds, with a preference for insects and lizards. All prey is taken from the ground. Hunts from perch, making short flights to ground to capture prey.

BREEDING HABITS: Breeding season is February to May. In the early breeding season the birds are very noisy, continually calling from perches. Single birds or pairs may also soar over territory, calling continually. It may constitute display.

The nests are built by pair 8~12 meters up tall tree, in open country and very often solitary, but sometimes in a grove or a village. They are slight structures loosely made of sticks, without lining, from eight to eighteen inches across by three to four inches deep, with an ill-defined depression in the center. Both sexes build, and nest construction may occupy a long time. A new nest appears to be built each year.

Two or usually three eggs are laid, broad ovals, fine and close-textured, smooth and almost glossy, bluish or greyish white, often unmarked, but sometimes with reddish spots and undermarkings of gray. Incubation by female only, reported to last 19 days, but probably much longer. Chicks have white down, buff-colored on back. Both parents feed

young. According to Handbook of the Birds of the World Vol. 2, 1994, fledging and dependency periods unrecorded. Eggs are laid in India from February to April, occasionally may, usually February - March in the North, tending to be later elsewhere. More observations are needed on the breeding cycle (L. Brown and D. Amadon 1968).

MOVEMENT: Mainly sedentary. Some local movements in N Pakistan, in region of border with Afghanistan. Vagrant to Tibet (Handbook of the Birds of the World Vol. 2, 1994).

STATUS AND CONSERVATION: Not globally threatened. Common to fairly common locally; abundant in Pakistan (Handbook of the Birds of the World Vol. 2, 1994).

(2) *Butastur liventer* (Rufous-Winged Buzzard Eagle)

RANGE: Buruma, SW Yunnan to Indochina and Malay peninsula, Java, Sulawesi.

FIELD CHARACTERS: The bright chestnut tail with four narrow black bars and black terminal band and wings distinguish it from all other species in its range, in all plumages. Slender, rather pointed wings and long, slender, square cut tail of Genus *Butastur* distinctive.

VOICE: According to L. Brown, 1968, 'Chip-Kweeo, Chip-Kweee', or 'Hiu-Keek', also 'Hieek-Hieek' very like that of other members of Genus; noisy at times.

GENERAL HABITATS: It is found in open dry forest near rivers or swamps. In such places it perches singly on a tree branch or a post, sitting for long periods at times, and making short flights from one perch to another, or dropping on prey. Generally, hunts from tree perches near open water or in open cultivated patches.

FOOD: Small mammals, frogs, lizards, crabs and insects.

BREEDING HABITS: It builds its nest often in solitary trees in paddy fields, not very high, and usually inside the tree. They may rarely be found also in tracts of jungle.

Breeding begins in March and April; the birds are noisy at the beginning of the breeding season like their congeners. Two or three eggs are laid, indistinguishable from those of *Butastur teesa*, bluish white, unmarked, or spotted with brown and grey. Laying date: Java, February; Celebes, June. No other details are available. (Coomans de Ruiter, L., 1947. Limosa 20, pp. 213-229).

MOVEMENT: A resident, non-migrant species.

STATUS AND CONSERVATION: Not globally threatened. Throughout most of range fairly common to uncommon, but local; rare in SS China.

(3) *Butastur Rufipennis* (Grasshopper Buzzard Eagle)

RANGE: Senegambia E to Ethiopia, migrating S to Sierra Leone. Cameroon. NE Zaire, Kenya and N Tanzania. Found ranges from woodland and forest edge to arid thorn savanna; sometimes on edges of swamps and over burnt ground.

FIELD CHARACTERS: In the field it is unmistakable because of the clear rufous patch on the wings at the carpal joint, and by reason of its buoyant flight. Juvenile with head and neck also rufous and darkly streaked below. Sex indistinguishable. At rest on a perch it looks a little like a kite, *Milvus migrans*, but the very prominent yellow cere and eye and black wing tips and tail, contrasting with generally rufous plumage, are good field marks (L. Brown and D. Amadon, 1968).

VOICE: A loud repetitive yelping 'ki-ki-ki-ki-ki-kee' with variations. Far from being completely mute, as hitherto supposed, this is a very noisy bird that calls frequently in breeding quarters, but not on migration in winter quarters. (L. Brown and D. Amadon, 1968).

GENERAL HABITATS: According to L. Brown, within its range this species is migratory, breeding in the northern part between about latitude 9° N to 15° N (though not in the whole of that range) between March and May, remaining in the north for rainy season, and migrating south about September. In West Africa the pattern appears clear,

the birds moving south in September–October, reaching about latitude 8° N in West African savannahs, but in some years reaching farther south than in others, and not always found in apparently suitable localities. In East Africa the movements are much less clear, but it is found in Eritrea from June to October, passes through Somalia, probably moving south, in October, and occurs in Kenya and Tanganyika as far south as Morogoro (7°) between October and February, frequenting arid thornbush areas, and so avoiding the worst of the equatorial short rains season, from October to December. In West Africa it is far more numerous generally than in East Africa, often seen in numbers together, while in East Africa, only a few are seen at any time, not more than ten together.

In its winter or dry season, non-breeding quarters, it is generally found in areas of savannah, grassland, of cultivation. On its way to winter quarters it appears in numbers, especially attracted in flocks to fires, newly burnt areas and insects emergences; also follows flocks of egrets or herds of game for the insects they flush. Later it takes up a temporary territory, and the same bird may be seen frequenting the same patch of bush or cultivation, perching on the same trees day after day.

**FOOD:** Mainly insects, especially grasshoppers, together with mantids, termite and ant alates, beetles, stick insects and spiders. Will take some other arthropods and a few small birds, reptiles and rodents (Handbook of the Birds of the World, Vol. 2)

**BREEDING HABITS:** Laying during rainy season: March–April across Sahel zone. Probably disperses to breed in territorial pairs. Builds substantial stick nest in fork of tree, often rather low down and lined with green leaves. 1–3 eggs: further details unrecorded (Handbook of the Birds of the World, Vol. 2).

**MOVEMENTS:** A widespread and common intra-African sub-Saharan migrant, moving across 22° latitude, S to the border of Guinea woodland and forest during the October–March dry season. When fires and grazing reduce cover, then departing N with first heavy rains to breed in semi-arid steppe during March–September. Also non-breeding migrant to E Africa, moving N through Taru Desert of lowland Kenya in January–March and through NW Somalia in September–October. Well studied only on non-breeding range of W Africa (Handbook ).

STATUS AND CONSERVATION: Not globally threatened. Locally abundant in several areas of W Africa during dry season, outnumbering all other raptors but *Mulvis migrans*. Vulnerable to overgrazing and drought in Sahel, but nomadic to take advantage of local situations of plentiful prey. Recent decline in non - breeding visitors to Kenya. Not known to be affected by pesticides, but may be vulnerable to spraying for locusts (Handbook ).

(4) *Butastur indicus* (Grey-faced Buzzard Eagle)

RANGE: NE China to Amurland and Ussuriland. Mainland of Japan, South of Akita. Winters from S and SE China and Taiwan through Indochina and Malay Peninsula to Greater Sundas. Philippines, Sulawesi and New Guinea.

FIELD CHARACTERS: The feathers of the male Buzzard-eagle are rufous-tinged, and the head is grayish brown. The feathers and head of the female differ from the male in that they are dark brown (Kiyozumi 1952, Yamashina 1980). The female bird is slightly larger than the male. The iris of the juvenile bird is dark blue or bluish brown and changes into reddish yellow as the young bird grows older. Also, the vertical streaks on the breast of the juvenile change into lateral streaks after the young bird molts.

VOICE: 'Pi-kwee, Pi-Kwee', the second syllable accented.

GENERAL HABITS: In breeding quarters it frequents wooded country, often mountainous, with open spaces in which it can hunt. It is during the autumnal migratory season that the birds stop in large flocks at the islands of Okinawa. The first records of *Butastur indicus* in the Okinawa Islands are found in Cyuzan Denshinroku (1721). Scientific records are noted in Ishigakijima Kiko-hen written by Mr. Takuji Iwasaki (1927). In breeding quarters pairs occur well spread out, but on migration it becomes gregarious, spreading out again over suitable country when winter quarters are reached. In winter quarters it frequents paddy fields and plains with scattered trees.

Prefers low mountains, hills and foothills to absolutely flat land and mixed woods to unvaried deciduous woods: generally favours evergreen trees for nesting and perching in: nests in woods.

FOOD: Mainly frogs, reptiles (snakes, lizards), rodents and possibly birds. Often hunts from perch, typically at top of dead tree, waiting to spot prey and dive down on it; forages mainly in morning and evening.

BREEDING: Laying May~June. Fairly small nest of twigs and sometimes sedges, built in tree, normally conifer, 4~14 meters above ground; lined with bits of bark, grass and green leaves, which continue to be added throughout breeding. 2~4 eggs; incubation about 30 days; fledging about 5 weeks; in Ussuriland chicks start to hunt for themselves in second half of August.

MOVEMENTS: It is the most strongly migratory of the Genus; flocks of thousands of birds sometimes gather. Sets off for winter quarters mainly in the end of September or upto mid - October from Japan. Major migration route along Pacific coast of Japan, through Ryukyu Island, especially the Miyako Islands to Taiwan and S to Philippines.

STATUS AND CONSERVATION: Size and trends of populations very poorly known. Not uncommon in Japan, nor perhaps in Ussuriland, where distances of 4~5km between pairs are normal in large river valleys; however, Russian population apparently undergoing major decline; up to 1000 migrants shot annually on Twaiwan. Abundant on migration in various parts of Japan; one of commonest migrant raptors in Thailand (Handbook of the Birds of the World Vol. 2)

## 2 Morphological Comparisons of the Four mentioned Species

Morphological comparisons of the Genus *Batasur* have conducted by checking each specimens and consulting abovementioned reference books.

### (1) *Butastur teesa* (White-eyed Buzzard)

Adult: Striking white eye and rufous brown upper side of tail. White throat with wide dark central stripe. Tail is narrow, rather long; square at extremely. Six or seven narrower blackish bands, obscure basally, sometimes indistinct or absent. Wing coverts brown, paler than back, mottled and barred with white. Wing quills brown-rufous brown,

edged grey, largely white on inner webs, broadly tipped and narrowly barred black (on inner webs). Chin and throat white with a black. Sides of head, neck, and breast brown with black shafts. Lower breast brown, barred buffywhite becoming wholly buff or pale rufous on under-tail coverts and things. Under-wing coverts white toward tip, brown and white at base of wings, axillaries brown. Frequently conspicuous when bird is perched. Base of bill and cere yellow, legs and feet yellow-orange. Wing (male) 278-296, (female) 294-314, tail 151-169, tarsus 58-61 wing span 800-825.

Immatures have a broad white forehead and eyebrow; feathers of crown and nape brown, edgeed paler, streaked black. Feathers of upper parts brown, more or less edged paler. Slender, pointed wings, long narrow, aquaretipped tail and rather long legs help identify this Genus. Similar to adult, but paler on head and less heavily marked below.

Downy young - white, buffy on black, with a buffy circle on crown (L. Brown and D. Amadon 1968).

(2) *Butastur indicus* (Gray-Faced Buzzard-Eagle)

Adult: Tail brown with a subterminal and three dark bars. Leading edge of wing white. Upper-wing coverts brown, tinged rufous, the greater edged white and indistinctly barred darker brown. Wing quills blackish, paler and more rufous on inner webs, which are barred back. Chin and throat white, with a central and two lateral blacks, more or less distinct. Breast pale rufous brown to dark brown, spotted and barred white. Sides of head blackish; upperparts brown, streaked and barred blackish; underparts buff barred or washed rufous and streaked black. Tail quills below pale grey, broadly barred darker on inner pairs. Wing quills below white to pale pinkish grey, barred black on inner webs, primaries tipped black. Eyes bright yellow, gape and cere orange-yellow. Wing (male) 315-325, (female) 322-336, tail 190-193, tarsus 55-59. Weight (male) 375-433.

Immature: Underparts are barred vertically. Soars in circles with flat wings. Below white to rufous white, streaked on breast and barred on abdomen and flanks with rufous brown (L. Brown and D. Amadon, 1968).

(3) *Butastur liventer* (Rufous-Winged Buzzard-Eagle)

Adult: Small, buteo-like raptor with rufous wings and tail, tipped greyish, with a

broad subterminal and two or three other broken blackish bands. Back and upperwing coverts paler greyish brown, tinged rufous; darker and more rufous on upper-tail coverts and rump. Edge of wing white, outer and primary coverts rufous, tipped brown. Wing guills bright rufous chestnut, white basally on edges of inner webs, barred and tipped black. Innermost secondaries greyish brown. Below ashgrey, tinged brown, with darker shafts obscurely barred white on belly, becoming white on vent and under-tail coverts. Eye yellow, or golden; cere and gape yellow; legs and feet dull yellow. Wing (male) 261-275, (female) 264-280, tail 139-145, tarsus 62-66.

Immature: It has rufous buff head, neck and underparts. Like adult but head brown with whitish eyebrows and forehead; throat white. Chin and throat white, brown at the sides. Below pale gray with fine black shaft streaks, becoming white on things and under-tail coverts. Eye, legs and cere yellow.

Downy young: brownish; eye dark grey, base of bill, cere and legs, yellow (L. Brown and D. Amadon, 1968).

(4) *Butastur rufipennis* (Grasshopper Buzzard Eagle)

Adult: Rufous wing-coverts and underparts distinctive at all ages. Sexes indistinguishable. Tail greyish, with faint brown bars and a subterminal band. Greater coverts and primaries light rufous, the latter back-tipped, forming a conspicuous reddish patch when in flight. Secondaries basally rufous, terminally dark brown, tipped white. Chin and throat white or buff, with a median and two other black streaks on either side of throat. Under parts varying degrees of rufous, the breast with narrow shaft streaks of black, the belly and thighs unmarked. Axillaries grey-brown, spotted white or buff, underwing coverts and wing lining white. Eye gamboge yellow, legs and cere deep straw yellow, bill with yellow base and black tip, claws black. The female is only slightly larger than the male.

Immature: With head and neck also rufous and darkly streaked below. With age the crown assumes the same colour as the back, the tail acquires bars, and edging of rufous on the mantle and coverts becomes less distinct. Downy young undescribed. Wing (male) 290-311, (female) 305-330, tail (male) 160-175, (female) 172-182, tarsus (male) 55-58, (female) 57-61, weight 2 females 305, 408 (L. Brown and D. Amadon 1968).

3 The Specimens examined and name of the museum

1) Smithsonian institution

*Butasutur indicus* (Adult, male)

| No.     | Specimen No. | Wing<br>(cm) | Tail<br>(cm) | Mandible<br>(mm) | Tarsus<br>(cm) | Locality   | Date         |
|---------|--------------|--------------|--------------|------------------|----------------|------------|--------------|
| 1       | 112685       | 32.3         | 18.7         | 20.40            | 6.2            | Sulauesi   | 1886, 12, 1  |
| 2       | 114572       | 33.0         | 20.5         | 19.22            | 6.4            | Fusan      | 1984, 4, 13  |
| 3       | 403981       | 31.3         | 19.2         | 21.00            | 6.6            | Seoul      | 1948, 4, 18  |
| 4       | 314851       | 32.3         | 18.5         | 21.33            | 6.7            | Culion     | 1892, 2, 16  |
| 5       | 161119       | 32.1         | 19.1         | 19.90            | 6.4            | Siquijor   | 1888, 2, 14  |
| 6       | 95911        | 32.0         | 19.9         | 19.37            | 6.4            | Mergui Ar. | 1877, 1, 21  |
| 7       | 212619       | 32.3         | 19.3         | 18.82            | 6.3            | Seoul      | 1909, 11, 7  |
| 8       | 161120       | 31.0         | 18.5         | 21.00            | 6.4            | Mindanao   | 1887, 2, 24  |
| 9       | 86146        | 31.1         | 20.5         | 21.00            | 6.5            | Luzon      | 1881, 11, 10 |
| 10      | 476443       | 31.7         | 20.3         | -----            | 6.8            | Taiwan     | -----        |
| Average |              | 31.88        | 19.45        | 19.61            | 6.47           |            |              |

*Butastur indicus* (Adult, female)

| No.     | Specimen No. | Wing<br>(cm) | Tail<br>(cm) | Mandible<br>(mm) | Tarsus<br>(cm) | Locality | Date         |
|---------|--------------|--------------|--------------|------------------|----------------|----------|--------------|
| 1       | 306730       | 33.3         | 19.7         | 20.00            | 6.5            | Thailand | 1925, 11, 15 |
| 2       | 306731       | 32.4         | 18.5         | 20.08            | 6.5            | Thailand | 1926, 1, 1   |
| 3       | 114571       | 33.3         | 19.8         | 21.35            | 6.2            | Unknown  | 1884, 4, 13  |
| 4       | 1801331      | 33.3         | 19.6         | 20.31            | 6.5            | Burma    | 1903, 12, 17 |
| 5       | 161116       | 32.5         | 19.4         | 21.00            | 6.5            | -----    | -----        |
| 6       | 88707        | 33.0         | 19.8         | 18.20            | 6.5            | Japan    | 1882, 7, 19  |
| 7       | 383213       | 32.2         | 19.2         | 21.65            | 6.7            | Samar    | 1945, 3, 18  |
| 8       | 161120       | 31.0         | 18.5         | 21.00            | 6.4            | Mindanao | 1903, 12, 9  |
| 9       | 403979       | 32.0         | 20.2         | 21.95            | 6.5            | Seoul    | 1948, 5, 12  |
| 10      | 200790       | 32.5         | 21.2         | 21.55            | 6.4            | Basilan  | 1906, 1, 28  |
| 11      | 483576       | 33.4         | 22.5         | 20.23            | 6.0            | Taiwan   | 1961, 4, 19  |
| Average |              | 32.8         | 19.9         | 20.59            | 6.4            |          |              |

*Butastur indicus* (Juvenile Male)

| No.     | Specimen No. | Wing<br>(cm) | Tail<br>(cm) | Mandible<br>(mm) | Tarsus<br>(cm) | Locality | Date        |
|---------|--------------|--------------|--------------|------------------|----------------|----------|-------------|
| 1       | 303064       | 30.6         | 18.2         | 19.70            | 6.4            | China    | 1924, 6, 16 |
| 2       | 483577       | 31.5         | 18.1         | 19.60            | 6.6            | Taiwan   | 1961, 4, 19 |
| 3       | 114574       | 31.0         | 19.8         | 21.00            | 6.4            | Korea    | 1884, 4, 30 |
| 4       | 161122       | 32.1         | 19.6         | 20.10            | 6.3            | Basilan  | 1887, 11, 5 |
| 5       | 377834       | 31.1         | 19.5         | 21.26            | 6.8            | Siquijor | 1945, 3, 5  |
| 6       | 314853       | 31.8         | 20.2         | 15.49            | 5.9            | Siquijor | 1891, 2, 26 |
| 7       | 191865       | 31.3         | 18.8         | 20.65            | 6.2            | Cagayan  | 1904, 2, 26 |
| 8       | 336811       | 31.3         | 18.0         | 18.85            | 6.3            | Thailand | 1937, 4, 2  |
| 9       | 114755       | ----         | ----         | 19.45            | 6.2            | Japan    | 1887, 7, 29 |
| 10      | 88708        | ----         | ----         | ----             | ----           | Japan    | 1880, 7, 22 |
| Average |              | 31.34        | 19.03        | 19.58            | 6.36           |          |             |

*Butastur indicus* (Juvenile female)

| No.     | Specimen No. | Wing<br>(cm) | Tail<br>(cm) | Mandible<br>(mm) | Tarsus<br>(cm) | Locality  | Date         |
|---------|--------------|--------------|--------------|------------------|----------------|-----------|--------------|
| 1       | 114575       | 33.0         | 20.5         | 19.94            | 6.8            | Korea     | 1884, 4, 30  |
| 2       | 114573       | 31.5         | 19.4         | 21.20            | 6.8            | Korea     | 1884, 4, 30  |
| 3       | 114576       | 33.5         | 19.7         | 22.20            | 6.6            | Korea     | 1884, 4, 30  |
| 4       | 201816       | 32.3         | 19.3         | 20.09            | 6.5            | Luzon     | 1907, 3, 13  |
| 5       | 161121       | 33.0         | 22.7         | 21.20            | 6.7            | Negros    | 1888, 2, 8   |
| 6       | 161118       | 31.5         | 19.4         | ----             | 6.5            | Siquijok  | 1888, 2, 14  |
| 7       | 114756       | ----         | ----         | 18.00            | 6.3            | Japan     | 1887, 7, 29  |
| 8       | 475180       | 29.7         | 18.4         | 20.00            | 6.3            | Taiwan    | 1961, 4, 19  |
| 9       | 172968       | 31.9         | 18.8         | 19.40            | 6.3            | Burma     | 1900, 1, 12  |
| 10      | 212618       | 32.8         | 20.0         | 20.66            | 6.8            | Luzon     | 1909, 10, 25 |
| 11      | 96412        | 31.0         | 19.2         | 20.55            | 6.3            | Japan     | 1877, 3, --  |
| 12      | 76943        | 31.7         | 19.2         | 19.66            | 6.5            | Greenland | 1800, -----  |
| 13      | 303065       | 30.7         | 18.6         | 20.58            | 6.5            | Shanghai  | 1924, 6, 16  |
| 14      | 403980       | 31.8         | 19.8         | 20.86            | 6.7            | Korea     | 1947, 4, 27  |
| 15      | 475181       | 32.4         | 19.8         | 20.70            | 6.5            | Taiwan    | 1961, 4, 23  |
| 16      | 333656       | 31.1         | 18.4         | 20.29            | 6.4            | Thailand  | 1933, 12, 4  |
| Average |              | 31.86        | 19.55        | 20.07            | 6.5            |           |              |

*Butastur teesa* (male)

| No.     | Specimen No. | Wing<br>(cm) | Tail<br>(cm) | Mandible<br>(mm) | Tarsus<br>(cm) | Locality | Date         |
|---------|--------------|--------------|--------------|------------------|----------------|----------|--------------|
| 1       | 390109       | 28.3         | 15.9         | 21.75            | 6.7            | India    | 1947, 2, 6   |
| 2       | 408022       | ----         | 17.8         | 19.21            | 6.3            | Nepal    | 1949, 11, 25 |
| 3       | 399827       | 29.5         | 19.4         | 20.00            | 6.9            | Pakistan | 1945, 11, 22 |
| 4       | 399830       | 29.5         | 19.7         | 21.01            | 6.9            | Pakistan | 1945, 12, 9  |
| 5       | 483845       | 30.0         | 19.3         | 20.85            | 7.0            | Pakistan | 1960, 1, 9   |
| Average |              | 29.33        | 18.42        | 20.56            | 6.8            |          |              |

*Butastur teesa* (Female)

| No.     | Specimen No. | Wing<br>(cm) | Tail<br>(cm) | Mandible<br>(mm) | Tarsus<br>(cm) | Locality | Date         |
|---------|--------------|--------------|--------------|------------------|----------------|----------|--------------|
| 1       | 099423       | 28.3         | 18.5         | 21.50            | 6.0            | India    | -----        |
| 2       | 099424       | 27.3         | 18.3         | 18.35            | 6.0            | India    | 1869, 12, 11 |
| 3       | 146877       | 29.7         | 18.7         | 18.10            | 5.8            | India    | -----        |
| 4       | 399828       | 28.8         | 17.5         | 20.35            | 6.4            | Pakistan | 1945, 11, 9  |
| 5       | 399829       | 30.0         | 19.0         | 21.55            | 6.2            | Pakistan | 1945, 11, 5  |
| 6       | 483846       | 29.8         | 19.8         | 21.61            | 6.2            | Pakistan | 1960, 1, 9   |
| 7       | 483847       | 27.4         | 16.9         | 19.70            | 6.3            | Pakistan | 1960, 3, 22  |
| Average |              | 29.0         | 18.3         | 20.80            | 6.28           |          |              |

No. 099423, 099424 and 146877 are sex unknown.

*Butastur rufipennis* (Male)

| No.     | Specimen No. | Wing<br>(cm) | Tail<br>(cm) | Mandible<br>(mm) | Tarsus<br>(cm) | Locality | Date        |
|---------|--------------|--------------|--------------|------------------|----------------|----------|-------------|
| 1       | 216337       | 30.5         | 18.5         | 16.25            | 6.3            | Uganda   | 1910, 2, 13 |
| 2       | 216338       | 29.3         | 16.6         | 18.30            | 6.2            | Sudan    | 1910, 2, 18 |
| 3       | 216339       | 30.3         | 17.6         | 19.20            | 6.3            | -----    | -----       |
| 4       | 216340       | 29.7         | 17.7         | 17.43            | 6.3            | Uganda   | 1910, 2, 14 |
| 5       | 458208       | 32.4         | 18.6         | 19.05            | 6.7            | Ghana    | 1952, 6, 1  |
| Average |              | 30.44        | 17.8         | 18.05            | 6.36           |          |             |

*Butastur rufipennis* (Female)

| No.     | Specimen No. | Wing<br>(cm) | Tail<br>(cm) | Mandible<br>(mm) | Tarsus<br>(cm) | Locality | Date        |
|---------|--------------|--------------|--------------|------------------|----------------|----------|-------------|
| 1       | 216335       | 30.3         | 17.5         | 20.04            | 6.5            | Sudan    | 1910, 1, 13 |
| 2       | 216341       | 31.1         | 20.0         | 19.11            | 6.7            | Sudan    | 1910, 2, 27 |
| 3       | 462640       | 29.0         | 16.5         | 18.20            | 6.2            | Kenya    | 1956, 11, 4 |
| 4       | 519092       | 30.4         | 18.2         | 20.00            | 6.3            | Kenya    | 1966, 2, 1  |
| 5       | 519093       | 31.8         | 19.0         | 19.65            | 6.3            | Kenya    | 1966, 2, 1  |
| 6       | 519094       | 29.0         | 19.4         | 19.27            | 6.7            | Kenya    | 1966, 2, 1  |
| Average |              | 30.27        | 18.43        | 19.38            | 6.45           |          |             |

*Butastur liventer* (Male)

| No.     | Specimen No. | Wing<br>(cm) | Tail<br>(cm) | Mandible<br>(mm) | Tarsus<br>(cm) | Locality   | Date        |
|---------|--------------|--------------|--------------|------------------|----------------|------------|-------------|
| 1       | 335455       | 25.8         | 14.3         | 19.95            | 6.8            | Chiengmai  | 1935, 9, 24 |
| 2       | 335965       | 26.4         | 14.5         | 20.10            | 6.8            | Chiengmai  | 1936, 1, 4  |
| 3       | 349926       | 26.2         | 13.4         | 20.80            | 5.9            | Ban Saleng | 1936, 5, 1  |
| Average |              | 26.13        | 14.07        | 20.28            | 6.5            |            |             |

2) Museum of Comparative Zoology, Harvard University

*Butastur indicus* (Adult male)

| No. | Specimen No. | Wing<br>(cm) | Tail<br>(cm) | Mandible<br>(mm) | Tarsus<br>(cm) | Locality     | Date         |
|-----|--------------|--------------|--------------|------------------|----------------|--------------|--------------|
| 1   | 69834        | 31.2         | 20.6         | 19.90            | ----           | Fusan, Korea | 1915, 1, 14  |
| 2   | 57561        | 32.5         | 22.7         | 19.20            | ----           | Philippines  | -----        |
| 3   | 275030       | 31.5         | 20.2         | 19.00            | ----           | Suwon, Korea | 1884, 4, 30  |
| 4   | 276854       | 32.5         | 21.6         | 19.00            | 6.8            | Izu island   | 1947, 5, 1   |
| 5   | 275027       | 30.5         | 20.8         | 19.30            | 6.9            | Suwon, Korea | 1946, 4, 6   |
| 6   | 41228        | 31.5         | 22.0         | 19.65            | ----           | Philippines  | 1887, 11, 4  |
| 7   | 275029       | 31.5         | 20.5         | 19.20            | ----           | Suwon, Korea | 1946, 4, 13  |
| 8   | 53210        | 31.5         | 20.5         | 19.00            | ----           | Halviahena   | 1917, 2, --  |
| 9   | 132490       | 32.0         | 19.0         | 18.7             | 6.3            | Foochou      | 1909, 2, --  |
| 10  | 92660        | 32.2         | 19.8         | 19.7             | 6.9            | Balabac      | 1893, 12, 22 |

| No. | Specimen No. | Wing<br>(cm) | Tail<br>(cm) | Mandible<br>(mm) | Tarsus<br>(cm) | Locality   | Date         |
|-----|--------------|--------------|--------------|------------------|----------------|------------|--------------|
| 11  | 132486       | 32.0         | 19.4         | 18.7             | ----           | Shaweishan | 1910, 10, 20 |
| 12  | 132489       | 30.6         | 19.0         | 19.8             | ----           | Fukien     | 1904, 3, 26  |
| 13  | 132482       | 33.1         | 20.6         | 19.9             | ----           | Kiangsui   | 1910, 10, 20 |

Average      33.73    20.5    19.31    6.91

No. 69834, 57561 and 53210 are sex unknown

*Butastur indicus* (Adult female)

| No. | Specimen No. | Wing<br>(cm) | Tail<br>(cm) | Mandible<br>(mm) | Tarsus<br>(cm) | Locality     | Date        |
|-----|--------------|--------------|--------------|------------------|----------------|--------------|-------------|
| 1   | 277592       | 34.0         | 20.5         | 19.5             | ----           | Negros       | 1950, 1, 15 |
| 2   | 275028       | 32.5         | 20.5         | 19.9             | ----           | Suwon, Korea | 1946, 4, 6  |
| 3   | 92659        | 31.3         | 21.0         | 21.1             | ----           | Labuan       | 1893, 11, 3 |
| 4   | 194020       | 32.5         | 20.0         | 19.9             | ----           | Mindro       | 1937, 4, 3  |
| 5   | 41229        | 32.8         | 21.5         | 21.1             | ----           | Negros       | 1888, 2, 19 |
| 6   | 196008       | 32.0         | 21.8         | 19.5             | ----           | Siam         | 1937, 2, 26 |

Average      32.52    20.88    20.16

*Butastur indicus* (Juvenile male)

| No. | Specimen No. | Wing<br>(cm) | Tail<br>(cm) | Mandible<br>(mm) | Tarsus<br>(cm) | Locality      | Date         |
|-----|--------------|--------------|--------------|------------------|----------------|---------------|--------------|
| 1   | 37354        | 30.5         | 21.0         | 19.7             | ----           | -----         | 1899, 6, 1   |
| 2   | 132485       | 30.7         | 20.5         | 20.1             | ----           | Shawei, China | 1910, 10, 20 |
| 3   | 11189        | 30.6         | 20.4         | 20.4             | ----           | Malay         | -----        |

Average      30.6    20.66    20.07

No. 11189 is sex unknown

*Butastur indicus* (Juvenile female)

| No. | Specimen No. | Wing<br>(cm) | Tail<br>(cm) | Mandible<br>(mm) | Tarsus<br>(cm) | Locality     | Date        |
|-----|--------------|--------------|--------------|------------------|----------------|--------------|-------------|
| 1   | 132488       | 31.5         | 20.1         | 19.7             | ----           | Fukien       | 1898, 4, 26 |
| 2   | 132484       | 32.5         | 20.8         | 21.0             | ----           | Kishan       | 1910, 10, 6 |
| 3   | 37355        | 30.5         | 19.5         | 19.0             | ----           | Ishigaki Is. | 1899, 3, 23 |
| 4   | 132483       | 31.0         | 20.0         | 20.0             | ----           | Shaweishan   | 1908, 5, 30 |

| No. | Specimen No. | Wing<br>(cm) | Tail<br>(cm) | Mandible<br>(mm) | Tarsus<br>(cm) | Locality | Date        |
|-----|--------------|--------------|--------------|------------------|----------------|----------|-------------|
| 5   | 194021       | 32.5         | 21.5         | 19.3             | ----           | Mindro   | 1937, 1, 3  |
| 6   | 194019       | 33.0         | 22.5         | 21.6             | ----           | Laguna   | 1937, 1, 29 |

Average      31.83    20.73    20.09

*Butastur teesa* (Male)

| No. | Specimen No. | Wing<br>(cm) | Tail<br>(cm) | Mandible<br>(mm) | Tarsus<br>(cm) | Locality      | Date         |
|-----|--------------|--------------|--------------|------------------|----------------|---------------|--------------|
| 1   | 265567       | 28.5         | 16.8         | 21.25            | ----           | Burma         | 1938, 2, 3   |
| 2   | 278133       | 28.2         | 19.0         | 20.03            | ----           | Pandwr        | 1948, 3, 4   |
| 3   | 25239        | 29.0         | 17.6         | ----             | ----           | Plavis, India | -----        |
| 4   | 24627        | 29.0         | 18.0         | 18.90            | ----           | Koolo, India  | -----        |
| 5   | 33605        | 30.1         | 18.5         | ----             | ----           | North Beugal  | -----        |
| 6   | 152264       | 29.2         | 18.5         | 18.50            | ----           | Kesbafur      | 1931, 3, 5   |
| 7   | 24701        | 27.3         | 18.5         | 19.75            | 6.8            | Ambala, India | -----        |
| 8   | 25007        | 27.0         | 18.5         | 19.40            | 7.2            | Koolo, India  | -----        |
| 9   | 24628        | 28.3         | 18.4         | 20.90            | 7.0            | Koolo, India  | -----        |
| 10  | 33633        | 29.0         | 18.5         | 19.2             | 7.47           | Etawah, India | 1871, 12, -- |
| 11  | 24626        | ----         | 19.0         | 19.4             | 7.13           | Koolo, India  | -----        |
| 12  | 24700        | ----         | 20.0         | 19.0             | ----           | Ambala, India | -----        |

Average      28.56    18.44    19.63    7.12

No. 25239, 33605, 152264, 24701, 25007, 24628, 33633, 24626 and 24700 are sex unknown.

*Butastur teesa* (Female)

| No. | Specimen No. | Wing<br>(cm) | Tail<br>(cm) | Mandible<br>(mm) | Tarsus<br>(cm) | Locality | Date        |
|-----|--------------|--------------|--------------|------------------|----------------|----------|-------------|
| 1   | 92658        | 30.0         | 19.7         | 21.0             | ----           | India    | 1893, 2, -- |

Average      30.0    19.7    21.0

*Butastur rufipennis* (Female)

| No. | Specimen No. | Wing<br>(cm) | Tail<br>(cm) | Mandible<br>(mm) | Tarsus<br>(cm) | Locality | Date        |
|-----|--------------|--------------|--------------|------------------|----------------|----------|-------------|
| 1   | 133184       | 29.5         | 18.20        | 18.80            | ----           | Nairobi  | 1918, 1, 28 |

| No.     | Specimen No. | Wing<br>(cm) | Tail<br>(cm) | Mandible<br>(mm) | Tarsus<br>(cm) | Locality | Date        |
|---------|--------------|--------------|--------------|------------------|----------------|----------|-------------|
| 2       | 168530       | 30.5         | 19.30        | 18.90            | ----           | Uganda   | 1933, 12, 2 |
| Average |              | 30.0         | 18.75        | 18.85            |                |          |             |

*Butastur liventer* (Male)

| No.     | Specimen No. | Wing<br>(cm) | Tail<br>(cm) | Mandible<br>(mm) | Tarsus<br>(cm) | Locality | Date  |
|---------|--------------|--------------|--------------|------------------|----------------|----------|-------|
| 1       | 93711        | 27.9         | 14.7         | 19.9             | ----           | Java     | ----- |
| Average |              | 27.9         | 14.7         | 19.9             |                |          |       |

3 American Museum of Natural History

*Butastur indicus*

| No. | Specimen No. | Adult or Juvenile | Sex  | Locality       | Date         |
|-----|--------------|-------------------|------|----------------|--------------|
| 1   | 417517       | Juvenile          | M    | China          | 1901, 5, 14  |
| 2   | 534798       | Adult             | F    | Ryukyu Island  | ----, 10, 25 |
| 3   | 534797       | Adult             | ---- | Amami-oh-shima | 1904, 11, 14 |
| 4   | 534794       | Juvenile          | F    | Amami-oh-shima | 1904, 12, 28 |
| 5   | 534801       | Adult             | F    | Amami-oh-shima | 1904, 12, 24 |
| 6   | 734792       | Juvenile          | F    | Okinawa        | 1902, 3, 14  |
| 7   | 534791       | Adult             | M    | China          | 1911, 3, 30  |
| 8   | 534863       | Juvenile          | F    | Amami-oh-shima | 1905, 1, 26  |
| 9   | 534800       | Juvenile          | F    | Amami-oh-shima | 1904, 12, 3  |
| 10  | 205246       | Subadult          | F    | Ovbli Province | 1921, 8, 11  |
| 11  | 534793       | Adult             | M    | Ryukyuu        | -----        |
| 12  | 468369       | Adult             | F    | Ishigaki       | 1952, 10, 29 |
| 13  | 417515       | Adult             | M    | Chefoo         | 1899, 4, 1   |
| 14  | 96707        | Adult             | M    | Korea          | 1912, 5, 24  |
| 15  | 534796       | Adult             | M    | Amami-oh-shima | 1905, 1, 20  |
| 16  | 534795       | Juvenile          | M    | Amami-oh-shima | 1905, 1, 18  |
| 17  | 534802       | Juvenile          | F    | Amami-oh-shima | 1905, 1, 23  |
| 18  | 295870       | Juvenile          | F    | Manila, Luzon  | 1913, 12, 21 |

| No. | Specimen No. | Adult or Juvenile | Sex  | Locality        | Date         |
|-----|--------------|-------------------|------|-----------------|--------------|
| 19  | 93557        | Adult             | M    | Luzon           | 1903, 3, 4   |
| 20  | 459062       | Adult             | M    | Lamao,Bataan    | 1947, 12, 3  |
| 21  | 142968       | Adult             | ---- | Fukien,China    | 1912, ----   |
| 22  | 417519       | Subadult          | M    | China           | 1912, 5, 10  |
| 23  | 31291        | Adult             | M    | -----           | 1910, 10, -- |
| 24  | 295871       | Adult             | M    | -----           | 1915, ----   |
| 25  | 93558        | Adult             | F    | Sorsogon,Luzon  | 1903, 3, 10  |
| 26  | 290393       | Adult             | F    | Pokho (Lookay)  | 1929, 12, 23 |
| 27  | 417516       | Juvenile          | M    | China           | 1901, 5, 10  |
| 28  | 459060       | Juvenile          | M    | Bataan,Phili.   | 1985, 11, 2  |
| 29  | 31290        | Juvenile          | M    | Caviti,Phili.   | 1910, 12, -- |
| 30  | 534809       | Juvenile          | M    | Laguna          | 1895, 1, 10  |
| 31  | 31292        | Juvenile          | F    | Cavite,Phili.   | 1910, 12, 10 |
| 32  | 203128       | Adult             | F    | Tenaserium      | 1924, 1, 23  |
| 33  | 461571       | Adult             | M    | Taipei,Taiwan   | 1956, 3, 22  |
| 34  | 416971       | Juvenile          | M    | Laos            | 1932, 2, 11  |
| 35  | 90437        | Adult             | M    | Negros          | 1898, 3, 9   |
| 36  | 161115       | Juvenile          | F    | Cebu,Phili.     | 1888, 3, 7   |
| 37  | 161117       | Adult             | F    | Siquijor,Phili. | 1888, 2, 25  |
| 38  | 534813       | Subadult          | F    | Mindanao        | 1887, 10, 25 |
| 39  | 534814       | Juvenile          | ---- | Basilan,Phili.  | 1889, 11, 18 |
| 40  | 534815       | Juvenile          | M    | Philippines     | -----        |
| 41  | 96144        | Adult             | F    | Palawan         | 1907, 12, 5  |
| 42  | 534807       | Adult             | M    | Luzon,Phili.    | -----        |
| 43  | 96148        | Adult             | ---- | Palawan         | 1907, 4, 15  |
| 44  | 534812       | Adult             | F    | Snimarg,Phili.  | 1888, 2, 1   |
| 45  | 90438        | Adult             | F    | Negros,Phili.   | 1902, 2, 19  |
| 46  | 459061       | Adult             | M    | Bataan,Phili.   | 1947, 12, 17 |
| 47  | 534811       | Juvenile          | M    | Palawan         | 1888, 1, 3   |
| 48  | 534810       | Adult             | F    | Palawan         | 1887, 11, 8  |
| 49  | 96145        | Adult             | M    | Palawan         | 1907, 12, 20 |

| No. | Specimen No. | Adult or Juvenile | Sex  | Locality         | Date         |
|-----|--------------|-------------------|------|------------------|--------------|
| 50  | 96147        | Juvenile          | M    | Palawan          | 1907, 10, 7  |
| 51  | 96146        | Juvenile          | M    | Palawan          | 1907, 12, 7  |
| 52  | 534820       | Juvenile          | ---- | Labuan,Borneo    | 1887, 11, -- |
| 53  | 534823       | Juvenile          | F    | Benkoken,Borneo  | 1885, 11, 2  |
| 54  | 648226       | Adult             | F    | Batu Patong,Bor. | 1952, 12, 12 |
| 55  | 534824       | Juvenile          | M    | Benkoken,Borneo  | 1885, 10, 22 |
| 56  | 534825       | Adult             | M    | Benkoken,Borneo  | 1885, 11, 14 |
| 57  | 534827       | Juvenile          | M    | Tampassuk,Borneo | 1886, 2, 17  |
| 58  | 534833       | Adult             | F    | Sulu Is.         | 1883, 12, 25 |
| 59  | 534822       | Adult             | F    | Labuan           | 1887, 12, 29 |
| 60  | 49715        | Juvenile          | ---- | -----            | -----        |
| 61  | 534825       | Adult             | F    | Kina Balw,Borneo | 1887, 3, 30  |
| 62  | 534831       | Adult             | F    | Curshome Call    | 1894, 10, 21 |
| 63  | 534816       | Adult             | M    | Talsut Islands   | 1897, 4, 22  |
| 64  | 534819       | Adult             | M    | Labuan Borneo    | 1885, 12, -- |
| 65  | 648225       | Adult             | M    | Pamain           | 1949, 11, 8  |
| 66  | 534818       | Adult             | F    | Labuan,Borneo    | 1885, 11, -- |
| 67  | 534817       | Adult             | M    | Celebes          | 1938, 11, -- |
| 68  | 534829       | Subadult          | ---- | Celebes          | 1938, 11, -- |
| 69  | 298320       | Adult             | F    | N,Celebes        | 1938, 11, -- |
| 70  | 783122       | Adult             | M    | Celebes          | 1938, 11, -- |
| 71  | 783123       | Subadult          | ---- | Celebes          | 1938, 11, -- |
| 72  | 534832       | Subadult          | ---- | Moluccas         | 1894, 11, 20 |
| 73  | 534830       | Adult             | ---- | Celebes          | 1894, 10, 25 |
| 74  | 534828       | Adult             | ---- | N,Celebes        | 1938, 11, -- |
| 75  | 298319       | Adult             | F    | N,Celebes        | 1938, 11, 13 |
| 76  | 534805       | Adult             | F    | Shomotsuke,Japan | -----        |
| 77  | 534804       | Adult             | F    | Yakushima,Japan  | 1904, 10, 25 |
| 78  | 534799       | Adult             | F    | Japan            | 1904, 11, 10 |
| 79  | 534808       | Adult             | M    | Yokohama,Japan   | 1881, 10, 4  |
| 80  | 534806       | Adult             | M    | Shimotsuke,Japan | -----        |

*Butastur teesa*

| No. | Specimen No. | Wing<br>(cm) | Tail<br>(cm) | Mandible<br>(mm) | Tarsus<br>(cm) | Locality      | Date         |
|-----|--------------|--------------|--------------|------------------|----------------|---------------|--------------|
| 1   | 534787       | 30.2         | 17.7         | 19.0             | 6.7            | -----         | 1938, 11, -- |
| 2   | 344154       | 30.8         | 21.0         | 20.20            | 6.9            | SW Mysore     | 1939, 11, 29 |
| 3   | 534789       | 28.8         | 18.5         | 19.5             | 7.2            | -----         | 1938, 11, -- |
| 4   | 98950        | 30.3         | 19.0         | 19.5             | 6.2            | -----         | 1938, 11, -- |
| 5   | 448638       | 30.2         | 20.6         | 21.2             | 6.8            | Pakistan      | 1931, 3, 1   |
| 6   | 776482       | 31.3         | 22.1         | 21.5             | 6.8            | Boniberg      | 1938, 1, 23  |
| 7   | 448636       | 29.4         | 19.7         | 20.0             | 7.3            | Pakistan      | 1931, 2, 14  |
| 8   | 776679       | 28.9         | 18.2         | 21.0             | 6.8            | Pakistan      | 1946, 12, 19 |
| 9   | 534784       | 30.1         | 20.5         | 21.0             | 6.8            | Pakistan      | -----        |
| 10  | 534776       | 28.9         | 19.2         | 21.0             | 7.5            | Panjab        | -----        |
| 11  | 534783       | 29.8         | 19.8         | 20.3             | 7.3            | Scinde        | 1890, 5, 28  |
| 12  | 534779       | 30.3         | 18.6         | 19.5             | 6.6            | India         | -----        |
| 13  | 534782       | 29.4         | 19.3         | 21.5             | 6.9            | Hyderabad     | 1887, 2, 24  |
| 14  | 534781       | 28.2         | ----         | 19.0             | 7.1            | India         | 1893, 2, 1   |
| 15  | 776680       | 29.3         | 17.3         | 19.0             | 6.7            | -----         | 1847, 12, 11 |
| 16  | 534788       | ----         | ----         | 18.0             | 6.8            | -----         | -----        |
| 17  | 534775       | 28.0         | 18.4         | 21.0             | 6.8            | India         | -----        |
| 18  | 461934       | 28.9         | 19.3         | 18.0             | 6.4            | Bombay, India | 1938, 1, 26  |
| 19  | 534785       | 26.8         | 18.6         | 19.1             | 6.1            | -----         | -----        |
| 20  | 534778       | 29.1         | 18.4         | 20.8             | 6.8            | Nepal         | -----        |
| 21  | 461925       | 29.6         | 19.3         | 20.0             | 6.7            | India         | 1946, 2, 21  |
| 22  | 778608       | 28.5         | 19.7         | 19.5             | 6.9            | W. Ghati      | 1955, 11, 2  |
| 23  | 534786       | 29.2         | 20.2         | 20.08            | 6.2            | Madras        | -----        |
| 24  | 388559       | 28.5         | 18.2         | 20.5             | 7.0            | India         | 1953, 9, 23  |
| 25  | 448637       | 29.3         | 18.3         | 20.5             | 6.6            | Punjab        | 1931, 2, 1   |
| 26  | 534790       | 29.2         | 19.7         | 20.0             | 6.6            | India         | -----        |
| 27  | 534774       | 28.9         | 18.2         | 20.0             | 7.2            | Pakistan      | 1901, 4, 2   |
| 28  | 534780       | 29.4         | 17.5         | 19.5             | 7.05           | India         | -----        |
| 29  | 534777       | 29.0         | 17.8         | 21.0             | 6.8            | India         | -----        |

*Butastur liventer*

| No. | Specimen No.  | Wing<br>(cm) | Tail<br>(cm) | Mandible<br>(mm) | Tarsus<br>(cm) | Locality    | Date        |
|-----|---------------|--------------|--------------|------------------|----------------|-------------|-------------|
| 1   | 298324        | 29.0         | 17.8         | 21.0             | 6.5            | -----       | 1930, 5, 25 |
| 2   | 298323        | 27.5         | 16.0         | 20.0             | 7.5            | -----       | -----       |
| 3   | 534839        | 27.6         | 18.0         | ----             | 7.0            | Lower Burma | 1893, 3, -- |
| 4   | 534840, Chick | 14.6         | 6.4          | ----             | 6.6            | Lower Burma | 1893, 4, -- |
| 5   | 534837        | 27.6         | 16.2         | 21.0             | 7.0            | Celebes     | 1895, 4, -- |
| 6   | 534838        | ----         | 17.5         | 20.5             | 6.75           | Thayelmyo   | 1911, 6, 18 |
| 7   | 298321        | 28.0         | 16.0         | 19.0             | ----           | -----       | 1930, 5, 27 |
| 8   | 298322        | 29.4         | 16.9         | ----             | 7.3            | -----       | 1930, 8, 12 |
| 9   | 534834        | 28.3         | 17.3         | 21.0             | 7.9            | Celebes     | 1895, 4, -- |
| 10  | 534836        | 29.3         | 16.7         | 21.0             | 7.8            | Celebes     | 1898, 4, -- |
| 11  | 298325        | ----         | 16.2         | 21.0             | 7.8            | -----       | 1930, 8, 12 |
| 12  | 534835        | 28.5         | 16.5         | 21.0             | 7.4            | Celebes     | 1895, 4, -- |

*Butastur rufipennis*

| No. | Specimen No. | Wing<br>(cm) | Tail<br>(cm) | Mandible<br>(mm) | Tarsus<br>(cm) | Locality     | Date         |
|-----|--------------|--------------|--------------|------------------|----------------|--------------|--------------|
| 1   | 534855       | 31.6         | 20.3         | 19.0             | 6.3            | -----        | 1918, 1, 31  |
| 2   | 157857       | 29.7         | 17.5         | 19.0             | 6.3            | -----        | 1911, 2, 1   |
| 3   | 534844       | 30.0         | 19.2         | 19.0             | 6.3            | Somaliland   | 1920, 9, 22  |
| 4   | 196753       | 31.6         | 20.0         | 19.0             | 6.2            | Sudan, Egypt | 1922, 3, 3   |
| 5   | 534849       | 32.7         | 21.4         | 20.0             | 7.1            | Somaliland   | -----        |
| 6   | 157859       | 31.8         | 18.2         | 21.0             | 6.8            | Zaire        | 1912, 3, 8   |
| 7   | 157856       | 31.8         | 18.2         | 19.0             | 6.7            | Niangaro     | 1911, 1, 13  |
| 8   | 534846       | 31.7         | 19.5         | 20.0             | 6.9            | Somaliland   | 1918, 10, 15 |
| 9   | 534842       | 29.3         | 18.9         | 19.0             | 6.0            | Ethiopia     | 1903, 7, 2   |
| 10  | 534848       | 30.0         | 18.5         | 22.0             | 6.4            | Somaliland   | -----        |
| 11  | 534843       | 27.2         | 16.9         | 20.0             | 6.7            | Somaliland   | 1910, 9, 22  |
| 12  | 157860       | 31.3         | 20.0         | 19.0             | 6.9            | Zaire        | 1913, 2, 1   |
| 13  | 157858       | 32.1         | 19.2         | 20.0             | 6.6            | Taradje      | 1912, 1, 31  |
| 14  | 534847       | 30.4         | 20.3         | 19.0             | 7.0            | Somaliland   | 1917, 10, 24 |

| No. | Specimen No. | Wing<br>(cm) | Tail<br>(cm) | Mandible<br>(mm) | Tarsus<br>(cm) | Locality     | Date         |
|-----|--------------|--------------|--------------|------------------|----------------|--------------|--------------|
| 15  | 157854       | ----         | ----         | ----             | ----           | Taradje      | 1912, 1, 31  |
| 16  | 534841       | ----         | ----         | ----             | ----           | Niegria      | 1922, 4, 30  |
| 17  | 819469       | ----         | ----         | ----             | ----           | -----        | 1973, 8, 20  |
| 18  | 534845       | ----         | ----         | ----             | ----           | Somaliland   | 1917, 10, 10 |
| 19  | 534851       | ----         | ----         | ----             | ----           | Central Afr. | 1850, 8, 24  |
| 20  | 534853       | ----         | ----         | ----             | ----           | Khartoum     | 1850, 8, 2   |
| 21  | 534852       | ----         | ----         | ----             | ----           | Khartoum     | 1850, 10, 11 |
| 22  | 534850       | ----         | ----         | ----             | ----           | Kahartoum    | 1850, 8, 20  |
| 23  | 534854       | ----         | ----         | ----             | ----           | Kahartoum    | 1850, 8, 20  |

#### 4 Delaware Museum

##### *Butastur indicus*

| No. | Specimen No. | Sex  | Locality | Date         |
|-----|--------------|------|----------|--------------|
| 1   | 14874        | M    | -----    | 1971, 11, 13 |
| 2   | 14873        | F    | -----    | 1971, 11, 15 |
| 3   | 14872        | F    | -----    | 1971, 12, 8  |
| 4   | 28685        | M    | -----    | 1972, 3, 5   |
| 5   | 10092        | F    | Palawan  | 1971, 3, --  |
| 6   | 10204        | F    | Palawan  | 1971, 3, --  |
| 7   | 14452        | M    | Polillo  | 1972, -----  |
| 8   | 1829         | M    | -----    | 1957, 10, 16 |
| 9   | 10369        | M    | -----    | 1971, 1, --  |
| 10  | 25893        | M    | -----    | 1904, 8, --  |
| 11  | 2918         | F    | Laguna   | 1969, 1, --  |
| 12  | 68834        | M    | Negros   | 1927, 11, 22 |
| 13  | 55924        | M    | Laguna   | 1975, 10, -- |
| 14  | 55925        | ---- | Laguna   | 1975, 10, -- |
| 15  | 43697        | F    | -----    | -----        |
| 16  | 68360        | M    | -----    | 1980, 1, --  |

| No. | Specimen No. | Sex  | Locality | Date         |
|-----|--------------|------|----------|--------------|
| 17  | 55926        | F    | -----    | 1974, 1, --  |
| 18  | 46390        | M    | -----    | 1972, 4, --  |
| 19  | 35892        | ---- | Louzon   | 1929, -----  |
| 20  | 35891        | F    | Davao    | 1929, -----  |
| 21  | 44871        | M    | Laguna   | 1975, 3, --  |
| 22  | 55922        | ---- | Laguna   | 1975, 10, -- |
| 23  | 55923        | F    | Laguna   | 1974, 1, --  |

5 Chicago Museum

*Butastur indicus*

| No. | Specimen No. | Sex  | Locality       | Date         |
|-----|--------------|------|----------------|--------------|
| 1   | 281574       | F    | Sulawesi       | 1931, 1, 3   |
| 2   | 226265       | ---- | Nigata,Japan   | -----        |
| 3   | 226266       | ---- | Nigata,Japan   | -----        |
| 4   | 226263       | M    | Miyakejima,Jap | 1953, 5, 23  |
| 5   | 226264       | F    | Miyakejima,Jap | 1952, 6, 25  |
| 6   | 89899        | M    | Laos           | 1931, 11, 26 |
| 7   | 281575       | M    | Malaysia       | 1986, 2, 18  |
| 8   | 281576       | ---- | Malaysia       | 1887, 12, -- |
| 9   | 19891        | F    | Cagayan,Phili. | 1903, 10, 25 |
| 10  | 11084        | F    | Guimaras,Phi.  | 1888, 1, 7   |
| 11  | 258771       | F    | Cagayan,Phili. | 1960, 4, 21  |
| 12  | 265413       | F    | Camarines,Phi. | 1961, 4, 23  |
| 13  | 252927       | M    | Luzon,Phili.   | 1959, 5, 6   |
| 14  | 252928       | F    | Luzon,Phili.   | 1939, 4, 26  |
| 15  | 252929       | F    | Luzon,Phili.   | 1959, 5, 1   |
| 16  | 19890        | M    | Mindanao,Phi.  | 1904, 11, 3  |
| 17  | 184013       | F    | Mt.Apo,Phili.  | 1946, 11, 6  |
| 18  | 185135       | F    | Mindanao,Phi.  | 1947, 2, 28  |

| No. | Specimen No. | Sex  | Locality        | Date         |
|-----|--------------|------|-----------------|--------------|
| 19  | 184014       | F    | Mindanao, Phi.  | 1946, 12, 7  |
| 20  | 184015       | F    | Davao, Phili.   | 1946, 11, 28 |
| 21  | 185136       | F    | Davao, Phili.   | 1947, 3, 6   |
| 22  | 210844       | M    | Mindro, Phili.  | 1951, 1, 11  |
| 23  | 185442       | F    | Negros, Phili.  | 1947, 12, 21 |
| 24  | 185443       | F    | Negros, Phili.  | 1947, 12, 23 |
| 25  | 246872       | ---- | Negros, Phili.  | 1956, 12, 23 |
| 26  | 184622       | M    | Palawan, Phili. | 1947, 3, --  |
| 27  | 184623       | M    | Palawan, Phili. | 1947, 3, 7   |
| 28  | 80531        | M    | Thailand        | 1927, 12, 12 |
| 29  | 77496        | M    | Vietnam         | 1929, 2, 28  |

6 British Museum

*Butastur indicus* (Juvenile)

|        |    |
|--------|----|
| Female | 13 |
| Male   | 15 |

*Butastur indicus* (Adult)

|        |    |
|--------|----|
| Female | 42 |
| Male   | 25 |

*Butastur indicus* (Sex unknown)

|          |    |
|----------|----|
| Juvenile | 39 |
| Adult    | 27 |

7 Number of the specimens of *Butastur indicus* examined

|                         | Juve. |    | Adult |    | Sex unknown |       | Juve. or Ad. unknown |       |
|-------------------------|-------|----|-------|----|-------------|-------|----------------------|-------|
|                         | M     | F  | M     | A  | Ad.         | Juve  | M                    | F     |
| Smithsonian Institution | 10    | 16 | 9     | 11 | 1           | 0     | -----                | ----- |
| British Museum          | 15    | 13 | 25    | 42 | 39          | 27    | -----                | ----- |
| Harvard University      | 2     | 6  | 10    | 6  | 3           | 1     | -----                | ----- |
| American Museum         | 14    | 11 | 21    | 22 | 4           | 6     | -----                | ----- |
| Delaware Museum         | --    | -- | --    | -- | -----       | ----- | 11                   | 9     |
| Chicago Museum          | --    | -- | --    | -- | -----       | ----- | 10                   | 13    |
| Sum                     | 41    | 46 | 65    | 81 | 47          | 34    | 21                   | 22    |

8 Ratio of the specimens of juvenile bird and adult bird examined  
(*Butastur indicus*)

| Juvenile Bird  | Adult Bird     | Sum |
|----------------|----------------|-----|
| 121<br>(38.5%) | 193<br>(61.5%) | 314 |

9 Ratio of the specimens of female bird and male bird examined  
(*Butastur indicus*)

| Male Bird    | Female Bird  | Sum |
|--------------|--------------|-----|
| 127<br>(46%) | 149<br>(54%) | 276 |

Fig. 1 The distribution of the Genus *Butastur* in the world.  
(L. Brown and D. Amadon, 1968. modified)

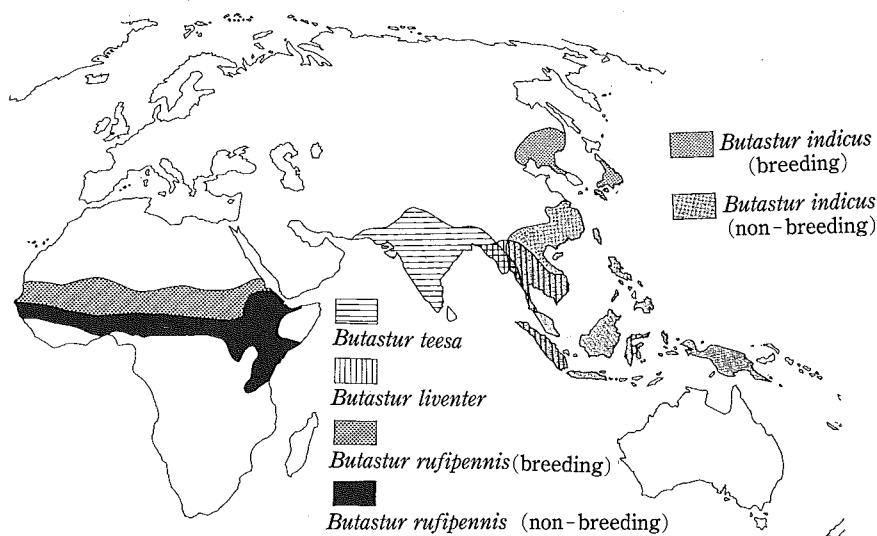


Photo. 1 *B. liventer*, *B. teesa*, *B. rufipennis* and *B. indicus*

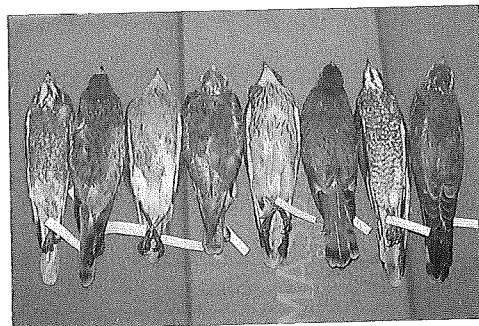


Fig. 2 The distribution of *Butastur teesa*.



Photo. 2 *Butastur teesa*

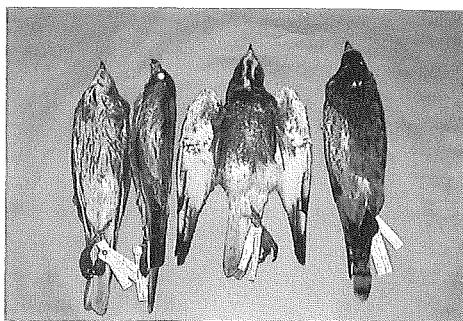


Fig. 3 The distribution of *Butastur indicus*.



Photo. 3 *Butastur indicus* (Adult and chick).

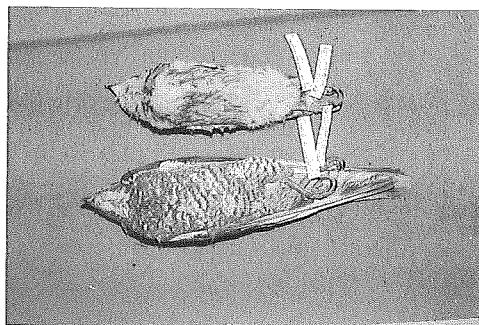


Fig. 4 The distribution of *Butastur liventer*.



Photo. 4 *Butastur liventer*.

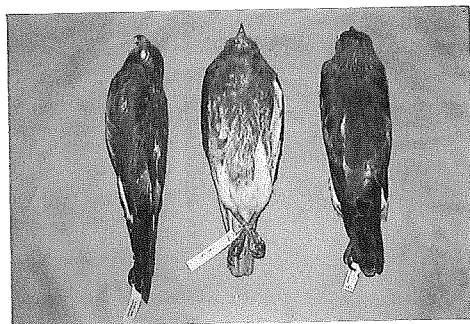


Fig. 5 The distribution of *Butastur rufipennis*.

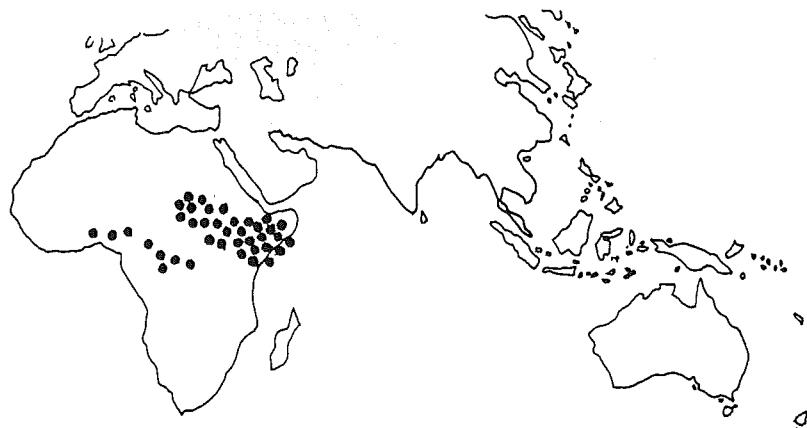
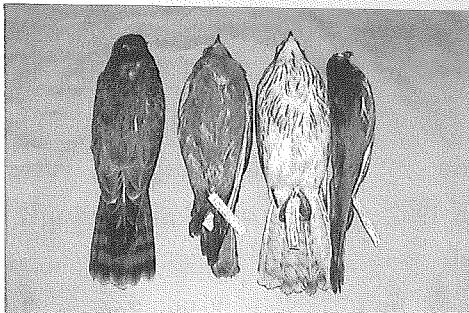


Photo. 5 *Butastur rufipennis*.



### Acknowledgements

I wish to express hearty thanks to the Human Resources Development Foundation of Okinawa Prefectural Government for giving me the opportunity to study at the Smithsonian Institution. Also I am thankful to Dr. Hidetoshi Ohta, Department of Biology, University of the Ryukyus, Dr. Kiyoshi Yamazato, Depertment of Biology, University of the Ryukyus, Dr. Sadao Ikehara, Honorary Professor, University of the Ryukyus and Mr. Kzuo Okamura, the former principal of Miyako Senior High School for their nice advice and recommendations to the Smithsonian Institution.

I gratefully acknowledge Dr. Storrs Olson, Dr. Richard Zusi and Dr. Richard Banks, curators at the Ntional Museum of Natural History Smithsonian Instirution, Charles A. Ross, Mr. J. Phillip Angle, Mr. Roberto Phillips and Mrs. Carla Dove, museum support staff at National Museum of Natural History Smithsonian Institution and all other staff for their thoughtfull criticism of this Reserch Report and kind help and for introducing me to the other Museums of Natural History.

I am especially appreciative to Mr. Charless A. Ross, museum specialist, for allowing me to stay at his home for three months, to Mrs. Carla Dove, museum technician, for her help in checking my English and typing and Ms. Mayumi Miyahira Okinawa Prefectural Museum staff, for her help in drawing the maps.

### References

- (1) Arthur A Allen, 1961. The book of bird life (Second Edition). Davan Nostrand Company, Inc. P.133-139.

- ( 2 ) Austin L. Rand & E. Thomas Gilliard, 1965. Handbook of New Guinea Birds. Weidenfeld and Nicolson. P. 80-81.
- ( 3 ) B. E. Smythies. B. A., F. L. S (Third Edition), 1986. The Birds of Burma. P. 59-60.
- ( 4 ) Birds of the World 1969. IPC Magazines LTD. Part 6 Vol. 2, P. 485
- ( 5 ) Cheng Tso-Hsin 1987. A Synopsis of the Avifauna of China. Science Press Beijing P. 93-95
- ( 6 ) Dento to Gendaisya, 1974. Iwasaki Takuji Zensyu (Ishigaki-jima kikou Hen).
- ( 7 ) H. Elliott McClure, 1974, Migration and Survival of Birds of Asia U. S Army Component SEATO Medical Research Laboratory Bangkok Thailand. P. 124-125, P. 367-369.
- ( 8 ) Herbert Friedmann, 1964, Evolutionary Trends in the Avian Genus *Clamator* Smithsonian Miscellaneous Collections Volume 146 No. 4, P. 75-79.
- ( 9 ) J. G. Vanmarle & Karel H. Voous, 1988. The Birds of Sumatra, British Ornithologist Union P. 74-75.
- (10) Jyo Hou Kou, 1982, Cyuzan Denshin-roku, Gengyousha.
- (11) Kasumori Kugai, 1979a, Kyoudo no shizen, Hirara City Kyouiku Iinkai, P. 108-111.
- (12) -----, 1981b, Miyako gunto no sekitsui-doubutsu to doubutsu tennen-kinenbutsu, Hirara shi no bunkazai, P. 6-14.
- (13) -----, 1983c, The Migration of the Gray-faced Buzzard-eagle and the Miyako Islands. Okinawa seibutsu kyouiku kenkyu kaishi Vol. 16. P. 6-14.
- (14) -----, 1988d, Nansei shoto ni okeru sashiba no aki no watari to ettou sashiba no sekatsu, Okinawa Kenritsu kyouiku sentar kensyu hokoku syu-roku, Vol. 76, P. 193-204.
- (15) -----, 1991e, A basic study of migratory birds, Overseas researchers report, Human Resources Development Foundation of Okinawa Prefectural Government.
- (16) Leslie Brown and Dean Amadon, 1968, Eagles, Hawks and Falcons of the World, Vol. 2, P. 537-544.
- (17) Lynx Edicions Bird Life International 1994, Handbook of the Birds of the World Vol. 2.

## 久米島におけるワシタカ類とハヤブサ類

久貝 勝盛・嵩原 建二・瀬名波 任

(沖縄県立博物館)

Hawks, Eagles, Vultures and Falcons on Kume Island, the Ryukyu Archipelago

Katsumori KUGAI, Kenji TAKEHARA and Tsutomu SENAHA

(Okinawa Prefectural Museum)

The order FALCONIFORMES in the world is composed of 5 families and 285 species. They inhabit every part of the world except the South Pole. They include family *Cathartidae*, 7 species, family *Accipitridae*, 218 species, family *Sagittariidae*, 1 species and family *Falconidae*, 60 species (1991, Sasagawa). In Japan, there are 3 families and 29 species. On Okinawa, there are two families; *Accipitridae* and *Falconidae* with 21 and 5 species recorded respectively (1991, Okinawa Bird Study Society).

Among them, on the Okinawa islands, *Pandion haliaetus*, *Buteo buteo*, *Buteo lagopus*, *Accipiter gularis*, *Butastur indicus*, *Pernis ptilorhynchus*, *Accipiter soloensis*, *Falco peregrinus*, *Falco subbuteo* and *Falco tinnunculus* have been observed as winter visitors or transients. On the Okinawa islands, only subspecies, *Accipiter gularis iwasakii* and *Spilornis cheela* (only Yaeyama islands) are breeding.

Hawks and Eagles have also been recorded as rare winter visitors or accidental visitors on the Okinawa islands. The different species recorded on Okinawa are as follows; *Buteo hemilasius*, *Haliaeetus albicilla*, *Pernis ptilorhynchus*, *Milvus migrans*, *Accipiter gentilis*, *Accipiter nisus*, *Spizaetus nipalensis*, *Aquila clanga*, *Aquila heliaca*, *Aegypius monachus*, *Circus cyaneus*, *Circus melanoleucus*, *Circus spilonotus*, *Falco columbarius* and *Falco naufragi*.

Until recently the only hawks and eagles that had been recorded on Kume island were *Butastur indicus*. But with this examination, *Pandion haliaetus*, *Accipiter soloensis*, *Accipiter gularis*, *Buteo buteo*, *Falco tinnunculus*, *Falco subbuteo* and *Falco peregrinus* were

also found.

The authors examined hawks and eagles, especially the migration of the *Accipietr soloensis* and the wintering habits of the *Butastur indicus* on Kume island.

Concerning the autumnal migration of the *Butastur indicus*, the authors used the late Mr. Nakayoshi's private letter.

世界のワシタカ類は5科285種で南極を除いた各地に生息している。その内訳はコンドル科7種、タカ科218種、ヘビクイワシ科1種、ハヤブサ科60種で、日本では3科29種であるという(1991、笹川)。沖縄ではワシタカ科21種、ハヤブサ科5種の合計26種が記録されている(1991、沖縄野鳥研究会)。そのうち、主に旅鳥や冬鳥として沖縄で見られるものにミサゴ、ノスリ、ケアシノスリ、ツミ、サシバ、ハチクマ、アカハラダカ、ハヤブサ、チゴハヤブサ、チョウゲンボウ等がある。沖縄で繁殖するのは亞種のリュウキュウツミとカンムリワシ(八重山諸島のみに繁殖)だけである。それ以外に、沖縄で記録のあるオオノスリ、オジロワシ、ハチクマ、トビ、オオタカ、ハイタカ、クマタカ、カラフトワシ、カタジロワシ、クロハゲワシ、ハイイロチュウヒ、マダラチュウヒ、チュウヒ、コチョウゲンボウ、ヒメチョウゲンボウ等は迷鳥またはまれに見られる冬鳥である。

これまで久米島で記録されたワシタカ類はサシバのみであったが、今回の調査でミサゴ、アカハラダカ、ツミ、ノスリ、チョウゲンボウ、チゴハヤブサ、ハヤブサ等が新たに加わった。

筆者等は1987年11月1日～5日、1993年9月11日～9月13日、1994年3月16日～3月18日、1994年9月15日～17日、1994年12月26日～1994年12月28日の調査で久米島におけるワシタカ類、特にアカハラダカの渡りの状況とサシバの越冬状況の概要が把握できたので報告する。なお、サシバの渡りに関しては一部故仲吉列雄氏からの私信(1987)によった。

### サシバ *Butastur indicus* とは

分類学上は脊椎動物門、鳥綱、ワシタカ目、ワシタカ科、サシバ属に属する。秋田県以南に夏鳥(繁殖のため、春に日本に渡り、秋に越冬のために日本を去る鳥)として渡来し、低山や丘陵地帯の森林で繁殖する。繁殖は年に一回で卵は2～4個産む。抱卵日数は約30日である。

雄は赤銅色の羽色で頭部が灰褐色を示し、雌は灰色味がなく、頭部も羽色も暗褐色である(清棲、1952; 山階、1980)。雌の方が雄に比べて若干大きい。幼鳥は目の色が黒みが

かった青色ないし青褐色をしているが成長するにつれて赤みの強い黄色やあざやかな黄色に変化する。また胸の縦じまも横じまに変化する。(写真1、2)。

国外では中国東北部、朝鮮半島の一部で繁殖し、大半は華南や東南アジアで冬を越す。

(図1) 久米島を含む沖縄の島々に大群で立ち寄るのは秋の渡りの時である。

なお、琉球で初めてサンバが記録されたのは中山伝信録(1721)で科学的に記録されたのは岩崎卓爾(1927)の石垣島気候編であるという。

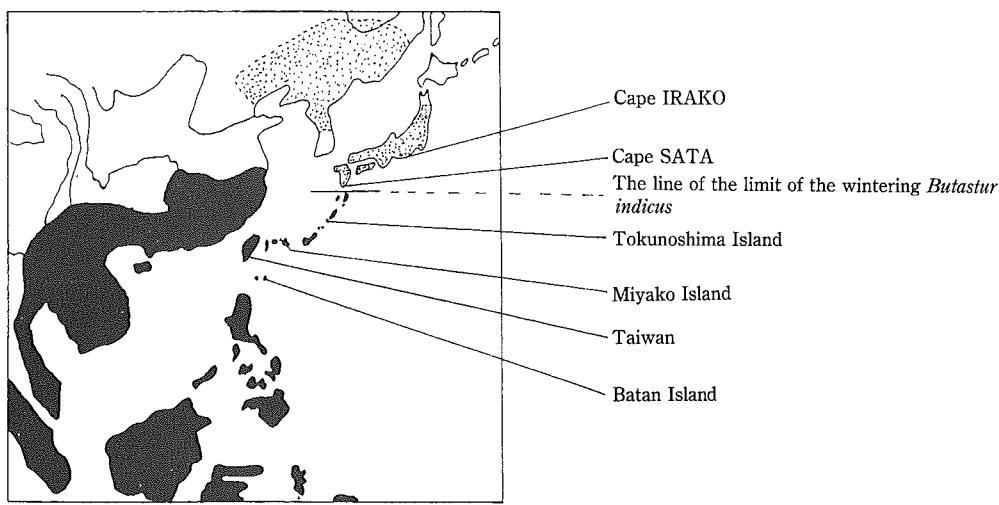
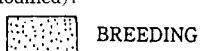


Fig.1 : Breeding and Non-Breeding Distribution of  
*Butastur indicus* and Concentrating Places  
During Migration (Wild Bird Society of Japan  
1982. Modified).



BREEDING



NON-BREEDING



Photo. 1 . *Butastur indicus*  
(Gray-faced Buzzard Eagle)  
Juvenile Bird



Photo. 2 . *Butastur indicus*  
(Gray-faced Buzzard Eagle)  
Adult Bird

## サシバの渡り

繁殖地の日本列島においては、8月下旬から9月中旬にかけて渡りの準備が始まる。この頃には数羽のサシバが低山の上空を忙しそうに飛び回っているのをよく見かける。渡りの衝動が高まっていくものと思われる。

9月下旬になると本土の各地からサンバが南下したという情報に入る。渡りのコースについては、まだまだ不明な点が多いがこれらのサシバの一部は日本における第一番目の集団渡来地「鷹一つ見つけてうれし伊良湖岬」と芭蕉が詠んだ愛知県の伊良湖岬を通り、第二番目の集団渡来地、鹿児島県の佐多岬に集まるものと思われる。本州の中部地方での渡りのピークは10月5日～10日の間にある。沖縄諸島では10月12日～18日の間にある。

久米島を含む沖縄諸島にサシバの大群が渡来するのは九州付近にかかっていた寒冷前線が本州の方へ移動し、大陸の強い高気圧が南西諸島を覆う時のようなである。こういう気圧配置の時には佐多岬の風向も北寄りの風に変わりサシバの渡りを助ける。

ところで、本土での最後の合流地点、佐多岬を飛び立って南下するサシバは気象条件が良ければ一気に沖縄諸島まで飛来するのか。この点があまり調査されず不明であったが最近の調査で徳之島とその周辺の島々も集団渡来地であるという事がわかつてきた。

なお、サンバの平均時速はその日の気象条件にもよるが大体40Kmで一日450Km前後飛行すると言われている。

また、渡りの幅は約120Kmでその東端は沖縄島であり、西端は久米島であるという。メインの流れは沖縄本島を中心とする南西諸島沿である（図2）。

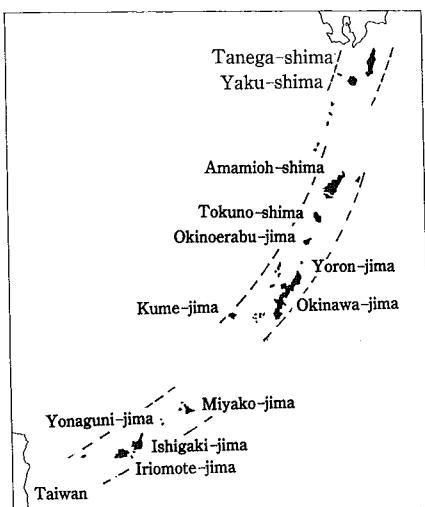


Fig.2 : The distribution of the wintering *Butastur indicus* (Part of shadow) and the width of the migration (dotted line).

故仲吉氏（1987）によると久米島アーラ岳周辺における秋のサシバの飛来時間帯はいずれも14:00～17:00に集中しているとの事であった。久米島アーラ岳周辺で比較的多く見

られた1987年10月11日（30羽）、10月18日（60羽）の両日、サシバの集団飛来地で知られる宮古島では約300羽がカウントされている。単純比較はできないが、久米島に飛来するサシバの数はさほど多くはない。それは久米島が渡りのヘリの部分にあたるからだろうと考えられる。

### 久米島における越冬サシバの分布

越冬サシバとは、秋の渡り時に最終越冬地の東南アジアまで南下せずに渡りの途中の島々で翌年の三月まで生活する個体のことである。これは種子島（緯度 $30^{\circ} 50'$ ）以南でよく見られる。南西諸島で越冬するサシバの数は3,000羽前後はあるものと推定される。これらの越冬サシバは春の渡り時（3月下旬～4月上旬）に繁殖地に戻る。久米島における越冬サシバの分布状況は図3のとおりであった。

久米島では越冬サシバの個体数はその年によっても、いくらか異なるが、1987年11月1日～5日の調査では15羽、1994年3月16日～18日の調査では21羽、12月18日～20日の調査では18羽、12月26日～12月28日の調査では20羽が確認された。幼鳥と成鳥との比率は1987年11月1日～5日の調査では0:15（全部成鳥）、1994年3月16日～18日の調査では0:21（全部成鳥）、1994年12月18日～20日の調査では4:14（幼鳥22%、成鳥78%）、1994年12月26日～28日の調査では1:19（幼鳥5%、成鳥95%）で圧倒的に成鳥が多かった（表1）。

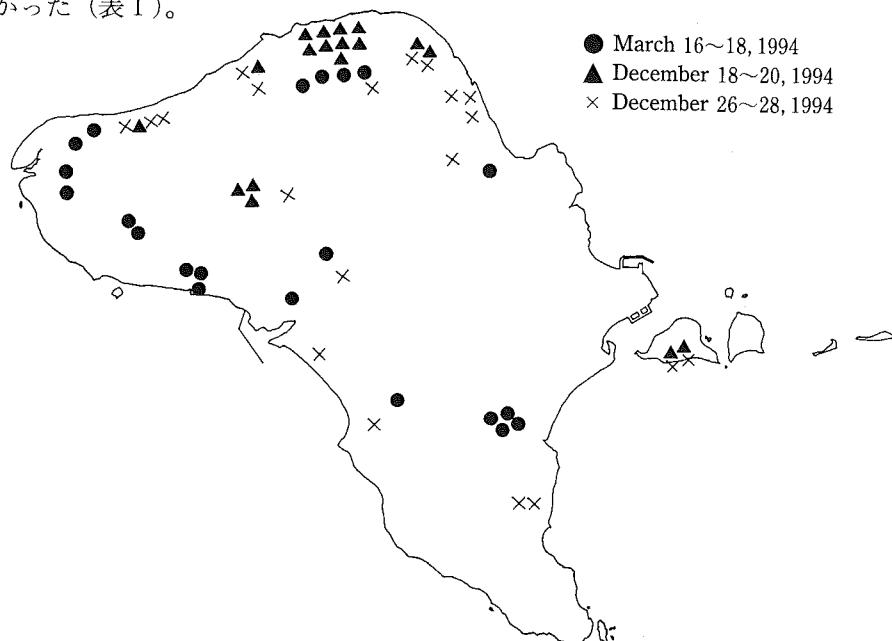


Fig. 3 : The distribution of the wintering *Butastur indicus* in Kume Island.

|                   | Juvenile Individuals | Adult Individuals | Sum |
|-------------------|----------------------|-------------------|-----|
| 1 ~ 5 , Dec, 1987 | 0                    | 15                | 15  |
| 16~18, Mar, 1994  | 0                    | 21                | 21  |
| 18~20, Dec, 1994  | 4                    | 14                | 18  |
| 26~28, Dec, 1994  | 1                    | 19                | 20  |

Table. 1 . The ratio of Adult bird and Juvenile bird. Showing the number of wintering birds has been increasing gradually day by day. The migratory urge gradually grows more intense.

表1からもわかるように、毎日、月毎に個体数が増加している。これは、もうすでに小規模な春の渡りが始まっている事を示唆している。1994年12月18日～20日、幼鳥は4羽観察されたが、1994年12月26日～28日には1羽しか観察されていない。これは幼鳥が先に移動するという事なのだろうか。

### 越冬サシバの生活

越冬サシバの生活は実にノンビリしており、朝は6時30分頃から7時頃にかけて自分の狩場にでてくる。狩場近くの電線か木の上で獲物が現れるのじっと待つ。餌を採るのは午前9時頃から午後1時頃の間に集中する。

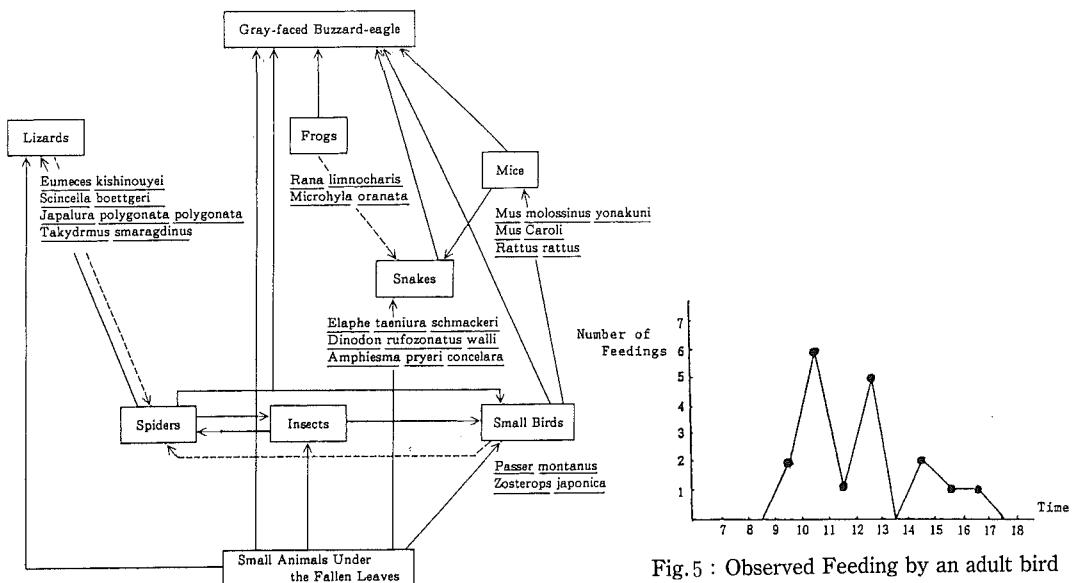


Fig.4 : *Butastur indicus* (Gray-Faced Buzzard-Eagle) and Food Chain.

畠周辺を狩場とするサシバはバッタ類、ハツカネズミ類を森林周辺を狩場とするサシバはトカゲ、カエル、ヘビ類を主な餌とする。補食回数は餌の種類にもよるが大体1日10～20回である。宮古島ではサトウキビ畠でセスジツチイナゴを1日15匹も補食しているサシバを観察した。

越冬サシバは1ha前後のテリトリーを作つて自分の狩場を守つているが、テリトリーの解消はわりと早いようである。1月の中旬頃にはすでにテリトリーを解消している個体もある。

#### アカハラダカ *Accipiter soloensis* とは

朝鮮半島や中国東北部で繁殖し、日本では渡りの時に琉球列島や男女群島を通過し（高野1980）、冬期はマライ諸島、ニューギニアなどに渡る（小林1980）。台湾では留鳥である。下面は白く胸から腹にかけては赤褐色である。虹彩は雄では紅色、雌では黄色である。幼鳥の胸及び腹部には大きめの縦斑が出る（黒田1984）。水田地帯を生活の場とし、カエル、トカゲ、バッタ等を主な餌としている。水田近くの松林に営巣する。島根県で1989年6月に営巣したが、繁殖に失敗した1件あるのみ（1993、池長）で、これまで日本では記録は少なく迷鳥として扱われていた。

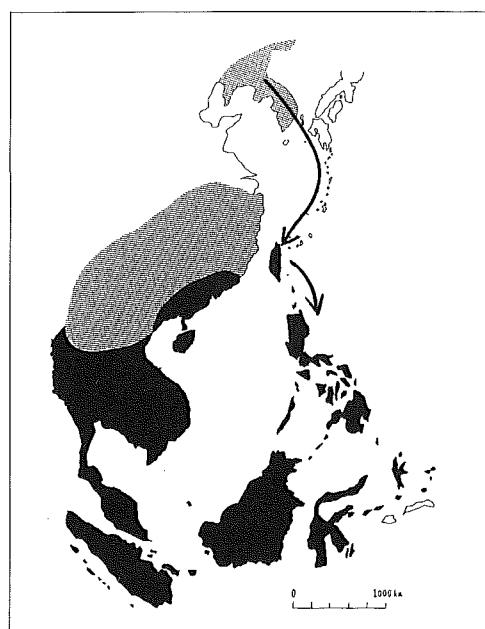
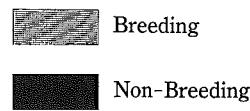


Fig.6 : Breeding and Non-Breeding Distribution of *Accipiter soloensis* and migration route.  
(Handbook of the Birds of the world  
Vol.2, 1994, modified)



## アカハラダカ *Accipiter soloensis* の渡り

アカハラダカの渡りについては1980年9月に宮古島で山本晃氏等によって230羽の群れが確認され、その後の調査でサシバと同じくらいの規模で南西諸島を渡るという事が確認されている。サシバは朝6時頃には次の目的地へ向かって一斉に飛び立つがアカハラダカは7時30分頃から8時30分頃にかけて飛び立つ。1993年9月11日～13日、1994年9月15日～17日の調査による久米島からのアカハラダカの渡去状況は図7、8のとおりであった。

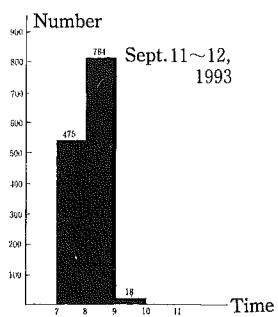


Fig.7 : Departure of *Accipiter soloensis* in the morning from kume island.

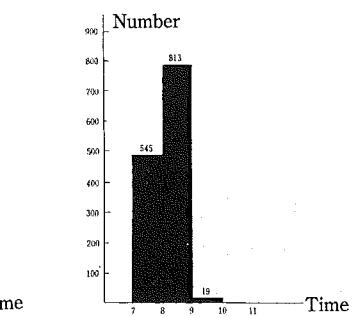
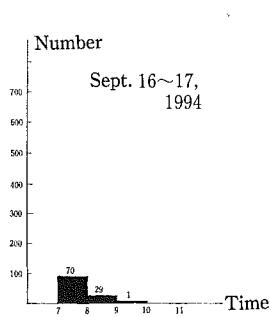


Fig.8 : Total Number of *Accipiter soloensis* departed on 11～12 Sept. 1993 and 16～17 Sept. 1994 by Time of Day (Hour).

## その他のワシタカ類

### ミサゴ *Pandion haliaetus*

1994, 3, 17/1994, 12, 26. 真謝海岸、比屋定海岸、謝名堂海岸。冬鳥として毎年1～2羽見られる。ホバリングしながら足から水に突っ込み魚を捉える。

### ツミ *Accipiter gularis*

1987, 11, 1. アーラ岳周辺、ダルマ山周辺。個体数はきわめて少ない。冬鳥。小鳥類(スズメ、メジロ等)を襲って食べる。

### ノスリ *Buteo buteo*

1987, 11, 1. アーラ岳周辺、ダルマ山周辺の開けた所。たまに旅鳥または冬鳥として見られる。ネズミ類、トカゲ類を食する。

### チョウゲンボウ *Falco tinnunculus*

1994, 12, 26. 宇江城。個体数は少ない。冬鳥として毎年2～3羽見られる。サトウキビ畑周辺でホバリングしながらねらいを定め急降下して昆虫類、時にはネズミ類も捉える。

### チゴハヤブサ *Falco subbuteo*

1994, 3, 16. 清水小学校近く。たまに旅鳥として春秋の渡りの時期にみられる。個体数はきわめて少ない。小鳥類を食する。

### ハヤブサ *Falco peregrinus*

1994, 12, 27. 仲地。まれに見られる旅鳥または冬鳥。はばたきながら直線的に飛ぶ。翼をすばめて急降下して小鳥類やときにはカモ類を襲ったりする。

おわりに

この調査を行うにあたり久米島仲里村、具志川村の両教育委員会、故仲吉列雄氏のご家族の皆様方には大変便宜をはかっていただきました。また、当博物館の宮平真由美、西村晃子両氏には、資料整理、図版作成等でお世話になった。心から感謝の意を表したいと思います。

### 参考文献

- (1) BROWN, L., D. AMADON, 1968. *Eagles, Hawks and Falcons of the World*. London, Country Life Books.
- (2) 伝統と現代社、1974。岩崎卓爾一巻全集（石垣島気候編）。
- (3) 徐葆光、原田禹雄訳注、1982。完訳「中山伝信録」、言叢社。
- (4) 清棲幸保、1952。日本鳥類大図鑑 2、講談社。
- (5) 久貝勝盛、1983。サシバ *Butastur indicus* の渡りと宮古島、沖生教研会誌（16）：6-14。
- (6) ———、1986。The Life Cycle of the Gray-faced Buzzard-eagle. 国外留学生研究報告集。沖縄県人材育成財団。Vol. 1 : 129-170.
- (7) ———、1988。南西諸島におけるサシバの秋の渡りと越冬サシバの生活、沖縄県立教育センター研修報告集録、第30期 理科76号 : 193-204。
- (8) ———、1993。A BASIC STUDY OF MIGRATORY BIRDS. 国内・国外派遣研究員研究報告書、第2号 : 7-37。
- (9) 小島幸彦、1982。サシバ *Butastur indicus* のテリトリー行動。Tori, 30:117-147.
- (10) 岡 徹、1985。サシバが飛来する時刻からの考察・沖生教研会誌 18:15-19。
- (11) Wild Bird Society of Japan, 1982. A Field Guide To The Birds of Japan.
- (12) 山階芳磨、1980。日本の鳥類とその生態、2. 復刻版。東京、出版科学総合研究所。

- (13) 高野伸二、1980。野鳥識別ハンドブック、日本野鳥の会
- (14) 小林桂助、1980。原色日本鳥類図鑑、改訂版、保育社
- (15) 山本 晃、1981。野鳥、No 423、日本野鳥の会
- (16) 笹川昭雄、1993。タカの渡り入門、BIRDER 5 (10)、Oct. P 6 ~14.
- (17) 岡徹、久貝勝盛、座喜味英二、砂川友弘、1985。宮古島におけるアカハラダカの渡りの概要。沖生教研会誌、18:20-22。
- (18) 沖縄野鳥研究会、1993。沖縄県の野鳥、改訂版、沖縄出版
- (19) Lynx Edicions Bird Life International 1994, Handbook of the Birds of the World Vol. 2.

## 種子島、馬毛島の野鳥観察記録

沼口 憲治<sup>(1)</sup>・溝口 文男<sup>(2)</sup>・久貝 勝盛<sup>(3)</sup>・嵩原 建二<sup>(4)</sup>

Bird Watching Notes in Tanega-shima and Mage-shima, Kagoshima Prefecture

Kenji NUMAGUCHI<sup>(1)</sup>, Fumio MIZOGUCHI<sup>(2)</sup>,  
Katsumori KUGAI<sup>(3)</sup> and Kenji TAKEHARA<sup>(4)</sup>

Tanega-shima is located at latitude 30° 21' ~ 30° 50' N and longitude 131° 5' ~ 130° 50' E, about 1,000 kilometers south from kagoshima city. The length of the island is about 57 kilometers. The width is about 5~12 kilometers. It is a long and narrow island in the north to south direction. The terrain of the island consists of gentle hills and the highest peak is approximately 282.3 meters. The average annual temperature is 19° C with mild climate. The average annual precipitation is about 2,500 millimeters.

Originally, an evergreen broadleaved forest composed of *Castanopsis sieboldii Hatsu-shima* or *Machilus thunbergii* covered most of the inland area. The landform is flat and conducive to farming so agriculture has been promoted in recent years. As a result of this, most of the flat land is utilized as farmland. Only the sloping areas not suitable for farming remain. Compared with Yaku-shima, an island mostly covered with forests, it makes a remarkable contrast.

The authors have examined the birds at different periods on Tanega-shima and Mage-shima, Kagoshima prefecture. Mr. Mizoguchi, one of the authors, examined the birds from 1975 to 1978. Mr. Numaguchi examined the birds from 1988 to 1992. Mr. Kugai and Mr. Takehara examined in October, 1987 and August, 1994. As a result of the examination, the authors recorded, 16 orders, 48 families and 205 species.

(1) 31-8 Kihara-cho Kashiwara City Nara Prefecture (Kashiwara Mansion 1-505)

(2) 1908-1 Shimozuru Takaono-cho Izumi-gun Kagoshima Prefecture

(3) Okinawa Prefectural Museum

(4) Okinawa Prefectural Museum

## はじめに

種子島は大隅半島の南方、北緯 $30^{\circ} 21'$ ～ $30^{\circ} 50'$ 、東経 $131^{\circ} 5'$ ～ $130^{\circ} 50'$ に位置し、鹿児島市までおよそ100km離れている。南北の長さは57km、東西の幅は5～12kmで南北に細長い島である。地形はなだらかな丘陵状で、最高点でも、282.3mである。年平均気温はおよそ19°Cと温暖で年間降水量は2500mmに達する。本来は内陸部を中心に入ダジイ、タブノキなどから構成される常緑広葉樹林が発達するが、低平な地形ということもあって古くからカンショウ、サトウキビ栽培などによって耕地化が進んだ結果、平坦地はほぼ耕地に占められ、傾斜地等の耕作不適地が森林として残されている。その点ではほぼ全域が森林に覆われている屋久島と対照的である。代表的な森林植生としては常緑広葉樹林であるが、杉の植林、リュウキュウチクの群落もかなり普遍的に分布する。まとまった規模の常緑広葉樹林が広がる西之表市、南種子町の山域ではチップ材とするための伐採が継続的に行われており、他の各種開発等も加わって、自然度の高い森林は分断され局在化する傾向にある。

大きな河川はないが、各河川の流域には水田が発達し、南種子町南端部に広がる沖積平野の茎永、下中は島内有数の水田地帯であり、渡り途中のシギ、チドリ類の中継地となっている。この他に熊野山の西麓の干拓地は養鰻場としてかつて利用されていた池沼群がそのまま残され、種子島では数少ない水鳥の重要な生息地であったが1990頃から大半が埋め立てられ渡来数は減少した。南種子町茎永にある宝満の池は、マガモを中心に数千羽のカモ類が飛来し、島内では有数の越冬場所となっている。

著者のうち溝口は1975年から1978年まで南種子町に居住し、また沼口は1988年から1992年まで中種子町に居住し、島内の各地で継続的に野鳥の観察を行った。久貝と嵩原は1987年10月と1994年8月に種子島で、車センサスによる鳥類観察を行った。それぞれ異なる時期に種子島に滞在し、決して充分とは言えないがさまざまな季節、場所で野鳥観察を行った結果、同島からはこれまで知られていないいくつかの知見を得ることができた。このほかにここでは同島の野鳥に関する近年の文献の記録をできる限り整理することを試みたのでその結果について報告する。

## 記録の記載様式

観察記録及び文献の記録については概ね以下の様式にしたがって記載した。

- 1 種を基準として観察記録をまとめたが、亜種まで判定できた場合には、特に記載した。文献の記録についても同様に扱った。
- 2 観察記録は年次別に記しており、1975年から1978年までは溝口の、1988年から1993

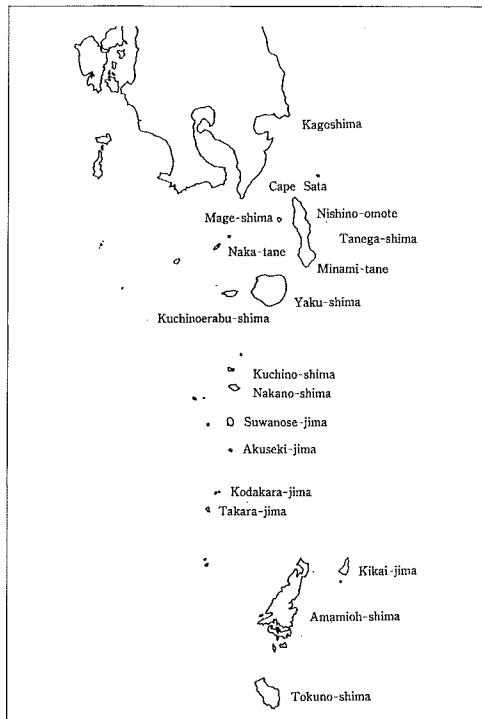
年までは沼口の、1994年は久貝、嵩原の各々観察記録に基づく。

- 3 各年次の観察記録は、時期の早い順に配列し、基本的に月日、地名、個体数を示したが、個体数については確認できない場合は省略した。
  - 4 同一個体であっても、時期が異なる場合には各々を独立した記録として示したが、煩雑になる場合には初認～終認月日で記した。
  - 5 繁殖、渡りなど生態的に重要な観察事項は、個体数の後に記した。
  - 6 観察地名として用いた地域の所属する行政区画は、下記の通りである。

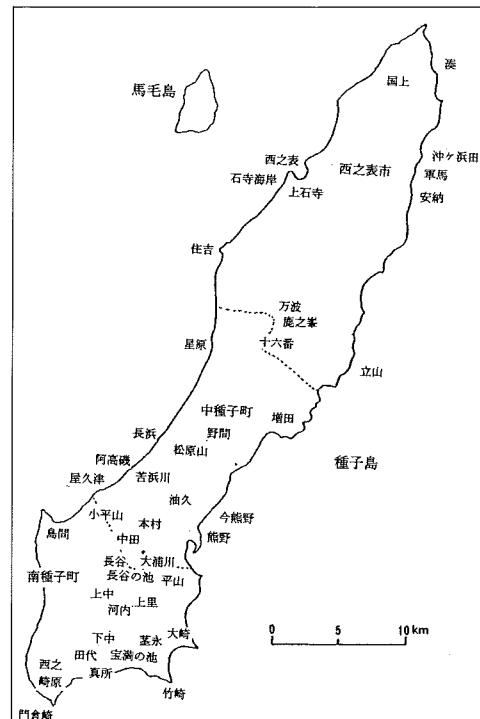
(西之表市) 安納、石寺海岸、沖ヶ浜田、上石寺、国上、軍馬、鹿之峯、十六番、住吉、立山、西之表、万波、馬毛島、湊

(中種子町) 阿高磯、今熊野、熊野、中田、長浜、苦浜川、野間、平山、星原、本村、増田、松原山、屋久津、油久

(南種子町) 上里、大崎、大浦川、門倉崎、上中、河内、茎永、郡原、小平山、崎原、島間、下中、新上里、竹崎、田代、西之、長谷、長谷の池、宝満の池、松原、真所
  - 7 文献に基づく記録は、1974年までの記録については日本鳥類目録に網羅されていると考えてそれ以後の報告について調査し、種名の後に文献の番号で出典を示した。



## FIG 1 Map of Tanega-shima and Mage-shima



## ■ 2 Observing Points in Tanega-shima



写真1 西之表市鹿の峰  
(自然度の高い常緑広葉樹林)

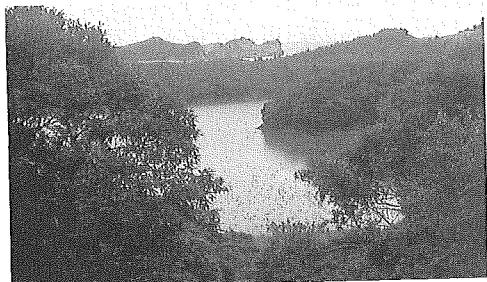


写真2 南種子町宝満の池  
(カモの渡来地)

カツツブリ目 PODICIPEDIFORMES

カツツブリ科 PODICEPTIDAE

1 カツツブリ *Podiceps ruficollis* 2), 6)

1975 0530 茎永 1, 0914 宝満の池 6

1976 1010 宝満の池 1, 1010 熊野

1977 0315 上中 2, 0416 宝満の池 1, 0429 宝満の池 1

1978 0317 宝満の池 10

1988 0424 熊野 4 (ひな4), 0813 熊野 6 (ひな4), 0911 熊野

1989 0116 熊野 4, 0528 熊野 5 (ひな4), 0827 熊野 6, 0903 熊野

1990 0321 熊野 2, 0902 熊野 3

1991 0407 宝満の池 3, 0420 熊野 2, 0511 熊野 1

1992 0308 熊野 1, 0328 阿高磯 3 (ひな2)

熊野 (池)、阿高磯 (川) で繁殖を確認している。

2 ハジロカツツブリ *Podiceps nigricollis*

1989 0321 熊野 1

1991 0309 熊野 1, 0323 熊野 1

いずれの観察も早春の一時的な飛来であった。

3 カンムリカツツブリ *Podiceps cristatus* 6)

ミズナギドリ目 PROCELLARIIFORMES

ミズナギドリ科 PROCELLARIIDAE

4 アナドリ *Bulweria bulwerii* 6) 馬毛島

5 オオミズナギドリ *Calonectris leucomelas* 1), 2), 3)

1991 0310 阿高磯 2 (死体), 1010 阿高磯 沖合いに多数観察

西之表から鹿児島に向かう船上からしばしば観察できるが、島内で観察したのは上の

2例のみである。

1994 0812 西之表から鹿児島に向かう船上で20羽

6 ハイイロミズナギドリ *Puffinus griseus* 3)

7 シロハラミズナギドリ *Pterodroma hypoleuca* 2)

カツオドリ科 SULIDAE

8 カツオドリ *Sula leucogaster* 2), 3)

1991 1231 竹崎 1

ウ科 PHALACROCORACIDAE

9 ウミウ *Phalacrocorax filamentosus* 1), 2), 3), 6)

1975 0107 城永 +

1977 0309 宝満の池 6, 0310 宝満の池 2,

1978 0317 宝満の池 10

1988 0410 熊野 3, 1030 熊野 3, 1103

宝満の池 3

1989 0116 熊野 3, 0128 熊野 62, 1210 熊野 4,

1990 0102 熊野 22, 0115 宝満の池 36, 0224 熊野 9, 0324 熊野 2, 1111 熊野 1

1991 0115 宝満の池 22, 0323 熊野 10, 0324 屋久津 5, 0407 宝満の池 18, 0511

屋久津 2, 1109 鳥間 150, 1208 熊野 1

1992 0102 宝満池 5, 0308 熊野 2, 0328 島間

秋期から多数飛来し越冬する。数十羽の集団をなし海岸、漁港で休息する姿が認められる。

10 ヒメウ *Phalacrocorax pelagicus* 3)

1991 1208 熊野 1



写真3 ウミウとトビ  
1990.4.1 中種子。熊野

グンカンドリ科 FREGATIDAE

11 コグンカンドリ *Fregata ariel* 3)

コウノトリ目 CICONIIFORMES

サギ科 ARDEIDAE

12 ヨシゴイ *Ixobrychus sinensis* 2)

13オオヨシゴイ *Ixobrychus eurhythmus* 3)

14リュウキュウヨシゴイ *Ixobrychus cinnamomeus* 1)

15ミヅゴイ *Gorsakius goisagi* 1), 2), 3), 6)

16ゴイサギ *Nycticorax nycticorax* 2), 3), 6)

1977 0915 熊野 1

17ササゴイ *Butorides striatus* 1), 2), 6)

1975 0914 宝満の池 1

1976 0619 竹崎 4, 0904 沖ヶ浜田 1, 1005 熊野 1

1977 0307 茅永 1, 0319 熊野 1, 0530 茅永 1

1988 0730 茅永 +

1991 0115 熊野 1, 0511 茅永 1

18アカガシラサギ *Ardeola bacchus*

1992 0805 熊野 1 (夏羽)

19アマサギ *Bubulcus ibis* 2), 6)

1975 0422 茅永 12, 0528 平山 27

1976 0428 茅永 10, 1003 熊野 10

1977 0319 熊野 4, 0429 長谷 4, 0915 熊野 2

1978 0106 熊野 6, 0317 本村 9, 0317 本村 9 (8夏羽)

1988 0813 熊野 12, 0904 大浦川干潟 4

1989 0319 熊野 4, 0903 大浦川干潟 5

1991 0115 宝満の池 36, 0420 熊野 30, 0511 茅永 10

1992 0503 熊野 12, 0906 熊野 43

20ダイサギ *Egretta alba* 2), 6)

1975 0528 平山 3

1978 0106 熊野 2

1989 0116 熊野 1

1990 0102 熊野 2, 0115 熊野 1, 1111 熊野 1

1991 0324 屋久津 1, 0922 熊野 1, 1109 長浜 1, 1208 熊野 1

1992 0102 宝満池 1, 0503 熊野 5, 0805 熊野 2

21チュウサギ *Egretta intermedia* 2), 6)

1975 0528 平山 3

1976 0617 熊野 1, 1003 熊野 3, 1010 熊野 1

1977 0307 茅永 1, 0416 宝満の池 1, 0915 熊野 1



写真4 アカガシラサギ (夏羽)  
1992.8.5 中種子. 熊野

- 1988 0904 大浦川干潟 2, 0911 大浦川干潟 1
- 1989 0116 熊野 1
- 1991 0407 宝満の池 2, 0922 熊野 1, 1010 阿高磯 3, 1231 熊野 1
- 1992 0308 熊野 1, 0328 阿高磯 2, 0503 熊野 7, 0906 熊野 4
- 22コサギ *Egretta garzetta* 2), 6)
- 1975 0107 茎永 1, 0422 茎永 11, 0727 熊野 1, 0914 宝満の池 6
- 1976 0428 茎永 1, 0617 熊野 7, 1003 熊野 8, 1005 熊野 6, 1010 熊野 12
- 1977 0116 茎永 2, 0116 宝満の池 1, 0116 熊野 14, 0211 茎永 1, 0307 茎永 3  
0309 宝満の池 1, 0309 下中 5, 0310 熊野 1, 0319 熊野 14, 0416 宝満の池  
7, 0915 熊野 25
- 1978 0106 熊野 16, 0317 本村 2
- 1988 0807 大浦川干潟 7, 0813 大浦川干潟 4, 0813 熊野 18, 0904 大浦川干潟 11,  
0911 大浦川干潟 7, 0911 熊野 2
- 1989 0116 熊野 3, 0319 熊野 3, 0423 熊野 4, 0827 熊野 5, 0903 熊野 8, 0903  
大浦川干潟 8
- 1990 0102 熊野 1, 0115 熊野 1, 0812 熊野 11, 0902 熊野 17, 0917 熊野 5, 1111  
熊野 3
- 1991 0115 宝満の池 2, 0323 熊野 1, 0324 屋久津 30, 0406 熊野 1, 0407 宝満の池  
20, 0420 熊野 2, 0511 茎永 4, 0818 熊野 1, 0922 熊野 23, 1010 熊野  
10, 1010 宝満の池 2, 1010 阿高磯 10, 1109 長浜 8, 1208 熊野 1, 1231 熊  
野 3
- 1992 0308 熊野 1, 0328 阿高磯 30, 0503 熊野 6, 0805 熊野 14, 0906 熊野 23,  
0914 小平山 1
- 1994 0812 南種子町 1
- 23クロサギ *Egretta sacra* 2), 3), 6)
- 1975 0107 茎永, 0426 熊野 1, 0727 熊野 4, 0914 宝満の池 1
- 1976 0428 熊野 1, 0617 熊野 3, 0617 熊野 2, 1005 熊野 1, 1010 熊野 1
- 1977 0116 熊野 1, 0410 熊野 1
- 1988 0424 熊野 1
- 1990 0103 軍馬 1, 0115 熊野 2
- 1991 0406 熊野 1, 0420 熊野 1, 0511 熊野 1, 0511 島間 1, 0818 熊野 1, 0922  
熊野 1, 1010 熊野 2, 1109 長浜 1
- 1992 0529 熊野 1, 0805 熊野 3

観察したのはいずれも黒色タイプであり、白色タイプは観察していない。

1994 0812 南種子町 1 (黒色タイプ)

24アオサギ *Ardia cinerea* 2), 3), 6)

1975 0107 茎永 +, 0914 宝満の池 1

1976 1005 熊野 1

1977 0116 茎永 1, 0116 宝満の池 4, 0309 宝満の池 1, 0310 宝満の池 1, 0915  
熊野 1

1988 0410 大浦川干潟 1, 0813 大浦川干潟 1, 0904 大浦川干潟 1, 0911 大浦川干  
潟 2, 0911 熊野 1

1989 0116 熊野 1, 0827 熊野 2, 0903 熊野 1, 0903 大浦川干潟 2, 1201 熊野 4

1990 0102 熊野 3, 0115 熊野 1, 0115 宝満の池 1, 0224 熊野 2, 0902 熊野 1,  
0917 熊野 1, 1006 熊野 2, 1111 熊野 1

1991 0115 熊野 2, 0211 茎永 2, 0309 熊野 1, 0323 熊野 5, 0324 屋久津 1,  
0511 茎永 1, 1010 熊野 2, 1010 阿高磯 2, 1208 熊野 3, 1231 熊野 5

1992 0308 熊野 5, 0328 阿高磯 6, 0328 熊野 6, 0529 熊野 1, 0805 熊野 2,  
0906 熊野 3, 0914 熊野 3

1994 0812 南種子町 1

コウノトリ科 CICONIIDAE

25ナベコウ *Ciconia nigra* 1), 6)

ガンカモ目 ANSERIFORMES

ガンカモ科 ANATIDAE

26コハクチョウ *Cygnus columbianus*

1989 0108~0212 熊野 1 (若鳥)

27オシドリ *Aix galericulata* 1), 2), 3), 6)

28マガモ *Anas platyrhynchos* 1), 2), 3), 6)



写真5 コハクチョウ  
1989.1.8 中種子. 熊野

1975 0107 茎永 多数

1977 0116 宝満の池 100, 0309 宝満の池 488(♀282), 0310 宝満の池 330

1978 0311 宝満の池 500, 0317 宝満の池

1988 1023 熊野, 1028 熊野 21, 1030 熊野 47, 1103 宝満の池 220, 1208 熊野 36

1989 0108 熊野 9, 0116 熊野 26, 0226 熊野 8, 0319 熊野 11, 0423 熊野 1,  
1210 熊野 1, 1210 熊野 40

1990 0115 熊野 2, 0115 宝満の池 3218, 0917 熊野 5 (エクリップス), 1111 熊野 32

1991 0115 宝満の池 2760, 0407 宝満の池 10, 0511 茎永 3♂, 1201 熊野 22, 1208  
熊野 12

1992 0102 宝満の池 2000, 0115 宝満の池 4404, 0328 島間 1♂  
宝満の池には数千羽の越冬集団を形成する。

29カルガモ *Anas poecilorhyncha* 1), 2), 6)

1975 0107 茎永 多数 0422 茎永 1, 0426 熊野 1, 0530 茎永 1, 0914 宝満の池 51

1976 0428 熊野 2, 0617 熊野 7, 1005 熊野 48, 1010 宝満の池 1

1977 0116 宝満の池 100, 0309 宝満の池 167, 0310 宝満の池 50, 0313 田代 7,  
0416 下中 2, 0416 宝満の池 25, 0429 宝満の池 3, 0429 長谷 2, 0915 熊野  
2

1978 0311 宝満の池 50, 0317 宝満の池

1988 0410 大浦川干潟 6, 0424 熊野 3, 0730 宝満の池, 0813 熊野 9, 0911 熊野  
8, 0923 熊野 8, 1023 熊野, 1028 熊野 18, 1030 熊野 18, 1103 宝満の池  
10, 1208 熊野 14

1989 0108 熊野 28, 0116 熊野 87, 0226 熊野 11, 0319 熊野 22, 0423 熊野 20,  
0528 熊野 5, 0903 熊野 3, 1210 熊野 16

1990 0102 熊野 13, 0115 熊野 11, 0115 大浦川干潟 84, 0115 宝満の池 60, 0224  
熊野 40, 0321 熊野 10, 0902 熊野 1, 1006 熊野 6, 1111 熊野 79

1991 0115 宝満の池 193, 0309 熊野 120, 0323 熊野 10, 0324 屋久津 10, 0406  
熊野 20, 0407 宝満の池 20, 0420 熊野 7, 0511 熊野 2, 0511 茎永 8, 0922  
熊野 7, 1010 熊野 5, 1010 宝満の池 5, 1201 熊野 106, 1208 熊野 90, 1231  
熊野 15

1992 0102 宝満の池 150, 0115 熊野 63, 0115 茎永宝満の池 156, 0308 熊野 30,  
0328 島間 2, 0503 熊野 5, 0529 熊野 2, 0805 熊野 3, 0906 熊野 4, 0914  
熊野 2

周年観察される。

30コガモ *Anas crecca* 1), 2), 3), 6)

1975 0107 茎永

1977 0116 宝満の池 10, 0116 熊野 11, 0309 宝満の池 8 (♀5, ♂3), 0310 宝満の  
池 6

1978 0317 宝満の池, 0317 宝満の池

1988 0923 熊野 6 (エクリップス), 1023 熊野, 1028 熊野 23, 1030 熊野 23, 1208  
熊野 79

- 1989 0108 熊野 32, 0116 熊野 80, 0226 熊野 64, 0319 熊野 41, 0423 熊野 6,  
     1210 熊野 3  
 1990 0102 熊野 52, 0115 熊野 16, 0218 長谷 8, 0224 熊野 20, 0321 熊野 58,  
     0408 熊野 7, 1006 熊野 50, 1111 熊野 4, 0115 熊野 85, 0309 熊野 29  
 1991 0115 宝満の池 40, 0323 熊野 36, 0406 熊野 6, 0420 熊野 10, 0922 熊野 4  
     (エクリップス), 1010 熊野 46, 1010 宝満の池 10, 1201 熊野 36, 1208 熊野  
     17, 1231 熊野 31  
 1992 0115 熊野 84, 0308 熊野 2, 0328 熊野 40  
 31トモエガモ *Anas formosa* 3), 6)  
     1992 0115 宝満の池 1  
 32ヨシガモ *Anas falcata* 3), 6)  
     1977 0116 宝満の池 1, 0309 宝満の池 7  
     1988 1023 熊野, 1028 熊野 4, 1030 熊野 3, 1208 熊野 3  
     1989 0108 熊野 5, 0319 熊野 3  
     1990 0115 宝満の池 14, 1111 熊野 2  
     1991 0115 宝満の池 6  
     1992 0115 宝満の池 10  
 33オカヨシガモ *Anas strepera*  
     1988 1023 熊野, 1028 熊野 12, 1030 熊野 36, 1208 熊野 18  
     1989 0108 熊野 11, 0116 熊野 98, 0226 熊野 96, 0319 熊野 64, 0423 熊野 2,  
         1210 熊野 18  
     1990 0120 熊野 12, 0115 熊野 68, 0224 熊野 45, 0321 熊野 4, 1111 熊野 4  
     1991 0115 熊野 36, 0309 熊野 17, 0323 熊野 10, 1208 熊野 2, 1231 熊野 12  
     1992 0115 熊野 12, 0308 熊野 14, 0328 熊野 6  
 34ヒドリガモ *Anas penelope* 1), 2), 6)  
     1975 0107 茅永  
     1977 0116 宝満の池 5, 0309 宝満の池 12, 0310 宝満の池 2  
     1978 0317 宝満の池  
     1988 1023 熊野, 1028 熊野 91, 1030 熊野 14, 1208 熊野 25  
     1989 0116 熊野 3, 1210 熊野 4  
     1990 0115 宝満の池 20, 1111 熊野 14  
     1991 0115 宝満の池 106, 0511 熊野 1♀, 1010 熊野 1, 1201 熊野 4, 1208 熊野 5  
     1992 0102 宝満の池 2, 0115 宝満の池 86

35オナガガモ *Anas acuta* 1), 2), 6)

- 1975 0107 茎永  
1977 0116 宝満の池 1  
1988 1023 熊野, 1028 熊野 3, 1030 熊野 9, 1208 熊野 15  
1989 0108 熊野 3, 0116 熊野 11, 0226 熊野 11, 1210 熊野 1  
1990 0102 熊野 5, 0115 宝満の池 4, 1111 熊野 6  
1991 0115 宝満の池 4, 1201 熊野 4, 1208 熊野 3, 1231 熊野 2  
1992 0102 宝満の池 18, 0115 熊野 2, 0115 宝満の池 42

36シマアジ *Anas querquedula*

- 1977 0416 宝満の池 4  
1991 0420 熊野 1♂

37ハシビロガモ *Anas clypeata* 1), 2), 6)

- 1977 0116 宝満の池 30, 0309 宝満の池 9  
1978 0106 熊野 9, 0317 宝満の池  
1988 1023 熊野, 1028 熊野 3, 1030 熊野 9, 1208 熊野 18  
1989 0108 熊野 30, 0116 熊野 30, 0226 熊野 44, 0319 熊野 7, 1210 熊野 2  
1990 0102 熊野 28, 0115 熊野 17, 0224 熊野 14, 0321 熊野 16, 1111 熊野 4  
1991 0115 宝満の池 4, 0115 熊野 6, 0309 熊野 25, 0323 熊野 20, 0406 熊野 8,  
0407 宝満の池 2, 0420 熊野 8, 1231 熊野 12  
1992 0115 熊野 21, 0328 熊野 16

38ホシハジロ *Aythya ferina*

- 1988 1028 熊野 4, 1030 熊野 9  
1989 0116 熊野 12, 0226 熊野 3, 0319 熊野 3, 1210 熊野 4  
1990 0102 熊野 5, 0115 熊野 8, 0224 熊野 8, 0321 熊野 3, 1111 熊野 3  
1991 0115 熊野 10, 0309 熊野 2, 1201 熊野 6, 1208 熊野 14, 1231 熊野 10  
1992 0115 熊野 20, 0308 熊野 16

39キンクロハジロ *Aythya fuligula* 2)

- 1977 0416 宝満の池 12, 0429 宝満の池 3  
1978 0317 宝満の池  
1988 1023 熊野, 1028 熊野 51, 1030 熊野 63, 1208 熊野 12  
1989 0116 熊野 12, 0226 熊野 15, 0319 熊野 89, 1210 熊野 10  
1990 0120 熊野 73, 0115 熊野 92, 0224 熊野 80, 0321 熊野 58, 0408 熊野 1,  
1006 熊野 1, 1111 熊野 34

1991 0115 宝満の池 1, 0115 熊野 143, 0309 熊野 92, 0323 熊野 39, 0406 熊野  
9, 1201 熊野 133, 1208 熊野 98, 1231 熊野 117

1992 0115 熊野 158, 0308 熊野 124

40スズガモ *Aythya malila* 1), 2), 6)

1977 0116 宝満の池 15, 0309 宝満の池 50

1978 0317 宝満の池

1989 0319 熊野 6, 0423 熊野 1

1991 0309 熊野 3, 1208 熊野 4, 19911231 熊野 1

1992 0308 熊野 12

41ホオジロガモ *Bucephala clangula*

1989 0116 熊野 3



ワシタカ目 FALCONIFORMES

ワシタカ科 ACCIPITRIDAE

42ミサゴ *Pandion haliaetus* 1), 2), 6)

1975 0701 熊野 1

写真6 ミサゴ

1976 0606 竹崎 1, 1003 熊野 1

1989.2.5 中種子. 熊野

1977 0116 熊野 1, 0209 星原 1, 0915 熊野 1

1978 0317 竹崎 3

1988 1023 熊野 2, 1030 熊野 2

1989 0827 熊野 1, 0903 熊野 2, 0915 苦浜川 1, 1210 熊野 1

1990 0120 熊野 2, 1111 熊野 1

1991 0309 熊野 1, 0407 宝満の池 1(魚採る), 0420 熊野 2, 0511 熊野 2, 1109  
長浜 1

1992 0102 田代 1, 0308 熊野 1, 0328 熊野 1, 0503 熊野 2, 0529 熊野 1(ペア),  
0906 熊野 1

沿岸域で周年観察できる。

1994 0811 南種子町 1

43ハチクマ *Pernis apivorus*

1990 0923 鹿之峯 1

44トビ *Milvus migrans* 1), 2), 6)

1975 0107 茅永 11, 0426 熊野 2, 0701 熊野 1, 0727 熊野 1

1976 0428 茅永 1, 0428 熊野 2, 0617 熊野 1, 0619 竹崎 1, 0619 熊野 1, 1003

茎永 2, 1003 熊野 2, 1010 茎永 1, 1010 竹崎 2, 1010 熊野 1  
1977 0116 宝満の池 1, 0116 新上里 3, 0116 熊野 4, 0213 上中 1, 0306 平山 1,  
0307 茎永 5, 0310 宝満の池 1, 0315 上中 1, 0319 熊野 3, 0410 熊野 1,  
0416 上中 1, 0429 宝満の池 1, 0915 熊野 3, 1003 島間 1  
1978 0106 熊野 3, 0311 宝満の池 1, 0317 竹崎 2 溝  
1988 0410 熊野, 0424 熊野 6, 0906 油久 1  
1989 0528 熊野, 0604 鹿之峯 1, 0827 熊野 3, 0903 熊野 6, 0915 苦浜川  
1990 0121 熊野 多数, 0923 鹿之峯 1  
1991 0303 茎永 1, 0309 熊野 1, 0317 上里 1, 0406 熊野 3, 0420 熊野 2, 0503  
鹿之峯, 0511 熊野 2  
1992 0102 茎永 4, 0308 熊野 1, 0328 熊野 1, 0529 熊野 3, 0712 馬毛島 2, 0805  
熊野 2

45アカハラダカ *Accipiter soloensis*

1988 0925 上中 15  
1989 0917 鹿之峯 9, 0923 熊野 23, 0924 上里 34  
1990 0909 上里 2, 0922 上里 26, 0923 鹿之峯 3  
1991 0921 上里 4, 0921 上里 12  
1992 0913 上里 156, 0915 上里 8, 0920 竹崎 2, 0926 上里 293, 0927 上里 119  
9月上旬から下旬まで渡りの群が観察される。

46ツミ *Accipiter gularis* 6)

1975 0126 南種子町内 2

47ハイタカ *Accipiter nisus* 1), 2), 3), 6)

48ノスリ *Buteo buteo* 2), 6)

49サシバ *Butasur indicus* 1), 2), 6)

1975 0126 南種子町内 9

1977 0211 茎永 5, 0213 上里 4, 0310 茎永 1, 0313 田代 1, 0315 上中 1, 0423  
茎永 3, 0424 上中 1, 0429 島間 1, 0918 上中 2, 1001 上中 6, 1006 松原  
山 10

1978 0317 本村 1

1988 0520 油久 1, 0605 熊野 1, 1004 油久 1, 1023 熊野 1

1989 0116 熊野 2, 0604 鹿之峯 2 (トカゲ補食), 0915 苦浜川 3, 1004 油久 1,  
1014 上里 1

1990 0923 鹿之峯 1, 1002 油久 1

1991 0115 油久 1, 0211 宝満の池 2, 0303 茎永 1, 0326 油久 10 (春の渡り),  
0503 鹿之峯 1, 1012 上里 34, 1109 油久 2

1992 0129 油久 1 (冬越し), 0308 熊野 1, 1003 油久 6

9月から10月に南下途中の少群が認められる他、わずかだが島内で冬越しする個体も確認されている。また3月下旬には北上する少群が認められ、鹿之峯では5、6月の観察記録があり繁殖の可能性も示唆された。

#### 50 チュウヒ *Circus aeruginosus*

1978 0311 宝満の池 1 (亜成島)

#### ハヤブサ科 FALCONIDAE

##### 51 ハヤブサ *Falco peregrinus* 2), 6)

1977 0505 十六番 1

1988 1023 熊野 1, 1028 熊野 1

1989 0122 熊野 1 (カモ類捕食), 0319 平山 1

1990 0103 軍馬 1, 0121 熊野 1, 1027 竹崎 1

1991 0406 熊野 1

1992 0328 熊野 1

##### 52 チゴハヤブサ *Falco subbuteo*

1989 0924 上里 1

1991 1012 上里 1

##### 53 アカアシチョウゲンボウ *Falco amurensis*

1991 0504 長谷の池 1

電線に止まり下の畑に降りてバッタ類を捕食し、少し移動してまた別の電線に止まるふとを繰り返した。



写真7 アカアシチョウゲンボウ  
1991.5.4 南種子・長谷

##### 54 チョウゲンボウ *Falco tinnunculus* 1), 2), 6)

1975 0107 茎永 1, 0126 南種子町 1, 1008 上中 1

1976 1004 上中 1, 1010 熊野 1

1977 0116 新上里 1, 0309 上中 1, 0309 下中 1, 0313 田代 1

1978 0311 郡原 1

1988 0914 油久 1, 0925 上中 1

1989 1014 上里 1

1990 0102 熊野 1, 0121 熊野 1

1991 0211 茅永 1, 0303 茅永 1, 0323 崎原 1  
1992 0102 田代 1, 0914 田代 1, 0920 竹崎 3

キジ目 GALLIFORMES

キジ科 PHASIANIDAE

55ウズラ *Coturnix coturnix* 1), 2), 3), 6)

1992 0102 田代 2

56コジュケイ *Bambusicola thoracica* 2), 6)

1975 0107 河内 1, 0214 南種子町 1 (♂計測データあり), 0422 茅永 1, 0427 大崎 1, 0530 茅永 2, 0914 河内 4, 0914 宝満の池 2

1976 0606 竹崎 1

1977 0116 宝満の池 1, 0213 上里 3, 0313 上中 2, 0313 田代 1, 0410 十六番 1,  
0416 上中 1, 0416 下中 1, 0416 宝満の池 2, 0429 上中 1, 0619 島間 3

1988 0424 熊野 1, 0903 油久, 0904 上中, 0906 油久, 0908 油久

1989 0527 鹿之峯, 0917 鹿之峯

1990 0909 上里 2

1991 0317 油久 5, 0324 油久 4, 0503 鹿之峯 3, 1109 油久 4

1992 0529 熊野 1

1994 0811 南種子町、西之表、中種子でそれぞれ 1 (西之表では子連れ)  
ごく普通に繁殖している。

57キジ *Phasianus colchicus* 1), 2), 6)

1975 0530 茅永 1

1977 0306 長谷 1, 0307 茅永 1, 0505 十六番 1

1988 0605 十六番

1991 0323 崎原 1, 0317 油久 2 (♂♀), 0324 油久 2 (♂♀), 0504 長谷の池 2  
(♂♀)

1992 0529 今熊野 1 ♀

ツル目 GRUIFORMES

ミフウズラ科 TURNICIDAE

58ミフウズラ *Turnix suscitator* 1), 2), 6)

ツル科 GRVIDAE

59マナヅル *Grus vipio* 6)

クイナ科 RALLIDAE

60クイナ *Rallus aquaticus* 2)

1975 0422 茅永 1, 0422 茅永 1

61ヒクイナ *Porzana fusca* 1), 2), 3), 6)

1975 0914 河内 1, 0914 宝満の池 2

1976 1003 茅永 1

1977 0116 熊野 1, 0309 田代 1, 0315 上中 1, 0423 茅永 2

1988 0513 油久 1, 0911 熊野 2

62バン *Gallinula chloropus* 1), 2), 3), 6)

1978 0317 宝満の池 1

1988 0911 熊野 2, 0923 熊野

1989 0423 熊野 2

1990 0102 熊野 1

1991 0115 宝満の池 1, 0407 宝満の池 1, 0511 茅永 1

63オオバン *Fulica atra*

1975 0107 茅永

1976 1010 宝満の池 1

1977 0116 宝満の池 5, 0309 宝満の池 1, 0310 宝満の池 1

1978 0317 宝満の池 1

1988 1023 熊野, 1208 熊野 9

1989 0108 熊野 11, 0116 熊野 3, 0226 熊野 8, 0319 熊野 8, 0423 熊野 2, 1210  
熊野 7

1990 0102 熊野 4, 0115 熊野 9, 0321 熊野 6, 1111 熊野 3

1991 0323 熊野 1, 1201 熊野 2

1992 0308 熊野 2, 0328 熊野 1

チドリ目 CHARADRIIFORMES

レンカク科 JACANIDAE

64レンカク *Hydrophasianus chirurgus* 6)

タマシギ科 ROSTRATULIDAE

65タマシギ *Rostratula benghalensis* 1), 2), 6)

ミヤコドリ科 HAEMATOPODIDAE

66ミヤコドリ *Haematopus ostralegus* 1), 6)

チドリ科 CHARADRIIDAE

67コチドリ *Charadrius dubius* 2)

1988 0911 熊野 2  
1990 0812 熊野 2  
1991 0317 油久 3  
1992 0102 田代 5, 0906 熊野 2, 0914 小平山 2

68イカルチドリ *Charadrius placidus* 2)

69シロチドリ *Charadrius alexandrinus* 1), 2), 6)

1975 0530 熊野 1, 0701 熊野 1, 0907 渕 2  
1976 0617 熊野 2, 0904 安納 2, 0904 渕 2, 1010 熊野 1  
1977 0116 熊野 11, 0915 渕 2  
1988 0807 大浦川干潟 5, 0911 熊野 1  
1989 0827 大浦川干潟, 0903 大浦川干潟  
1990 0102 熊野 2  
1991 0309 熊野 12, 0511 島間 3, 0511 屋久津 3, 0922 熊野 3, 1010 阿高磯 1,  
1991 1109 島間 15  
1992 0328 島間

70メダイチドリ *Charadrius mongolus* 2)

1975 0426 熊野 1  
1977 0915 渕 1, 0915 熊野 1  
1991 0511 島間 2, 0511 屋久津 2, 1010 阿高磯 1, 1109 島間 1  
1992 0919 熊野 1

71ムナグロ *Pluvialis dominica* 6)

1976 0904 安納 1  
1988 0907 油久 7, 0909 油久 1, 0914 油久 3, 0915 油久 5  
1990 0102 熊野 1, 1006 熊野 1  
1991 0511 屋久津 1  
1992 0427 熊野 5, 0923 小平山 1, 1003 油久 20, 1017 油久 10

72ダイゼン *Pluvialis squatarola* 2), 6)

1992 0906 熊野 1

73ダゲリ *Vanellus vanellus* 2)

1990 0121 熊野 1

シギ科 SCOLOPACIDAE

74キヨウジョウシギ *Arenaria interpres* 1), 2), 6)

1975 0426 熊野 3, 0907 渕 1

1976 0904 渕 2 溝

1991 1010 阿高磯 2

1994 0812 阿嶽川 1

75トウネン *Calidris ruficollis* 2), 6)

1988 0923 熊野 1, 1030 熊野 1

1989 0903 熊野 4

1990 0812 熊野 3, 0902 熊野 1, 0917 熊野 1

1991 0511 屋久津 1 (夏羽), 0922 熊野 6

1992 0914 小平山 2, 0919 熊野 1, 0923 小平山 3

76ヒバリシギ *Calidris minutilla*

1988 0911 熊野 5

1922 0914 小平山 1

77オジロトウネン *Calidris temminckii*

1992 0914 小平山 1 (冬羽)

78ウズラシギ *Calidris acuminata* 2)

1988 1030 熊野 4

79ハマシギ *Calidris alpina* 2), 6)

1977 0116 熊野 3

1988 0424 熊野 1, 1030 熊野 9

1989 1210 熊野 13

1990 0102 熊野 3

1991 1109 長浜 7

80オバシギ *Calidris tenuirostris* 2)

1988 0410 大浦川干潟 2

1989 0827 熊野 1

81 ミユビシギ *Crocethia alba*

1991 0818 熊野 1 (幼鳥)

82 エリマキシギ *Philomachus pugnax*

1991 0922 熊野 2

1992 0906 熊野 1 (幼鳥)

83 キリアイ *Limicola falcinellus*

1976 1003 熊野 1

84 ツルシギ *Tringa erythropus*

1990 0917 熊野 1

85 アカアシシギ *Tringa totanus*

1989 0903 熊野 1

1992 0920 熊野 1 (冬羽)

86 コアオアシシギ *Tringa stagnatilis*

1976 1003 熊野 2, 1010 熊野 1

1988 0911 熊野 1

1989 0903 熊野 3

1990 0902 熊野 1, 0917 熊野 1

1991 0922 熊野 3, 1010 熊野 1

87 アオアシシギ *Tringa nebularia* 2)

1976 1003 茅永 4, 1010 茅永 1

1988 1030 熊野 1

1990 0812 熊野 1

1992 0529 熊野 1 夏羽

88 クサシギ *Tringa ochropus* 1), 2), 6)

1976 1003 茅永 2

1975 0907 湊 1

89 タカヅシキ *Tringa glareola* 2)

1975 0914 宝満の池 21

1976 1003 茅永 4, 1003 熊野 4, 1010 茅永 2

1977 0915 熊野 4

1988 0813 熊野 3, 0911 熊野 2, 0923 熊野 5, 1030 熊野 2

1989 0903 熊野 2

1990 0812 熊野 4

1992 0805 熊野 1, 0914 熊野 2

90キアシシギ *Tringa brevipes* 1), 2), 6)

1975 0907 湿地 3, 0914 宝満の池 2

1976 0904 安納 1, 0904 湿地 1

1977 0915 湿地 1

1988 0424 熊野 1, 0807 大浦川干潟 8, 0813 大浦川干潟 4, 0904 大浦川干潟 15,  
0911 大浦川干潟 8

1989 0528 熊野 5, 0827 熊野, 0903 熊野 6, 0903 大浦川干潟

1900 0812 熊野 1, 1006 熊野 3

1991 0511 熊野 3, 0511 島間 6, 0818 熊野 2, 0922 熊野 2

1992 0503 熊野 4, 0529 熊野 1, 0805 熊野 2, 0906 熊野 1, 0923 小平山 5

91イソシギ *Tringa hypoleucos* 1), 2), 6)

1975 0107 茅永 1, 0426 熊野 1, 0907 湿地 3, 0914 河内 1, 0914 宝満の池 1

1976 0904 安納 1, 0904 湿地 2, 1003 茅永 2, 1003 熊野 3, 1005 熊野 1, 1010 茅  
永 2, 1010 熊野 1

1977 0116 茅永 1, 0915 湿地 3, 0915 熊野 1

1978 0317 熊野 1

1988 0424 熊野 1, 0807 大浦川干潟 2, 0911 熊野 2

1989 0423 熊野 1, 0827 熊野, 0903 熊野 3

1990 0102 熊野 1, 0812 熊野 2, 0902 熊野 16

1991 0406 熊野 1, 0511 熊野 2, 0818 熊野 1, 0922 熊野 4, 1010 阿高磯 1,  
1109 島間 1, 1109 長浜 1

1992 0328 阿高磯 1, 0503 熊野 2, 0805 熊野 2, 0914 小平山 3, 0923 小平山 4

1994 0811 南種子町 1

92ツリハシシギ *Xenus cinereus* 2), 6)

1977 0915 熊野 3

1988 0807 大浦川干潟 9, 0813 大浦川干潟 6, 0904 大浦川干潟 8, 0911 大浦川干  
潟 6

1989 0827 大浦川干潟, 0903 大浦川干潟

1990 0812 熊野 1, 0922 熊野 6

1991 0511 熊野 1, 0902 熊野 6

1992 0914 小平山 2, 0923 小平山 2

93オグロシギ *Limosa limosa*

1989 0528 熊野 1 (幼鳥)

1991 0511 茅永 1 (夏羽)

94 オオソリハシシギ *Limosa lapponica*

1988 0410 大浦川干潟 1

95 ホウロクシギ *Numenius madagascariensis* 3), 6)

1992 0102 田代 1

96 チュウシャクシギ *Numenius phaeopus* 1) 馬毛島, 2), 6)

1989 0903 大浦川干潟 2

1990 0427 油久 3

1991 0511 島間 2

97 コシヤクシギ *Numenitis minutus*

1990 0427 油久 4 (牧草地にチュウシャクシギとともに飛来)

98 ヤマシギ *Scolopax mira* 1), 2), 6)

1978 0111 上中 1

99 タシギ *Gallinago gallinago* 1), 2), 6)

1975 0914 宝満の池 2

1977 0116 茅永 2

1989 0116 熊野 1

1991 1201 今熊野 1

1992 0923 小平山 1

セイタカシギ科 RECURVIROSTRIDAE

100 セイタカシギ *Himantopus himantopus*

1988 0911 熊野 2, 0923 熊野 6, 1030

熊野 1

1989 0226 熊野 1, 0423 熊野 2, 0827

熊野 1, 0903 熊野 1, 0903 大川浦干潟 2

1990 0902 熊野 1

1991 0922 熊野 2

1992 0906 熊野 1♀, 0914 熊野 1, 0914 小平山 1, 0919 熊野 1

カモメ科 LARIDAE

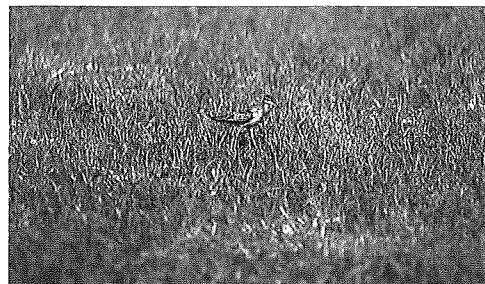


写真8 コシヤクシギ  
1990.4.27 中種子、油久

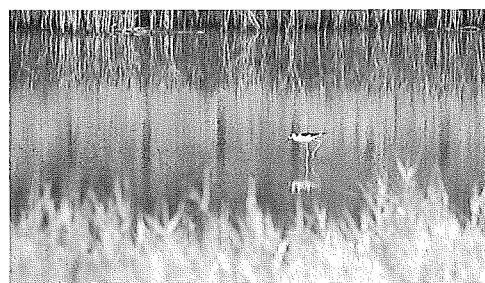


写真9 セイタカシギ  
1988.9.11 中種子、熊野

101コリカモメ *Larus ridibundus* 6)

1991 1109 長浜 3

102セグロカモメ *Larus argentatus* 1), 2), 3), 6)

1977 0310 平山 2

1978 0317 熊野 3 (2成1幼)

1989 0108 熊野 1, 0128 熊野 3

1990 0224 熊野 9

1991 0323 熊野 3

103オオセグロカモメ *Larus schistisagus* 3)

1989 0128 熊野 1

104カモメ *Larus canus* 2)

105ウミネコ *Larus crassirostris*

1990 0115 熊野 1, 0115 宝満の池 1

106ズグロカモメ *Larus saundersi* 3)

107ミツユビカモメ *Larus tridactylus* 3), 6)

1990 0101 西之表 1

108ハジロクロハラアジサシ *Sterna leucoptera*

1976 1003 熊野 1

1989 0528 熊野 1

109クロハラアジサシ *Sterna hybrida*

1988 0605 熊野 1, 0911 熊野 2, 0923 熊野 2

1989 0528 熊野 1 夏羽, 0903 熊野 2

110アジサシ *Sterna hirundo* 2)

111ベニアジサシ *Sterna dougallii* 6) 馬毛島

1975 0727 熊野 80

1976 0606 竹崎 50, 0617 熊野 10, 0619 竹崎 10

1992 0712 馬毛島高坊の岩礁 250 +

熊野, 竹崎、馬毛島で繁殖の可能性がある。

112エリグロアジサシ *Sterna sumatrana* 1) 馬毛島, 2), 6)

1975 0727 熊野 2

1976 0619 竹崎

1989 0612 安納 1

113コアジサシ *Sterna albifrons* 2)



写真10 ミツユビカモメ  
西之表市港

114クロアジサシ *Anous stolidus* 3)

ウミスズメ科 ALCIDAE

115ウミスズメ *Synthliboramphus antiquus* 2)

116コウミスズメ *Aethia pusilla* 1), 2), 6)

ハト目 COLUMBIFORMES

ハト科 COLUMBIDAE

117カラスバト *Columba janthina* 1), 2), 6)

1988 1009 上中 2

1989 1014 上里 2

1990 0909 上里 1

1991 0921 上里 1, 0922 上里 1

1992 0102 宝満の池 1, 0712 馬毛島 1

118キジバト *Streptopelia orientalis* 1), 2), 6)

1975 0107 茎永

1976 0606 石寺海岸 1

1977 0211 茎永 1, 0213 上里 2, 0310 茎永 4, 0313 田代 14, 0410 万波 4, 0317  
宝満の池

1988 0605 十六番, 0730 上中

1990 0218 上里 10, 0909 上里 2

1991 0317 上里 1, 0324 油久 3

1992 0414 油久 6

119アオバト *Sphenurus sieboldii* 1), 2), 3), 6)

1992 0111 油久 14, 0202 増田 1♂

120ズアカアオバト *Sphenurus formosae* 1), 6)

ホトトギス目 CUCULIFORMES

ホトトギス科 CUCULIDAE

121ホトトギス *Cuculus poliocephalus* 2)

1976 0606 石寺海岸 1

1977 0516 上中 2

1988 0515 油久 1, 0605 十六番

1989 0518 油久 1

122ツツドリ *Cuculus saturatus* 6)

フクロウ目 STRIGIFORMES

フクロウ科 STRIGIDAE

123トラフズク *Asio otus* 1), 2), 6)

124コノハズク *Otus scops* 2)

1989 0512 油久 1

125アオバズク *Ninox scutulata* 1), 2), 3), 6)

1975 0902 上中 1

1977 0424 上中 1

1989 0318 油久 1

ヨタカ目 CAPRIMULGIFORMES

ヨタカ科 CAPRIMULGIDAE

126ヨタカ *Caprimulgus indicus* 2)

アマツバメ目 APODIFORMES

アマツバメ科 APODIDAE

127ハリオアマツバメ *Chaetura caudacuta*

1989 0527 鹿之峯 10

128ヒメアマツバメ *Apus affinis* 1)

1989 0423 熊野 5

129アマツバメ *Apus pacificus* 1), 6)

1975 0422 茎永 3, 0530 熊野 1, 0701 熊野 1

1976 0606 石寺海岸 2, 0617 熊野 50, 0619 竹崎 10, 1003 真所 1, 1010 中田 10

1977 0429 大崎 10 (巣材運び)

1988 0410 熊野 2, 0410 熊野 2, 0424 熊野 2, 0605 熊野 3

1989 0319 熊野 1, 0423 熊野 8, 0527 鹿之峯 10

1990 0408 熊野 2, 0902 熊野 3, 0909 上里 3

1991 0511 熊野 3, 1012 上里 7

1992 0427 竹崎 100, 0503 熊野 10, 0529 熊野 20

春から秋まで頻繁に観察される。沿岸の岩礁で繁殖している可能性がある。

ブッポウソウ目 CORACIFORMES

カワセミ科 ALCEDINIDAE

130 ヤマセミ *Ceryle lugubris* 2)

1990 0115 宝満の池 1

131 アカシヨウビン *Halcyon coromanda* 2), 3), 6)

132 カワセミ *Alcedo atthis* 1), 2), 3), 6)

1976 0617 熊野 1, 1003 熊野 1

1977 0116 茎永 1, 0213 上里 1

1988 0808 油久, 0813 竹屋野 1

1990 0115 大浦川干潟 1, 1111 熊野 1

1991 1208 熊野 1

1992 0529 熊野, 0805 熊野 1, 0906 熊野 1

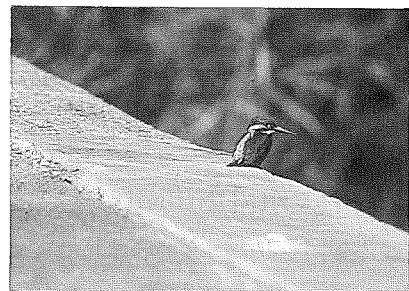


写真11 カワセミ  
1991.4. 中種子. 熊野

ヤツガシラ科 UPUPIDAE

113 ヤツガシラ *Upupa epops* 1), 2), 6)

キツツキ目 PICIFORMES

キツツキ科 PICIDAE

134 アリスイ *Jynx torquilla* 1), 2), 6)

1990 0102 熊野 1

135 アオゲラ *Picus awokera* 1), 2), 6)

1975 0427 大崎 1

1977 0410 十六番 1

1989 0527 鹿之峯 1, 0604 鹿之峯 2, 1014 上里 1

1990 0923 鹿之峯 1♂

1991 0503 鹿之峯 1, 0921 上里 1

1992 0102 宝満池 1



写真12 アリスイ  
1990.1.2 中種子. 熊野

136 オオアカゲラ *Dendrocopos leucotos* 6)

137 コゲラ *Dendrocopos kizuki* 2), 6)

2)に記録はあるが通常は観察されず、迷行したものではないだろうか。

スズメ目 PASSERIFORMES

ヒバリ科 ALAUDIDAE

138ヒバリ *Alauda arvensis* 1), 2), 6)

- 1975 0107 茅永  
1977 0211 茅永 1, 0307 茅永 20, 0530 長谷 5  
1990 0115 下中 2  
1991 0211 茅永 2, 0303 茅永 10

ツバメ科 HIRUNDINIDAE

139ツバメ *Hirundo rustica* 1), 2), 6)

- 1975 0422 茅永 5, 0530 茅永 10, 0701 熊野 1, 0914 宝満の池 9  
1976 0606 石寺海岸 2, 0904 安納 2, 1003 門倉崎 11, 1003 本村 18, 1003 真所  
40, 1010 中田 10  
1977 0226 西之 1, 0310 河内 2, 0310 松原 1, 0416 上中 3, 0429 上中 15, 0429  
大崎 1 (巣材運び), 0429 長谷 30, 0505 十六番, 0619 島間 2 (繁殖)  
1978 0317 崎原 2  
1988 0424 熊野, 0906 油久 24 沼, 0908 油久  
1989 0122 熊野 4, 0226 熊野 4, 0423 熊野 多数, 0827 熊野 1, 0903 熊野 2  
1990 0102 熊野 1, 0408 熊野 5, 0414 野間 2 (営巣)  
1991 0303 茅永 2, 0324 油久 2, 0501 西之表 1 (営巣), 0503 鹿之峯 3, 0511 屋  
久津 10  
1992 0328 阿高磯 10, 0414 油久 4, 0503 熊野 7

多くは通過するが、繁殖するものもある。

140リュウキュウツバメ *Hirundo tahitica*

- 1989 0226 熊野 2 (巣材運び), 0312 熊野 4 (橋下面に営巣), 0319 熊野 3, 0423  
熊野 2, 0423 熊野 2, 0528 熊野 3, 0903 熊野 1  
1990 0102 熊野 2, 0224 熊野 2 (橋下面に営巣), 0310 熊野 2 (巣材運び), 0318  
熊野 2 (交尾), 0321 熊野 2 (抱卵),  
0324 熊野 2, 0401 熊野 2, 0408 熊野  
2, 0408 熊野 2 (糞を捨てる), 0422  
熊野 0 (巣放棄), 0430 熊野 1 (巣立  
ち前の雛 1 死体)

1989年、1990年に熊野漁港の橋下で繁殖を確  
認したが、それ以後は同地では観察されてい  
ない。



写真13 リュウキュウツバメの巣材集め  
1990.3.10 中種子、熊野

141コシアカツバメ *Hirundo daurica*

1989 0423 熊野 3

142イワツバメ *Delichon urbica* 2)

1975 0530 茅永 1

1977 0310 河内 4

セキレイ科 MOTACILLIDAE

143キセキレイ *Motacilla cinerea* 2), 3), 6)

1975 0107 茅永, 0902 上中 1, 0914 河内 1, 0914 宝満の池 2

1976 1003 本村 2, 1003 茅永 1, 1003 熊野 1, 1005 熊野 1, 1010 茅永 2, 1010 竹崎 3, 1010 熊野 1

1977 0306 平山 1, 0310 熊野 1, 0313 真所 1, 0319 熊野 1, 0915 熊野 1, 1003 島間 1, 0317 熊野 1

1988 0903 油久, 0914 油久 1,

1989 0116 熊野 3, 0824 油久 1

1990 0909 上里 1

1991 0303 茅永 1, 0323 崎原 1, 0324 屋久津 1, 1010 熊野 2, 1109 油久 3, 1208 熊野 1

1992 0914 小平山 1

144ハクセキレイ *Motacilla alba* 1), 2), 3), 6)

1975 0107 茅永 多数, 1006 上中 2

1976 1004 上中 10, 1010 茅永 2

1977 0116 茅永 1, 0116 熊野 1, 0211 茅永 2, 0213 上里 1, 0217 上中 1, 0306 平山 38, 0309 下中 33, 0309 下中 61, 0310 平山 7, 0310 熊野 25, 0313 田代 7, 0313 真所 7, 0410 熊野 31, 0410 熊野 1, 0915 熊野 1幼

1978 0106 熊野 2, 0126 上中 1, 0311 宝満の池 3, 0317 熊野 1, 0317 本村 10, 0116 熊野 5

1989 0920 油久 1♂

1990 0102 熊野 3

1991 0211 茅永 2, 0303 茅永 多数, 0323 崎原 16, 0324 油久 3, 1010 阿高磯 3, 1109 油久 1

1992 0102 田代 多数, 0308 熊野 2, 0328 阿高磯 1

145セグロセキレイ *Motacilla grandis* 2)

146 ピンズイ *Anthus gustavi* 6)

- 1975 0422 茅永 2  
1990 0218 上里 3, 1220 油久 5  
1991 1231 竹崎 3

147 ムネアカタヒバリ *Anthus cervinus*

- 1975 0426 熊野 1  
1991 0211 茅永 15

148 タヒバリ *Anthus spinoletta* 1), 2), 6)

- 1975 0107 茅永  
1976 1010 茅永 10  
1977 0116 新上里 10, 0211 茅永 50, 0213 上里 1, 0307 茅永 12, 0309 下中 50,  
0310 茅永 5, 0313 田代 50, 0410 熊野 3, 0410 熊野 3  
1978 0311 郡原 10  
1989 0122 熊野 30  
1990 0103 軍馬 10  
1991 0211 茅永 7, 0303 茅永 18, 1109 油久 7  
1992 0102 茅永 15  
1992 0308 熊野 30

サンショウクイ科 CAMPEPHAGIDAE

149 サンショウクイ *Pericrocotus divaricatus* 1), 2), 6)

- 1977 0410 十六番 3, 0416 宝満の池 1, 0429 島間 1, 0505 十六番 1  
1988 0605 十六番 (リュウキュウタイプ), 0913 油久 1  
1989 0527 立山 1, 0604 鹿之峯 3 (リュウキュウタイプ), 0917 鹿之峯 2 (リュウ  
キュウタイプ)  
1990 0923 鹿之峯 2 (リュウキュウタイプ)  
1991 0503 鹿之峯 3 (リュウキュウタイプ), 0504 上里

観認できた個体はいずれもリュウキュウサンショウクイであった。

ヒヨドリ科 PYCNONOTIDAE

150 ヒヨドリ *Hypsipetes amaurotis* 1), 2), 6)

- 1975 0422 茅永 1, 0530 茅永 4, 0701 熊野 1, 0914 河内 1, 0914 宝満の池 2  
1976 0606 石寺海岸 2, 1003 門倉崎 2, 1010 宝満の池 2, 1010 竹崎 2  
1977 0116 宝満の池 1, 0213 上中 9, 0213 上里 6, 0306 長谷 1, 0309 田代 1,  
0310 河内 3, 0313 上中 1, 0315 上中 1, 0410 十六番 1, 0416 宝満の池 2,

- 0423 基永 4, 0429 島間 4, 0429 長谷 1, 0505 十六番 1, 1003 島間 2  
 1978 0311 宝満の池 1, 0317 崎原 1, 0317 万波 1  
 1988 0605 十六番, 0904 上中 2, 0906 油久 3, 0908 油久 1  
 1989 0528 熊野 3, 0604 鹿之峯 10, 0917 鹿之峯, 1014 上里 48 (群れ)  
 1990 0102 熊野 1, 0218 上里 1, 1027 竹崎 840 (群れ)  
 1991 0129 鹿之峯 1, 0317 上里 5, 0324  
     油久 6, 0503 鹿之峯 2, 0504 上里  
     4, 1109 油久 2  
 1992 0712 馬毛島 5, 1017 油久 32(群れ)  
     10月には南下する群れが確認される。

#### モズ科 LANIIDAE

- 151チゴモズ *Lanius tigrinus* 1), 2), 6)

- 152モズ *Lanius bucephalus* 1), 2), 3), 6)

1975 0107 基永 1, 0126 1メス, 0914 河内 2

1976 0904 沖ヶ浜田 1, 1003 門倉崎 2, 1010 竹崎 2

1977 0116 熊野 1, 0211 基永 4, 0211 基永 3, 0213 上里 1, 0226 西之 1, 0309  
 上中 1, 0309 宝満の池 1♀, 0309 下中 2, 0309 田代 1, 0310 河内 2, 0310  
 熊野 1, 0313 上中 1, 0315 上中 5, 0410 十六番 1, 0627 住吉 1

1988 0903 油久, 0907 油久 1♂, 0907 油久 1♂, 0908 油久 1

1990 0102 熊野 1

1991 0303 基永 2, 1208 熊野 1

- 153アカモズ (シマアカモズ) *Lanius cristatus*

1990 1006 油久 1



写真14 ヒヨドリの渡り

1990.10.27 南種子. 基永

#### レンジャク科 BOMBYCILLIDAE

- 154キレンジャク *Bombycilla garrulus* 2)

- 155ヒレンジャク *Bombycilla japonica* 2)

#### カワガラス科 CINCLIDAE

- 156カワガラス *Cinclus pallasii* 2)

川畠 (1982) からは記録の出典が不明である。最近の観察事例もない。

#### ミソサザイ科 TROGLODYTIDAE

157ミソサザイ *Troglodytes troglodytes* 1), 2), 6)

日本鳥学会(1974)では留鳥とされるが、最近の観察事例が少なく、生息状況については不明である。

ヒタキ科 MUSCICAPIDAE

158コマドリ *Erithacus akahige* 1), 6)

きわめて古い記録があるのみで、最近の観察事例はない。現在も繁殖するとは考えにくい。

159アカヒゲ *Erithacus komadori* 1), 2), 6)

1975 0422 茅永 2 (ソング)

1989年～1992年に本種が生息する可能性の高い良好な常緑広葉樹林の残された地域（立山、十六番、上里など）を4～5月に調査したが、全く確認できなかった。1990年9月23日住吉でそれらしき個体を目撃したが確認できなかった。

160ノゴマ *Erithacus calliope* 1), 2), 6)

161ルリビタキ *Tarsiger cyanurus* 1), 2), 3), 6)

1990 0115 宝満の池 1♀, 0201 油久 1

162ショウビタキ *Phoenicurus auroreus* 1), 2), 6)

1988 1112 油久 1♂

1989 1210 熊野 1♀

1990 0115 熊野 1, 0210 油久 1♀, 1027 竹崎 1♂

1991 0129 鹿之峯 1♂, 1109 油久 1

163ノビタキ *Saxicola torquata* 1), 2), 6)

1976 1010 熊野 2

164イソヒヨドリ *Monticola solitarius* 1), 2), 6)

1975 0422 茅永 2, 0426 熊野 1

1976 0428 熊野 1, 0606 竹崎 2, 0619 竹崎 1, 0904 安納 4, 0904 渕 2, 1003 門倉崎 2, 1003 熊野 1, 1005 熊野 2, 1010 竹崎 3

1977 0226 西之 1♀, 0306 平山 1♀, 0310 熊野 1, 0410 熊野 1, 0429 大崎 1 (巣材運搬)

1978 0317 崎原 1

1988 0424 熊野 1

1989 0528 熊野 1

1990 0102 熊野 1, 0909 熊野 1, 0909 上里 1

- 1991 0303 茎永 1, 0324 屋久津 3, 0511 熊野 1, 1109 島間 1, 1208 熊野 1, 1231  
熊野 1
- 1992 0308 熊野 1, 0328 阿高磯 1
- 165 トラングミ *Turdus dauma* 1), 2), 6)
- 166 クロツグミ *Turdus cardis* 2)
- 167 アカハラ *Turdus chrysolaus* 1), 2), 3), 6)
- 1991 0317 上里 1
- 1992 0414 油久 4
- 168 シロハラ *Turdus pallidus* 1), 2), 3), 6)
- 1978 0126 上中 1 (アコウの実を採食), 0111 上中 1
- 1988 1115 油久 2 (本年初認)
- 1990 0218 上里 2
- 1991 0129 鹿之峯 1, 0317 上里 2, 0324 油久 2
- 1992 0104 油久 2, 0414 油久 1
- 169 マミチャジナイ *Turdus obcurus* 1), 2), 6)
- 1977 0121 上中 1
- 170 ツグミ *Turdus naumanni* 1), 2), 3), 6)
- 1975 0107 茎永, 0126 南種町 2
- 1977 0116 新上里 1, 0213 上里 1, 0307 茎永 1, 0309 下中 1, 0313 上中 1,  
0315 上中 2, 0319 熊野 7, 0416 下中 1
- 1978 0106 熊野 1, 0126 上中 1, 0311 郡原 1, 0317 熊野 1, 0317 本村 10
- 1989 0116 熊野 1
- 1990 0103 軍馬 2, 0115 下中 10, 0218 長谷の池 1
- 1991 0129 鹿之峯 1, 0211 茎永 2, 0303 茎永 30, 0323 熊野 5, 0324 油久 5,  
1231 熊野 2, 1231 竹崎 3
- 1992 0102 茎永 5, 0414 油久 1
- 171 ヤブサメ *Cettia squameiceps* 1), 2), 6)
- 1975 0422 茎永 1
- 1977 0410 十六番 1, 0424 上中 1, 0505 十六番 3
- 1978 0317 万波 1
- 1988 0605 十六番 多い
- 1989 0527 鹿之峯 3, 0528 熊野 2, 0604 鹿之峯 2
- 1991 0317 上里 2, 0324 油久 1, 0503 鹿之峯 2, 0504 上里 2

172ウグイス *Cettia diphone* 1), 2), 6)

- 1975 0107 茎永, 0422 茎永 1, 0422 茎永 1, 0427 大崎 1, 0728 中種子町 1  
1977 0309 田代 1, 0313 上中 5, 0410 十六番 3, 0424 上中 1, 0429 島間 2,  
0505 十六番 1, 0516 上中 1, 1003 島間 1  
1978 0126 上中 1, 0317 崎原 1, 0317 万波 1  
1988 0605 十六番  
1989 0527 鹿之峯 2, 0528 熊野 1, 0604 鹿之峯 多数  
1991 0129 鹿之峯 1, 0317 上里 1, 0324 油久 4, 0503 鹿之峯 1, 1109 油久 1  
1992 0104 油久 1

173シマセンニュウ *Locustella fasciolata* 6)

174キクイタダキ *Regulus regulus* 1), 2), 6)

175セッカ *Cisticola juncidis* 1), 2), 3), 6)

- 1975 0107 茎永 1, 0422 茎永 1, 0426 熊野 1, 0530 茎永 1, 0914 宝満の池 10  
1976 0428 茎永 2, 0606 石寺海岸 1, 0904 安納 1, 1003 真所 3, 1003 茎永 1,  
1003 熊野 1, 1010 熊野 2  
1977 0410 万波 1, 0915 熊野 1  
1988 0410 熊野 1, 0906 油久 1, 0908 油久 1  
1989 0527 鹿之峯 1, 0528 熊野 3, 0903 熊野 1  
1990 0102 熊野 1, 0902 熊野 3, 0909 上里 2, 1111 熊野 1  
1991 0511 熊野 4, 0818 熊野 5, 1109 油久 3, 1231 熊野 5  
1992 0102 茎永 1, 0529 熊野 3, 0712 馬毛島 4, 0805 熊野 2

周年生息し、草地、サトウキビ畑で繁殖する。

176メボソムシクイ *Phylloscopus borealis* 1), 6)

177センダイムシクイ *Phylloscopus ijimae* 2)

178キビタキ *Ficedula narcissina* 1), 2), 6)

179ムギマキ *Ficedula mugimaki* 1), 6)

180オオルリ *Cyanoptila cyanomelana*

- 1990 1012 野間 1

181エゾビタキ *Muscicapa griseisticta* 1), 2), 6)

- 1977 1003 島間 2

- 1988 0904 阿高磯 1, 0908 油久 2

- 1990 0923 鹿之峯 1

- 1991 0921 上里 1

182コサメビタキ *Muscicapa latirostris* 2)

183サンコウチョウ *Terpsiphone atrocaudata* 1), 2), 3), 6)

1977 0429 島間 1, 0505 十六番 3

1988 0513 油久 1 (ソング), 0605 十六番 1

1989 0527 立山 1, 0604 鹿之峯 1

1992 0805 熊野 1

#### ツリスガラ科 REMIZIDAE

184ツリスガラ *Remiz pendulinus*

1989 0212 熊野 10

1991 0115 熊野 10

いずれも冬の一時期に確認されており、  
全く飛来しない年もあった。



写真15 ツリスガラ

1989.2.12 中種子. 熊野

#### シジュウカラ科 PARIDAE

185ヒガラ *Parus ater* 2)

2)には分布繁殖するらしいとされているが、本種の生育環境から考えて繁殖の可能性  
はきわめて低いのではないかと考えられる。

186ヤマガラ *Parus varius* 1), 2), 6)

1975 0427 大崎 1, 0530 茎永 1, 0728 中種子町 2

1977 0310 宝満の池 2, 0410 十六番 2, 0424 上中 1, 0429 島間 1, 0505 十六番  
1

1978 0311 宝満の池 1

1988 0605 十六番 3, 0903 油久 2, 0904 上中 3, 0908 油久 4

1989 0527 鹿之峯 2, 0528 熊野 3, 0604 鹿之峯 2, 0917 鹿之峯 2

1991 0317 上里 2, 0503 鹿之峯 2, 0504 上里 5, 0922 上里 2, 1010 宝満の池 1

1992 0102 宝満の池 1

本島に生息するカラ類は本種のみであり他の種は通常確認されない。

187シジュウカラ *Parus major* 6)

1980 0510 鹿之峯での観察例がある。筆者らも同地域周辺を踏査しているが全く確  
認できず、迷行した個体ではないかと考えられる。

#### メジロ科 ZOSTEROPIDAE

188 メジロ *Zosteropspus japonica* 1), 2), 6)

- 1977 0116 宝満の池 2, 0213 上中 2, 0217 上中 1  
1978 0311 宝満の池 2, 0317 熊野 2  
1989 0527 鹿之峯 1  
1990 0102 熊野 3  
1992 0104 油久 2

冬鳥として渡来するメジロのほか少數ではあるが島内で繁殖するシマメジロが生息する。後者の個体数はきわめて少なく生息地も限られるようだ。

ホオジロ科 EMBERIZIDAE

189 ホオジロ *Emberiza cioides* 1), 2), 3), 6)

- 1975 0107 茅永, 0126 南種子町 1, 0422 茅永 1, 0427 大崎 1, 0530 茅永 1, 0914 河内 6  
1976 0606 石寺海岸 1, 0606 竹崎 1, 0617 熊野 1, 0619 竹崎 1, 0619 熊野, 0904 安納 1, 1003 門倉崎 2, 1003 茅永 1  
1977 0213 上中 3, 0213 上里 3, 0306 長谷 1, 0310 河内 11, 0313 上中 3, 0315 上中 23, 0410 十六番 1, 0410 万波 8, 0410 平山 1, 0416 下中 2, 0429 松原 1, 0429 大崎 1 (巣材運搬), 0429 島間 2, 0915 熊野 1, 1003 島間 1  
1978 0106 熊野 2, 0317 万波 1  
1988 0410 熊野, 0424 熊野, 0605 十六番, 0903 油久, 0904 上中, 0906 油久  
1989 0527 鹿之峯, 0528 熊野 2, 0604 鹿之峯  
1990 0102 熊野  
1991 0129 鹿之峯 多数, 0317 上里 3, 0323 熊野 2, 0324 油久 7, 0406 熊野 2, 0503 鹿之峯, 0504 上里, 0511 熊野, 1109 油久, 1208 熊野 2, 1231 熊野 2  
1992 0308 熊野 1, 0414 油久 2, 0712 馬毛島 2  
周年生息し各地で普通に見られる。しばしばサトウキビ畑内で営巣する。

190 ホオアカ *Emberiza fucata* 1), 2), 6)

- 1975 0107 茅永  
1977 0315 上中 2, 0410 十六番 1  
1978 0106 熊野 1  
1988 1208 熊野 2  
1990 0203 熊野 1  
1991 0211 茅永 2, 0303 茅永 10, 1208 熊野 3, 1231 熊野 10  
1992 0102 茅永 5, 0308 熊野 7

191カシラダカ *Emberiza rustica* 3)

1989 0116 熊野 2

192ミヤマホオジロ *Emberiza elegans* 1), 2), 3)

1988 1112 油久 2♂

1991 0129 鹿之峯 1♀, 0317 上里 3

1992 0104 油久 7

193アオジ *Emberiza spodocephala* 1), 2), 6)

1975 0107 茎永

1977 0116 茎永 1, 0213 上中 1, 0213 上里 2, 0410 十六番 1, 0410 万波 1, 0410 平山 1

1978 0126 上中 1♂, 0317 万波 1

1990 0102 熊野

1991 0303 茎永 2

1992 0129 油久 2, 0414 油久 3

194クロジ *Emberiza variabilis* 1), 2), 6)

195オオジュリン *Emberiza schoeniclus*

1977 0310 熊野 15

1989 0116 熊野 2, 0226 熊野 6, 1210 熊野 2

1990 0115 熊野 2

1991 1231 熊野 11

1992 0308 熊野 1

#### アトリ科 FRINGILLIDAE

196アトリ *Fringilla montifringilla* 1), 2), 6)

197カワラヒワ *Carduelis sinica* 2), 3), 6)

1975 0107 茎永, 0126 南種子町 1

1977 0116 新上里 60, 0211 茎永 16, 0213 上里 134, 0309 下中 29, 0310 河内 20, 0313 田代 200, 0313 真所 228, 0410 熊野 10, 0505 十六番 5

1978 0106 熊野 11, 0311 郡原 48, 0317 本村 30

1988 1208 熊野 4

1990 0115 下中 40, 1111 熊野 2

1991 0211 茎永 50, 0303 茎永 50

198マヒワ *Carduelis spinus* 2)

199シメ *Coccothraustes coccothraustes* 2)

1988 0407 油久 1

ハタオリドリ科 PLOCEIDAE

200ニュウナイスズメ *Passer rutilans* 2)

201スズメ *Passer montanus* 1), 2), 6)

1975 0107 茎永 多数, 0426 熊野 2, 0701 熊野 1, 0914 宝満の池 3

1976 0619 竹崎 10, 0619 熊野, 1010 茎永 2, 1010 熊野 3

1977 0116 茎永 2, 0116 新上里 50, 0211 茎永 2, 0309 田代 2, 0410 十六番 1,  
0410 万波 2, 0410 熊野 2, 0424 上中 1, 0429 松原 5, 0429 大崎 10, 0429  
長谷 1, 0915 湊 10, 0915 熊野 30

1978 0126 上中 22

1988 0906 油久 23, 0908 油久

1989 0528 熊野, 0827 熊野, 0903 熊野

1990 0902 熊野 7

1991 0420 熊野, 0511 熊野, 0818 熊野, 1231 竹崎 1

1992 0805 熊野 多数

ムクドリ科 STURNIDAE

202コムクドリ *Sturnus philippensis* 1), 2), 6)

1988 0410 油久 1♂, 0929 油久 2

1989 0504 国上 20

1991 0429 上石寺 100, 0430 油久 1

1992 0920 竹崎 10

春と秋に渡りの群れが通過する。

203ムクドリ *Sturnus cineraceus* 1), 2), 3)

1976 1003 門倉崎 20

1977 0315 上中 1, 0915 熊野 6

1978 0317 崎原 28

カラス科 CORVIDAE

204ハシボソガラス *Corvus corone* 2)

2)には留鳥として分布繁殖するとあるが、再確認する必要がある。

205 ハシブトガラス *Corvus macrorhynchos* 1), 2), 6)

1975 0914 河内 3, 0914 宝満の池 2

1976 0428 熊野 2, 0617 熊野 3, 1003 門倉崎 16, 1003 茅永 3, 1003 熊野 1,  
1010 茅永 3, 1010 宝満の池 3, 1010 熊野 2

1977 0116 宝満の池 1, 0211 茅永 10, 0307 茅永 7, 0309 下中 2, 0310 平山 15,  
0310 熊野 2, 0313 上中 2, 0315 上中 8, 0319 熊野 11, 0410 熊野 2, 0424  
上中 1, 0429 茅永 2 巣材運, 0429 大崎 2 巣材運, 0915 熊野 1

1978 0106 熊野 20, 0126 上中 1, 0311 宝満の池 10, 0317 崎原 1

1988 0410 熊野, 0424 熊野 4, 0605 十六番, 0903 油久, 0904 上中, 0906 油久,  
0908 油久, 0908 油久 10

1989 0528 熊野, 0604 鹿之峯 2, 0827 熊野 1, 0903 熊野 3, 0917 鹿之峯

1990 0102 熊野, 0902 熊野 3, 0923 鹿之峯 3, 1111 熊野 1

1991 0303 茅永 1, 0317 上里 2, 0324 油久 5, 0503 鹿之峯, 0511 熊野, 1109 長  
浜 1

1992 0102 茅永 1, 0712 馬毛島 2, 0805 熊野 1

留島としての島内の各地で生息する。

## まとめ

### 種子島の鳥相

同島の鳥相は森岡(1976)によると基本的には屋久島と同一の起源を持ち、九州の属島として本土と密接な関係があると考えられている。ここでは同島を特徴づけている鳥類の生息分布状況について簡単にまとめた。

- 1) シジュウカラ、エナガ、コゲラ等の南九州の低山帯で繁殖する鳥類は生息しない。あるいは、希にしか観察できない。これらの種群の欠如は、本島の現在の環境からは想定しにくく、地史的な要因によるのか生物間の競合によるのか不明であるが、興味深い点である。
- 2) アオゲラ、コマドリ、ヤマガラ、メジロ、キジ等の種は、種子島あるいはその周辺地域に固有の亜種が分布している。このうちタネコマドリは最近の観察事例がなく現在生息する可能性はほとんどない。シマメジロについては、観察されるものの生息する地域は脊梁山脈の一部に限られており生息が危ぶまれている。他の 3 種は島内に普遍

的に見られるが、タネアオゲラは、民家周囲に断片的に残された林等に営巣する事例もあり生息基盤は必ずしも安定したものではない

- 3) 奄美、沖縄との同一亜種が分布する例としてサンショウクイ、リュウキュウツバメ、などがある。サンショウクイについては視認できた個体のいずれも額の白色部が狭く黒色味の強いリュウキュウサンショウクイであったが、その他の記録については特定できていない。リュウキュウツバメは、中種子町熊野で1989年、1990年にそれぞれ繁殖行動を確認できた。いずれも全く同じ場所での繁殖でありこれ以外の観察事例はない。熊野は島の東海岸に位置し冬期の季節風の影響も少なく温暖な地域であることから、南に起源する生物の生息に適した地域といえるかもしれない。東海岸を中心にもう少し詳細に調査すればあるは他にも繁殖している場所が確認できるかも知れない。新たな北進の例となるのか今後の推移が注目される。
- 4) 種子島は南西諸島の北端部に位置し渡り鳥の中継地点の一つになっている。ただ同じような位置に屋久島、口之永良部島があり、それより若干東に外れているためか、あるいは上昇気流のできやすい高い山がないせいかサシバ、アカハラダカなどの出現個体数は、他の南西諸島のそれに比べればかなり少ない。サンバについては、極めて少数の越冬個体が確認され、初夏の観察記録もあり島内で繁殖している可能性もある。また、一例のみではあるが、アカアシショウゲンボウも観察されている。このようないわゆる珍鳥も観察者の数が増えれば種子島からもさらに多く記録されるであろう。
- その他、10月頃には、南下してゆくヒヨドリの大群が南種子町の南部で観察できる。シギ、チドリ類については特にまとまった規模の干潟、湿原もないが、河口、海岸の干潟や休耕田等で観察できる。カモ類については前記したとおりである。
- 5) 沿岸の岩礁で繁殖するベニアジサシ、エリグロアジサシは同地域が北限に近い生息地に相当すると思われる。ベニアジサシについては、熊野、竹崎で繁殖が確認されており、馬毛島の岩礁で確認された群れも付近で繁殖するものと推察された。エリグロアジサシについてはすでに馬毛島での繁殖例があり、種子島沿岸での観察例も点在することから付近の岩礁で同様に繁殖している可能性が高い。

## 種子島の探鳥地案内

### 1) シギ、チドリ類

ヒバリシギ、オジロトウネン、エリマキシギ、オグロシギ等の淡水性のシギ、チドリ類は南種子町南部の水田地域に点在する休耕田や、熊野の養鰻場跡の池、あるいは小平山の澱粉工場の排水池等で観察される。メダイチドリ、トウネン、ハマシギ、アオ

アシシギ、キアシシギ、ソリハシシギ等の塩水干潟のシギ、チドリ類は、大浦川下流域に広がる塩田跡とそれをとりまくマングローブ地帯が規模的には大きいがその他湊川下流の干潟、島間港東側の干潟等によく出現する。大浦川下流域のものを除いて概して規模は小さく多数のシギ、チドリ類が群れる様な光景は島内ではあまりお目にかかるない。

## 2) ワシタカ類

サシバ、アカハラダカなどの秋の渡りの観察場所についてであるが、中種子町、南種子町を中心にいろいろ探したが適した場所がない。比較的見晴らしがきく場所としては上里の集落の南にある中継塔の付近と上中の南の宇宙が丘展望台がある。いずれの場所でも9月下旬から10月にアカハラダカ、サシバ、チゴハヤブサ、チョウゲンボウ等が観察できる。島の北部地域はあまり踏査していないので、もっと他により場所が見つかるかもしれない。

ミサゴは沿岸部の各地で頻繁に出現し、周年見られることから島内で繁殖するものと推察される。ハヤブサは、渡りのヒヨドリの集まる竹崎やカモ類の越冬場所の熊野で観察しやすい。

## 3) カモ類

多くはシギ、チドリ類のポイントと重複する。熊野の養鰻場跡の池には、各種のカモ類が飛来するがオカヨシガモ、キンクロハジロ、ホシハジロ等の個体数が多く、希にホオジロガモ、コハクチョウも出現した。宝満の池は周囲を常緑樹林で覆われ池にはハスが繁茂する良好な景観を有し飛来数は島内随一である。大多数はマガモで2,000～4,000羽がカウントされている。数は少ないがヨシガモは例年確認されている。

## 4) 森林性の鳥類

タネアオゲラ、キビタキ、アカヒゲ、タネコマドリ、オガワミソサザイ、シマメジロ、などの森林性の小鳥類は、よく発達した常緑広葉樹林を生息環境としている。現在ではそのような環境をとどめる地域は限られており、タネアオゲラ、シマメジロ以外は最近の記録が少なく、生息している可能性はきわめて低い。古田～増田の間の太平洋に向かって流下する河川の上中流部に断片的に常緑広葉樹林が残されており、中でも大川田川上流の鹿之峯周辺は良好な状態を保っている。同地にはアカヒゲの確認のため繁殖期に度々調査を行ったが、全く確認できなかった。それでもタネアオゲラの出現頻度が高く、この他の森林性の種の生息が期待できる地域である。この他、上里周辺も良好な森林が認められ、カラスバト、タネアオゲラがよく出現している。

## 5) 馬毛島について

かつてはトビウオ漁などで栄えたが、現在では定住する人はいない。島に渡るには、

定期便がないため漁船を利用するしかない。沼口は2回、同島に渡っているが充分な調査はできていない。本報告においても若干の記録を追加したにすぎない。葉山から高坊までを踏査したが、マゲシカの密度は高く、いたるところで目撃することができた。高坊では沿岸の岩礁や海岸に多数のベニアジサシを見ることができ、近くに繁殖している岩礁があることが伺われた。島の植生は低木を主体とした疎林、荒れ地が目につき荒涼とした感がある。大きな島からやや離れて位置する小さな島ではしばしば珍鳥に出会うチャンスがあり、今後、冬期の調査を行うと面白い所ではないだろうか。

## 謝辞

本報告をまとめるに当たって、参照した文献のいくつかは池長裕史氏の御助力によって入手する事ができた。また同氏からは全般にわたる御教示を頂いた。その他、鏑木絢一氏からはいくつかの鳥類の生息情報や、種子島科学同行会の資料を見せて頂いた。また種子島での在職中（沼口、溝口）には職員並びに関係各位の方々に公私に渡るお世話を頂いた。以上記して感謝の意を表します。

## 引用文献

- 1) 日本鳥学会 (1974) 日本鳥類目録 pp.120 第2刷、学習研究社.
- 2) 川畠矢須美 (1982) 種子島の鳥類目録 pp.20、西之表市立種子島博物館.
- 3) 種子島科学同好会 (1973) 種子島博物館所蔵標本目録 pp.111-114. ガリ版刷 (中種子町の西要氏が運営されていた博物館です。)
- 4) 川路則友 (1988) 南九州低山帯における繁殖鳥類群集、日本鳥学会誌 36:153-158.
- 5) 川路則友、安部淳一、高良武信、溝口文男、松下義範、沼秀昭、今村克行 (1987) 鹿児島県産鳥類目録、*Strix* 6:20-30.
- 6) 鹿児島県 (1987) 鹿児島県の野鳥 pp.99、鹿児島県公害防止協会

## 最近（1994年4月～1995年3月）沖縄島及びその周辺離島で 保護及び目撲された興味深い鳥類について (短報)

嵩原 建二、久貝 勝盛、瀬名波 任  
(沖縄県立博物館)

The Interesting Birds that were observed or Given Medical Care Recently (Apr.  
1994-Mar. 1995) in the Okinawa Islands

Kenji TAKEHARA, Katsumori KUGAI and Tsutomu SENAHA  
(Okinawa Prefectural Museum)

### はじめに

1994年の春季から1995年の冬季にかけて、県立博物館に持ち込まれる傷病鳥の中には分布記録的に興味深い鳥類が含まれる。また野外で目撲した野鳥の中にも分布記録としては興味深い種がみられ、最近の沖縄島及びその周辺における鳥類の記録としては興味深いと考えられる2種をここにまとめて報告する。なお、本報告における鳥類の配列や学名の扱いについては、日本鳥学会（1974）にしたがった。

本短報をまとめるにあたり、調査に便宜を図っていただいた沖縄県自然保護課、粟国村教育委員会に厚く感謝申し上げる。また、野鳥を保護し、届けていただいた国頭村教育委員会及び同委員会の山川光邦氏にも感謝申し上げる。

### 分布的に興味深い鳥類の保護及び観察記録

#### 1) カンムリカッコウ *Clamator coromandus*

(Chestnut-winged Cuckoo or Red-winged Crested Cuckoo)

保護の経緯は、1994年4月26日の朝8時頃、国頭村立辺土名小学校3年生の使用する教室の窓ガラスにぶつかっている見慣れない鳥が保護され、翌4月27日には国頭村から

博物館へこの保護鳥が届けられた。筆者らで保護鳥を検討した結果、カンムリカッコウであること同定した（写真1）。

本種はインドから中国南部、東南アジアにかけて広く分布するホトトギスの仲間で、フィリピン、台湾、海南島、セレベス島などにも生息している（Ben and Edward, 1975）。

国内では1974年5月11日に「トカラ列島」の宝島で迷行して保護された記録がある（迫, 1991）。したがって、今回の記録は最初の記録から19年ぶりの記録で、沖縄島においては初記録の鳥である。当初飼い鳥が逃げだした可能性も考えられたが、前に述べたように南西諸島の北部に属する宝島における記録は、5月の中旬であり、今回の記録された時期は4月の下旬と時期的にほぼ近いことから迷行してきた可能性が高いと思われる。

なお、本種は1994年4月27日14時頃に、那覇市内の末吉公園内森林に放鳥した。

Table 1. Measurements of the chestnut-winged Cuckoo, *Clamator coromandus*, from Okinawa Island.

| Item         | Measurements |
|--------------|--------------|
| Body weight  | 90 g         |
| Total length | 38cm         |
| Wing         | 165.01mm     |
| Tail length  | 200.7mm      |
| Tarsus       | 29.84mm      |
| Culmen       | 20.9mm       |
| Open wing    | 42cm         |

## 2) コクマルガラス *Carvus monedula dauricus* Pallas

(Jack daw)

1994年11月27日に筆者の一人である嵩原によって、粟国島で1羽目撲された（写真2）。観察された場所は、島の東側にある耕転された農耕地で、採餌中の個体を目撲した。この個体は全身黒色で、光彩が白くないことから、コクマルガラスの暗色型と判断された。

本種は主として中近東やインド、中国南部、東南アジアなどに生息し、国内ではまれな迷鳥として扱われている（世界文化社, 1984. 日本鳥学会, 1974）。県内では1977年10月20日に西表島で記録されており、その後も同島で2度の記録がみられる（八重山野鳥の会, 1983）。また筆者らは1987年12月30日に宮古諸島の下地島で白色型1羽を目撲した（未発表）。したがって、県内では5度目の渡来記録であろう。

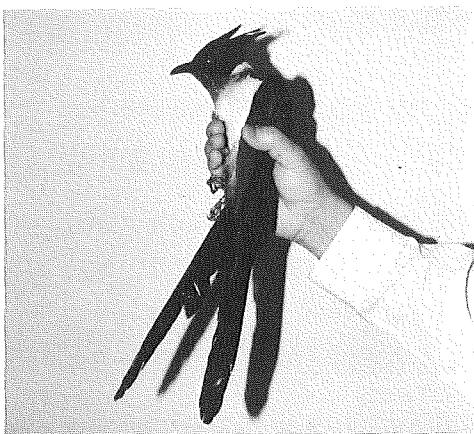


写真1, カンムリカッコウ  
*Clamator coromandus*



写真2, コクマルガラス  
*Corvus monedula dauuricus*

#### 〈参考文献〉

- 沖縄野鳥研究会. 1986. 沖縄県の野鳥. 沖縄野鳥研究会. 265p.
- 沖縄野鳥研究会. 1993. 改訂沖縄県の野鳥. 沖縄出版. 299p.
- B. F. King and E. C. Dickenson. 1975. A Field Guide to the BIRDS of SOUTHEAST ASIA. HOUGHTON MIFFLIN COMPANY BOSTON.
- 世界文化社. 1984. 生物大図鑑, 鳥類. 世界文化社. 399p.
- 日本鳥学会編. 1974. 日本鳥類目録改訂第5版. 学習研究社. 120p.
- 八重山野鳥の会. 1983. 八重山地方鳥類目録. 10周年記念誌. p. 28-38. 八重山野鳥の会.
- 迫 静男. 1991. トカラ列島の鳥相. トカラ列島学術調査報告書. p. 118-166. 鹿児島県.

## 博物館紀要執筆規定

- 1 誌名：沖縄県立博物館紀要 BULLETIN OF THE OKINAWA PREFECTURAL MUSEUM とする。
- 2 目的：本誌は広く自然、歴史、民俗、考古、美術工芸、教育普及等に関する原著、短報、資料紹介、論文紹介等の研究成果を公開する事によって県民の博物館についての関心を高め、理解を深める。また、この紀要を通して国内、国外の博物館職員や研究者との交流を深める。
- 3 執筆者：博物館職員及び博物館職員との共著に限る。
- 4 別刷：原著については1論文につき30部の別刷を無料で進呈する。それ以上必要な場合の超過分は著者負担とする。

### 沖縄県立博物館紀要 第21号

1995年 3月30日 発行

編集・発行 沖縄県立博物館

〒903 那覇市首里大中町1-1

TEL (098) 884-2243

FAX (098) 886-4353

印 刷 株式会社南西印刷

TEL (098) 884-4321

沖縄県立博物館

# BULLETIN OF THE OKINAWA PREFECTURAL MUSEUM

No. 21

1995

## CONTENTS

|   |     |
|---|-----|
| Masayuki Maeda : Interpretation on Rediscovering Museum Objects : Learn from the Materials .....  | 1   |
| Sayaka Shinjyo and Toshiaki Hagio : Research Report on Materials Concerning Postwar Okinawa and Emigration from Okinawa .....   | 19  |
| Shiichi Toma : Small Scale Gusukus, the Medieval Castles, in the Isolated Islands, Okinawa .....  | 43  |
| Tsutomu Senaha : On the Description Concerning Earth Science in the Kyu-yo, an Official Okinawan Historical Book (1) .....  | 73  |
| Kenji Takehara, Katsumori Kugai and Tsutomu Senaha : Birds at Ameku area, Naha City, Okinawa (1) .....  | 79  |
| Kenji Takehara, Yukio Ikema and Katsuo Kaneshiro : Birds of the Kerama Islands, the Ryukyu Archipelago .....  | 101 |
| Katsumori Kugai : Genus <i>Butastur</i> in the World .....  | 129 |
| Katsumori Kugai, Kenji Takehara and Tsutomu Senaha : Hawks, Eagles, Vultures and Falcons on Kume Island, the Ryukyu Archipelago .....   | 159 |
| Kenji Numaguchi, Fumio Mizoguchi, Katsumori Kugai and Kenji Takehara : Bird Watching Notes in Tanega-shima and Mage-shima, the South West Islands, Japan .....                  | 169 |
| Short Report  |     |
| Kenji Takehara, Katsumori Kugai and Tsutomu Senaha : The Interesting Birds that were observed or Given Medical Care Recently (Apr. 1994-Mar. 1995) in the Okinawa Islands ..... | 209 |

OKINAWA PREFECTURAL MUSEUM